カオス レギオン 02

魔天行進篇

冲方 丁

イラスト 結賀さとる

カオス レギオン 02
魔天行進篇

どこまでも荒れ果てた大地が広がっていた。大地は人々が踏み締める足音で、いつまでも揺れていた。
二万人の民衆たちが荒野を進んでいた。
永遠に消え去った故郷を胸に。
遥かなる新天地へ向かって。
彼らを守るため、赤き黒印騎士ジークは孤軍奮闘の戦いを続ける。それはかつての友ドラクロワと共に抱いた理想を証明するため。だが、行く手には忌まわしき過去の残像が立ちはだかる。決して消えない悲しき因縁。その果てに待つものとは!?
失われた故郷を夢見て、全ての終わりが始まる——。
書き下ろし軍勢ファンタジー巨編!!

「これから君は、とても……とてもひどいものを見るんだ……ノヴィア」
魔天行進篇
カオスレギオン
CHAOS LEGION

「出発する」
ゆっくりと、だが確実に、二万余の人間が動き出したのだ。
東へ――昇りゆく陽に向かって、長い長い行進が、始まった。

「なぜだ……！　なぜ、こんなものを作った、ドラクロワ！」

カオス レギオン02

魔天行進篇

976

冲方　丁

富士見ファンタジア文庫

136-4

口絵・本文イラスト　結賀さとる

目次

ノヴィア・エルダーシャ
ジークの従士〈銀の乙女〉所属の聖女
「はい、頑張りますっ！」
アリスハート
ノヴィアと行動を共にする小妖精
「チビって言うなっ、この狼男っ！」
カオスレギオン
CHAOS LEGION
CHARACTER & HISTORY
ジーク・ヴァールハイト
黒印騎士団所属の葬士
「俺がお前を止める」

ヴィクトール・ドラクロワ
かつてのジークの友。反聖法庁として暗躍中
「知りたければ、追ってこい……ジーク」
レオニス・ジェルミナル
聖地シャイオンの新領主。車椅子に乗る
「僕らが、新しい怪物になればいい」
HISTORY
天界と堕界を分かつ大地、アルカーナ大陸。
ジークたちは、凶行を繰り返すかつての友・ドラクロワを追っていた。
旅の途中、一行は聖地シャイオンにてレオニスと出会い、それぞれの道を歩み出す
三人の男が握る大陸の未来　混沌＜カオス＞の大地は新たな局面へ突入する……
トール・ヴュラード
レオニスに仕える暗殺者
「父が死んでくれて、せいせいしました」

Prologue　闇の足音

ぞくりとした。貴族服の下で全身に鳥肌が立つのを、少年は感じた。
急に、首筋から冷たい空気でも吹き込まれたかのような寒気に襲われたのだ。
風の薫る、初夏の夜である。寒いわけがない。だが少年が脳裏で想像し、推理し、導き出した結論が、実際の気温を無視して、心と体に冷たいものを感じさせるのだった。
「ふん……」
少年は細い眉をしかめ、わざと気楽な様子で、その身を移動させる唯一の手段――車椅子の背もたれに体重を預けた。生まれつき歩くことが困難な自分の両脚を見つめ、
「どんな相手だろうと所詮は人間だ。怪物がいきなり飛びかかってくるわけじゃない」
微笑して言った。その尊大な口調からは、とても少年が恐怖を――畏怖に近い感情を抱いているとは微塵もうかがうことは出来ない。
澄んだ青紫の瞳に、高い鼻筋、白い磁器のような滑らかな肌。茶色がかった金髪には、

細く銀髪の輝きが混じっている。特に顔の両脇の髪などは、鋭い白刃のごとき銀髪だ。
その金銀の髪に彩られた少年が、嘲笑うような笑みを浮かべると、それこそ見るものをぞくりとさせるような、悽愴の迫力を生んだ。
「勝手な想像が怪物を作り出す。まったく心ってやつは歪んだ鏡そのものだな、トール」
「はい、レオニス様」
傍らから、抑揚の無い声が応える。銀の髪に、濃い紫の目をした青年であった。
引き締まった肢体に黒い法衣をまとい、油断のない鋭い顔つきをしているが、ひどく気配が薄い。それこそ少年の影ででもあるかのような存在感の無さなのである。
影法師トール――という異名を持つ青年だった。気配を絶ち、影のように標的の背後に忍び寄る、恐るべき暗殺能力の持ち主である。また逆に人の気配を察知する能力にも優れ、建物の中だろうが森の中だろうが、誰がどの辺りで動いているかをすぐに探知してしまう。猟犬のごとき能力であり、少年にとっては盾であり刃でもある貴重な存在だった。
そのトールを、ちらりとレオニスが見上げた。トールがすっと腰をかがめ、囁く。
「まだ、何の気配もしません……レオニス様」
レオニスは肩をすくめ、今いる聖堂のテラスから、月光に輝く彼の領地を眺めやった。
街の向こうでは、森に囲まれた大きな湖が月を映し、この地の名の由来を告げている。

澄んだ鏡――そういう名の湖であり、土地だった。父の死の直前に、少年が受け継いだ領地であり、足が不自由なためどこへも行けぬ少年にとっての世界そのものである。
「これは、聖地シャイオンの今後を占う賭けだ。肝心なのは、賭けに勝ったときと負けたとき、両方の場合のことを考えてあるかどうかさ……」
レオニスの声が、ふいに尻すぼみになって消えた。
突然、扉がぎいっと軋みながら開く音が、階下から響いてきたのである。
再び扉が閉ざされる音が聖堂内に響き渡り、長く尾を引くようにして消えた。
レオニスは目を見開いてトールを振り返った。だがトールも、驚きの顔でいる。誰かが、二人のいる聖堂に入って来たのだ。しかも、トールにさえ全く気配を悟られないままに。
扉の閉まる音が消えると、あとは沈黙が耳を打つようだった。
侵入者が扉の内側で立ち止まっているのか、音もなく移動しているのかも分からない。
レオニスは車椅子から身を乗り出すようにして室内を振り返った。
礼拝で使う水圧オルガンの輪郭が暗闇に浮かぶ向こうに、聖歌隊の座席がある。
その聖歌席の右側に、一階の礼拝堂へと続く階段があった。今にも誰かがその階段を登り、暗闇に包まれた聖歌席を通って、彼らのいるテラスにやって来そうだった。
「何の気配もしません……」

トールはそう言いつつも、レオニスを侵入者から庇(かば)うようにして前へ出た。その右手が、早くも腰の短剣(たんけん)の柄(つか)に触(ふ)れているのを、レオニスは見た。

かつん――

だしぬけに足音が響いた。階段の方からだ。トールが息をのみ、レオニスは強い寒気に襲(おそ)われ、ぞっと総毛立(そうけだ)った。急に聖堂の中の温度が下がったような、異様な感覚があった。

かつん――かつん――と続けて足音が響く。明らかに、何者かが階段を登っているのだ。

「何の気配も……しません」

だがトールは言った。腰の短剣を握(にぎ)りしめ、そろそろと抜(ぬ)き放ってゆく。

足音が近づいてくる。姿(すがた)も気配もないまま、まるで形のないものが足音だけ立てて階段を登ってくるようだった。

やがて、ひときわ高い靴音(くつおと)がレオニスとトールの前で響き渡った。

だが階段を登りきったはずの者は、それこそ影も形もない。

「気配が……ない」

トールは闇を凝視(ぎょうし)し、抜きはなった刃を眼前(がんぜん)で構(かま)えた。そのまま、侵入者の存在を確(たし)かめるため、そろりと室内の闇に向かって足を踏(ふ)み出す。

「トール」

レオニスが咄嗟に呼び止めた。そのままトールを行かせたら、二度と戻ってこないような気がしたのだ。レオニスにとってトールはただの兵士ではない。従兄弟同士という血のつながりがあり、互いに心を許せる唯一の相手だった。今この場もレオニスとトールだけで決めたことであり、廷臣達にさえ話せないこともトールになら話せた。レオニスの様々な思いや、あらゆる策謀まで、それこそ話せないことなど何一つないくらいに。

トールは僅かに振り返り、自分は大丈夫だ、というようにはっきりとうなずいてみせた。

そのトールの態度が、レオニスにすべきことを教えた。車椅子の車輪を自分で動かし、室内の闇へと向かい合いながら、背を伸ばし、毅然とした姿を示したのである。足の不自由なレオニスに戦うすべなど無いに等しい。だがそれならそれでとるべき態度というものがあった。自分のために戦ってくれる者をしっかりと見つめ、現状を直視すべきだった。

トールが、刃を手に、音もなく闇へ踏み込もうとした、そのとき――

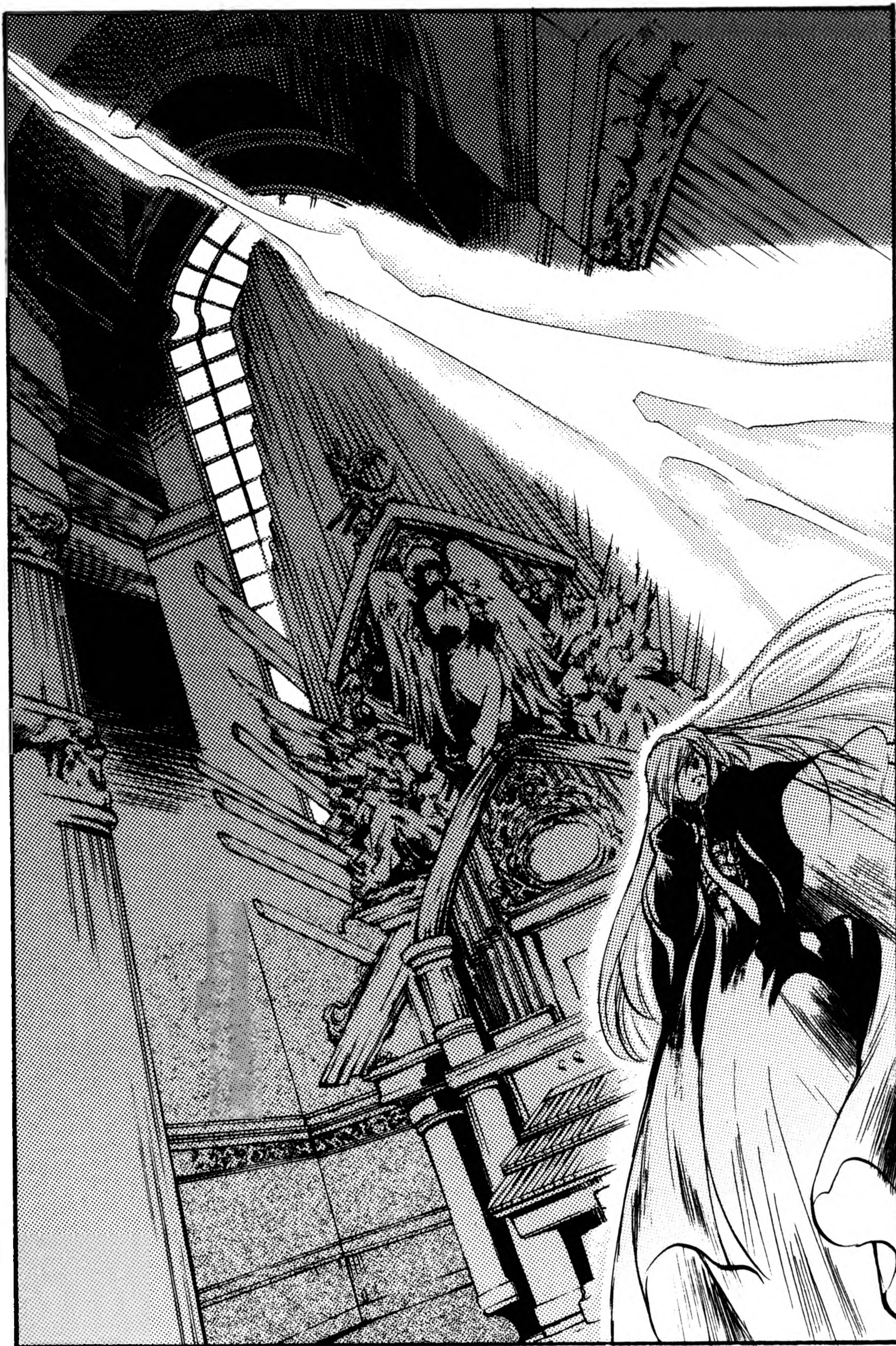
にわかに水圧オルガンが猛然と鳴り響き、旋律を奏で始めた。

レオニスもトールも素早くそちらを振り向いたが、悲鳴を上げて怯えたりはしない。

賛美歌の冒頭が、まるでレオニスのその態度を賞賛するかのように奏でられてゆく。

やがて侵入者の存在が闇に浮かび上がり、旋律の合間に、低く、凍てついた声が響いた。

「聖地シャイオンの若き領主よ……その継承を心から讃えよう。血塗られた領主の椅子の

静かな声音でありながら、鉄槌を振るうがごとき迫力があった。
その声に真っ向から挑むようにして、レオニスは、渾身の微笑を浮かべてみせた。
「実に心地よく、安らかですよ」
かすかな余韻を残して、旋律が終わった。いったいいつそこに現れたのかまるで不明のまま、水圧オルガンの演奏者はゆっくりと立ち上がり、優雅な動作で振り返った。
まるで最高の彫刻家の手による氷像が、青ざめたマントを翻らせたように見えた。
もう二年以上も放浪生活を続けているはずなのに、その貴族服にはしみ一つ無い。
長い銀髪が闇の中で蒼く浮かび、白皙のおもてに透徹した表情をたたえている。
その群青の目には凄烈な意志がみなぎり、今まで全く気配を感じさせなかった男とは思えぬほどの圧倒的な存在感が、烈風のごとく吹きつけてくるようだった。
レオニスはそのとき、恐怖とは別に奇妙な感動を覚えていた。今、この男との対話の場についたことが得体の知れない歓喜となってレオニスを内から燃え立たせたのであった。
悽愴の微笑を浮かべながら、レオニスは、痺れるような喜びを込めて言った。
「ようこそ、聖地シャイオンへ——ヴィクトール・ドラクロワ卿閣下」

第一章　魔炎

1

山々が黄金色に染まる、初夏の夕暮れであった。山腹にある巡礼者用の小屋の前で、男が一人、木に背を預けて座り、銀色に光る大きな物を黙々と磨き続けている。

赤い髪が夕陽を受けて燃えるような輝きを帯びる一方、その美貌といえる顔立ちは静謐として揺るぎない。白外套の下には黒革の鎧、腕には赤籠手と、実に殺伐とした戦闘衣裳である――が、その膝の上にあるものが、異様だった。

男はなんと、ひと振りの巨大な銀色のシャベルを、丹念に磨いているのである。

ふいに男の頭上で、木の葉が揺れた。かと思うと、何かが男の頭めがけて降ってきた。

男は静かにシャベルから手を離し、上から降ってきたものを無造作につかみとめた。

ほどよく固いプラムの果実である。男が背を預けている木に実っていたものだ。

「ちぇー、当たると思ったのにぃ。なーんでわかっちゃうのかなぁ」

本気で悔しがっているような声とともに木の葉の間から小さなものが、舞い降りてくる。
掌ほどの妖精だった。女性形をした身を白いシルクのドレスに包み、花弁のように束ねた金髪に、ぱっちりとした金の瞳をしている。その背で震える羽も淡く金色の輝きを帯び、まるで夕陽のかけらが陽気な姿をとって宙を舞い踊るようだった。
「修行が足らんな、チビ」
男が投げやりに返す。たちまち妖精がきっとなってわめいた。
「あたしはチビじゃないっ！　小さいだけっ！　この性悪の狼男めっ、絶対にあんたのその頭にどかーんとぶつけて、あんたから一本取ってやるからねっ！」
「それが出来たら、やめるのか」
男が、にこりともせず言い、受け止めた果実をかじる。妖精のことなど見てもいない。
「ううん。もっといっぱいぶつける」
きっぱりと妖精が言う。そこへ小屋から一人の少女がやって来て、
「ジーク様を困らせては駄目よ、アリスハート」
真面目な口調で、言った。溌剌と束ねた栗色の髪に、旅暮らしにも白さを失わぬ頬。淡く澄んだ紫の瞳は、どこか大人びた光をたたえている。青い法衣の胸元を〈銀の乙女〉の紋章が飾り、それに刻まれた〈見守る者〉の称号は、少女が聖法庁に仕えるれっきとした

聖道女であり、並々ならぬ聖性の使い手であることを示している。腰帯に白木細工の短い宝杖を差しているのも、少女が〈銀の乙女〉の正当な教えを受けた者である証拠だった。

その少女が、湯気の立つ椀を捧げ持つようにして男に歩み寄るのへ、

「ノヴィアぁ、狼男のやつったら、ぜーんぜん引っかかってくれないのよぉ」

アリスハートが、口惜しそうにわめいた。狼男とは、男――ジークの鋭い目つきを茶化してつけた渾名である。

「アリスハートったら……。申し訳ありません、ジーク様」

少女が困ったように代わりに謝る。ノヴィアにとってアリスハートは長年の友人だが、ジークとは主と従士の関係なのだ。アリスハートが何をしようとジークは怒りもせずきわめて無関心なのだが、何だか妙に自分が悪いことをした気になってしまうノヴィアだった。

「どうぞ、薬湯をお作りしました」

ジークは一つうなずいて、ノヴィアが差し出す椀を受け取った。

「人からものをもらったら、お礼を言うのが礼儀ってもんよぉ」

アリスハートが、いたずらっぽく茶々を入れてくる。

ジークは齧り終えた果実の芯を、上へ向かって高々と指で弾いた。

「ご馳走になった」

「そうそう、そうやって素直になれば狼男も少しは可愛げが……」
得意げなアリスハートの小さな頭を、次の瞬間、くるくる回りながら降ってきた果実の芯が直撃した。地面に叩き落とされて悲鳴を上げるアリスハートへ、ジークが言った。
「少し酸っぱかったぞ」
「ななな……なにすんだぁーっ！　この根性の歪みまくった、ひねくれ狼男ぉっ！」
涙目になって頭をさするアリスハートを無視して、ジークは平然と薬湯をすすっている。
「じきに、日が暮れるな」
「はい、ジーク様」
ノヴィアがアリスハートを拾い上げ、よしよしと撫でてやりながら応える。
「待ち合わせていた方は……今日はいらっしゃらないのでしょうか」
「分からない」
ジークは厳しい目を山道に向けている。
前回の聖地シャイオンでの任務から、半月余り経っていた。旅に復帰したジークは、ここで聖法庁の者から新たな任務に関する情報を得る予定だったのだ。常に単独で動くジークにとって情報は命綱に等しく、それ無しで迂闊に動けばみすみす危険を招くことになる。
「見えるか、ノヴィア？」

ジークに訊かれ、ノヴィアは淡い紫の目を、木々の生い茂る道の先へと向けた。それから素早く辺りを見渡すが、遠くで街道を行き交う行商や旅人の姿があるばかりだった。
「いえ……それらしい方は見えません……」
むろんジークやアリスハートには木々の向こうの道さえ見ることは出来ない。ノヴィアならではの視界である。万里眼と呼ばれる透視の力によって、遥か遠方まで見通すのだ。
「どこかで居眠りでもしてるんじゃないのぉ？」
アリスハートがわめいて、ジークに向かってべえっと舌を突き出すが、
「あるいは……既に始末されたか」
というジークの呟きに、ぎょっとなって危うく舌を噛みそうになった。敵の情報を探っていた者が、ジークと連絡を取り合う前に命を奪われている可能性もあるのだ。
「あの……では、今夜はここに？」
ノヴィアが遠慮がちに訊いた。本当ならこの先の村の修道院に泊まるはずだったのだ。
「そうなりそうだ。……どうした？」
ジークは、アリスハートを抱えたまま立ちつくすノヴィアを、怪訝そうに見やった。
「い……いえっ、あの……では、夕食をご用意しておきますね」
ノヴィアは慌てたようにきびすを返し、小屋に戻った。

小屋は五、六人は宿泊出来る広さで、井戸や台所があり、洗濯や湯浴みも出来る。どれも使ったらちゃんと綺麗にして立ち去るのが礼儀であり規則だった。
問題は寝所である。木のベッドが両側の壁に並び、棚には洗濯して畳んだ毛布が入っている。広い居間とは布で仕切られており、寝る場所はそこしかない。
ジークと旅をして長いノヴィアだが、一つの部屋で夜を過ごすのは初めてのことだった。いつもは修道院や教会など別々の場所に宿を求めており、夜はノヴィアも従士の務めを終え、たいていアリスハートと一緒にごろごろしている。もしそんなところをジークに見られたらどう思われるだろう。そう思って不安になった。
一方でいつもジークがどんな風に夜を過ごしているのかノヴィアには想像も出来ない。常に一緒にいるようでいて、実は従士としての立場が一枚の壁となって明確にノヴィアとジークを隔てているのだ。その壁が無い状態というのが見当もつかず、妙にそわそわして落ち着かなくなる。しまいには苦しいような緊張さえ感じてくる始末だった。
「ちょ……ちょっと、ノヴィア、苦しいってばぁっ」
悲鳴のような声で、はっと我に返る。気づけば両手でアリスハートを押し揉んでいた。
「ご……ごめんなさい、アリスハート。大丈夫？」
「もぉ、ちょっと、どうしたのぉ、ノヴィアぁ。なんか変よぉ」

「ううん……何でもない。お夕食作らなくっちゃ」
逃げるようにして台所に入るノヴィアを、アリスハートが首を傾げながら追った。
やがて日が暮れ、食事どきになってもノヴィアは落ち着かず、むしろますます緊張がつのってゆく。だがジークはいつも通り淡々と料理を平らげているし、アリスハートなどは、
「今日はあんたもここに泊まるんだぁ。寝てる間ならあんたも油断してるかしらねぇ」
などと、懲りないことを言っている。
「俺が寝ているときは、いたずらはやめておけ」
「ふぅん……さすがの狼男もよけられる自信が無いってわけぇ」
「手加減できずに、うっかり斬る可能性がある」
ジークに淡々と釘を刺され、ぎくっとなってアリスハートがテーブルの上で後ずさる。
「ノヴィアぁ、危ないから、こいつの隣で寝るのはよそうよぉ」
がしゃっと音を立ててノヴィアは皿に食器を落とし、双方の注目を浴びた。
「どうした……？」
「大丈夫ぅ、ノヴィアぁ？」
「す、すいません……何でもありません」
慌ててごまかすが、隣で寝るという言葉に胸を突かれたようになって、顔が猛烈に赤く

なってくる。幼い頃から父親がおらず、母とともに修道院で生活してきたノヴィアにとって、男性の隣に寝るなどというのは、もはや別世界の出来事だった。

いっそのこと真面目に寝所について相談した方が良いのではないかと思ったとき、

「来たか……」

ジークが、重々しく呟いていた。アリスハートがきょとんとなる。

そのときノヴィアの耳にも、馬蹄が地を蹴る音が聞こえてきた。慌てて壁越しに外を見ると、男が一人、馬に乗って真っ直ぐに小屋へ向かってきているではないか。

「もう一人分、食事の用意をしてくれ」

ジークの声には、任務のことだけを胸に抱いているような響きがある。

ノヴィアは気を引き締め、余計な考えを頭から振り払うためにも急いで台所へ行った。

ジークは席を立って小屋の扉を開き、木に馬をつなぎ終えて歩みくる男を迎えた。

「おお、黒印騎士団のジーク・ヴァールハイトだ。間違いない。あんたの顔は知ってる」

男が言った。油断無く辺りに目を配りながら小屋に入ると、白い歯を見せて笑った。

「俺は諜報院のサガ・トルホーズだ。あんたに情報と聖王からの書状を持ってきた」

こはく色の髪と目をした男だった。細いが精悍な顔つきで、しなやかな肢体に巡礼者の白い法衣姿、背はジークよりやや低いくらいだ。陽気な雰囲気を発散しており、

「よろしくな、おチビさん」
と、テーブルの上のアリスハートに、片方の目をつむってみせる。
「チビじゃないってのっ、アリスハートって名前があるんだからねっ！」
「すまんすまん、報告書にもちゃんとそう書いておくさ」
サガと名乗った男は笑顔で返し、ジークに書状を手渡した。
「負傷したのか」
ジークが訊く。サガの左肩から腕にかけて、衣服が真っ赤な血に染まっているのだ。
「ただの返り血だ。情報を収集して撤退したところを待ち伏せされて戦闘になった。生意気にも諜報院の動きを読もうとするやからがいるってことさ」
にやりと、今度は少しばかり凄みをきかせて笑った。諜報院とは、聖王の目となり耳となって各地の情報を収集する、聖王の直属の密偵機関である。
「待ち伏せした相手は？」
「三名、全員倒した。ある街の聖堂の兵だ。詳細は報告書を読んでくれ。後をつけられてないか確かめながら来たせいで時間がかかった。あんたが去るんじゃないかと焦ったよ」
「お食事の用意が出来ています」
ノヴィアが声をかけると、サガは喝采でも送りかねない勢いで感謝をあらわにした。

「こいつは助かる。何も食ってないんだ。おお、なんて良い匂いだ」
「あの……お洗濯しましょうか？」
「いや、この衣裳はすぐに捨てて別のを着るつもりなんだ。舞台の役者みたいに、ころころ衣裳を変えるのが俺たちの仕事の一つなのさ。いやしかし、まったく何て良い匂いだ」
　席につくや、そのサガの笑みが強ばった。目の前の料理に愕然となったのだ。まだらに濁ったスープに、皿の上の青緑色の物体、もとは何だったか不明の黄褐色の付け合わせ。
「味も良いぞ」
　ジークが、書状に目を通しながら淡々と声を投げる。それでも固まったままのサガに、
「見かけで判断して真実を逃すな」
　そう言った途端である。サガが目を細め、一瞬、笑みを完全に消したのをノヴィアは見た。まるで笑顔さえも自由に着替えられる衣裳の一つでもあるかのようだ。もしかすると陽気な雰囲気も、密偵としての見せかけかもしれない。そもそも服に人間の血が大量にしみたまま平然と食事をするなど、尋常の精神ではないのだ。
「見かけで判断して真実を逃すな……か。その言葉……以前にも聞いたことがある」
　にやっとまた笑顔を浮かべ——あるいは顔にかぶせて、サガは言った。
「そうそう……あんたの従士だった男から聞いたんだ」

何気ない一言だったが、その場にいる全員の動きを止めるには十分な衝撃があった。
ノヴィアは、はっと息をのんでサガを凝視した。アリスハートはぽかんとしている。
ジークは顔を上げて、しばしサガの背を見つめ、そしてまた書類に目を戻した。
「そいつはあんたに憧れててね。色々とあんたの言葉を俺に話してくれたもんさ。よし、俺も一つその言葉にあやかって、見かけじゃ分からない真実に触れてみるか」
サガは陽気に喋りたて、ひょいとスプーンを手にとってスープに口をつけた。
「なんてこった！　こいつは美味いなんてもんじゃない。とんでもなく美味いな！」
「ありがとうございます……。あの……」
ノヴィアは、サガに尋ねようとして口ごもった。ノヴィア以外のジークの従士について。
一度だけノヴィアはジークから聞いたことがある。従士になる少し前のことだ。ジークには四人の従士がいて、その全員が死んだ。二人は敵に殺され、あとの二人は――
「あいつもこうして真実を見つけてりゃ、あんたに斬られることもなかったのかね」
サガの言葉に、ノヴィアはひやりと冷たいものを感じた。そう――四人の従士のうち半分までもが、ジークに斬られて死んだのだ。そんなこと、今の今まですっかり忘れていた。
ノヴィアは詳しく聞きたい気持ちを咄嗟に抑え込んだ。ジークの前でそんなことを訊くなど、自分が斬られる心配をしているようではないか。そんな馬鹿なことはなかった。

いつもなら真っ先に好奇心をあらわすアリスハートも、この話題には興味を示さずにいる。もともと斬った斬られたといった血なまぐさい話は苦手なのだ。テーブルの上でパンをかじりながら、警戒するような目をサガに向けるばかりだった。

「ナデッタの街か――」

ジークは言った。どこか緊張したような空気を平然と吹き払う、淡々とした声だった。

「そうだ。俺もふくめて三人が内偵していたが、その街がドラクロワの通り道で、しかも置き土産をもらったことは、間違いない」

サガもまた、ジークと同じく、聖法庁の者としてドラクロワを追っているのだ。

「その置き土産がなんであるかを確かめるのは――」

「俺の仕事だ」

すぐさま答えるジークに、サガはまたにやっと笑って、食事を平らげにかかった。

「ごちそうさん。いやはや、美味かった。あんたが羨ましいよ、ジーク」

立ち上がって小屋を出てゆこうとするサガを追い、ジークも席を立った。

「じゃあな、従士さん。ジークに斬られないように気をつけろよ」

サガが笑う。ノヴィアは返答出来ないまま、サガとジークが小屋を出るのを見送った。

「変な人ぉ……。あんなにいっぱい笑ってるのに、ちっとも笑ってないみたい」

アリスハートが呆れた。ノヴィアも同感だった。にこにこ笑いながら、こちらの内情を容赦なく暴いて来ようとするような気配が、あのサガという男にはあった。
課報院の職務が、人をあんな風にしてしまうものなのだろうか。そんな風にも思う。
「狼男に斬られちゃうなんてねぇ。そんなことあるわけないのに、本当に変な人よねぇ」
しみじみと呟くアリスハートの言葉に、ちょっとほっとしつつ、
「そうよ。そんなことあるわけないもの」
怒ったようになって、サガとジークが出て行った戸を睨むノヴィアだった。

「平和な夜だ。それなのに今もドラクロワがどこかで何かを企み、それに従って反聖法庁の奴らがぞろぞろ動いてやがる。そのくせドラクロワ本人の居場所は不明ときてる」
サガはそう口にしながら、つないでいた馬を木から離し、手綱を引いてきた。
「報告書を読めば分かるが……何人もの人間がドラクロワを見たと密告してきたんだ。あのドラクロワがそう簡単に姿を見られるというのは、どうも出来すぎてる気がする」
「ドラクロワが仕掛けた罠かどうかは、行けば分かる」
「奴の罠を食い破れるのはあんただけさ。奴を仕留められることを祈ってるぜ」
「少し調べて欲しいことがある」

ジークはそう言って、サガに紙片を差し出した。サガはその内容を確認し、
「シャイオンの地の再調査依頼……？　それと……これは……」
驚いたようにジークと小屋とを見比べ、やがて、にやりと意味深な笑みを浮かべた。
「ジーク……あんたは確かに、見かけで真実を逃すことのない男だよ。ノヴィア・エルダーシャ……今の自分の従士のことさえ調べちまうってんだからな」
「十五年前のことだ。調べられるか？」
「やってみるさ。それより、シャイオンの地の一件は、あんたが片付けたんじゃなかったのか？　今じゃ新領主が跡を継いで、なかなか上手くやってるらしいぜ」
「その新領主に、何か動きがあるかもしれない」
「本当に油断も隙も無い男だ。そのうち俺も斬られる心配をしなくちゃならんかもな」
サガは笑った。夜目に、どこか獰猛な表情に見えた。
「いずれまた俺がナデッタの街に行くさ。それまでにあんたの頼み事を片付けとこう」
「余計な仕事だ。時間をとられるようなら打ち切って良い」
「なに、ドラクロワの調査にどっぷりつかってると、そのうち世界中がやつを中心に回ってる気がしてくるんでな。たまにはこういう仕事も良いものさ」
サガはしみじみ言うと、馬を連れて夜道を下っていった。

客が去ってのち、ノヴィアは改めて呆然とした思いにとらわれていた。
夜は更け、ランプの灯りが居間を照らし、湯浴みを済ませ、眠りにつく前の穏やかな時間が過ぎてゆくなか、ジークがいる。実際それはとてつもなく変な感じだった。目の前にいるジークが一晩中そこにいて、自分がこの場を立ち去ることもないというのは。
先ほど、小屋の裏の湯どころで湯浴みをして戻ったときなど、ノヴィアは完全にドアの前で固まってしまったものだ。ドアの向こうにジークがいることが——寝間着姿の自分がそこに入って行くことが、どうにも信じられなかった。思わず、
「う……が、頑張りなさいっ、ノヴィアちゃんっ！」
拳を握りしめて自分に向かって激励を発し、
「が……、頑張ります……はい」
ちょっと息をひそめるようにして応えるノヴィアであった。
「ちょ……ちょっとノヴィアぁ、何を頑張るのよぉ」
「わ……私にも分かんない」
「早く入ろうよぉ。まだ夜は寒いんだよぉ。山風が吹いて寒いったらぁ」
ノヴィアはごくっと喉を鳴らしてドアを開け、

「ずいぶんゆっくりだったな」
「きゃあっ！」
中から出てきたジークにもろ手を挙げて悲鳴をあげていた。
「十分、暖まったか」
「は……はいっ」
慌ててアリスハートとともにジークと入れ違いに小屋に駆け込み、背でドアを閉めた。
そのままジークが湯どころへ行く気配を背で感じると、思わず大きなくしゃみが出た。
ジークが湯浴みを終えて戻るまで、薬湯を作ることで気を落ち着かせた。そして今も自分をなだめるようにして薬湯をすすっている。あまり音を立てず、ゆっくりと。
別にノヴィアに薬湯は必要ない。強烈な堕気で体に負荷をかけるジークのためのものだ。
ではなぜノヴィアも飲んでいるかといえば、ぼんやり煮込むうちに大量に作りすぎたのである。気づけば鍋いっぱいに湯気を立てている薬湯を前にして、ノヴィアは初めて自分が動揺していることに気づいた。緊張し、どきどきし、しまいには朦朧としてきた。
「明日は歩く。今のうちにゆっくり休んでおけ」
ジークはそう言い、アリスハートなどはさっそくノヴィアの肩先でうとうとしている。
だがノヴィアにとって、これ以上の緊張はない。ジークの一挙手一投足が気になり、自

分の動きの全てが気になり、言葉が喉の奥で固まりになってつっかえている感じがした。
一方、ジークに、ノヴィアの存在を気にした様子は全くない。
ノヴィアを無視するというのではないが、やるべきことを淡々とやっている感じがした。書状を丹念に読み、報告書を調べ、日程を確認し、武装を手入れする。
剣をシャベルから抜き、丁寧に磨き始めたときは、思わずあのサガの言葉が気になった。
従士を斬ったのはその剣だろうか――そんなことが頭に浮かび、慌てて振り払う。
そして、この緊張はジークが怖いせいだろうか、いやそんなはずはない、としばらくの間、延々と自問自答を繰り広げねばならなかった。
ジークは剣の手入れを終えると、あとはひたすら地図の確認に没頭した。何枚もの地図を照らし合わせ、まるで一冊の分厚く難解な本を、じっくり味わいながら読むようなのだ。
その様子を見るうちに、ノヴィアはやがてジークのもう一つの側面を察していた。
ジークが、いかに大地と強く結びついているかを。
旅をするにも敵と戦うにも、地形はこの上なく重要な情報だった。ジークが死者を葬るのも、その魂を招き出すのも大地を通じてである。地図を見つめるジークの姿は、大地全てを神聖なものとしているかのように、とても貴いものを扱うような厳粛さに満ちている。
ノヴィアは、あれほど乱れていた気持ちがだんだんと静まり、代わって奇妙な感慨が込

み上げてくるのを感じていた。
広大な土地を延々と旅していると、たまに、ひどく孤独な気分に襲われるときがある。自分が何ものにも属さず、故郷さえ持たず、果てしなく連なる山河のまっただ中で、どうしようもなくちっぽけな存在に思えてくる。そしてそんなときに限って、あらゆる土地が美しく貴く感じられ、全てが輝いているような気になるのだ。
それは奇妙でいて、なじみ深い感覚だった。幼い頃から母と旅を続け、そして今もジークの従士として旅をしている自分にとって切っても切れない感覚だった。
ジークもまた生まれながらの放浪者といえた。育てられた場所はあるが、生まれ故郷を持たず、旅から旅への日々を送るジークにとって、大地全体が支えであり礎であるのだ。
地図を通して大地を読み解こうとするジークの姿には、孤絶感とでもいうべきものが漂っていて、見ているだけでノヴィアの胸にひどく澄んだような切なさを覚えさせた。
かつて親友だったドラクロワを追討せねばならない哀しみも、どこにその相手がいるのか分からない焦りも、これまでの戦いで経験しただろう無数の思いも、ジークは、大地と向き合うことによって、ぴたりと胸におさめているようだった。
これまでずっと見てきたジークのそんな姿が、今こうして夜をともに過ごしていると、ひどく新鮮なものに見えてくる。その姿をいつまでも見続けていたくなり、

「このまま……朝なんて来なければ良いのに」
思わず、ぽつんと、誰にも聞こえないような小声で、呟いていた。
「真面目ねえ、ノヴィアもぉ。〈銀の乙女〉の言いつけを、しっかり守っちゃってぇ」
あくび混じりのアリスハートの声が、いきなりノヴィアを我に返らせた。
「い、言いつけ……？」
「ほらぁ、狼男の様子を監視するっていう、言いつけよぉ」
本来ジークの従士となることが許されないノヴィアに、〈銀の乙女〉が与えた使命のことだ。ジークと旅をともにし、戦いを報告する――
「まるで捕虜になった気分だな」
いつの間にかジークがこちらを向き、真顔でそんなことを言った。
「ち……違いますっ。監視じゃありません、見守るんですっ」
なんと言って良いか分からないまま、ノヴィアは真っ赤になって返し、
「そ……そろそろ、包帯をお取り替えした方が良いのではと思って見ていただけです」
取り繕うように、荷物の中から包帯を探してみせる。
「頼む」
ジークはあくまで真面目な顔で長シャツの袖をまくった。その左腕一面に巻かれた包帯

に、アリスハートがぎょっとなってノヴィアの背後に隠れてしまった。
ノヴィアが包帯をほどくと凄まじいものが現れた。肉体に直接刻み込まれた聖印の赤い輝きである。かつてドラクロワから授けられた、〈招く者〉たるジークの力の源だった。
堕気があまりに強く発揮されると、その負荷で聖印が更に深く腕に刻みつけられ、激烈な痛みと出血を引き起こすのだが、ジークが弱音を吐いたところは一度も見たことがない。
それだけでも、この聖印とそれがもたらすものへのジークの強い思いが察せられた。
「お前の母親も……同じ目の色をしていた」
唐突にジークが言った。ノヴィアはちょっと驚いて顔を上げたが、間近にジークと目が合うと、赤くなってまたぱっと顔を伏せてしまった。
「は……はい。聖性を受け継ぐには、目や髪の色が同じである方が良いとか……」
「お前の母は……フェリシテは、どんな母親だった？」
びっくりした。ノヴィアがジークの過去を尋ねることはあっても、その逆は滅多にない。
ふいに母の面影がよぎり、ノヴィアは目を細めながら、包帯を巻いていった。
「いつも帰りの遅い、普通の母親でした」
「叱られるときは怖かったですけど……優しい母でした。ただ、滅多に家にいなくて……いつも置いていかれているような気がして、私、邪魔なのかなって……」

「そんなことないよぉ。ノヴィアのお母さん、いっつもノヴィアのこと気にしてたよぉ」
アリスハートが慌てて言い募る。ノヴィアはくすっと笑って、
「今なら……母が命がけで何を守ろうとしていたか、分かるような気がします。もっと話がしたかったです。母が守ろうとしたものを、私も守れるようになりたいから……」
包帯を巻き終え、その端を二つに裂き、綺麗に結び合わせた。
「私はフェリシテ・エルダーシャの娘だと、自信を持って言えるようになりたいから」
そして、静かに花の咲くような微笑を見せて言った。
「ジーク様のお陰で、心の中の母と仲直り出来ました。それが私には嬉しいんです」
「俺には、母がいないから、それがどんなものか分からないが……」
と断りを入れるジークの顔は、ノヴィアが不思議に思うほど、真剣だった。
「フェリシテは、母親としてお前を育てていた。決して、ただ後継者が欲しかったわけではなく。フェリシテは、お前を守るために、俺を呼んだ」
ノヴィアは赤くなってどぎまぎしながら、うなずいた。ジークが自分を気にかけてくれていることが、嬉しいような恥ずかしいような気分だった。
「そろそろ寝て、明日に備えて疲れをとっておけ」
「は……はい」

ノヴィアはアリスハートとともに布で仕切られた寝所へ行き、
「では……お先に、おやすみなさい」
うなずくジークの姿を、天井から吊された布が遮った。万里眼を用いれば、いつまでもその姿を見つめていられるだろう。だがノヴィアはあえて力を発揮させることなくベッドに入った。そしてふと母への気持ちとジークへの気持ちが、似ているような気がした。どこが似ているのだろう……。アリスハートが枕元で、おやすみなさいを告げた。自分もおやすみなさいと返し、目を閉じかけたとき、何かが分かった。
「従士として以上に……どう思われたいんだろう」
母からは、後継者として以上に娘として思われたかった。ではジークからは——
そう思ったとき、眠気がノヴィアの思考をなだめ、それ以上の考えを夜の静かな時間に溶かし込んでしまった。確かにノヴィアは疲れていた。色々と考えすぎて疲れたのだ。
不思議と何の緊張もなく、ノヴィアはそのまま眠りに落ちた。

2

「支度は整っているかい」
レオニスが穏やかに言った。衛兵や従者たちを代表して、トールがそれに答えた。

「万事、整っております、レオニス様」
「では、行こう」
レオニスの言葉に従って、トールがそっと車椅子を押し、その後をぞろぞろと城の者達がついて歩いた。その様子を、城の旧くからの臣下たちが見守り、
「本当に、父君の若い頃に優るとも劣らぬ凜々しさですなぁ」
「父君の遺書には、新領主を厳しく監視するよう記されておったが……いやいや、若いながら立派に務めを果たすあの姿をお目にされたら、何の文句もありますまい……」
前の領主といちいち比べるという煩わしさはあるが、誰もが好意的に評するのだった。
十日に一度ほど、レオニスは領地を見回るために城を出る。前領主である父がしていたことであり、領民にとってはちょっとした行事で、ことのほか喜ばれる。
レオニスの姿を見ると、みな進んで頭を下げ、自分たちの領主を褒め称えたりした。
別にレオニスも賞賛されるために見回っているわけではない。耕地の様子を聞き、水路に破損が無いか調べ、道路を作るための検地を行い、そして領民の不平不満を聞き入れる。
決して一部の有力者の言いなりにならず、土地全体が豊かになるためのすべを見出そうとするレオニスの態度こそ、領民も臣下も揃って賞賛するところだった。
やがて見回りを終え、領民たちから解放されると、レオニスは一息ついて言った。

「湖に行こう」
トールはすぐにその気持ちを察し、澄んだ鏡と呼ばれる大きな湖のそばへレオニスをつれていってくれた。そこが、レオニスにとっての真の聖地だった。
トールが車椅子の車輪を固定するなり、レオニスはすぐに身を起こそうとした。
両手で右足を持ち上げ、注意深く降ろす。同じように左足を降ろし、確信が湧くのを待ってから、両腕で車椅子の手すりをつかんで体を押し上げ――ゆっくりと立ち上がった。
「立てたよ……ノヴィア」
レオニス自身、意識していないような声が、自然とその口から零れた。
いつか、ノヴィアとともに必死に歩く訓練をしたこの場所も、今は初夏を迎え、楽園のごとく花々が咲き乱れようとしている。特にこの湖の周辺にだけ咲く、ひときわ可憐な花の一房にむかって、レオニスは少しずつ足を進めていった。
かつてその胸で荒れ狂っていた闇雲な怒りも今は消え、代わりにそこに芽生えたノヴィアへの思いが、今、目の前の花のように咲き誇るようだ。
一歩を進み、決して無理をせぬよう長い時間をかけて二歩目を踏み、三歩目で大きく息をついた。ノヴィアが自分を歩けるようにしてくれたのだという思いが胸いっぱいに広がり、切々としたその思いが言葉を超えた想いとなって、レオニスに四歩目を運ばせた。

トールがひっそりと見守る前で、ついに五歩目に至るや、くたっと座りこんでしまった。
だが目的は果たしている。息を整え、自分の力で辿り着いた花の一房へ手を伸ばす。
そして車椅子を運んできたトールに向かって、屈託のない笑顔を見せて言った。
「ほら、見てよ。もう一人の自分さ」
「自分……ですか？　その花が？」
トールが、不思議そうに、レオニスの手にある花を覗き込んだ。
「白水仙さ。知らないのか？」
トールは首を傾げた。むろん、その花は知っている。まるでこの澄んだ鏡の透明な水が
そのまま花咲いたような、小さな白い無垢の花である。水辺にしか咲かず、特にこの湖の
周辺を白く鮮やかに飾ることから、聖地シャイオンの紋章として使われているほどだった。
「それが、なぜ、もう一人の自分なのですか？」
トールが、レオニスを車椅子に乗せてやりながら、不思議そうに訊く。
「伝説だよ。若い男が、水に映った自分の姿を見てるうちに花になっちゃったんだ」
「なぜ、自分の姿を見ていたんです？」
「呪いだよ」
「呪い？」

「その若者に沢山の乙女が恋をしたけど、彼は誰も相手にしなかったんだ。彼に相手にされないことで泣く乙女の涙が、河になって流れて、森の木を倒してしまった。それで森の妖精たちが怒って、若者に呪いをかけたんだ。誰にも恋をしないような男は、自分自身に恋をしろってね。それで若者は、水辺に映った自分に呪縛されてしまった」
「……それでなぜ、花になったんです？」
「まあ聞きなって。若者は水に映る自分をつかまえようとするけど、決してつかまえられない。若者はそこで初めて恋の苦しさを知って、泣くんだ。そして、自分の顔が映るその河が、乙女たちの涙であることを知り、若者は悲しみのあまり、その河に身を投げて死んでしまう。乙女たちは彼の死を悲しみ……」
「怒って呪いをかけたくせに、今度は悲しむのですか？」
「呪いをかけたのは妖精たちだってば。ちゃんと聞いてよ」
ちょっとむきになってレオニスが言う。トールは素直に頭を垂れ、無言で詫びた。
「乙女たちが彼の亡骸を水辺に葬ると、翌朝、そこに見たこともない綺麗な花が咲いていたんだ。乙女たちは、その花に若者の名をつけた。それが、この白水仙の伝説さ」
「遺体に花の種を埋め込んでいたのですか？」
トールが真顔で訊く。レオニスはちょっと――というか、かなり、がっかりした。

「本当に、トールはこういう話は駄目だな」
「申し訳ありません」
至って真面目にまた頭を垂れるトールに、レオニスは苦笑を浮かべて手を振った。
「良いよ、もう。城に戻ろう。後で人をやって、この花を部屋に活けてもらうよ」
トールは従順と忠心に服を着せたような様子で、うやうやしく車椅子を押した。
城の執務室に入ると、執事が届いたばかりの書状をレオニスに差し出してきた。
「聖法庁からの書状……か」
レオニスが呟く。中身がそれとは違うものだと予想している口調だった。
花を机に置き、代わりに小さなナイフを手にして書状を開くと、予想が確信に代わった。
「例の男からの報告だ……」
レオニスの言葉に、トールが素早く周囲を確認した。部屋の外で誰かが立ち聞きしている気配もない。トールがうなずくと、レオニスは改めて書状を読んだ。
「予定通り、諜報院をナデッタの街に食いつかせた。ドラクロワにも無事に確認がとれた。ふうん。あの男……ドラクロワの紹介なのが油断出来ないけど、有能なのは確かだな」
呟くように告げるレオニスの顔が、ふいに強ばった。
「ジーク・ヴァールハイトが……ナデッタの街に向かっているそうだ」

そう言って書状から目を上げ、机の上に置かれた花に目を向けた。
「ノヴィアも、もちろん……一緒だ」
「では……」
「大丈夫……。ジークほどの男だ。今回のこれで仕留められるとはドラクロワだって思っちゃいない。だからこそ、この計画があるんだ」
まるで自分に言い聞かせるような声だった。書状を机に置いて、そっと花を手にとり、
「何を守り、何を与え、何をもたらすのか……」
白い花弁を撫でるレオニスの口から、そんな言葉が零れた。
その言葉が、もともと誰のものであるか、トールは知っている。
あのとき——あの男が、暗闇の向こうから恐ろしいほどの圧迫を込めて問いかけたのだ。
聖法庁の禁断の秘儀を盗みだし、二年余りも逃走を続けているばかりか、各地で戦乱の気運を盛り上げる、あの叛逆児——ヴィクトール・ドラクロワが。
「聖地シャイオンの若き領主よ……私がこの地を訪れた理由は、一つだ」
冷淡なくせに、どこか煮えたぎるような響きをふくんだ声が、暗い聖堂にこだました。
「私にとって、ロムルスは既知の相手だった。彼が何を守り、何を与え、何をもたらそう

としていたか、私には手に取るように分かった」
そう告げるドラクロワに向かって、レオニスは自ら車椅子の車輪を握った。車輪の回転する軋んだ音が、まさしく運命の輪が回る音のようにレオニスとトールの耳を打っていた。
「父は、亡くなりました」
「そう。何者かに謀殺されて」
完全な断定の口調だった。ドラクロワが既に聖地シャイオンの真実を見抜いていることを悟り、レオニスは猛烈な畏怖を感じた。聖法庁から逃走を続けている男が、この領地の出来事を確信している――！　この領地のことを。この自分が父を殺したことを。
「そなたの父は、各地に運ぶはずだった物資と、あの強力な兵器――何千何万もの兵の代わりとなる兵器の行方を司っていた。それが、そなたの父の死によって混乱をきたした」
その一言一句が、まるで落雷の衝撃のごとくレオニスを打ちのめした。
この男は、間違いなく自分を殺す気だ。それがはっきりと確信された。ぞくりと全身が寒気に震えた。だがそれは分かっていたはずだ――レオニスは懸命に自分に言い聞かせた。
それは予想がついていた。だから自分はあんなにも怖がっていたのだし、ドラクロワもそのつもりでさんざん脅しをきかせ、闇の中でオルガンを弾くなどという芝居がかったことまでして自分に抵抗する意志があるかどうかを試してきているのだ。

むしろそうしたことが確信されたからこそ今の自分の決意があるのだ。怒りを抱くドラクロワが自分を滅ぼしに来る前に、自分から招き、呼び寄せるという決意が。

ドラクロワは怒りだけで動く男ではない。必ず明確な戦略を持つ。このままではいずれドラクロワは挙兵の際に聖地シャイオンを滅ぼし、豊かな物資を兵のために奪うだろう。だがそれも戦略であり、それ以上の戦略があればドラクロワは決してそれを行わない。

「増殖器の運搬計画の乱れについては、既に修正して各地に連絡してあります。聖法庁の警戒のせいで大幅に遅れますが、一つとして見つからずに運ぶことが出来るでしょう」

　そしてそこで、レオニス自身、信じられないことをしていた。

「あなたと聖地シャイオンは、今でも同盟の関係にあると信じております」

　そう言いながら、微笑んだのだ。この瞬間にも、自分の五体を木っ端微塵に砕けるほどの力をもった相手に向かって――親しげに、共感のこもった微笑みを浮かべたのであった。

「同盟……。聖地シャイオンの若き領主よ、今、同盟と言ったか……？」

「はい。ヴィクトール・ドラクロワ卿。外典イザーク書の解読は進んでおりますか？」

　それこそがドラクロワが聖法庁から盗み出した禁断の秘儀の名だった。

　そしてレオニスは持てるだけの情報網を駆使して、その秘儀を調べ上げていたのだ。

ドラクロワが沈黙した。同時に、その身から放たれていた圧迫感が、殺気というのも生

やさしい、息をもつかせぬ激烈な重圧に変わっている。
レオニスよりも早く、トールの全身がそれに対抗しようとして緊張を帯びた。
だが、他ならぬレオニスが、さっと手をかざしてトールを遮り、敢然と告げた。
「ジェルミナル家当主として父の遺志を受け継ぎ、聖法庁の承認のもとで領主となった僕が、この聖地シャイオンを発展させるためにも、あなたとの同盟を批准する！」
その小柄な身のどこから発したかと思えるほどの凛烈たる声音であった。
ドラクロワはじっとレオニスを見つめ、やがてこう訊いた。
「父の遺志を受け継いだ……そう言ったのかね？」
レオニスはうなずきながら、ドラクロワとの最初の賭けに勝ったことを確信した。
「それこそ、僕が、血塗られた領主の座に、誓ったことだ」
「ならば訊こう、レオニス・ジェルミナルよ」
ドラクロワのその言葉は、レオニスにとって真の試練となった。これに勝てば自分もこの聖地もしばらくは安全だ。そして敗北は、すなわち死と滅亡以外の何ものでもない。
「そなたは、何を守り、何を与え、何をもたらすのか――？」
「僕は、この聖地を守る」
即座にレオニスが返した。

「僕が人に与えるものも、この聖地だ」
先ほどの宣言に優るとも劣らぬ、凜とした声音であった。
「そして、僕がもたらすものもまた、この聖地だ！」
ドラクロワは沈黙した。その一瞬一瞬がレオニスには果てしない時の経過に感じられた。
「確かに……そなたは、父の遺志を受け継いだ」
奇妙なことに、レオニスはそのとき限りない喜びを覚えていた。殺されるかもしれない相手の言葉に、どんな賞賛よりも——もしかすると父に誉められる以上の喜びを感じた。
「では聖地シャイオンの主よ……そなたは聖地の外にあるものへ、何をもたらす？」
ごくっと喉が震えた。ドラクロワがどのような言葉を求めているか、すぐに分かった。
先の問答が試練ならば、これは契約だった。悪魔のような男と地獄の契約を結ぶのだ。
「この聖地を輝かせるためなら……それ以外の土地全てを滅ぼしても、構いません」
レオニスが言い放った。すると突然、ドラクロワの顔に、信じがたいものが浮かんだ。
一幅の聖画を思わせるような、限りない優しさをたたえた微笑であった。その見る者を陶然とさせる笑顔で、闇の叛逆児ヴィクトール・ドラクロワは、はっきりとこう口にした。
「聖地シャイオンの正統なる主よ……我が同盟者として、そなたを迎えよう」

「レオニス様──」
トールの声で、レオニスは、ドラクロワとの密談の光景から現実に引き戻された。
気づけば、指が白くなるほどの強さで、花の茎を握っている。
「何を守り、何を与え、何をもたらす……」
そう繰り返しながら、ゆっくりと手の力を抜き、もう一方の手で、花弁を撫でた。
「出来ることなら……より良いものを守りたい、美しいものを与えたい、これが真実だと思えるものを、もたらしたい……。でも君は、あの街で僕らがもたらすものを見る。僕とあの男がともにもたらす、最初のものを……」
遠く──自分にはとても辿り着けぬほど遠い地を旅する少女を想いながら、レオニスは白い無垢の花に向かって、そっと囁いていた。
「これから君は、とても……とてもひどいものを見るんだ……ノヴィア」

3

澄み切った青空の下を、ジークたちは小屋を出て、新たな道を歩んだ。
その頃──同じ道の向こうから、のんびりと進んでくる二頭立ての馬車があった。
御者台に座るのは二人で、客席には誰もいない。というより本来後ろの客席にいるはず

の者が、御者台に登ってきていると言った方が良かった。
「そうそう坊ちゃん、なかなかお上手で。馬っこは二頭いるからといって、沢山尻を叩けば良いってもんでもなくてな。平等に叩かねば、馬がやっかみあって喧嘩しちまうだ」
年かさの男がパイプをくゆらせ、言った。どうやらこの男が、本来の御者らしい。
「平等ねえ。本当に平等にするんだったら、たまには俺たちがこの馬車を引っ張って、馬に鞭打たせてやるってのはどうだろう」
そう返すのは、若い青年だった。さらさらとした山吹色の髪の下で、青っぽい灰色の目がいたずらげな光を帯びている。長身だがひょろりと細く、瀟洒な貴族服を着ているが、前襟は開き、袖は留めず、上着のボタンは開け放題という、実に野放図な格好だ。
「はっはは！　エノル坊ちゃんは冗談がうめえな！」
「真面目な話さ。今度うちの親父で試してみよう。寝てる間に馬車にゆわえとくんだ」
「はっは！　俺ぁ坊ちゃんが、いつか父君に殺されっちまうんでねえかと心配だあ」
するとその笑い声を聞きつけたかのように、右の丘から疾駆する騎兵が現れていた。
数は一騎。とんでもなく逞しい悍馬が、草地をえぐって奔走してくる。その馬をしなやかに操る様は、決して荒っぽく乗り回すだけではなく、騎兵としての洗練された乗馬術を身につけている証拠だった。軽騎兵の薄い鎧姿に兜をかぶり、鞍には長槍が装備され、い

つでもそれを抜いて構えるぞと言わんばかりの気配がみなぎっている。
「エノルっ！　抜け駆けは許さんぞっ！」
兜の面頬を上げて、騎手が怒鳴った。なんと女である。しかも青年と同年代の若い娘だ。長い子鹿色の髪が兜の後ろから零れ、鳶色の目がらんらんと怒りに輝いている。
「あーあ……カヤに見つかっちゃった。参ったな」
青年が大して参っていないような顔で呟く。御者が笑って、馬上の娘を呼んだ。
「カヤ嬢ちゃん、どうしてここに？」
「どうしても、こうしても、あるものかっ！」
娘は馬の速度をゆるめ、巧みに馬車と併走させながら、物凄い声で叫んだ。
「我らの街を、聖王の騎士が訪うゆえ、丁重に出迎えるべしとの使命を貴様の父君から授かったのは、私と貴様の二名だ、エノル！　言い換えれば、私たち二人ということだ！」
「言い返せば、御者長のドナ爺を入れれば、三人だってわけだ」
平然と青年——エノルが返す。その頭上で、娘の槍が唸りを上げて振るわれた。
一見してとても娘の腕で扱える槍ではない。だが槍の刃に刻まれた聖印が輝くや、娘が軽く振っただけで、並の男がぶん回すより遥かに鋭い斬撃が宙を薙ぐのだ。
槍自体が聖性をやどし、それを握る者に力を与える、聖槍であった。

「冗談だよ、怖いなぁ。でもどうして先に行ったことが、こんなにすぐバレたの？」
そらっとぼけるエノルを、カヤがきっと睨んだ。兜を脱げば言い寄る男も一人や二人ではないだろう面立ちなのに、眉を逆立てるとそれはもう恐ろしいことこの上なかった。
かといって槍を振るっても大して効果は無いと察したか、きちんと鞍の脇に収めてから、騎兵に特有——というよりもカヤに特有の、てきぱきした口調で言った。
「尋ねるならば答えてやろう。一つ、私と約束した時刻よりも早く貴様が馬車に乗るところを城の者が見ていたのだ、エノル！　一つ、だいたい貴様が早朝に起床し正しい時間に朝食を食ったと聞いて、これは怪しいと思ったのだ、エノル！　一つ、そもそも貴様が昨夜、酒も飲まず正しい時間に寝たと聞いて何かを企んでいると思ったのだ、エノル！」
「ひどいなぁ、俺だってたまには真人間になることだってあるんだよ、カヤ」
「貴様が真人間になるなどこの世の終わりまで無いわ。せっかく私が食後のお茶を、お前の前で飲もうと思って推参したのに、一人で城を出るなど言語道断だ」
「俺の前で茶なんか飲んで何が楽しいの」
「二日酔いで髪もぼさぼさで顔も洗わず寝間着のまま、お茶と間違えてスープに砂糖を放り込んでそのまま気づかず食ってるお前は、下手な役者の芝居よりよほど笑える」
「じゃあ今度から、朝飯は舞台の上で食うよ。酒代くらいは稼げるんじゃないかな」

恬然と返すエノルに、カヤはまた反射的に槍を握ったが、ぐっとこらえて話を戻した。
「つまりだ。私を差し置いて一人で行くなど、ひどい！　あんまりではないか！　ものすごく楽しみにしていたのに！　と、私は言いたいわけだ。貴様の反論を聞こう」
「うーん……置いてったのは悪いと思ってるよ」
「そらみろ。貴様は今、自分の非を認めたではないか。まったく私に詫びるべきだ」
「ナデッタ聖堂騎士団の一等聖槍騎兵カヤ・アピアノスさんに、質問があります」
「なんだ、ナデッタの領主の一粒種でありながら酒色に溺れるエノル・ディオン卿」
「なんでカヤさんは、槍なんか持ってるんですか」
「問われれば答えよう。槍騎兵が槍を持ってるのは当たり前だからだ、この馬鹿」
「客を迎えに行くだけなのに、なんでがちがちに武装してるんですかぁ」
「愚問だぞ、エノル。あわよくば腕試しに聖王の騎士とやらと一戦交えたいから……」
はっとカヤが口元を押さえた。じろりと見やるエノルから、慌てて目をそらし、
「いや、つまり、一手指南を受けようと……」
「言い換えたって駄目だよ、カヤ」
「だ……だって、相手は聖王の騎士だぞ？　〈戦場の真理〉の称号を授けられたれっきとした聖騎士なのだ。その上、黒印騎士団を名乗ることを許され、聖咎の剣を下賜される

など、もはや騎士の名誉が人間の姿をして歩いているようなものではないか。数多ある騎士団でも最強かもしれん男と聞いて、貴様は同じ男として血がたぎらんのか？」
「血の気が引くよ。そんなとんでもない人を、爆弾みたいな女の子と一緒に出迎えるなんて。僕ら三人が皆殺しにされでもしたら、さすがのうちの親父も泣くね」
「私とドナ爺の死は悲しむだろうが、貴様の上で零されるのは嬉し涙としか思えぬ」
「どっちか試されないことを祈るよ。なんにせよ、そんな人が街に来るんだ。親父や聖堂の連中に後ろめたいことがあって、その人にいきなりぶった斬られてもおかしくないよ」
「貴様、父の名誉を汚す気か。私なら父をそんな風に言われたら問答無用で叩っ斬るぞ」
「カヤの親父さんは、立派な人だからね」
ぽつんとエノルが言った。カヤが黙り、御者が目もとに深い皺を溜めてエノルを見た。
「惜しい人を亡くしたよ。カヤの親父さんが病気で死んでから聖堂は腐る一方だ。親父もそれに加担するに決まってる。もしかするともう……でも俺には、何も出来ない」
「エノル――」
カヤは、エノルの横顔を見つめ、僅かな間を置き、えへんと咳払いをして、言った。
「お前は、一人ではない。私の父とお前の父君が親友同士であったように、私とお前も、幼少からともに育った仲ではないか。つまり……私がいるではないか、ということだ」

がちゃがちゃと軽騎兵の鎧を鳴らして言い募るカヤに、エノルがくすっと笑った。
「そうだね。大事な腐れ縁だ」
「だ、だろう？　かくなる上は私とお前で、聖王の騎士に挑もうではないか。かの騎士を屈服させられれば、なぁに、聖堂もお前の父君でさえも感服し、我らの望む通りに……」
エノルは腕を振り上げると、ていねいに両方の馬の尻を鞭打った。
「カヤ。もし聖王の騎士に喧嘩を売ったら、この鞭で、お尻を叩くからね」
とぼけた顔に似合わず、それこそ鞭のようにぴしりと厳しい声音だった。
カヤが、どきっとなって思わず片方の手でお尻を隠す。御者が、声を上げて笑った。
「ほんにまあ、坊ちゃんは馬の叩きどころを知ってるだでな。わしゃあ安心だあ」
「貴様らっ、許可なく私の尻に触れてみろっ。城門の前に二人並べて吊すぞっ！」
真っ赤になってわめき立てるカヤへ、エノルはにっこり笑って言った。
「じゃあ聖堂騎士団にかけ合って、正式に許可をもらっておくよ」

最初に気づいたのはノヴィアだった。森の中の道をゆくうち、ノヴィアの万里眼が次なる目的地をとらえたのである。ナデッタの街――大聖堂を抱える大きな街であり、耕地の収穫量も莫大で、聖地シャイオンと並ぶ豊饒の地の一つであった。

「なんて立派な街……」
幾つも並ぶ美しい白亜の尖塔を見て、ノヴィアが感嘆の声を上げた。
「え、どこどこ？　全然見えないよー、ノヴィアぁ」
ノヴィア以外に見えるわけがない。ジークも何となくノヴィアと同じ方を見やった。
「じきに森を抜ける。丘の向こうに街が見えるはずだ」
ジークにとっては脳裏に叩き込んだ地図が、万里眼の代わりというわけだった。
「あ……ジーク様。馬車が……襲われています」
「襲われている？」
「紋章付きの馬車が、鎧を着た騎士に襲われていて……あ、両方とも同じ紋章……？」
ジークもアリスハートも意味が分からない。森を抜けて、やっとそれが明らかになった。
一騎の騎兵が槍を振り回しながら、併走する馬車に向かって何ごとか叫んでいるのだ。
「確かに、襲われているようにも見えるが……」
だが馬車の車体にも、騎兵の馬の前掛けにも、同じ紋章が記されている。
「仲間割れでしょうか……」
「あれ？　こっちに気づいたみたい。……ちょっと、こっち来るよぉ、どうするぅ？」
「放っておけ」

ジークは、まるで気にした風もない。馬車も騎兵も、人目を気にして大人しくなったか、静かに進んでくる。そしてすれ違う際、馬車に乗った二人のうち若い方が首を伸ばして、
「もしかして、あれじゃないかな……」
「馬鹿な。黒印騎士団ともあろう者が、馬にも乗らずシャベルなど担いでるものか」
騎兵が、馬車の若者に向かってひそひそ返した。
ぴたりとジークの足が止まった。その腕がシャベルを振り上げるのを見て、ノヴィアとアリスハートがびっくりして大急ぎで脇に退いた。
ずどん！　爆弾でも炸裂したかのような音が響き渡り、馬たちが騒然といなないた。
「な……な、な!?」
騎兵が慌てて馬首を返す。ずぼっ。ジークがシャベルを地面から引き抜いた。
今の音がシャベルを突き立てたせいだと悟って、騎兵が絶句した。
「黒印騎士団――ジーク・ヴァールハイトだ」
そう名乗るや、凍りつく騎兵をよそに御者台の若者が嬉しそうに顔を出し、
「やっぱり、そうだったんだ」
急いで上着を着込み、馬車から降りると、にこにこ微笑みながらジークに歩み寄った。
「ジーク殿！　俺……いや、私はナデッタの領主ランド・ディオンの長子、エノル・ディ

オンと申します！　父から、あなた方をお迎えに上がるよう言いつかっております！」
「そんな話は聞いていない」
にべもないジークの応答に、エノルはやや鼻白んだようになって立ち止まった。
「まあ……私もつい先日、聞いたばかりでして。詳しいことは馬車の中ででも……」
「断る」
「お……お待ちを、聖王の騎士殿！」
大声を上げる騎兵に、今度はノヴィアとアリスハートが呆気に取られていた。まさか槍を振り回すこの騎兵が、若い娘だとは思っていなかったのである。
「ぜひとも手合わせ……ああ、いや、ぜひ我らの馬車に乗って下され！　我らの客人を街まで歩かせたとなれば、我らが主君より叱責を受けます！」
「……カヤっ、馬から下りろって。槍っ、槍なんか持つなよっ」
エノルが小声で叱りつける。カヤが慌てて槍をおさめ、あたふたと馬から下りた。
「馬車の中は空です。周りで隠れている兵士もいません。罠ではなさそうですが……」
ノヴィアが、そっと報告する。ジークはうなずき、鋭くエノルを見つめ――言った。
「三番目のボタンだ」
は――？　とエノルが緊張した顔で返す。たちまちカヤが猛然と怒鳴った。

「ば、馬鹿者っ、ボタンをかけ違ってるではないか！」
あっ、と素っ頓狂な声を上げてエノルが上着のボタンをかけ直すのへ、
「なんであらかじめ整えておかんのだ。ええい貸してみろっ。この、じたばたするな！」
カヤが怒って手を出すものだから、余計にこんがらがってくる。
そのうち御者台から老人が降りてきて、丁寧にジーク達に向かってお辞儀をした。
「ようこそナデッタへ、騎士様。いまどきの若いもんの礼儀ときたら驚きますですな。まずわしらも面くらいましたが、まあわしらとは文化ってやつが違いますでな」
「――なぜ、領主が自分で迎えに来ない？」
「はあ。わしらは……」
「ち、父は、体調が思わしくなく、無礼と承知の上、私たちがお迎えに上がりました」
エノルがボタンをかけ終え、満面に汗を浮かべて言い募る。そのあまりに必死な様子に、
「あたしたちって、そんなに怖い人たちに見えるのかなぁ、ノヴィアぁ」
アリスハートが何となくがっかりしたようになって肩をすぼめた。
「もぉ狼男のせいだからねぇ。ほらぁ、もーちょっと愛想良くしなさいよぉ」
「領主様は、お歳を召してから胸やら足やら悪くしなさってなぁ、お可哀想になぁ」
「数日前に俺が来ることを聞いたと言ったな？　誰がそれをお前の父に教えた？」

「ええと……父も聖堂の者も聖法庁に知人が沢山いまして、それできっと事前に……」
「馬鹿、エノルっ、それではさも悪いことをしているような言いざまではないか」
「ほらぁ、狼男がむすっとしてるから、怖がってんじゃないのよぉ」
「駄目よアリスハート、ジーク様の邪魔をしては」
口々にみながわめき立てるこの状況下にあっても、ジークはあくまで淡々としている。
「お前の父と聖堂の者は親しいのか？」
鋭く重い尋問口調に、みなが黙り込んでエノルを見た。エノルはごくっと喉を鳴らし、
「分かりません。ただ領主と聖堂が協調するのは、健全な都市では珍しくありません」
ほう、とジークが呟く。冷淡ともいえる態度だが、その実、エノルがうまく質問をかわしたことを誉めるような気配があるのを、傍らのノヴィアだけは察していた。
「では――ナデッタの聖堂は、どんな協調を領主に求めている？」
試すようなジークの言葉に、エノルはだんだん肝が据わってきたか、
「おおむね民のためになる協調ですが、自分たちだけの利益を求めることもあります」
「エ、エノルっ……自分たちの聖堂を、そんな、悪しざまにっ」
「聖堂も民の一部なわけでして。民の代表者は、利益を求めるものです。利益を求められない者は代表者にはなれませんしね。そして彼らを守るのが、領主の役目でして」

しれっと返答していた。不正について明言せず、統治の難しさをそのまま問うていた。
ジークは無言で、ひょいとシャベルを担いだ。エノルとカヤが揃って、どきっとなる。
ノヴィアだけはジークの内心を察している。この一見して頼りなさげなエノルが、自分の家や聖堂だけではなく市民全体を守ろうとする意志を正面からジークにぶつけたのだ。
「なるほど」
重々しく呟きつつも、ジークは、この未熟だがなかなか腹の据わった青年とのやり取りを明らかに楽しんでいた。ノヴィアはちょっと呆れつつ、口を挟んだ。
「ジーク様、とりあえず馬車に乗ってはいかがですか？」
ジークの従士が口添えしてくれたことで、エノルとカヤの表情が一気に明るくなった。
「ぜひとも、ぜひとも我らの馬車へお乗り下され」
カヤが勢い込んで足を踏み出した――そのときであった。
「あれえ――？」
御者の老人が、大きな声を上げて街の方を見やった。
エノルとカヤも何となしにそちらに目を向け――呆然と立ちつくした。
ジークが眉をひそめて振り返り、ノヴィアとアリスハートが揃って後ろを向く。
刹那――天地を砕くがごとき凄まじい雄叫びが、街の方から轟き渡ってきた。

まるで晴天に鳴り響く落雷の音だ。そしてなんと、猛然と咆吼を上げながら、塔ほども
ある何か巨大なものが、街のすぐそばでゆっくりと直立したではないか。
「なんだ、あれ……」
エノルが魂の抜けたような顔で呟く。御者もカヤも呆気に取られて言葉もない。
「〈竜骸〉だ！　ノヴィア、見えるか！」
全身に凄烈な気配をみなぎらせるジークに、エノルたちが、はっと我に返った。
「なんて大きい……。今までのものより、ずっと大きいです……」
「ひいええええ、いいいきなり出るぅううう？　ノヴィアぁあああ」
「馬を押さえろ！　怯えて走り去るぞ！」
ジークの叱咤に、エノルたちが弾かれたようになってそれぞれの馬に駆け寄った。
「走れそうか？」
御者台で馬を押さえるエノルと御者長に、ジークが訊いた。
「大丈夫です。狩りにも使う馬ですから、騒ぎには慣れてます」
エノルが蒼ざめながらも、しっかりと自分自身を落ち着かせて答えた。馬が怯えて狂奔
するのを避けるには、何より乗り手の動揺が馬に伝わらないようにせねばならないのだ。
エノルが十分に冷静なのを見て取ったジークは、馬車に足を乗せながら、言った。

「急げ」
「え――？」
「気が変わった。街まで乗せてもらおう」
ジークが告げたとき、遠くでひときわ騒然と、怪物が咆吼を上げた。

4

立て続けに轟く怪物の咆吼に煽られ、城中が大騒ぎとなっていた。
とはいえその怪物が具体的にどう恐ろしいのか誰も分からず、みな城の庭やテラスに集まり、街の向こう側の丘――聖堂がある辺りに現れた怪物に、騒然となるばかりである。
「聖堂とは、まだ連絡が取れぬか……」
初老の男が言った。髪も髭も白く、青みがかった灰色の目に静かな光をたたえ、執務室の窓から見える怪物の姿をとらえている。歳とともに体の不調が目立ち、肉体的には衰えてきたとはいえ、その落ち着きと威厳は今なおしっかりとその身に備わっている。
「兵は既に布陣したな？　聖王の騎士を迎えに行ったエノルも、まだ戻らぬのか？」
「はい、ランド様。兵の準備は整いましたが、いまだどこからも連絡はありませぬ」
臣下の一人が、窓を震わせる怪物の雄叫びに、びくっとなりながら答え、

「い、いったい何なのでしょう、あれは……ランド様」

ランドと呼ばれた初老の男は、短くかぶりを振って答えようがないことを示し、

「兵を聖堂に放て。街の広場に幕舎を建て、そこを拠点として情報のやり取りを行う」

まるで街の中で戦争が起こったかのような指示に、臣下たちが仰天した。

「し……しかし、聖堂の領域に、何の断りもなく兵を派遣しては……」

「その聖堂と連絡が取れぬのだ、仕方あるまい。このままでは民が恐慌に陥り、城になだれこんでくるぞ。そうなる前に、わし自ら街に下り、みなを静める。行くぞ」

慌ててその後を追う臣下たちを尻目に、ナデッタの領主ランド・ディオンは、

「二度とない好機だ。今こそ聖堂を倒し……その聖印を全て我が手に握ってみせる」

ひそかな呟きを零し、兵とともに城門へ向かった。

するとそこへ一台の馬車と一騎の騎兵が猛然と駆けつけ、大きく弧を描いて止まった。

御者台の青年――エノルが立ち上がり、大声で怒鳴った。

「父さん！　いったい何があったの！」

「エノルか……。聖王の騎士とは、無事に会えたのか？」

領主ランドが問うや、馬車から、長身の男が姿を現した。

「黒印騎士団ジーク・ヴァールハイトだ」

いっとき誰もが、ぽかんとなってジークの担いだ巨大なシャベルに目を奪われた。
「〈刻の竜頭〉の秘儀を知っているか」
鋭く問うが、領主ランドは怪訝そうにジークを見つめている。秘儀の名など、聞いたこともないらしい。ジークは、すぐさま質問を変えた。
「聖堂内部で告発があり、俺が派遣された。詳細が分かる者は、いるか」
「わしが、この地の領主ランド・ディオンだ、聖王の騎士よ。わしにも何が起こったのか分からぬ。聖堂と全く連絡が取れぬのだ」
「分かった。ノヴィア、チビ、お前たちはここにいろ」
「待って下さい、ジーク様。私も参ります！」
「ここ怖いって、ノヴィアぁああ、やめようよぉおおお」
馬車から新たに現れたノヴィアとアリスハートの姿に、領主ランドが仰天した。
「せ、聖王の騎士よ、なぜ子供が……？」
「俺の従士だ」
ジークが端的に応えたとき――城門に向かって更にもう一台の馬車が迫り来た。
「ひ、ひっ、ひっ、み、道を開けよ、み、み、道を開けぬかぁっ！」
緋色の法衣姿の男が、御者台で鞭を振り回しながら叫ぶ様に、

「あやつ……」
領主ランドが舌打ちにも似た声を零した。ジークは、新たな馬車を鋭く見据えている。
「危ないっ!」
エノルが叫び、ノヴィアもカヤも、慌てて新たに来た馬車の進路から跳びのいた。
エノルたちの馬車に危うく激突しそうになりながら、新たな馬車が止まった。
御者台で、ぜえぜえ息を荒げる法衣姿の男に、領主ランドが近づいた。
「チリング上級司祭よ、いかがした。聖堂から来たか?」
法衣の男は、褐色の目を見開き、樽のような腹を揺らして領主ランドを睨んだ。
「いかがも何も、化け物が聖堂をめちゃくちゃにしおったわ! 何をぼんやりしとる、かかしのようにつっ立つのがこの城の作法か? え、ランド・ディオン卿?」
「そうではない、チリング上級司祭。我らは既に兵を派遣した」
「兵? 兵と言うたか?」
法衣の男——チリング司祭は、緋色の帽子を脱ぎ、つるりと剃った頭をあらわにした。
手にした帽子で、頭にも顔にも浮かんだ脂汗を拭い、ふうふう荒い息をふき零し、
「兵じゃと? 兵ときたか。それが世俗の救い主というわけじゃな!」
闘犬のような獰猛な顔で領主ランドをにらむと、ぼそりと声を低めて言った。

「逃げんか」

「は？　何と言われた？」

「上級司祭のチリング・ラタン様が言うておるわ。逃げろ、逃げろ、逃げろと！　あの化け物に兵を派遣したとな！　聖堂騎士団がどうなったか教えてやる！　みな今頃あの化け物の腹の中じゃ！　あれは人間を食えば食うほど大きくなるんじゃ！」

　領主ランドが目を見開いたとき、丘の怪物が雄叫びを放ち、その体が、ぶくりと膨れあがった。お陰で、爬虫類のごとき顔がはっきり見えた。どこが胸か腰かも分からぬ体から、虫に似た脚が八方に伸びている。さながらどろどろに溶けたトカゲの頭を、巨大なムカデの体につけて起立させたような姿に、みなが嫌悪の声を上げて後ずさった。

　ジークだけが表情を変えず、チリング司祭に歩み寄り、鋭く問うた。

「聖堂全体で、〈刻の竜頭〉の秘儀に、協力したか」

は――？　とチリング司祭が間の抜けた声を返す。こちらも秘儀など知らないらしい。

「なんじゃお主、何者じゃ」

「黒印騎士団――ジーク・ヴァールハイト」

「な、なんと……！　聖王の黒き騎士が来るという噂は本当じゃったのか！」

「聖堂から馬車を走らせてきたか」

「い、命からがら逃げて来たわい。わしは何も知らん。上級司祭は他に七人もおるし、大司祭は二人じゃ。彼らが何をしとったにせよ、あの化け物が聖堂ごと消し潰しおったわ」
ジークはうなずき、何ごとかを口にした。そのとき怪物が更に膨れあがり、その雄叫びがいっそう大きく轟き渡ったせいで、チリング司祭はその言葉を聞き損なった。
「なに？　なんじゃと？　何と言うた？」
「戻れ。一緒に聖堂に行く」
チリング司祭が蒼白になった。ジークはチリング司祭の法衣の襟をひっつかむと、有無を言わさず御者台から引きずりおろし、後部座席に放り込んでしまった。
そのジークに、ノヴィアがアリスハートを抱えて走り寄り、きっぱりと言った。
「お供させて頂きます」
ジークはノヴィアを見つめ、厳しい顔をしつつうなずいた。そこへ更にエノルが叫んだ。
「俺も行きます。街のみんなを安全な場所に避難させたいんだ。カヤはどうする？」
「むろん私も行くぞ。聖堂の危機に、聖槍騎兵が駆けつけぬわけにいかぬわ」
「坊ちゃん、坊ちゃん、わしも行きます。馬車を走らせるのは任せて下され」
「エノル、待たんか！　お前は兵とともに、街の城門を管理せよ！」
領主ランドが怒鳴った。エノルはくるりと振り返って、真っ直ぐ父親を見つめた。

「父さん……この機会に、街を自分のものにしたいの？」
我が子にいきなり核心(かくしん)をつかれ、領主ランドのこめかみに太い青筋(あおすじ)が浮(う)かんだ。
「エノル……貴様(きさま)という奴(やつ)は、聖王の騎士の前で何ということを……」
「父さん。本当に、あの化け物のこと何も知らないの？」
「なんだと、わしを疑(うたが)うのか？」
「疑ってるんじゃない。訊(き)いてるんだ。本当のことを言ってよ！」
「そのような態度(たいど)を、疑っておるというのだっ！」
わめき合う領主と息子(むすこ)の間に、ジークがすっと割(わ)り込んだ。
「聖堂に放った兵を今すぐ退(ひ)かせ、市民を城に避難させろ」
淡々(たんたん)とした声が持つ圧力(あつりょく)に、領主ランドが僅(わず)かに退(ひ)きながら、
「て、撤退(てったい)しろと言うのか？　兵もなく、いったいどうするというのだ？」
「俺(おれ)が、あの化け物を街から遠ざけ、仕留(しと)める」
「せ……聖王の黒き騎士よ、そなた一人で？　兵はいらぬと言うのか？」
「俺が、軍団(レギオン)だ」
ジークはそう告げ、逃げ出そうとするチリング司祭をひっつかまえながら馬車に乗った。
エノルが御者(ぎょしゃ)長とともに御者台に上がって馬車を走らせ、カヤがそれを追う。

領主ランドは彼らを見送り、やがて、臣下たちを振り返ると、こう命じた。
「兵を撤退させよ……ただし半数は丘で待機し、残りの半数で民を避難させる」
それから、今さら隠してても仕方ないというように、声を高めて言った。
「兵に、領主ランドの名を唱えさせ、聖堂を非難する言葉を叫ばせよ。このような危機に街を陥らせた聖堂の者どもを打倒し、今こそ我らの手でこの地を統治する。よいな！」

「城に逃げろっ、みんな城に逃げるんだ！」
馬車で街を突っ切りながらエノルが叫ぶ。その後部座席ではチリング司祭が、
「わしは本当に何も知らぬ。今さら聖堂に戻って何が出来るんじゃ。引き返さんか」
ふうふう荒い息を零し、汗をしたたらせるのへ、ジークが鋭く問うた。
「なぜ聖堂の管理者が何人もいる？」
「この愚かなナデッタの地が、それだけくそ豊かだということじゃ」
司祭の口から零れるにしてはやけに乱暴な言葉遣いに、ノヴィアが目を丸くした。
「聖職者とは名ばかりの欲深い低劣なクズどもが集まって、みなで分け前に与かっとる。一時、人気者の聖騎士が、クズどもの不正を抑えておったが……それ、そこで走るじゃじゃ馬娘の父親じゃよ。その聖騎士が病でくたばると、もう手がつけられなくなった。挙げ

句の果てにこの騒ぎじゃ。ええい、もうこんな土地はうんざりじゃ」
「お前も、ここに分け前を求めに来たか？」
ジークの淡々とした眼差しに、チリング司祭はぶるっと闘犬のように頬を震わせた。
「わしがこのくそ豊かな地へ派遣を望んだのは、ここがわしのくそ故郷だからじゃ。飲んだくれのくそ親父どのも、優しき我が母も、このくそナデッタの地で眠っておる」
ジークが小さくうなずく。その隣でノヴィアは眉をひそめて、不謹慎な言葉遣いを連発する司祭から離れるように座席の端へ寄った。するとチリング司祭がにたっと笑い、
「それにしても聖王の騎士の従士にしては、可愛いお嬢ちゃんじゃの。どれ、わしの隣に座らんか。このくそナデッタの地のくそたわけた内情を面白おかしく話してしんぜよう」
「け……けっこうです」
思わず身を庇うようにするノヴィアだった。その懐ではアリスハートが細い悲鳴を上げ、
「ううう、あれが近づいてくるのが分かるよぉ、ノヴィアぁあ」
そしてにわかに——怪物の咆吼が頭上から聞こえてきた。それほど怪物に接近したのだ。
ジークが身を乗り出し、鋭く声を放った。
「止めろ！」
馬車の速度が落ち、カヤもそれに合わせて馬を止め——みなが、それに愕然となった。

「まるで……巨大な木が暴れてるみたいだ」
エノルが呟いた。ジークでさえも意表を突かれたようになって、その姿を凝視している。
事実、それは根づいていた。地面を貫いて生え伸び、巨大な根を張っていた。
ムカデのような体は、まさしく幹だった。そこから伸びる虫のような脚が、木の枝のように生え広がっている。その頂点では、どろどろに溶けた爬虫類の顔が、四つに裂けた顎を開いて咆吼を上げ、まるで気味の悪い巨大な花が咲き誇るかのようだ。
「あれでは、あの場所から移動させられません……」
ノヴィアがジークを振り仰ぐ。そのとき怪物が暴れ、根の一部がめりめりと裂けた。
「呪縛されているのか……」
さすがのジークが瞠目した。怪物自身は、どうにかしてその場を動こうとしているのだ。
だが体から生えた根が放してくれず、身動きの取れぬ怒りが体内で膨れあがるようにして、これまでジークが見てきたものの何倍もの大きさへと成長してゆくのだった。
「に、逃げろ、逃げろ、逃げんかっ！」
チリング司祭がわめく。エノルとカヤがジークを見つめた。やがてジークは、
「あの根を切る。それしかない」
呟くや、猛然とシャベルを地に突き立てた。かちりと柄を回して引き抜き、新たな柄を

現した。それを抜き放つや、鋭い銀の剣が一瞬でその手に現れた。
「聖咎の剣……！　そ、そんなところに……」
その剣の輝きに、カヤが馬上から賛嘆するとも呆れるともつかぬ声を上げた。
「俺がやる。お前たちはこれ以上、近づくな」
ジークが言う。チリング司祭が馬車の中からわめいた。
「あ……あの男が一人でやると言っておるんじゃ！　は、早う逃げぬかっ……！」
その途端だった。馬車のすぐそばの地面を突き破って、真っ黒いものが生え伸び、
「ば……化け物の脚だ！」
驚き叫ぶエノルの眼前で、それが断頭台の刃のごとく振り下ろされ、二頭の馬の胴体を両断してしまった。馬が血まみれの肉塊と化してふっ飛び、チリング司祭が絶叫を上げた。
「う、馬が！　馬がぁーっ！」
「おのれっ化け物っ！」
カヤが存分に槍を振るい、馬を殺した怪物の脚をなぎ払った。虫の脚そっくりのそれが切り砕かれ、どろりとした液体をしぶかせながら、地響きを立てて倒れた。
「ノヴィア、地面の下を見ろ！」
ジークの叫びに、ノヴィアがはっと目を足下に向け――あまりの恐怖に総毛立った。

「来ます！　沢山、来ます！」
「く、来るじゃと……？　何が来るんじゃ？」
チリング司祭が、だらだらと脂汗を零しながら、ぽかんとなる。
「エノルさんたちは逃げてっ！　カヤさんは動かないで！　司祭様も動かないで！」
エノルは猛然と御者の体をつかむと、身を投げ出すようにして御者台から飛び降りた。
「ジーク様、右へ！」
ジークが素早く跳んだ。その直後、そこら中から怪物の脚が地面を突き破って生え伸びた。馬車が真下から貫かれて粉々になり、次から次へと生え出す脚が、家屋を破壊し、市民をなぎ倒し、そこら中で暴れ狂った。その黒い刃の林に迷い込んだような光景に、
「お……終わりじゃ！　終わりじゃ！　みな怪物の餌食になって終わりじゃっ！」
チリング司祭がわめき散らし、エノルもカヤも完全に凍りついた、そのとき——
「ノヴィア、今ので終わりか」
「はい、次が伸びてくるのはまだ時間がかかりそうです、ジーク様」
「下がっていろ」
言うや、ジークの左腕が、にわかに眩い雷花を咲き乱れさせた。周囲で激しい堕気が渦を巻き、おうおうと慟哭の声にも似た唸りを上げる様に、チリング司祭が仰天した。

「な……なんじゃぁっ？　な、なぜ、死者の堕気が集まってきとるのだ……？」
そのわめき声が、突如（とつじょ）、猛然と吹き荒れる雷花と堕気の嵐（あらし）にかき消された。
「ジーク・ヴァールハイトが招（まね）く！」
叫びざま、ジークが凄（すさ）まじい勢（いきお）いでその左手を地面に叩（たた）きつけた。
「無念の魂（たましい）よ、火刻星（マムルーク）の連なりの下、砲魔（ほうま）ネルヴとなりて我（わ）が敵（てき）を撃（う）て！」
刹那（せつな）、青白い稲光（いなびかり）が地中から吹き荒れ、こちらに向かって振りかぶられた怪物の脚の群（むれ）が、まとめて木（こ）っ端微塵（ぱみじん）に爆発（ばくはつ）し、消し飛んでいた。
「天秤座（ズリエル）の陣！」
ジークの言下、もうもうたる煙（けむり）の中を、異形（いぎょう）の者達が一糸乱れず動き出した。焼けただれた体に仮面（かめん）のような顔、全身から煙霧（えんむ）を噴（ふ）き、その右腕は全（すべ）て巨大な砲身だった。
異形の魔兵たちが、おろおろするエノルたちの周囲で円陣を組み、一斉（いっせい）砲火を放つ。
怪物の脚が次々に吹き飛び、一気に視界（しかい）が開けるさまに、カヤが呆然（ぼうぜん）と声を上げた。
「こ、これは何なのだ……黒印騎士団（シュワルツ・リッター）とは、いったい……」
「――〈招く者（レギオン）〉」
ノヴィアが、静かに告げた。みなが、一斉にノヴィアを振り向いた。
「ジーク様は、堕界の魂を招く〈招く者（レギオン）〉――たった一人の、軍団（レギオン）」

魔兵にノヴィアたちを守らせながら、ジーク自身もまた魔兵に円陣を組ませ、怪物へと突き進んでいった。怪物は、必死に呪縛から離れようとしては怒りの声を上げている。

「こんなものを、いったい何のために……。まさか……ドラクロワ……」

倒壊した城門を越えて丘のふもとに到達したジークは、そこでまたもや愕然と立ちつくした。集結していた兵の遺体が散乱するその丘に、巨大な根がびっしりと生えているのだ。

その光景が、凄まじい無力感となってジークを打ちのめした。聖堂など跡形もない。丘全体が怪物の根だった。そこに怪物は生え、生まれながらの呪縛に身もだえていた。

これでは丘そのものを吹き飛ばしでもしない限り、怪物を移動させることは出来ない。

「なぜだ……！　なぜこんなものを作った、ドラクロワ！」

そのとき、ジークの怒りに感応したかのように、ぶくっと怪物が膨れ上がった。

ジークの左腕が高々と掲げられた。その腕に雷花が迸り、口から烈声が放たれた。

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」

その瞬間、怪物の根本で閃光が走り——爆発した。

ノヴィアはそれを見た。みなが見ていた。太陽の輝きがそこに全て集まり、炸裂したよ

うな輝きがあった。丘が真っ二つに割れ、中から巨大な光の球が現れたのだ。
その輝きが天地を真っ白に照らし、爆煙が迫った。凄まじい爆圧が何もかも押しつぶしながら押し寄せてきた。誰かが叫んだ。いや、みなが叫んでいた。だが何も聞こえなかった。とてつもない轟音に、むしろ音が消えたような錯覚を覚えた。
ノヴィアが建物の陰に隠れようとしたところへ、粉塵が舞い上がり、衝撃がきた。目の前が暗くなり、ノヴィアは一瞬、自分が盲目に戻ったのかと思った。耳がきーんと鳴り、胸に抱いたアリスハートの存在を感じた。地面が鳴動し、体がふわっと浮かぶような感覚と、地面に叩きつけられるような感覚とが何度も交互に起こった。
家や馬車だったものたちが炎の塊と化して砲弾のように飛んできた。辺り一面に火の粉が舞い狂い、頭上で死者の慟哭の声が渦を巻く中、何もかもが砕け散るのが分かった。狂ったように空気も地面も震えていた。それは長く、広く、深く、まさしく壊滅だった。
どれくらいの間、その崩壊が続いたのかも分からない。
ゆっくりと身を起こし、そのまま呆然と立ちつくした。
最初にノヴィアを正気に返らせたのは、頬を叩く雨滴だった。
街が無かった。全てが傾き、崩れ落ち、燃え盛る瓦礫の上に、雨が降り注いでいた。
ふとノヴィアは、隊列をなして立つ奇妙なものたちを見た。甲羅に覆われたクラゲのよ

うな姿で、肩から二つの巨大な爪が生えている。その全部で四つの爪を開き、微動だにせず立っていた。彼らが――この魔兵たちが盾となって爆風から自分を守ってくれたのだ。
そう悟ったとき、魔兵たちの体がぼろりと崩れた。あまりに強い衝撃を受けたため、ほとんど消し炭のようになって砕け散り、雨とともに地面にまき散らされた。
懐で動くものを感じ、ノヴィアは、ほっとして、震えるアリスハートを撫でた。
やがてあちこちの瓦礫から、エノルと御者が、カヤとその馬が、チリング司祭が、他の市民たちが現れた。みな、どうやら魔兵に守られていたらしい。
みな何かを口々に言っていたが、耳鳴りのせいでよく聞こえない。
ノヴィアは懸命になってジークを探した。爆発で丘が丸ごと消失したせいで、ジークが向かった方角が咄嗟につかめなかった。何度か辺りを見渡し、やっとジークを見つけた。
そこへ行こうとしたが足が動かなかった。遠くで剣を手に立つジークの姿は、ひどく傷つき、打ちのめされているようだった。自分にはとても慰められないだろう痛みに、ジークが一人で耐えているのが分かり、ノヴィアは胸を切られるような悲しさに襲われた。
「見よ、この雨を。真っ黒じゃ」
ふいに、はっきりとチリング司祭の声が、ノヴィアの耳を打った。
ノヴィアは、そっと掌をかざして雨を受け止めた。確かにそれは、黒く濁っていた。

「塵と煤が、雨に混じってるんだ……だから黒いんだ」
　エノルが言った。その隣で、カヤがふらふらと瓦礫の上に膝をつき、呆然と言った。
「……まるで、この世の地獄だ」

5

　ランプの灯りの下、十人ほどが座れる大きな円卓に、地図が広げられていた。
　アルカーナ大陸全土の詳細な地図——それを、車椅子に座ったレオニスが見つめている。
　左手に報告書の束を持ち、右手に裁縫用の針の束を握っていた。
　赤や緑や青など、何十色にも塗り分けられた針から、丁寧に色を選び、
「ここは黄色か……。ここは、そろそろ青くなってきたな」
　地図の何点かに突き刺し、それまで刺さっていた針を何本か抜いた。
「大陸東部に重心が移ってきている……ドラクロワの動きに合わせて赤くなってきた」
　五十色以上に色分けされた針による、極彩色の地図であった。針は、土地の争乱、政治状況、生産高、人口、砦の兵力などを精密にあらわし、それ以外には、文字さえない。
　これではレオニス以外の者が見ても何の地図かさえ分からない。色の一つ一つが意味するものを把握するだけでも困難なのに、レオニスは驚くべき速さで針を刺し替えてゆく。

そのレオニスの背後で、ふいにランプの灯りの陰から、すうっと黒い影が現れた。
「トールかい。どうしたの？」
「……例の報告が届きました」
トールが囁く。
そしてトールが差し出す一通の書状を受け取り、しばらくの間、じっと見つめた。
レオニスは報告書を持つ手で車輪を回し、別の机に針と報告書を置いた。
「これからは……こういう報告書が増えていくんだな」
机から小さなナイフを取り出し、小気味よい音を立てて封を切り、中身に目を通す。
「ナデッタの街は終わりだ」
断定だった。自分で車輪を回して移動し、壁が埋まるほど大きな本棚へ手を伸ばした。
本棚にはびっしりと書類が束ねて置かれてある。レオニスは、その一つを手に取った。
ナデッタの街の地図である。それに、冷淡とさえいえる眼差しを向けた。
「予定通り聖堂で爆発した。西側の市民は即死だ。家屋の五分の四が倒壊した。爆発で生じた塵と堕気のせいで耕地は全滅だ。百年は死の大地になる。聖堂も街も城も終わりだ」
独り言のような声音だった。地図をたたみ、報告書と一緒に本棚に戻す。
そこで突然——うっ……と呻き声を零し、書類を取り落としてしまった。
トールが、すっと近寄り、落ちた書類を束ね、きちんと所定の場所に戻してやる。

レオニスに目を向けると、さも痛そうに、左手で自分の右手をさすっていた。
「ものすごく熱かったんだ。急に熱くなるんだ。最近、どんどん熱くなる気がする」
うわごとのような言葉だが、その口調はきわめて理性的で、冷ややかでさえあった。
「父さんの血の熱さだ。命の熱さだ。本当に……火傷しそうなほど熱いんだ」
そのレオニスの脳裏では、かつてその手で殺傷した父の姿がまざまざと浮かんでいた。
父の血を浴びた記憶が、ときおり猛烈な熱の感覚となって甦るのだ。
それはときに火のように熱く、皮膚を焼かれるような痛みをともなった。
いつからそれが起こるようになったのか、レオニスもトールも、はっきり分かっている。
レオニスが、あの男と会ってからだ。あの、闇の叛逆児に――
「レオニス様」
「大丈夫……本当に火傷をしたわけじゃないよ」
レオニスは微笑し、机の花瓶から花を一房、そっと手に取った。そして先ほど熱さを感じた手で、ゆっくりと小さな花弁を撫でた。花を愛でるというよりも、花に触れることで傷を癒すような様子だった。火傷を慌てて水にひたすように――そんな風にトールは思う。
「もう後戻りは許されない。そうだろう、トール」
「はい、レオニス様」

トールが感情のないこだまのような声で返す。しかしその濃い紫の目には、あらゆる感情が溶け込んでいる。主君を頼もしく思う気持ちも、守ろうとする気持ちも、兄弟のような思いも、また――憐れみといっていい感情も。

「あの街で生まれた怪物は、制御不能な〈刻の竜頭〉の秘儀の別利用さ。大地から力を吸収し、暴発する……生きた爆弾だよ。ドラクロワが考え出し、僕が検証し、そしてあの聖堂が実行した……まさか自分たちを滅ぼすとも知らずに」

トールに声をかけているとも、まるで花に話しかけているともつかない口調だった。

「これでしばらく聖法庁もジークも、ある問題に縛られる。そこに……僕の勝機がある」

手にした可憐な白水仙の花を見つめながら、囁くような声で、レオニスは言った。

「ナデッタの民の悲劇は、これから始まるんだよ……ノヴィア」

第二章　歩みゆく者達

1

　暮れなずむ丘の一面に、墓標が並んでいる。
　ナデッタの城からやや離れた東側の丘の上に、ジークはいた。シャベルを肩に担ぎ、倒木に座って崩壊した都市を眺めている。足下の野原も、葉は枯れ、茶色く濁っていた。
〈竜骸〉が炸裂してから、四日目の夕刻であった。耕地と街の大半が焦土と化し、城の内外には軍が使う幕舎がひしめき、家を失った民の避難所となっている。
　民のほぼ三分の一が救護を必要とし、三分の一が動ける状態にあった。そして残りの三分の一が、もう何も必要とせず、二度と動くこともなく、ジークがいる丘に眠っていた。
「ジーク・ヴァールハイト殿！」
　ふいに声が上がった。目を向けると、エノルが手を振りながらやって来ていた。
「ジークでいい、エノル・ディオン卿」

エノルは肩をすくめ、ちょっと困ったように笑った。
「俺も、エノルで良いですよ。あの……隣に座っても、よろしいですか？」
　ジークがうなずく。エノルは会釈して倒木に腰を下ろし、墓標の群を眺めやった。
「みなを葬って下さって、ありがとうございます。自分も父も、生き残った者のことばかり考えていて、死者を葬ることでどれだけみなが慰められるか分かりませんでした」
「それが俺の仕事であり、お前の仕事だ。……ノヴィアは役に立っているか？」
「もちろんです。救護団と一緒に、治療が必要な者の世話をして下さっています。ただ、怪我がひどい者が多く……このままだと、更に墓標が増えるでしょう」
　ジークはまた小さくうなずいた。それから目を城に向け、言った。
「この土地は死んだ。生きるための新たな土地が必要だ」
「やはり……この地を棄てることになるのでしょうか。まだ城があるのに……」
「城だけあっても意味がない。強い堕気が地面にも水にも染みこんだ。この地にとどまれば、体力の衰えた者から死んでゆく」
「堕気が……。まるで死者たちが俺たちを招いているみたいですね。仲間になれって」
「彼らは、お前たちが生きることを望んでいる」
　やや厳しいジークの声音だった。エノルは、ひやっとしたように首をすくめ、

「すいません……。でも、この土地を捨てて……どこへ行けば良いんでしょう」
「聖法庁が、なるべく混乱が起こらないよう土地を選び、そこへの移動を命じてくる」
「……父はこの数日で、もの凄く老けたみたいです。自分が手に入れようとしていた街が吹っ飛んだせいでしょう。俺も、魂が半分欠けた感じです。家を失うならまだ実感があります。でも故郷を失うなんて……この土地を失うなんてこと、本当にあるんでしょうか」
ジークは答えず、ただ目の前にある光景を――現実に起こった出来事を見つめている。
「ジーク……あなたは、故郷は？」
「戦乱で焼かれた。誰かが幼かった俺を別の土地まで運んでくれた。その土地で剣を教わり、軍に売られた。そのあとは戦場が故郷みたいなものだ」
「俺には想像もつかない生活です……。我々に出来るでしょうか。故郷を離れ、新しい土地に行き、生活を一から築き上げるなんて……そんなこと、俺に出来るでしょうか」
「出来る。ここに眠る死者たちは、そう信じている。俺も、そう信じている」
エノルはじっとジークを見つめ、ややあって、明るい声を放った
「ありがとうございます、ジーク。あなたは俺の命の恩人で、心の恩人です」
そう言って立ち上がり、山吹色の髪をかき上げながら、精一杯の笑顔を浮かべた。
「たとえ、どんなことがあっても、何とかなりそうな気がしてきましたよ」

ジークもまた、この明るく聡明な青年に向かって、静かにうなずき返してみせた。

エノルが去り、またジーク一人になった。しばらくして、ぼそりと声を放っていた。

「――来たか」

枯れ果てた林から、男が一人、ひょいと姿を現した。こはく色の髪と目をした男である。引き締まった肢体に、今は行商の出で立ちを帯びている。

「遅くなった。覚えてるかい、諜報院のサガ・トルホーズだ。まったく……なんて光景だ。何もかも吹っ飛んでやがる。こんなのは初めて見たぜ」

ご丁寧なことに、商人が使う算盤つきの荷箱を背負っている。その荷箱をおろし、さも大事な商売の手形を扱うかのように、幾つかの書類を取り出してみせた。

「聖王からの書状だ。今回の件では聖法庁も、かなり混乱している。そら、これが聖法庁が用意した新しい土地への地図だ。何枚もあるだろう？ それだけ遠いってことさ」

「……遠すぎる。負傷者は到底、生きて辿り着けないだろう」

「負傷者については、隣国が受け入れる予定だ」

「隣国が――？」

「聖法庁がそうするよう近隣の領国に厳命した。聖法庁は、土地を失ったナデッタの民が、

隣近所に攻め込んで土地をぶんどろうとするのを恐れてるのさ。そうなる前に負傷者を他国に収容させ、健康な者だけでも、とにかく早く新しい土地に移そうってわけだ」
ジークはうなずいた。生きる場所を失った者たちが略奪に走るようになるにはまだしばらくかかるだろうが、放置しておけばまず確実にそうなる恐れがあった。
「何より聖法庁は、ナデッタの民を煽動するかもしれない男を恐れてるのさ。あのドラクロワが、あそこにいる民を、反聖法庁の兵に仕立て上げることをな」
ジークの目に、怒りに似た痛切な感情がよぎったが、それに関しては何も言わなかった。
「今回の件に関する書類は、これで全部だ。そして、これが、おまけさ」
「おまけ――？」
「おいおい、街と一緒に記憶もぶっとんだのかい。あんたが俺に頼んだことだよ」
ジークはすぐに合点した。聖地シャイオンや、ノヴィアの出生のことだ。確かにこの街の壊滅を目の当たりにして失念しかけていた。サガは書類を差し出しながら、
「読めば分かるが、ノヴィア・エルダーシャの出生については特に何も無かったぜ」
「何も無かった？」
「フェリシテ・エルダーシャは聖都の騎士と結ばれ、〈銀の乙女〉公認で結婚している。そして翌年、女児を出産し、ノヴィアと名づけている」

ジークは目を細めた。サガの挙動は、芝居がかってはいるが偽りを述べている気配は無い。むしろ自分が収集した情報の正確さを誇るような雰囲気さえあった。
「で、その数年後に、夫である騎士が戦死した。ここからが凄いところでな。フェリシテは〈銀の乙女〉の巡礼任務に志願している。別に食うに困ったんじゃなく、自分の夫を戦死させた戦場に赴いたのさ。そしてなんと、夫の代わりにその戦場を制覇しちまった」
「ノヴィアはそのときも一緒に？」
「最前線につれてったわけじゃない。〈銀の乙女〉の施設に預け、戦いが終わればまた引き取りに来るって調子だ。信じられんよ、我が子を置いて戦場に行く女ってのはな」
「フェリシテ自身が戦ったわけではない。主に斥候として、戦場を見通していた」
「〈見守る者〉か……記録によると、あんたとドラクロワも彼女を雇ってるな」
「〈銀の乙女〉を通して協力してもらった。傭兵として雇ったわけではない」
「まあ……そうして数々の戦勝を導き、多くの都市が彼女を求め、ついにはルールドの都市で戦死……と。その一人娘は、今や〈銀の乙女〉公認の、あんたの従士ってわけだ」
ジークは一つうなずくと、それらの地図と書類をひとまとめにして、懐に収めた。
「良く調べてくれたな」
「おやすいご用さ。シャイオンの地も、特にないな。他国との協調も上々、聖法庁でも優

等生扱いだ。特に今回の件でもシャイオンの地が筆頭に上がってる」
「筆頭……？　何のだ？」
「物資の援助だ。ナデッタの街の崩壊が報告されたとき、シャイオンの地が一番早く援助を申し出たんだ。今頃、大量の食料や物資が準備され、あちこちで動いてるはずだ」
「物資……」
「うん？　どうした？」
ジークは答えず、夕闇が落ちようとしている焦土と、ひしめく幕舎とを眺めやり、
「もう一つ……調べて欲しいことがある」
やがて、何かを鋭く見据えるような眼差しで、そう口にしていた。

「ノヴィアぁ、少し休もうよぉ。もうずっと働きっぱなしだよぉ」
アリスハートが悲しげに言うが、ノヴィアはかぶりを振った。大勢の者と一緒に、傷を負った者の手当てをし、包帯や衣服や毛布を洗濯し、食事の用意をし、水を汲んでいた。
「休んでいられないの」
まるで怒ったようにノヴィアは言う。涙をこらえるような顔で幕舎の間を歩き、水を汲むために城の井戸の方へ向かうと、ふいにジークが声をかけてきた。

「聖王から任務について書状が来た。今から領主と話し合う。お前も来い」
「私も……ですか？」
任務の話に同席させてもらえるのは嬉しいが、ノヴィアは、この地を離れると言われるのが不安だった。これほどの惨状に対し何も出来ずに去ることが、たまらない無力感となってノヴィアを責めるのだ。そしてその様子を察したジークが、やや命令口調で言った。
「少し休め。そのままではもたない」
「ほらぁ、狼男もこう言ってるよ、ノヴィアぁ。そのままじゃ病気になっちゃうよぉ」
ノヴィアは、唇を噛んで、うつむいた。ジークは、ひしめく幕舎に目を向けた。
忙しく動く者もいれば、呆然と座り込む者もいる。子供たちが身を寄せ合い、怪我人たちが苦痛の声をもらし、食事を作るための幕舎に老若男女が集まっている。
「今日だけで、百人近く死にました。ひどい怪我で苦しんで……」
ぽつんとノヴィアが言った。アリスハートが悲しげに、ノヴィアの首筋を撫でた。
「なんで……あの人たちが、こんなひどい目にあわなければならないんですか」
怒りを込めて口にした。涙がにじむ目に、ぼんやりと枯れた芝生が見えていた。初夏の青々とした芝生のはずが、どの葉も茶色く濁り、しなびている。
「何か、不足し始めているものはあるか」

「今はまだ……。ですが城の蓄えを見ても、十日もすれば空っぽになります。服や毛布や家具も、みんな街のあちこちから拾い集めてますが、ほとんど使い物になりません」
ふいにノヴィアの肩に暖かなものが触れた。はっと顔を上げた。気づけばジークの逞しい手が自分の肩に置かれていた。ノヴィアはどきっとなり、息をつめてジークを見た。
「これからは、お前の力が何より重要になる。覚悟して、今のうちに休んでおけ」
「私の力が……？」
ジークは一つうなずき、静かにノヴィアの肩から手を離した。その姿には、あの黒い雨に打たれて悄然としていた様子は微塵も残ってない。力強く今後のことを見通そうとする思いが気迫となって漂っている。ノヴィアは思わずすがるようにしてジークを見つめた。
「詳しいことは、領主と一緒に話す。来い」
そこへ突然――中庭からもの凄い気合い声が飛んできた。ジークは振り返ると、城に入るついでのように、中庭へ向かった。ノヴィアもついてゆきながら、事前にそれを見た。
聖印を刻まれた槍を持つ娘が、鳶色の目に屹然とした光をため、周囲に集まる生き残りの騎士たちを睨みつけているのだ。娘はカヤだった。兜はかぶらず、子鹿色の長い髪を頭の後ろでまとめて垂らしている。どうやら先ほどの気合い声は彼女のものらしい。
彼らからやや離れた場所で、ジークが足を止めた。ノヴィアも彼らを遠巻きに見た。

「誰が悪いだの、誰のせいだの、もう聞き飽きたわ！　民が健気に生き延びようとしているこのときに、下らぬいさかいを起こすなど、貴様らはそれでも騎士か！」
　カヤが怒鳴った。たちまち数人の騎士たちが殺気立つ。その足下では、カヤの槍に叩き伏せられたらしい騎士が、地面に倒れて頬についた砂を拭っている。
「聖堂の騎士が、偉そうに騎士の講釈を垂れるかっ！」
「街をめちゃくちゃにした聖堂の犬め！　這いつくばって詫びろ！」
　殺気立った四人の騎士たちが、口々にわめく。みな城の騎士らしい。
　その四人以外は、城の騎士も聖堂の騎士も、みな疲れた顔で傍観するばかりだ。
「街を破壊したのはあの化け物であり、それに関わった聖堂の者はみな死んだのだ。死者を鞭打ち、その咎を広げて争いを起こし、いったい何になる！」
　カヤが叫び返すが、ノヴィアには彼女もまた傷ついているように見えた。自分が属する聖堂が街を滅ぼしたのだ。その悲しみは深く、取り返しのつかないものに感じられた。
「俺の家族を返せっ！」
「お前たちが殺したんだ！　詫びろっ、俺たちに詫びろっ！」
　傷ついた者同士が、更に傷つけ合うようにして、ついに四人の騎士たちがカヤに迫った。
　さすがに殺気は無いが、それでも鞘に収めたままの剣を、力任せに振るってくる。

そしてカヤの迎撃は、ノヴィアの予想を遥かに超えて迅速であり、無慈悲ですらあった。
聖印の刻まれた槍を振るって二人の手から剣を弾き落とすと、間髪入れずにその腹を、足を、槍の柄でなぎ払って叩き伏せたのだ。そのまま一瞬のためらいもなく後方を振り返り、背後から剣を振りかぶる騎士の胸板目掛けて、猛然と槍の柄頭を突き込んだ。
相手はふっとばされて、傍観していた他の騎士たちの間へと、もんどり打って倒れた。
最後の一人が、殺気のこもった目になり、とうとう剣の鞘を外し、投げ捨てた。
「あの聖騎士の槍か——」
鞘が地に落ちる、からんという乾いた音に、さすがに周りの騎士たちの顔が強ばった。
だがカヤが反応したのは、騎士の言葉に対してである。
「いかにも、我が父から受け継いだアピアノス家の聖槍だ！　それがどうした！」
刃を握った騎士は、ただ、ぺっと地面に唾を吐き捨てた。
どうせ、その特殊な槍に頼っているだけだろうという、無言の侮辱であった。
カヤの思い切りの良さは、あらゆる場面ではっきりしている。無言で槍を地面に突き立てると、先ほど弾き落とした剣を手に取り、同じく鞘を抜いて投げ捨てたのだ。
相手の騎士が意外そうに目を細め、抜き身の剣を構えるカヤに、じりじりと近寄った。
傍観する騎士たちも、どこか息をのんだようになって見守っている。

「なんで、そこまで……」
ノヴィアは眉をしかめた。すぐそばで負傷者が痛みに喘ぎ、子供達が悲しみと恐怖で震えているときに、いったいこの者達は、何をやっているのか。たまらない怒りがノヴィアの中で生じ、彼らに何か言ってやらねば気が済まなくなって思わず歩み寄ろうとすると、
「黙って見ていろ」
鋭くジークに制止された。ノヴィアは驚いてジークを見上げ、そして騎士たちを見た。
高い気合い声が、カヤと騎士の双方の口から迸った。
互いに殺到し合うや、いきなりカヤの背が縮んだ。走りながら腰を落としたのである。
身を低めて相手の足を斬る気だ。ノヴィアにはそう見えたし、相手の騎士もそう思った。
騎士が進む速度を落とした。足を狙うなら、それを打ち払い、逆にカヤの顔を切るつもりなのだ。殺しはしないが、カヤの顔に一生消えぬ傷を負わせる――それが、この滅びをもたらした聖堂の者への、彼の怒りと恨みだった。
だがそのときカヤの身が上へと伸びた。狙いを変えて、腰を上げたのだ。
騎士も咄嗟に反応して、カヤの剣を打ち払うべく素早く剣を振るい――愕然となった。
カヤは跳んでいた。騎士のなぎ払った剣より、遥か高く宙を舞ったのだ。
このときカヤは騎士の頭でも肩でも好きなところを斬ることが出来たはずである。

だがそうはせず、なんと空中で剣を捨て、そのまま落下しながら騎士に抱きついた。
騎士は慌てたがどうにもならず、まるでカヤに抱きしめられるようにして、二人とも地面に倒れ込んでしまった。周りのみなもノヴィアも呆気に取られる中、
「私が詫びたところで……誰も生き返りはせんのだ」
カヤは、騎士の頭を胸に抱えたまま、耳元でそう囁いていた。
「それでお前の家族が生き返るなら、地面に頭をすりつけて何度でも詫びてやる。だがそれをしても、何にもならんのだ。私が詫びたところで、何の価値もないのだ……」
組み伏せるというより、真っ直ぐ抱きしめてくるカヤに、騎士は呆然となった。
「守れなかった。同じ街にいたのに、誰も守れなかった。なのに俺だけが無傷で……」
騎士が、目に涙を溢れさせて言った。カヤは、力いっぱいその騎士を抱きしめ、
「私とて守りたかったのだ……」
ゆっくりと立ち上がり、手を差し伸べて相手を起き上がらせた。そして、言った。
「もはや城の騎士も、聖堂の騎士もない。我々はナデッタの騎士だ。守れずに死んだ者達のためにも、生き残った我々が結束し、残された民を守らねばならない」
すると傍観していた城の騎士の一人が立ち上がり、剣を抜いて地面に突き刺した。
「俺は、カヤ・アピアノスに賛成だ。俺たちがいがみ合っても民に迷惑をかけるだけで何

にもならない。互いに争うための剣は、死者とともに葬ろう。仲間割れは、もう沢山だ」
続いて一人また一人と剣を抜き、無言のまま、目の前の地面に突き刺していった。
特に意味がある行為ではない。だがノヴィアには、それが彼らを結束させる何か神聖な儀式のように見えていた。争いごとを嫌ってノヴィアの背に隠れていたアリスハートも、
「あらぁ……いつの間にか、みんな仲直りしてるのねぇ。良かったわねぇ」
カヤに叩き伏せられた者たちも揃って剣を地面に突き立てるのを見て、明るく言った。
「互いに争う剣は、ここに葬った！　今ある剣はナデッタの民を守るためのもの！」
カヤが自分の槍を握り、叫んだ。みながその言葉を斉唱した。剣を地面から引き抜き、さっと袖で拭い、それぞれの鞘に収めたとき——彼らは一つの騎士団となっていた。
「……ようやく、まとまったか」
ジークが呟いた。その口ぶりから、守るべき街や家族を失った彼らが、新たに結束し直すのをずっと待っていたことが、傍らのノヴィアには察せられた。
「さすが、かの聖騎士の娘御じゃな。まるで父親そっくりじゃわい」
唐突に声が上がった。チリング司祭が、なんと酒瓶を手に、ふらふら近寄って来た。
「その調子で聖堂のクズどもを叩き潰しとれば、街もこうはならんかったんじゃろうに」
まるっきり酔っぱらいの口調で、たった今解決したことを蒸し返すように言う。

「司祭ともあろうお人が、こんなときに……何という醜態ですか」
カヤが、チリング司祭の酒臭さに、顔をしかめた。
「はっ、醜態というのはな、この土地のことじゃ。この醜く荒れ果てた土地を前にして、今さら何が醜態じゃ。じたばたあがくより酒でも飲んどった方がよっぽど潔いわ」
「じたばた……？　生き延びようとする民のことを……あがくと？」
カヤの顔に怒りがよぎった。握りしめた槍に殺気がこもっている。
「そうじゃ。どれだけあがいても、どうにもならんものは、どうにもならんのだ」
「あがいて何が悪い！　我々にここで死ねとおっしゃるかっ！」
カヤの怒りが頂点に達しかけたとき、初めてジークが動いた。すっと彼らに歩み寄り、
「そこまでにしておけ」
淡々としているくせに、ぴたりと全員の動きを止めるような重い声を放ったのである。
「ジーク殿……」
カヤが驚いたようにジークを振り返る。チリング司祭が小さく舌打ちし、酒をあおった。
「これから領主と話をしに行く。カヤ・アピアノス、チリング司祭、お前たちも来い」
「わ、私もですか、ジーク殿？」
「はっ、面倒じゃの。残念じゃが、わしはもっと酒がないか探しに……」

立ち去ろうとするチリング司祭の襟を、ジークが問答無用でつかみ止めた。
「こ、こらっ、離さんかっ。ええい、離せぇっ」
ジークは、じたばた暴れるチリング司祭を、じろりと正面から睨んで黙らせ、言った。
「確かに、あがいても、どうにもならないものは、どうにもならないな」
ジークが皮肉を口にするという珍しい事態に、ノヴィアは目を丸くした。
チリング司祭の顔が歪み、カヤがぷっと笑いを零した。そのままなすすべもなくジークに引きずられていくチリング司祭の様子を、騎士団のみなが笑って見送った。

2

城の執務室に入ると、領主ランドと、エノル、そして臣下たちがいた。
みな大きな円卓を囲んで座り、広げられた地図を、沈痛な様子で見つめている。
「聖法庁から、通達が来たようだな」
ジークが声をかけると、エノルが真っ先に顔を上げた。
「はい、ジーク。今、みなでそれを確認していたところです。やあ、カヤ。ノヴィアさんとアリスハートも、こんばんは。それに……チリング司祭も。どうぞ座って下さい」
「ふん、どいつもこいつも暗い顔をしおって。見ているこちらの気が滅入るわい」

チリング司祭は毒づき、領主ランドや臣下たちから一番遠い位置にどかっと座った。
その手に握られた酒瓶に臣下たちが眉をひそめたが、何も言わずに地図に目を戻す。
「聖法庁からの通達とは……？　このような場に、私が同席しても良いのですか？」
カヤがまごついたようになる。エノルが肩をすくめ、
「俺が頼んだんだ。ジークの目で見て、生き残った騎士の中から一人、他の騎士たちに色々と説明して納得させられるような人物を選んで欲しいって。はは、カヤが来るとはね」
カヤはぎょっとなってジークを振り返った。
「見たところ、彼女が適任だった」
ジークは当然のように言い、シャベルを脇に抱えたまま、席に座った。
カヤがごくっと緊張で喉を鳴らす。ノヴィアがくすっと笑いながら席についた。先ほどの騒動の一部始終を見ても、確かに騎士たちに色々と通達する上でカヤは適任だった。
カヤはこちんこちんになって席につき、はたと気づいて隣のエノルの腕を肘でつついた。
「エノル、なれなれしいぞ。ジーク殿と呼ばんか」
「ジークが、そう呼んで良いって言ったんだ。カヤもそう呼べば？」
「ば、馬鹿を言え、恐れ多い」

カヤがそう言い返したところで、領主ランドが初めて顔を上げ、ジークを見つめた。
「遠すぎる」
声に苦渋をにじませ、言った。白い髪も髭も艶を失い、顔の皺が今や深く陰影を刻んでいる。灰色の目には悲哀が漂い、砕けそうになる心を懸命に保とうとしている感じがした。
「現在、聖法庁が用意できる中で、その土地が、ここから最も近い」
ジークは、その領主ランドを見つめ返しながら、淡々と答えて言った。
「土地か。聖法庁め、我々に今度はどんなくそ豊かな土地を与えようと言うんじゃ？」
酔った声を上げるチリング司祭に、領主ランドが無言で地図の一点を指さしてみせた。
ナデッタの街がある場所だ。そこから指を動かし、別の地図へと移る。その地図から更に何枚かの地図へと移りゆき、しばらくして最後の一枚の上で、とん、と一点を叩いた。
チリング司祭が、あんぐりと口を開けた。カヤも呆然とし、ノヴィアもアリスハートも目を見開いて、領主ランドが指を置いた場所を注視している。
「も、最も近いじゃと？　こ、こ、この遥か彼方の土地が……？」
チリング司祭が闘犬のように、今にも唸り声を上げそうな顔でジークを睨む。
「そうだ」
ジークは、冷淡に言った。だが傍らのノヴィアには、ジークが相手に苦難をもたらす役

を務めようとしているのが痛いくらいに察せられた。
「ふ……負傷者はどうするのですか」
カヤが、叫び出したくなる自分を抑えるようにして訊く。それへ領主ランドが、
「近隣の領国が、一時的に収容し……看護してくれることになった……。明日にもその手配が行われ、数日以内に全ての負傷者が運ばれることになろう……」
「か……家族と別れさせろと言うのですか!?」
「一時的にだ……我々が新たな地に辿りついてから、傷を癒した者を迎えるのだ」
「し、しかし家族を置いてゆくなど……みなをどう説得すれば良いのですか。我々が新たな土地へ移動している間に、置いていった負傷者たちが死んでしまったら……」
「負傷者に、この旅は耐えられない。生きて欲しいのなら置いてゆくべきだ」
ジークが断定した。カヤが黙り、領主ランドが疲れ果てた声を零した。
「聖王の騎士よ……そなたならこの進路が、どれほど無謀か分かるであろう。ただ山河を越えるだけではない。我々にはもはや数十騎の騎士しかおらぬのだ。なのに戦乱が広がり、兵隊崩れの盗賊どもが跋扈する地域を通れという。蛮族もいる。ドラクロワによる反聖法庁の勢力もいる。もしそれらに襲われたら……ただ奪われ、殺されるしかない」
ジークは静かにうなずいた。はっきりとその苦難を理解しているというように。

「頼む……せめて聖王が我らのために兵を派遣してくれるよう、はからってくれぬか」
「これ以上の派兵は、聖法庁にも無理だ」
きっぱりとしたジークの断定に、領主ランドが沈痛に目を伏せた。エノルもカヤも、その絶望的な経路に顔を強ばらせ、チリング司祭はむっつりと酒を食らっている。
重い空気が室内を覆い尽くすかにみえたそのとき――ふと領主ランドが顔を上げた。
「……これ以上？」
ジークはうなずいた。みなが――ノヴィアやアリスハートさえ、はっとジークを見た。
「俺が、聖法庁から派遣された兵だ」
チリング司祭がぽかんとなり、エノルとカヤの顔が輝いた。ジークの力を実際に見ていない領主ランドや臣下たちさえ、この揺るぎない男に、すがるような目を向けている。
「で、では……聖王の騎士よ……そなたが……」
「お前たちを守る、軍団だ」
その瞬間、誰もがジークのことを信じた。この男が、たった数日しかともに過ごしていない民を、本気で守ろうとしていることを。そしてこの男ならば決して投げ出さずに最後までこの過酷な行軍について来てくれるということを。
領主ランドが震えた。咄嗟に声が出なかった。エノルが、その父の腕を、そっと支える

ようにつかんでやった。領主ランドは、深々と息を吸い、思いのたけをこめて言った。
「ジーク・ヴァールハイトよ……。そのご助勢……ありがたく受けさせて頂く」
今後の段取りが話し合われてのち、執務室を出たノヴィアは、入る前より格段に表情を明るくしていた。自分の力が少しでも役に立つのだと思うと、それだけで心が軽くなった。
「城の部屋を一つ、領主から借りた。そこで休め」
ジークがそう言ってくれたときも、素直にうなずくことが出来た。
「はいっ。頑張って休みます」
「い、いや、そんな頑張んなくて良いからさぁ。休もうよぉ、ノヴィアぁ」
宥めるアリスハートと奮起するノヴィアを部屋まで送り、ジークは一人、テラスに出た。
満天の星が、廃墟と化した街の上に茫漠として広がっている。冷たく乾いた風が、ひしめく天幕をばたばたと鳴らす光景に、ジークは拳を握りしめて耐えた。
「この街を……民の姿を、どこかで見ているのか……ドラクロワ」
低い、淡々とした声が、まるでひどい痛みに耐えるように、かすかに震えていた。
「なぜ滅ぼす……。お前が、俺に守れと言ったものを……なぜ……」
ジークは、声をのみこむように口を閉ざし、じっと眼前の光景を見つめた。やがて、

「俺が……彼らを守る。そして、お前を必ず見つけ出す……ドラクロワ」
目に映る全てのものに対し強く心に誓うように、決然と呟いていた。
翌朝、領主ランドが、聖法庁の通達の内容を、ナデッタの民に伝えた。
負傷者と別れ、民全体で、この地を捨てるということを。
みなが、それをひどく静かに受け入れた。異議を唱える者もいたが、他にどうしようもないということが、やがて彼らの口を重く閉ざした。そうして、悲しみの一日が過ぎた。
その翌日、近隣の領国から救護の一団がやって来て負傷者たちを運び始めた。まるで物のように運ばれる彼らが、家族や友人を持つ存在だということを、大勢の涙が証明した。
そしてその日からエノルや臣下たちが走り回り、民を幾つもの集団に分けていった。
それぞれの代表を決め、みなで話し合った。病人や怪我人が出た場合の対応を決め、食料や水などが不足した場合、誰が誰にそれを伝えるのかを決めた。
どの集団がどの順番で進むかを決め、大集団が移動する上で混乱しないための方法が考え出された。馬車を持つ者と持たぬ者とで争いが起きないよう、誰も馬車を独占しないことが決められた。馬車は主に、天幕と食料と水を運ぶために使われた。何台かは、怪我人や病人など、歩けなくなった者のために使うことになった。

大事にしていた家畜は、大半が屠られた。食料として焼かれ、塩に漬けられた。残りは民とともに、土地を離れることになった。
領主ランドは、城の装飾品や家具、宝物庫の中身の全てを、ジークを通じて聖法庁に買い取らせ、いざというときのために出来る限りの金を集めた。そして空っぽになった宝物庫は、民のために使われた。旅に持ってはいけないが、捨てるには忍びない品々が蔵められ、封印された。新天地に辿り着いたとき、あらためて取りに戻れるように。
中には自分の家があった場所に、思い出の染みこんだ品々を埋める者もいた。ある者は、それらを全て焼き捨てた。ある者は、持てるだけ持つことを決めた。
準備が着々と進み、誰もが、何かをしていることで気持ちを宥めようとしていた。
城の備蓄はどんどん減っていった。食料の不足が目立ってきたところで、最初の援助物資が届き、しばしの間、喝采と感謝の声が沸き起こった。
全てが一つの目的のために調っていった。誰も、それがどんなものになるか想像もつかずにいた。ジークでさえ、この旅に、どれだけの日数がかかるか予想出来ずにいた。
出立までに、目まぐるしい六日間が過ぎていった。短い六日間であり、彼らの運命を定める必死の六日間だった。そこで準備できなかったものは、もう二度と準備できないのが分かっていた。全てを取りこぼさず、持ち合わせ、準備しておかねばならなかった。

六日目の太陽が沈み、最後の夜が訪れた。
静かな夜だった。風は穏やかで、まるで全ての物音が消えたような——もう既に誰もこの土地にはいなくなってしまったような静寂が訪れた。
その静寂の中、全ての人々に変化が起こっていた。その変化こそが、最後の準備だった。
その夜、彼らは本当の意味で、故郷を失った。
そして、夜明けが来た。
みなが起き出した。すべきことはみな分かっていた。食事を用意し、天幕を畳み、荷物を馬車に載せた。出発の時が近づき、みな整然と隊列を組んでいった。どんな軍隊も彼らのようには連帯出来ないだろうと思わせるほど、確実に、当然のように彼らは列を組んだ。
そうして、ある土地で生きていた民が、移動することで生きる民となり、地に立った。
帰るべき場所を失った彼らが、もう一度それを手に入れるために——隊列が整い、領主ランドが先頭に立った。みなが立ち、待っていた。最後の、そして最初のときを。
やがてその民に向かって、領主ランドは、決定的な一言を告げた。
「出発する」
動き出した。最初の集団が歩き出し、それに従って一つの動きが出来上がっていった。
別個に並んでいた集団が、次々に数珠繋ぎになるようにして後を追い、ゆっくりと、だ

が確実に、二万人余の人間が、新たな土地の新たな生活を目指し、歩き出したのだ。
東へ——昇りゆく陽に向かって、長い長い行進が、始まった。

3

大きな湖が、夕陽の輝きを呑み、赤く命をはらむ血の色に染まっている。
テラスから湖を眺めるレオニスの金銀の髪も、滑らかな頬も、その右手にひっそりと握られた白い無垢の花も、みな鮮やかな血に濡れているようだった。
「レオニス様……書状が届きました」
背後でトールが囁いた。レオニスは花を握らぬ方の手を宙に差し伸べた。
その手に渡された書状を、膝の上に花と並べて置く。
トールが腰の短剣を抜き、白刃の切っ先を自分の方に向けてレオニスに渡した。
レオニスは、その刃で封を切り、短剣を返してから、ゆっくりと書状の中身を開いた。
「ナデッタの民が動き出した。狙い通り、ジーク・ヴァールハイトが彼らを護送する。あの男が守る二万人の民のうち、果たしてどれだけが新天地に辿り着けるんだろうね……」
冷ややかに呟くレオニスの傍らで、トールは静かに影のように佇んでいる。
「出来れば、一人も辿り着かず、皆殺しになるのが理想的なんだ……トール」

「はい、レオニス様」
「そうなれば、みすみす多数の民を死なせた失態によって、ジーク・ヴァールハイトの騎士生命は終わる。称号を剝奪され、聖咎の剣も奪われ、力も封じられる。聖王がジークを庇うだろうけど、聖法庁としては彼に責任を押しつけるしかないんだ」
「はい、レオニス様」
「ジークは逃げるだろう。聖法庁から逃げてドラクロワを追うだろう。そして広大な大陸で一人ぼっちになる。どこからも情報を手に入れられず、完全に孤立するんだ」
レオニスは、書状に向けていた目を湖に戻し、囁くように言った。
「それが、僕とドラクロワの同盟の、本当の鍵になる……」
赤く輝く湖面の向こうに、そのときレオニスは深い闇の底に立つ男の姿を見ていた。
あの叛逆児と同盟を結んだ決定的な光景を、まざまざと脳裏に甦らせていった――
「……そなたと聖法庁との関係は、私が彼らを滅ぼすまでの間、そのまま保つがいい」
ドラクロワは微笑んでレオニスにそう告げた。暗闇から苛烈な眼差しで世界を見据えるその群青の目が、そのとき鮮烈な赤さを帯びるのをレオニスは見たような気がした。
「私は多くは望まない。ただし真の同盟者に対しては、困難なことを望むだろう」

「〈刻の竜頭〉の秘儀の解明は、困難ですが時間さえかければ不可能ではありません。増殖器を始めとした物資の運搬も、困難ですが、時間さえあれば……」
「その時間を手に入れることこそが、真の困難なのだ、レオニス・ジェルミナル卿」
やはり、この男はそれを要求してきたか――レオニスは口を閉ざし、うなずいた。
聖法庁を攪乱し、時間を稼ぐ。それが、ドラクロワの第一の要求なのは分かっていた。
「〈刻の竜頭〉の秘儀も、じきに全てが解き明かされるだろう……。だがそのためには、この書に従って、まだ幾つもの土地を巡らねばならない……」
そう告げつつ、ドラクロワは、マントの陰から一冊の書物を持つ手をあらわしていた。
「外典イザーク書――」
レオニスがその名を口にした。聖法庁最大の禁忌として存在さえおおやけにされていない秘儀の書であった。そしてそれこそ、この男を強大なものにしている最大の武器だ――
レオニスはそう思いつつも、しいてそれに興味などないような目をドラクロワに向けた。
「物資の運搬についても既に私が手配した。ただし彼らが動くにも、時間が必要だ……」
ドラクロワは言った。いつの間にか、書物はマントの奥に消えている。
「聖法庁を惑わすには、出来るだけ大勢の人間を使う方が良い。大陸に住まう大勢の人々に恩恵を与えることが聖法庁の存在意義であり、その務めなくして彼らは存続しえない」

「聖法庁に、その務めを強制するような事態を引き起こせば――」
「そちらの方が、私の存在などより、聖法庁にとって重大ということになるだろう」
酷薄に笑うドラクロワに対し、レオニスもまた微笑しながら、その頭脳を猛然と回転させていた。このままでは同盟を結んだとはいえ、良いように利用されるだけだった。どこかで対等であることを示さねば、どんどんドラクロワにばかり有利に話が進んでゆく。
ドラクロワに拮抗できる材料が欲しい。秘儀の解明も、物資の運搬も、この男ならば自力でやってのける。ではドラクロワに出来ていないものは？　なんでもいい。ドラクロワがこちらを認め、むしろ警戒するくらいの力を見せつけるためには、何をすればいい？
「では、すぐにも、そのような事態に陥らせるのに、最も適した土地を選びましょう」
「同時に、〈刻の竜頭〉の秘儀の応用も試せるだろう」
「特に豊かな聖堂を選びましょう。聖法庁の禁断の秘儀というだけで、彼らは富を手に入れられると勘違いするでしょうから。必死に秘儀を試してくれると思いますよ」
にこやかに地獄の沼に沈むような会話を繰り広げながら、レオニスは考えに考えた。
あった――！　突然、回答が閃いた。一つだけある。ドラクロワに出来ていないこと、あるいは、あえてしようとしていないことが。もしかするとそれこそがドラクロワの弱点かもしれないと思えるほどのことが。そうだ。ドラクロワも自分の父も、それをしようと

しなかった。不可能というのではなく出来ればそれをしたくないというもの――それこそドラクロワには出来ず、自分にしか出来ないことではないのか。

だがいっときレオニス自身が、その思考を拒んだ。遠い地を旅する少女の面影が脳裏に浮かんだのだ。だがここを乗り越えねば、ドラクロワと対等になるなど夢のまた夢だ。

「聖法庁を惑わせるための、悲劇の準備はすぐに行うとして――」

レオニスは囁きながら、そのとき急に、両手に熱を感じていた。

熱さは徐々に増し、いきなり燃え上がる炭火の中に両手を突っ込んだようになった。

全身に鳥肌が立ち、背中一面に冷や汗がにじみ、思わず悲鳴を上げかけた。

血だ――レオニスは思った。血の熱さだ。父の腹を剣で貫き、その両手を赤く染めた血の熱さが、両手の皮膚を焼き焦がすかのような熱さで甦ってきたのだ。

トールが敏感にレオニスの異変を察し、無言のまま近寄ってくる。

いけない。ここでドラクロワに弱みを見せては、絶対に駄目だ。レオニスは焼けただれるような痛みに耐え、手を払ってトールの動きを制し、言った。

「一つ、懸念すべきことがあります、ヴィクトール・ドラクロワ卿」

ほう、と面白そうにドラクロワが呟き、レオニスに先をうながした。

「あなたを追討せんとする聖法庁の者たちを巧みに惑わし、迎え撃ち、滅ぼしてきたあな

たの手腕には感服する他ありません。ですがただ一名、あなたの罠を破り続けている者がおります。そしてその者はただ一名にて一個の軍団に等しい力と権限を持っております」
ドラクロワの表情に変化は見られなかった。だがその眼光が凍てつくような輝きを帯び、群青の瞳が、今度こそ本当に鮮やかな深紅に染まったかのようだった。
「かつてあなたが自ら力を与えたその男が、我々に危機をもたらさないとも限りません」
レオニスはそのとき、両手を焼く幻の熱を味わいながらも会心の微笑を浮かべていた。
やはり、これこそドラクロワの最大の落ち度——自分がつけこめる唯一の隙だったのだ。
「そなたは、その者を、どうするというのだ……レオニス・ジェルミナル卿」
ドラクロワは何の動揺もなく冷厳としている。だがそのドラクロワも内心で焼けつくものを抱いていることをレオニスは直感し、相手に匹敵する足がかりを得たことを確信した。
「聖地シャイオンの総力を挙げてジーク・ヴァールハイトを狩り、その首をあなたに捧げてご覧に入れます……ヴィクトール・ドラクロワ卿閣下」
そして、いずれその外典イザーク書も、あなたの手から奪ってさしあげる——その心の呟きを、レオニスは鮮やかなまでの微笑の裏に、ぴたりと隠し秘めたのだった。
「ジークを今倒せなくてもいい……ナデッタの民を皆殺しにし、騎士の称号を剥奪されて

孤立するジークを、刺客達に狩らせる」
紅蓮の夕陽の輝きに包まれながら、レオニスは言った。
「刺客……」
トールが、こだまのように繰り返した。今初めて、その言葉を聞いたのだ。
「ドラクロワが紹介してくれた例の男が、僕にそのことを気づかせたんだ。今、ジークの過去を徹底的に調べさせている……じきに四人の従士についての情報が届くはずだ」
「四人の従士……」
「ノヴィアの前にいたジークの従士達さ。あの男を狩るのに最も適した者達の情報が、いずれ手に入る。ただ、その前に一つだけ……トールに頼みたいことがあるんだ」
トールは何も聞き返さず、うやうやしく頭を垂れ、無言で命令を待っている。
「東へ移動しているナデッタの民の中に、ひそかに紛れ込んで欲しい」
トールは驚きに目を細めた。それはこのシャイオンの地を――レオニスのもとを離れるということだ。だがトールは何も言わず、黙って主君の心を察し、うなずいている。
「守ってあげて欲しいんだ。僕から……僕がもたらすものから彼女を……ノヴィアを守って欲しい。お前を危険な場所に行かせたくない。でも、お前にしか頼めないんだ」
「はい、レオニス様」

トールが返す。無感情なくせに不思議とレオニスの思いを汲んでいるような声だった。
「本当に皮肉だな……僕から彼女を守るなんて。彼女の大事なものを、僕が奪うなんて」
嘘をつけ――ふいに心のどこかが叫び、その手に、かっと幻の熱を生じさせた。
あの男を殺す理由が欲しかったくせに。彼女からあの男を奪ってやれ。さあ、ドラクロワやあの男のような怪物になるチャンスだぞ。あいつらを倒して自分が怪物になれ。
レオニスは、そっと花を握った。その花だけが、両手を灼く熱から自分を助けてくれた。見せつけたいくせに。一番大事なものが失われるところを彼女に見せたいくせに。ノヴィアがひどいものを見れば見るほど喜んでいる自分がいるじゃないか。自分を置いて行ってしまった彼女に、もっともっと残酷なものをもたらしてやればいいんだ。
レオニスは歯を食いしばり、右手に花を持ったまま、左手だけあえて幻の火に灼かせた。
その熱に苦しむうちは、まだ自分は、自分にだけは嘘をつかずにすんでいるのだと思った。
「出来れば僕がノヴィアを守りたい……でも僕には無理だ」
焼けつく痛みに震える左手で、まともに動かぬ己の脚を、きつく握りしめた。
「何を守れるんだろう。何を与えられるんだろう。何をもたらせるんだろう……」
すがるような、想うような、憎むような、全てがないまぜになったような目を、真っ赤に輝く湖に向けて、レオニスは呟いた。

「僕が君に与えてやれるものの中に、良いものは一つも無いのかな……ノヴィア」

4

歩いてゆく。長大な人の列が、重い荷を積んだ馬車とともに、東へ進んでゆく。
ジークは、先頭から三番目の集団の脇を歩きながら、長い人の列を振り返り、
「速すぎるな」
「速度を落とせと先頭に言え。このままだと隊列が伸びきって、ばらばらになる」
そうエノルに声をかけた。エノルは歩きながら各集団の代表と連絡を取り合ってきたばかりで、ちょっと疲れた顔を見せたが、すぐに明るく微笑んだ。
「父がまた焦ってるんでしょう。手綱を絞ってきますよ」
エノルは先頭に追いつきながら、ふと、いつかそんな会話をしたのを思い出していた。
本当に平等なら自分たちが馬車を曳いて、馬に叩かせよう――ジークを迎えに行くとき交わした笑い話だ。もう出発から何日も経っており、はるか昔のことのように思われた。
実際、父ときたら本当に馬になったようにみんなを引っ張っている。しかも臣下の者たちが馬車に乗るようすすめるのを拒み、自分の足で歩いているのだ。
「父さん、先頭のみんなの速度を少しゆるめて。後の者がついてこれなくなるよ」

そう言われて、領主ランドは、はっと地図を持つ手をおろした。
「……そうか。みながすぐ後ろに迫ってきている気がしてな」
「確かに追ってはいるけどね。別に父さんをつかまえようとしているわけじゃ……」
領主ランドは聞こえていない顔で、荷で溢れる馬車とみなの速度を落とさせている。
エノルは立ち止まった。後方から来たジークに合わせて再び歩き、ぽつっと言った。
「父は、なんだか民に追われてるみたいな顔でした」
ノヴィアとアリスハートが目を丸くする。ジークが、ちらりとエノルを見やった。
「街が滅んだことで、みなに責められている気分なのかも……。父を先頭に置かない方が良いかもしれません。あれじゃ、みなを引っ張ってるんじゃない。引きずってるんだ」
そう口にするエノルの中で、小さな悲しみが、やがて父への怒りに変わるようだった。
「歩かせてやれ」
ぴしりとしたジークの声音に、エノルがはっとなった。
「お前が引きずられなければ良い。父親の手綱を握っていてやれ」
エノルの顔に苦笑が浮かんだ。寝てる間に親父を馬車にゆわえとこう——いつかそう言って笑ったときのことが思い出された。自分がその父に引きずられてどうするのか。
「お前も走り回りすぎだ。民に引きずり回されるな」

傍らのノヴィアが、ちょっと首をすくめるほど厳しい言い方だったが、
「すいません。気をつけます」
エノルはむしろ救われたような笑みを浮かべている。ふとそこへ、わめき声が飛んだ。
「おい、エノル坊や！　坊主！　小僧！　ちょっと待たんか、こら！」
チリング司祭が、ふうふう息を荒げ、脂汗を流しながら追いかけてくる。埃だらけの緋色の法衣の下で、でっぷりとした腹が荒い呼吸のたびに揺れていた。エノルが呆れて、
「司祭様がいるのは、七番目の集団のはずですよ」
「知っとるわい。話があるから、こうして急いで来たのだ。ほれ、見て分からんか」
「分かるって……何がですか？」
「わしが参っとることがじゃ。体中が砕けそうじゃよ。ほれ、はよう馬車に乗せんか」
「暑いなら法衣を脱いだらどうですか。ほら、僕みたいに半袖になって」
しれっとした顔でエノルが答える。チリング司祭はぶるっと闘犬みたいに頬を震わせた。
「わしはナデッタの聖堂の唯一の生き残りじゃぞ。もっとわしを敬わんか。お前たちが新天地でも聖法庁の加護を受けられるには、わしの存在が必要なのじゃ。分かっとるのか」
「ええ。ずいぶんお元気でいらっしゃるのが、よく分かります。まだまだ歩けますよ」
「この領主のドラ息子めが！　わしはもう歩けぬと言っておる！　歩けぬのだ！」

足を止めるチリング司祭の首根っこをジークがつかみ、問答無用で突き出した。
「歩け」
チリング司祭が慌てて手足をじたばたさせ、よろめき歩く。その醜態にエノルとアリスハートが苦笑し、ノヴィアはちょっと眉をひそめた。
「どいつもこいつも……不敬で、無礼で、分からず屋で、乱暴な者ばかりじゃわい」
ふとノヴィアと目が合うと、ふうふう荒い息をふきこぼしながら歩み寄り、
「まったく、そうは思わぬか？　のう、可愛い〈銀の乙女〉の少女よ」
などと言いながら、気安く肩に触れてきた。ノヴィアは思わずびくっとなって身を離し、
「ちょっとぉ！　おじさん、お酒臭いよぉおっ。酔っぱらってるんじゃないのぉっ」
アリスハートが、珍しく怒った顔で指を突き出し、チリング司祭を牽制する。
「お、お酒を飲みながら歩いてらっしゃるんですか」
さしものノヴィアも、きっとなる。だがチリング司祭は一向に気にせず、
「妖精風情が、わしのことを、おじさんとはなんじゃ。チリング司祭様と呼ぶがいい」
ジークが何も言わないのを良いことに、ちゃっかりノヴィアの隣を歩いている。
「チリング司祭、ちゃんと列を守って下さい。だいたい、なんで酒なんか……」
エノルがさすがに声に怒りをにじませて言ったとき、ふいにジークが口を挟んだ。

「好きにさせてやれ」

みな——チリング司祭もふくめて、びっくりした。チリング司祭は赤ら顔で笑い、

「ふうん、意外に話の分かるやつじゃな。そうじゃ、わしとこの少女を一緒に馬車に乗せるというのはどうじゃ。さすれば、きっと新天地でも聖法庁から加護が与えられよう」

「駄目だ。歩け」

その点に関してはジークは一切容赦しない。ノヴィアは、ほっとした。

チリング司祭は荒い息を零し、腰から水筒を取り、ぐいっとあおった。中身が酒なのは明らかだ。エノルが呆れ返るが、チリング司祭はそれ以上文句は言わず、大人しく——心なしノヴィアに近寄るようにして歩くようになっていた。

しばらくして後方から馬蹄の音が響いてきた。カヤが馬を走らせてきたのだ。

「騎兵どもは馬に乗れてええのう！　快適な旅をお過ごしか、聖騎士の娘御よ！」

チリング司祭が毒づくのへ、カヤはあからさまに不愉快な顔になって言った。

「司祭様こそ、よいご身分ですな。酒を持つ手があるならば、後方で赤子を抱く母親たちの代わりに、荷物の一つや二つは抱えて欲しいものですが」

「お前さんがたという、どでかい荷物を抱えとるわい。これ以上、何も持てぬわ」

「奇遇ですな。私どもも司祭様というこの上なく厄介な荷物を背負い込んでおります」

「なんじゃと、この……」

「どうした、カヤ・アピアノス」

ジークが二人の会話を遮(さえぎ)る。カヤは、きりっと背を伸(の)ばし、報告(ほうこく)口調で言った。

「先ほど後方で馬車の荷が崩(くず)れました。怪我(けが)人はおりませんが、荷を戻(もど)すため後続がいったん止まりましたゆえ、彼らが追いつくために歩く速度を落として頂(いただ)けないでしょうか」

ジークが、エノルを見やる。すぐにエノルはうなずき、

「親父(おやじ)に伝えます。一度止まった方が良いですか」

「ここで止まれば士気が下がる。ゆっくりで良いから、進み続けろ」

ジークの言葉を了解(りょうかい)すると、エノルはまた足を速めて父のもとへ向かった。

「ふん、まるで軍隊の行進じゃや。聖王(せいおう)の騎士(きし)という牧羊犬(シェーファー)に面倒(めんどう)をみてもらう羊(ひつじ)の群(むれ)というわけじゃの。いっそ羊から狼(おおかみ)になって、どこぞの土地をぶんどれば良かろうに」

「ジーク殿(どの)、聖法庁(せいほうちょう)に対する叛逆(はんぎゃく)の意図ありとして、この者を逮捕(たいほ)いたしましょうか」

「なんじゃとっ。槍騎兵(そうきへい)風情が、聖堂が滅んで司祭への敬いの気持ちも失いおったか」

「真に受けるな」

ジークは両者に対し、淡々(たんたん)と返している。チリング司祭がふんと鼻を鳴らし、カヤはきっとそれを睨(にら)みつつジークに敬礼するとまた後方へ戻っていった。

「無知な者どもめ。わしが倒れでもしたらどうする。少しはわしの心配をせぬか」
ぶつぶつと呟くチリング司祭に、ジークが低く声をかけた。
「ナデッタの聖堂にあった聖印の原盤はどうなった」
「ふん、木っ端微塵じゃよ。聖堂のあった辺りを探し回ったが、影も形も無いわい」
「ナデッタが滅ぶ前に、聖印を持ち出した者はいるか」
「……なんで、そんなことを聞くんじゃ？」
「聖印が無事であることが露見すれば、盗賊以外にも他の領主や騎士団が狙ってくる」
チリング司祭が唸った。ノヴィアもやりきれない気持ちになった。苦しい行進を続けるナデッタの民が、聖印を巡って同じ聖法庁の民に襲われる心配をしなくてはならないのだ。
「では誰かが無事に聖印を持ち出しとったとしても、それを隠さねばならんのじゃな。やれやれ……どいつもこいつも、クズばかりじゃ」
チリング司祭は、ふうふう息を荒げつつ、またぐいっと酒をあおって歩き続けた。

ナデッタの民が、ようやく東側の隣国の街に辿りつくや、
「な、なんだこれは。いったいなんという光景か」
土地の領主は、街の広場に群れ集う民の様子に愕然となった。しかも民の大半が広場に

入りきらず、城壁の外でびっしりと幕舎を建てていることを知り、断固として言った。
「出来る限り、早く出て行ってもらう。二万人もの犯罪者が領内にいる気分だ」
領主ランドと廷臣たちは、じっと黙ってその言葉を聞いている。
「わ……我々を、罪人呼ばわりするのですか……！」
カヤが血相を変え、エノルがそれをすかさず宥めつつ、土地の領主に言った。
「援助された物資を受け取り次第、すぐにもこの地を離れることを約束しますよ」
「それまで、宿を失ったゴロツキ達が、問題を起こさぬようにしてくれねば困る」
「私たちも、宿を失っております」
エノルがにっこりと笑う。隣国の領主は、失言を悟って気まずそうに目をそらし、
「ともかく出来る限り早く立ち去ってもらう。このような事態、我が国始まって以来だ」
城から追い出すように領主ランドと臣下たち、エノル、カヤ、ジークを退席させた。城外では隣国の騎士団が出動し、ナデッタの民が問題を起こしたらすぐ対応する構えでいる。
「我々は暴徒か？　国境を接してきた隣人に、このような扱いを受けるとは……」
カヤが吐き捨てるように言う。みな無言だった。そこへ隣国の騎士たちが近寄ってきて、どうにかしてもらいたいことがあると告げてきた。エノルが率先して笑顔で応対し、
「我々の方でも、どうにかしたいことだらけなのですが……何か？」

「そちらの男たちのことです。朝から晩まで、ただ広場に座っているというのは……」
騎士が言った。つまり大勢の男たちが働きもせず一日中じっとしている姿が、街の住人を嫌な気分にさせるというのだ。この言葉に、たちまちカヤが暴発しそうになった。
「みな土地も家も仕事も失ったのだぞ！　働けるわけがなかろう！　歩むための体力を養っているだけで、お前たちの目には不穏なことを企んでいるように見えるのか！」
槍を振り回しかねないカヤを、エノルが必死に押さえつけている間、領主ランドが静かに騎士たちと話し合った。その結果、ナデッタの男たちは街の住人から見えないよう幕舎の中か、その陰にいることが決められた。
「我々が何をした……？　このような扱いを受けねばならないようなことをしたか？」
カヤが怒りを通り越して、しょんぼりと呟く。エノルはジークを見上げて力無く笑った。
「この分だと、聖堂の方に行った司祭様とノヴィアさんたちも苦労してるでしょうね」
「いやはや、まったく快適じゃや。やはり聖職者同士、分かち合いの心を持たねばな」
チリング司祭は、綺麗に洗濯された緋色の法衣の滑らかさを楽しみながら言った。
「ねぇ、ノヴィアぁ……あたしたちだけ、こんなんで良いのかなぁ」
アリスハートが、テーブルの上で果物をかじりつつ、気まずそうな声をもらす。

「あとで、ジーク様に正直にお話するわ」
小声で答えるノヴィアも、気まずいどころか罪悪感さえ抱きかねない心境である。
チリング司祭とともに聖堂に行くようノヴィアに命じたのは、他ならぬジークだった。
よりによってチリング司祭と――そう思ってノヴィアはまじまじとジークを見つめたが、
「この土地の聖堂とチリング司祭の様子を、よく見ておけ」
淡々と命じられ、嫌々ながらも従った。そして聖堂で予想もしない歓待を受けたのだ。
ノヴィアはまず修道院に通され、湯浴みをし、食事を振る舞われた。再び聖堂に通され、
あとは豪勢な宴会三昧となった。必死に体を休めるナデッタの民がいる一方で自分だけが
歓迎される理由がノヴィアには分からない。それが分かったのは夕暮れになってからだ。
「ときに……ナデッタの地は、それはそれは豊かな土地でありましたなぁ」
ここの聖堂の司祭がしみじみとした口調で言うと、チリング司祭は、にやりと笑った。
「まったくじゃ。あれほどくそ豊かな土地は、滅多になかったわい」
ノヴィアは慣れ始めていたが、聖堂の者たちはチリング司祭の口汚さにぽかんとなった。
ふとノヴィアは、そこで初めてチリング司祭が口汚さを披露したことに気づいた。
「かの地を豊かにしたチリング司祭様のご加護には、つねづね感銘を受けております」
聖堂の司祭は、チリング司祭の言葉など耳にしなかったように続けている。

「わし一人があのくそナデッタの土地を、くそ豊かにしたわけではないがな」
「その……チリング司祭様が危険な道を歩まれるのは忍びがたく、ぜひこの地に……」
「ははん。わしに、この聖堂で暮らせとでも言うのか？」
「チリング司祭様に留まり頂ければ、きっとこの地も今以上に栄えることでしょう」
「わしがいても浪費がかさむだけじゃが、まあ浪費以上のものがあるかもじゃな」
全員の表情が一変した。男も女も、貪欲さを絵に描いたような顔がずらりと並ぶさまに
ノヴィアとアリスハートはぞっとなった。聖堂の司祭が押し殺した声を放った。
「この地に継承された聖印は十二種……これにナデッタに継承された十四種の聖印が加われば、アルカーナ大陸最大の豊饒の地となりましょう」
だがチリング司祭はワインのお代わりを頼み、平然と分厚い手を振った。
「一つの土地で聖印を用いすぎれば、他の土地が聖性を奪われ、不作になるぞ」
「まさか、今さらナデッタの地が、不作になることを心配しておられると？」
みなが笑った。ナデッタの耕地が滅んだのは事実とはいえノヴィアは気分が悪くなった。
一方でチリング司祭もまた同じように笑いながら、ふと意味ありげにノヴィアを見た。
ノヴィアが首を傾げると、チリング司祭は訴えるような視線を送ってくる。かと思えば、
「ナデッタ以外の国が文句を言ってきたら？　素直に大量の聖印の所持を明かすか？」

「まさか。それは我らとチリング司祭様だけが知ることではありませんか」
「確かにナデッタの聖印がまだあるとしたら、わしがその管理を司るわけじゃが……」
などと相手に期待させるようなことを言っている。ノヴィアは呆れ果て、ジークの姿を求めて何気なく辺りを見て――ぎょっとなった。なんと隣の部屋に武装した兵士が待機しているのだ。思わずチリング司祭を振り返ると、やっと分かったか、という顔をされた。
「ナデッタの聖印は、残念ながら、全て粉々に吹き飛んでしまったわい」
チリング司祭が言った。たちまち嘲笑が飛び交い、聖堂の司祭が身を乗り出した。
「そのような嘘をおつきになるとは……我々の誘いを断る気ではありますまいね？」
チリング司祭は一つうなずき、太った腹を持ち上げるようにして席を立つと、
「まあ、クズどもが出す料理にしては美味かったが、貴様らの腐ったはらわたの臭いをかいでいると腹の中身を全部吐いてしまいそうじゃ。そろそろ退散させてもらおうかの」
そう言って、ぽんとノヴィアの背を叩いた。ノヴィアも驚いて立ち上がり、アリスハートがぽかんとなる。聖堂の司祭は、馬鹿にしたようにかぶりを振り、大きく手を叩いた。
「よろしい……少々痛い目にあってもらった上で、考え直して頂くことにしよう」
いきなり部屋に兵士がなだれこんできた。チリング司祭がノヴィアに向かってわめいた。
「何をしとるかっ！　なぜ聖王の騎士がそなたをわしのそばに置いたと思っとる！」

それでノヴィアはようやく自分の役割を悟った。慌てて眼前の空間に集中し、
「た……沢山の矢が見えますっ！」
その眼差しにやどるもう一つの力――幻視の力を発揮させたのだ。そこにそれがあるという幻を見ることで具現する力である。火や水、人や獣など、不定形なものや複雑なものは具現出来ない――が、兵の勢いをくじくものは十分に現せる。
そして次の瞬間、百本近い矢がテーブルや壁や床に突き刺さった。先頭の兵たちが矢に腕や脚を貫かれて倒れ、さらに彼らに足をとられた後ろの兵たちが転がり倒れた。
「頭を床につけて這いつくばれ、クズども！　この少女こそ黒印騎士団の従士！　見目麗しき姿をしているが、実は貴様らをひと睨みで殺し尽くす恐るべき力の持ち主じゃ！」
ノヴィアが唖然とするほどの勢いでチリング司祭が吠えた。
「殺戮されたくなくば詫びのしるしに貴様らが抱えとる食料と金銀の半分を献上せい！」
逃げ惑う聖職者たちの尻を蹴飛ばしながら部屋を出るチリング司祭の後を、ノヴィアとアリスハートは、呆れたような、心外なような、何ともつかぬ顔で追った。

5

「この調子で、あちこちの聖堂から巻き上げてやるのも悪くないのではないかのう」

街の広場に張られた幕舎に戻り、チリング司祭が成果を話すのを、ノヴィアはうんざりして聞いていた。胸焼けがするほど宴会に付き合わされた挙げ句、恐喝まがいのことをして食料と金を奪ったのだ。ノヴィアたちの性格からしても気分が良いわけがなく、

「二度としたくありません」

このために聖堂に行かせたのかと文句を言いたかった。だがジークもうなずき、

「敵を増やすような真似はやめておけ」

ここの聖堂が、献上品を取り返すために兵を放つ可能性もあった。あくまでナデッタの民に手を出させないよう牽制すべきだったのだ。物品を奪ったのは、やりすぎだった。

「なんの、聖王の騎士とその従士の威光に、みな恐れおののいておったわ」

チリング司祭はまるで気にせず酒を食らっている。カヤが苦々しげにかぶりを振った。

「これでは、ゴロツキ呼ばわりされても否定できんではないか」

エノルが苦笑して、領主ランドとともに見ていた援助物資のリストから顔を上げた。

「お互いの懐を奪い合うのは、どこも同じようですよ」

そう言って、リストを示した。あらかじめ聖法庁から通達されていた量に比べ、妙に少ないのだ。食料やその他の必需品が、一部、どこへともなく消えているのである。

「横取りされているのか？」

カヤが怒りをたぎらせた。ここの領主から犯罪者呼ばわりされた怒りが心の傷となってうずいているのに、誰かが、土地を失った民に送られるべき品をかすめ取っているのだ。
「あの領主だな……！　いったいどちらが罪人か！　私が奪い返してくる！」
今にも騎士たちを率て城を襲いかねないカヤに、ゆっくりと領主ランドが声をかけた。
「誰が盗ったかなど分からぬし、ここの領主が盗んだ証拠も無い。今この程度の横領で騒いでは民のためにならん。この地に滞在する、礼金だと思え」
「し、しかし領主様、民のための大事な物資を奪われて……」
「もともと我らの物ではない」
領主ランドの言葉に、みな黙った。自分たちの物――そう呼べる物がほとんど無い現状が、みなの心をえぐるのがノヴィアにも分かった。誰もが当たり前に持っている物。それが全て失われ、取り戻せるかどうかも分からない。そんな状況に心が押し潰されれば――
「羊が狼となって奪うかのう。城壁の内と外に我らの民がおる。やるなら今じゃな」
チリング司祭が鼻歌でも歌うように言う。カヤがはっとなり、慌ててかぶりを振った。
確かに今、十分な武器さえあれば、もしかするとこの国を奪えるかもしれない。だがそうすれば聖法庁を敵に回し、ナデッタの民は終わり無き戦いの奈落に落ちることになる。
「反乱を起こさねば生き延びられぬ状況ではなかろう……希望はまだあるのだ」

「まだあるか、領主どのよ。それが無くなったときの算段を整えとるのではないか？」
「どういう意味だ、チリング司祭」
領主ランドが言い返すが、疲労のにじむその声はいかにも弱々しかった。
「ここの国が我らを警戒するのも、お主が先頭におるからではないか？　民を反聖法庁の兵に仕立てるか？　何せ自分の街を吹き飛ばした領主じゃ。次はどうする？」
たちまちカヤが、殺気を迸らせてチリング司祭に歩み寄った。
「なんという言いがかりか！　ナデッタを滅ぼしたのは聖堂ではないか。領主たる方をそこまで責めるなら、聖堂の司祭としての責任は、いったいどれほどのものか！」
「ふん、わし以外のクズどもがやったことじゃ。わしは知らん」
カヤの顔がさっと怒りで青ざめた。エノルが弾かれたようにカヤに飛びつき、
「やめろ、カヤ！」
「離せっ、エノル！　こやつだけは……こやつだけはっ……！」
チリング司祭は馬鹿にしたような顔でいるし、誹謗の的である領主ランドは臣下たちと一緒に、ただ無言で地図を見つめている。ノヴィアも思わず目を伏せたくなった。
「喧嘩ばっかりぃ……」
アリスハートがしょんぼり呟く。ノヴィアはますます悲しくなり、ジークを見やった。

ジークは、黙って彼らの仲違いの様子を見つめている。かと思うと、
「無責任なくせに他人を罵ってばかりの卑怯者っ！　その舌を切り取ってくれる！」
剣を握るカヤに近寄り、すっとジークがその手をつかみとめた。
カヤが呻いた。ジークに手を押さえられただけで剣を抜くことも出来ない。
やがてカヤの手から力が抜け、剣から離れた。だがなおもチリング司祭を睨み据え、
「……貴様が何か問題を起こしたときは、私が貴様を、民の群から叩き出してやる」
「では、それまでゆるりとやっておるとしようかの」
チリング司祭はせせら笑うと、満面に汗を浮かべ、荒い息を零しながら立ち上がった。
ふとノヴィアは、チリング司祭の獰猛な顔に、奇妙な苦痛の表情があるのに気づいた。
チリング司祭はもしかすると持病でも隠しているのかもしれない。だからあれほど馬車に乗せてくれと言い募っていたのではないか。そのことを小声でジークに告げると、
「それがあの司祭の責任だ」
ジークは短くそう返しただけだった。ノヴィアには意味が分かるようで分からない。
「歩くこと以外は、あの司祭の気の済むようにさせてやれ」
みなに向かってジークが言う。エノルが真っ先にそれに同意した。
「そうですね。要するに、真面目に相手をするとこっちが損だってことさ、カヤ」

カヤは唇を噛み、はたと、いまだにエノルに背後から抱きつかれているのに気づいた。
「ば、馬鹿っ、いつまでしがみついてる。離さんか」
ぱっと顔を赤らめてエノルの腕をふりほどき、そのまま大股で幕舎を出て行こうとする。
「どこに行くんだよ、カヤ。まさかあの司祭を追いかけて後ろから斬ろうなんて……」
「わ、私はそこまで無道ではないっ。頭を冷やしてくるだけだ！」
「俺も一緒に行くよ」
「私を信用せんのか!?」
「そうじゃないよ。たまには二人きりで話すのも良いんじゃないかと思っただけさ」
「な、なにを……お前、エノル……」
「嫌ならいいけど」
「か……勝手にすれば良かろう」
怒ったように大股になるカヤを追って、エノルが幕舎を出て行く。
「あの、ジーク様……私も、外に行って、何かしてきても良いでしょうか」
ノヴィアが言う。聖堂で快適な目にあった分、少しでも働かないと落ち着かなかった。
「疲れを明日に残すな」
ジークの許可を得て、ノヴィアはみなに一礼し、アリスハートとともに退席を告げた。

「みなも休むがいい。今日はこれ以上、何も話し合うことはない」
そう言って領主ランドは臣下たちを下がらせた。ジークと二人だけになり、何か言おうとして——突然、その声が、ぐっと喉につかえた。苦しげに胸を押さえる領主ランドに、ジークが近寄った。だが領主ランドは手を振ってそれを止め、
「だ……大丈夫だ。胸が……ときどき、急に苦しくなる。なに……心配無用だ」
大きく息をつきながら、ジークと向かい合って座り直し、
「これからの行軍で……最も気をつけるべきことは何であろう、聖王の騎士よ」
「食料だ。それだけは、何としても確保しなければならない」
「民も、食料がきれることを最も不安にしておる……。だが、このような大集団が飢えたところを、わしは見たことがない。もし我らが飢えたら、いったい、どうなる?」
「まず子供から死ぬ。子供は大人の倍以上の早さで餓死する。それが大人たちを絶望させる。次に死ぬのが老人だ。最後に一部の大人だけが残れば……俺にも止められない」
「絶望した大人たちが、略奪に救いを見出すようになると……?」
「子供が生きているうちは、大人も暴徒にはなりにくい」
「なぜだ。子供のために略奪するのではないのか?」
「場合によるが、多くは自分以外死ぬ者がいなくなったとき他を襲うようになる」

「では……もし多くの大人たちが子供を重荷と思うようになったら、どうすればいい」
「子を捨てる者もいるが、多くは子をつれていこうとする。たとえ他人の子でもだ」
「他人の子を？　自分が飢えるかもしれないのにか？　わしには信じがたいが……」
「俺がそうだった。戦火から、誰かが赤ん坊だった俺を運んでくれた。理由は不明だ」
「そういうものだと思って良いのか……？　人は……我らの民は……」
「食料がなくなるほど子に執着する親は多くなる。そして餓死した子を見て絶望する」
「……そうはさせぬ。わしが決して、そうはさせぬ」
骨張った両手を膝の上で握りしめ、領主ランドは言った。
「だが飢えるまでもなく、物資を横領され、ひどい扱いを受ければ当然、怒りを抱く者が出る。彼らの怒りが爆発すれば、民にとって危機にしかならん……どうすればいい」
「策はある。人を使う。誰を使えばいいかも、見当がついている」
「策？　人を使う？　怒れる民を、事前に抑えられるような策などあるのか？」
領主ランドは聞くのを恐れるような表情でいたが、すぐに意を決して言った。
「聞かせてくれぬか……」
ジークは静かにその策を話した。たちまち、領主ランドは呆然となり、
「カヤ・アピアノスを……騎士たちを使って……？」

ジークはうなずいた。領主ランドは、力が抜けたように弱々しくかぶりを振った。
「カヤは、わしの友の子でな……。いつかエノルとカヤを娶せられればなどと友と語り合ったものだ……。カヤの父は、見事に聖騎士となって郷里に戻ってきた自慢の友だった。わしらは、ともにナデッタの地を更生させ、聖堂の腐敗を一掃しようと誓い合った……」
「カヤ・アピアノスの父は、病死したと聞いている」
領主ランドは沈痛な表情になり、小さくうなずいた。
「友が逝き……わし一人でも戦おうと思っていた。聖堂の者どもを追い払い、そしてエノルとカヤの二人に、あの、ナデッタの城を受け継がせ……」
言葉につまった。崩壊した故郷の有様を思い出し、もう少しで泣きそうになった。
「そのカヤを、我らの民のために使うか……。辛いことだ……他にすべがあれば……」
「子供たちを信じろ」
その言葉が、領主ランドの胸に突き刺さった。領主ランドは驚きに目をみはり、
「ナデッタの地に来てくれたのが、そなたで……本当に良かった」
心底からの感謝を告げた。だがジークはいささかも気に留めず、こう言った。
「ナデッタの地で、ドラクロワに協力した者の目的がまだ分からない。それが今後、民に害をなす可能性がある。なぜ〈刻の竜頭〉の秘儀が黙認された――?」

「聖堂の連中は……秘儀と聞いて、更なる富を手に入れる気だったのだろう」
「あんたは、どういう気だった？」
「わしか……。わしは、ドラクロワには会ったこともない。本当だ。チリング司祭が言うように、わしがナデッタの民を反聖法庁の兵に仕立てようとしたなどと思わんでくれ」
ふいに、幕舎のどこからか何人かの子供たちの泣き声が聞こえてきた。
その声は夜風に乗ってしばらく響き、やがてゆっくりと静まっていった。
「……妻は、平民の出だった。エノルが民と分け隔て無いのも、妻の影響だろう。妻は、民を守るということがどういうことかを教えてくれた。妻が死んだときも民を守ることを誓った。聖堂の腐敗を一掃したいと願ったのも民を思えばこそだ。民を守り……新天地へ導きたい。それだけが今のわしの真実だ。どうか信じてくれ」
ジークは、領主ランドに淡々とした目を向け、やがて無言のまますずいてみせた。
「聖王の黒き騎士よ……なぜそうまでしてナデッタの民を守ってくれるのだ？」
領主ランドの切々とした問いに、ジークはすぐには答えなかった。聖王の騎士——という呼ばれ方に対し、それは違うと返しそうになったのだ。だがジークは代わりに、
「誰かが、幼かった俺を戦火から助け、運んでくれた」
先ほど告げたことを繰り返した。領主ランドは、それがどうしたのかと目で問うた。

「今度は、俺が守る番だ」
当然のように告げるジークを、領主ランドは呆然となって見つめた。それからゆっくりと地図を向いた。その顔に、道のりの遠さに対して挑むような表情がみなぎってゆく。
その領主ランドの様子を見届け、ジークは幕舎を立ち去った。民の間を歩くうち、
「なぜ、守るのか……」
ふと足を止めた。そして、疲れた体を休める民を見つめながら、静かに呟いていた。
「そのための剣をお前から授けられたからだ。俺がお前の騎士だからだ……ドラクロワ」
夜が明け、毅然として先頭に立つ領主ランドと大勢の民とともに、ジークは歩んだ。
東へ——陽が昇る方角に向かって。遠い道のりの先にあるものを求め、進んでいった。

6

何をしても落ち着かなかった。レオニスはそれでも冷静に政務をこなしたが、内心では日ごとに苛立ちを抑えるようになっていた。その理由はよく分かっている。
トールがいないからだ。幼い頃から影のように付き添ってくれたトールがこれほど長期間いなくなることは今までなかった。トールに代わって他の大勢の従者たちがレオニスを助け、注意深く車椅子を運んでくれるのだが、どうも満足しない。それどころか思わず怒

鳴りかけ、かろうじて表面上は穏やかさを装ったことも多々あった。
レオニス自身、トールの不在でこんなにも自分が苛立つのかと不思議に思うほどだ。
それでも一つだけ落ち着くときがある。戦乱を操る極彩色の地図に向かっているときだ。
今、アルカーナ大陸全土の地図とは別に、何枚も地図をつなげたものが用意されていた。
ナデッタの街から、東へ東へと続く地図である。その新たな地図にも、びっしりと針が刺されている。その針の間に、ナデッタの民の位置を示す特別なしるしがあった。
紅い針が、一匹の大きな黒い蟻を貫き、地図に突き刺さっているのだ。
とはいえ本物の蟻ではない。紙と粘土で作ったレオニス手製の飾りである。
ナデッタの民を示すしるしを考え、蟻を思いついたときは声を上げて笑ってしまった。
さっそく飾りを作り、自分の手先の器用さに満足した。本物の蟻に比べ、ずいぶん大きいそれを紅い針で貫いたときなど、レオニスのおもてに鮮やかな微笑が浮かんだものだ。
大勢の人間が、ぞろぞろ群をなして歩いているさまを想像するだけで、レオニスの中で粘ついた感情が湧いた。お前たちがそうして歩いているのに、なぜ自分だけ、ここでこうして草花のように身動きも取れず呪縛されていなければならないのか――
トールがいないことへの苛立ちが、いっそうその思いを激しくさせた。そのたびに父の血の熱さが両手に甦ったが、むしろその灼熱の痛みが、針に貫かれた黒い蟻への――歩み

ゆくナデッタの民への、得体の知れない憎悪を燃え立たせるようだった。
「蟻ども……さあ、歩け。どこまでも歩け。僕に潰されないよう、必死に歩け」
自分の声で喉がひりつくような思いを味わいながら、レオニスは囁いた。
むろん、その蟻の中に、自分にとっての大事な存在がいることを忘れてはいない。
今、黒い蟻を貫く紅い針に、濃い紫色の紐が巻かれた銀の針が近づいている。
その銀の針こそ、トールであった。今頃は、ナデッタの民にさらに接近しているだろう。
「守ってくれ……トール。……ノヴィアを、僕から守ってくれ」
切々としたレオニスの呟きであった。もはやここで容赦すれば、ドラクロワにもジーク にも決して匹敵することは出来ないだろう——そういう思いもあった。そしてその思いが、 自分の中で渦巻く憎しみや苛立ちといった暗い感情を、策謀を練る力に変えさせた。
自分は、あのナデッタの街を吹き飛ばした怪物そのものだ——レオニスはいつしかその 思いに駆られていった。どこにも動けぬ憤懣を炸裂させる、生きた爆弾だ。
その自らの爆圧から、何としてもノヴィアだけは守りたかった。その爆圧で、何もかも 消し飛ばしたかった。あふれる憎しみを、何かの形に変えたくてしょうがなかった。
そしてそれでも心の底では、本当に良いものをノヴィアにだけは与えたいと思っていた。
矛盾する感情が渦を巻き、引き裂かれる心から零れ落ちる血のような紅い針を、レオニ

スは何本か手に取った。そして、ナデッタの民を示す黒い蟻の周囲に一つ一つ丁寧に刺した。その紅い針こそ、レオニスが操作可能な各地の兵であり、黒い蟻を潰す鉄槌であった。

「さあ……蟻のように潰してやるぞ、ジーク・ヴァールハイト」

レオニスは、灼熱の痛みを両手に握りしめ、言った。

それが、誰にも認められることのない、レオニスの孤独な戦いの始まりとなった。

第三章　怒りの行進

1

民とともに歩むノヴィアの前に、太陽の輝きを受けて生命の満ちる大地が広がっていた。
鮮やかな緑の木々の間を、突き抜けるような青空の下を、広がりゆく野の草花の上を、ノヴィアはジークやナデッタの民とともに歩んだ。日暮れとともに幕舎を組み立て、夜明けとともに東へ出発する。それを繰り返すうちに、大きな川が道行きの友となった。
やがて開けた川岸で休憩となり、大勢が川の水を汲んで食事の用意をした。
騎士の一団が、彼らのもとにやって来たのは、ちょうどそのときだった。
「みな武装しています。襲ってくる気でしょうか……ジーク様」
いち早くその一団の姿を見たノヴィアが訊いた。ジークはかぶりを振り、
「今ここで襲う気はないだろう」
そう言いながら、騎士たちが荒々しく馬を乗り入れてくる方へと足を運んだ。

「川を勝手に使われては困る。我らの砦にとっても、近隣の村や町にとっても迷惑だ」
というのが騎士たちの言い分だった。むろん一介の騎士団に川の所有権などない。だが騎士たちは、村や町の人々の迷惑になるの一点張りで、しつこく言い募ってくる。
「我々を追い払えば、手柄になるとでも思っているのか？」
カヤがむかむかした顔になるが、領主ランドの手前、大人しく遠巻きに見守っている。
エノルはその間に食事の準備を進めさせ、なし崩し的に川岸に居座らせてしまった。
ノヴィアは、ふと近くの村人たちが様子を見に集まって来るのに気づいた。と思うと、
「みなさんもご一緒にどうですかぁ」
エノルが陽気に手を振り、ノヴィアが驚くのをよそに、気さくな村人たちを、あっという間に食事に参加させてしまった。村人たちもナデッタの民に同情して食べ物を分けてくれた。とても二万人の腹を満たす量ではないが、その心遣いに、殺伐としかけていたカヤや騎士たちまで心慰められたものだ。そのエノルの手腕というか自然体に、
「なんだか、誰でも友達にしちゃう人ねぇ」
アリスハートが感心し、ノヴィアを微笑ませたものだった。
一方――領主ランドは、繰り返し相手を説得している。
「ここにずっと留まるわけではない。食事が終わり次第、立ち去るつもりだ」

やがて騎士たちが何かを求めている様子を見せ始めると、すぐにそれを与えてやった。途端に騎士たちは気をよくし、呆れるほどの素早さで去ってしまった。
「多少の金をつかませてやったら、すぐに行きおった。単に金をせびりに来ただけだ」
領主ランドはにこりともせず言った。ジークはすっと領主ランドに近づき、
「騎士たち全員に、周囲を警戒するよう命じた方がいい。今ので、こちらがどれだけの金を持っているか予測をつけたはずだ」
「なに……？　まさか……今のは……」
「斥候だ。何名かが、こちらの武力を調べて回っていた」
「急いでみなを……」
「今は大丈夫だ。みなにゆっくり食事をさせろ。その間に代表者たちを集めて話す」
領主ランドは動揺をぴたりと押し隠し、歯を食いしばってうなずいた。

ノヴィアが食事のために川に水を汲みに行くと、子供たちが何やら言い合っていた。
「この川は俺たちのものだ。お前たちが使うと川が汚れる」
一方の子供たちがそう言いはるのへ、
「俺たちはずっとこの川と一緒に歩いてきたんだ。お前たちのものじゃない」

ナデッタの民の子供たちも真顔で返す。どうやら近くの街や村の子供たちが、大人たちの騒ぎにつられて、ナデッタの民の子供たちと言い合っているらしい。

「嘘だ。じゃあ川がどこから始まるか知ってるのか」

「嘘じゃない。川はずっとあっちの方まであるんだ。ずっとずっと向こうまである」

「嘘だ」

「嘘じゃない」

「もぉー、なんでどこも喧嘩ばっかりなのぉ」

アリスハートが怒ったようになって、ふわりと宙を舞った。

「嘘じゃないわよぉ、本当だってば。あたしたち、ずーっと川と一緒だったんだから」

双方の子供たちが驚いて、わっと声を上げた。かといって恐れるわけでもなく、

「妖精だ！　ほら、羽がついてるよ。初めて見た！」

「すごーい、ちゃんと服を着てる。名前はなんていうのぉ」

二つに分かれて言い合っていた子供たちが、わらわらとアリスハートに群がるうちに、ひとかたまりになってしまった。アリスハートはちょっと得意になって、

「あたしはアリスハートって言うの。あんたたちはぁ？」

と名乗るや、みな口々に自分の名を告げた。

「あの子はノヴィアよ、あたしの一番の友達なの」
いきなりアリスハートに紹介され、ノヴィアは目を丸くした。気づけば子供たちに取り囲まれ、完全にその輪に入り込んでしまっている。
「ねえねえ、お姉ちゃん。川がずっと続いてるって本当？」
この近辺の土地しか知らない子供たちが、ノヴィアの袖やら手やらを引っ張る。
「え……ええ、あちらの山の方まで……ここから見えないずっと向こうまで続いてるわ」
ノヴィアは遥か彼方を見てから、きちんと答えた。
「でも父さんたちは、これは僕らの川だって言ってるよ」
「それは……。この川の、この辺りを、よく使うって意味じゃないかしら……」
困ったように答えるノヴィアの傍らで、アリスハートが元気良く言った。
「だからぁ、川は誰のものでも無いのよぉ。みんなで仲良く使ってもらうために、川はこんなに長ーく、どこまでも流れてるってわけよぉ」
みなその言葉に感心したようになって、小さなアリスハートを褒めそやしたものだ。
そこへエノルがやって来て、いつもの調子で、どちらの子供たちも一緒に食事をすることにしてしまった。食事をしながら、ナデッタの子供たちが、これまでどれだけ歩いたかを説明すると、滅多に土地を離れることのない村の子供たちが大いに驚きの声を上げた。

「まったく、可愛いもんですね」
エノルが子供たちを見て実に幸せそうに言う。ノヴィアが曖昧な微笑を浮かべていると、
「ねえ、お姉ちゃんはどこから来たのぉ」
と訊かれて、どう説明したら良いものか本気で分からず、
「遠いところよ」
やっとのことでそう答えた。年頃の子供たちと触れ合うことが少なかったノヴィアにとって、子供の群というのは、どう接して良いか分からないものの一つなのだ。
そのことを素直にエノルに言うと、にっこり笑ってこう返された。
「どう接したら良いかなんて、子供たちに教えてもらえば良いんですよ」
アリスハートと似たような自然体である。ノヴィアは思わず羨ましささえ感じた。
「エノル、ノヴィア、話がある」
そこに突然ジークが現れ、ナデッタの子供たちが歓声を上げた。
「聖王の騎士だ！　父さんたちが言ってた偉い騎士さんだ！」
すると村の子供たちも興味津々の目でジークをうかがい、一人が勇気を出して訊いた。
「騎士様は、どこから来たんですか」
ジークはちょっと眉をひそめて、足下を振り返った。今初めてそこに子供たちの群があ

ることに気づいたように、何とも言えない微妙な顔で彼らを眺めやった。

「……遠いところだ」

ぼそっと答えた。途端に、何が面白いのか子供たちがきゃあきゃあ喚くのへ、

「チビが沢山いるな」

憮然として、ノヴィアに声をかけた。ノヴィアは、自分とジークの答え方がまるで同じだったことがやけにおかしくて、もう少しで笑い出してしまいそうになった。

ノヴィアがアリスハートを呼ぶと、久々にご機嫌になって帰ってきた。

「ああ、楽しかったぁ。みんな良い子たちよねぇ」

子供たちと別れ、領主ランドのもとに行きながら、ジークがエノルに訊いた。

「民の様子はどうだ？」

「素晴らしいです」

エノルは即答した。隊列の組み方がどんどん合理的になり、休憩から再び歩き出すのにかかる時間が、最初の頃の半分以下で済んでいるのだという。みな自然とそうなるのだ。

「俺が彼らに話すことは、あまりありません。聞くだけです。彼らは毎日、何かを発見しては応用していくんです。素晴らしいですよ。俺は彼らの一人一人を尊敬しています」

心からそう告げるエノルの笑顔を、間もなく、領主ランドの厳めしい顔が出迎えた。

「エノル、近隣の村の者を、民の間に引き入れたそうだな」
「友好のためです。悪いことじゃないはずです」
エノルがむっとなる。領主ランドは、しょうがないと言うように小さくかぶりを振った。
その態度に、ますますエノルが反抗心を煽られる。
「あまり迂闊なことをして、危機を招いてはならん」
「村の人を食事に招くことが危機？　彼らからは多くのことが学べるのに？」
「今はそんなときではない。外部の者をむやみに入れて、どう責任を取るつもりだ」
「責任って……ただ一緒に食事をしただけじゃないか。それがなぜ悪いのさ」
「民の統率をしっかり示さねば、どの国も我々を信用せん」
「父さんは、みんながこんなになってまで支配者づらしたいの？」
「支配者ではない、庇護者だ。その責務を忘れて、遊びほうけておる場合か」
エノルが思わずかっとなった。珍しくカヤがエノルを宥めようとしたとき――
領主ランドが突然、呻き声とともに胸を押さえ、よろめいた。ジークとノヴィアが手を貸し、臣下たちとともに領主ランドを椅子に座らせる様子に、エノルもカヤも呆然となった。
「大丈夫だ……気にするでない。いつものことだ」

領主ランドが毅然として言う。そこへ遅れて来たチリング司祭が、エノルの背を叩いた。
「ほう……そろそろ政権交代かのう。ほれ、今なら親父どのの首をとれるぞい」
「貴様っ、何ということを！」
瞬間的にカヤが沸騰しそうになる。かと思うと、エノルが真顔でこう言った。
「まさか……今の父なら、聖王の首だってとりますよ、司祭様」
カヤとチリング司祭の両方が、揃って面食らうような不敬さだった。
エノルは、父が姿勢を正してみなに向き合う姿を、じっと見つめている。
「……みな、よく聞いてくれ。そして決して慌てず、恐れず、冷静でいて欲しい」
領主ランドは、重々しい声音で告げた。
「敵だ……。故郷を去ってより初めて、我らは敵を迎えることになるかもしれん」
話し合いののち、ナデッタの民は再び歩み出した。川に沿って、みな黙々と歩んでいく。
エノルも珍しく口を塞いでいる。話し合いの間も、黙って父の言葉を聞いていたのだ。
「村人を食事に誘ったのは、間違いだったんでしょうか」
エノルがぼつっと訊いた。傍らを歩くジークが、ちらりとエノルを見やった。
「敵が現れる可能性について、情報が足りなかっただけだ」

「父からすれば、そんなときに村人と仲良くしている俺に、腹が立ったでしょうね」
「もしあの村人が親しさを装ってお前に近づいていたなら、最初にお前が狙われた」
淡々と返すジークに、エノルが絶句した。ノヴィアも驚いて、うとうとするアリスハートを肩に乗せて歩きながら、ジークとエノルを見やる。
「そんな……俺を？　どうするっていうんです？」
「お前を人質にするか殺すかは状況次第だが、いずれにせよ重要な標的だ」
「じゃあ父さんは……」
「お前の心配をしただけだ。これからのお前の責任は、迂闊に殺されないことだ」
エノルは顔を伏せ、唇を噛んだ。悩むような顔でそのまま歩き続け、やがて言った。
「でも俺は、民といつも親しく接していたい……間違ってますか？」
「用心が必要なだけだ」
「ナデッタの民に対してもですか？　まさか彼らが……」
「自分たちだけ生きるために、お前を人質にとって金と食料を奪う場合もある」
「……俺には信じられません。そんなこと、実際にあるんですか？」
「それで従士を一人、失った」
エノルは驚きに目を丸くした。だがそれ以上に、傍らのノヴィアが、どきっとなった。

「死んだんですか、その従士は……？　民に殺されて……？」
ジークはしばらく答えないまま歩き続けた。ノヴィアは、ジークの顔を見るのが怖いような気持ちで、黙ったまま自分の足を見つめて歩いている。
「俺が斬った」
ジークが、言った。エノルは思わず身をすくませ、慌てて訊いた。
「あ、あなた自らの手で……？　なぜですか？」
ノヴィアもまた、胸が凍るような思いをしながらも、思い切ってジークを見た。
「俺が聖王の直属となって、最初につけられた従士だった」
ジークは静かに告げた。エノルもノヴィアも、固唾をのんでそれを聞いている。
「戦火で故郷を失った民が、他の土地を奪おうとし、それを鎮圧した」
「……その従士が何をしたって言うんです？」
「民に武器を与え、煽動したことが判明した」
「あなたの従士が、民に武器を……？　なぜ……？」
「そいつもまた、戦火で故郷を失った民の一人だった」
エノルもノヴィアも、そこでなお、なぜと問いたかった。なぜ故郷が失われたからといって武器を手にするようになるのか。だがナデッタの民の現状こそが、答えだった。

「……その人が、領主を人質にとったと言うわけですか？」
「領主の家族を人質にして武器と食料を手に入れ、民とともに略奪に走ろうとした」
「あなたの従士は……その、領主の家族と、親しかった……？」
エノルが恐る恐る訊く。するとジークは、淡々とうなずき返してみせた。
「その領主の家族は……無事に救い出せたんですか？　あなたが……従士を斬って？」
ジークはまた一つうなずいた。
「あなたは……こうして故郷を失った人を、何度も見ているんですね……」
エノルがうつむく。沈痛な表情だった。だがすぐにまた顔を上げ、きっぱりと言った。
「それでも俺は、民のことを信じています。それは、間違っていますか」
ジークは、じっとエノルを見つめた。そして、すべきことを教えてやった。
「俺も信じている。彼らが迷わないようにしてやれ」

2

「見えるか、ノヴィア」
ジークが訊く。ノヴィアはうなずき、木々の間をひそかに移動する兵たちを見てとった。
「私たちがどちらへ行くか確認しているみたいです。あ、一人、戻っていきました」

「本隊に連絡するためだろう。……そろそろだ」
夕暮れどきの、うっそうとした森の道であった。街道を通れるはずだったが、土地の領主に関門を閉じられ、やむなく選んだ道だった。そこの領主とは話し合いもろくに出来ず、
「頼む、入れてくれ。ここを通してくれ。女子供だけでも頼む」
領主ランドの嘆願も、関門を守る騎士団を相手につっぱねられるばかりだった。
「十人や二十人なら、なんとか我々から領主にはからうことが出来るだろう」
その騎士団も、気まずそうな表情を押し隠して、言ったものだった。
「だが、二万人は無理だ。女子供だけでも何千人もいる。とても責任が持てない」
「どうかここの領主と話をさせてもらえまいか」
「……申し訳ない。領主からの厳命なのだ。ここを絶対に開くなと……」
領主ランドはかろうじて失望をのみこみ、民に移動を告げた。
「歩こう。さあ、気を取り直して歩こう」
エノルが精一杯の明るさで声をかける。ナデッタの民のどの顔にも、失望の色が強く浮かんでいた。ただでさえ困難な道のりなのに、土地の領主の判断や、街の市民の反応によって、さらに険しい道を歩まされるのだ。
日が暮れる前に、何としても開けた場所を確保し、宿営地を作らなければ食事も出来な

い。閉ざされた関門を迂回し、峠を越えて街道を目指した。自然と進み方が乱暴になり、後続が分断されそうになって、しばし混乱が起こった。
　その間もノヴィアはジークの命令で、周囲を見ている。何日か前に、あの川べりで偵察に来た騎士たちの姿が見え、さらには全く別の一団がうろついているのが見えた。
　やがて峠から、なだらかな丘にさしかかり、そこで宿営の準備をしようとしたとき、
「ならん、ならん！　ここで留まってはならん！」
　近辺の砦の騎士団が疾駆し、怒声を放ってきた。領主ランドが説得しようとしたが、
「ここで貴様らが賊に襲われでもしたら、我らが守らねばならなくなるではないか！」
　騎士の一団は、何のためらいもなくそう言い放った。難民の保護など真っ平だと言う。
　領主ランドは、自分たちの身は自分で守ると返したが、
「それほどの武力を持つ危険な集団なら、なおさらここに留まらせるわけにはいかん」
　まったく何の容赦もなく断言し、領主ランドがさらに何か言い募れば、問答無用で追い払う構えをみせた。かと思えば騎士の何人かがナデッタの民を面白がるように見回し、
「こんな大勢の物乞いどもを守るために、はるばるご苦労なことだな」
　カヤに、そう声をかけた。それが、双方にとって最悪の事態を引き起こしかけた。
「あなた方もご苦労なことだ。民を脅すことで、自分が立派な騎士であることを証明しよ

な慌てて音のした方を振り返る。ずぼっ。音を立ててジークがシャベルを引き抜いた。
みな、ぽかんとなって、ジークがシャベルを肩に担いで歩み来るのを見た。
「カヤ・アピアノス、槍をおさめ、馬を降りろ」
ジークが鋭く言った。両者の一団が火花を散らす、ど真ん中である。
カヤは眉をひそめながら、言われた通りにした。
「兜を脱げ」
さらに言われるままにした。ほっそりとした顔立ちと、長い子鹿色の髪があらわになる。
まさか女だとは思っていなかった他の砦の騎士たちが、驚きの表情を浮かべた。
そして次の瞬間、ジークが、無造作にカヤを引っぱたいた。ぱーん。小気味よい音が響き、その場にいる全員が呆気に取られた。カヤは目を見開き、凝然と身を強ばらせた。
「兜をかぶり、馬に乗れ」
ジークの言葉に、カヤはのろのろと従った。
そこに至ってようやく、エノルとノヴィアたちが騒ぎの場所へやって来ていた。
ジークは改めて双方の一団を見渡し、言った。
「ナデッタの民は、間もなくここを立ち去る。黒印騎士団ジーク・ヴァールハイトの名において、ここでの争いを禁ずる。これに異議を唱えれば聖法庁に対する叛逆とみなす」

それは、ノヴィアがほとんど初めて見るジークの姿だった。尊大ともとれる態度であり、聖法庁の威光を最大限に振りかざし、みなの言葉と行動の一切を支配するようだった。
「当地の騎士団は、ナデッタの民が無事にここを通過出来るよう、先頭で導け」
ジークが命じると、騎士たちは何となく勢いに呑まれたようになって従った。
「カヤ……」
エノルが声をかける。カヤはむっつりと列の先頭へと移動する騎士たちを見つめ、
「侮辱されたのです。我らの誇りを、民の誇りを踏みにじられたのです」
低く、感情を押し殺したような声音を零した。だがジークは一切容赦しなかった。
「みなを危険にさらすような誇りは捨てろ」
「私は……」
「前進するための力を、無用な争いに使うような騎兵はいなくて良い」
カヤは歯を食いしばり、肩を震わせながら、やっとの思いでジークに敬礼してみせた。
「行け。民の背後を守れ」
ジークが命じた。カヤは無言でうなずき、その拍子に零れた涙を、兜の面頬を閉ざすことで、ぴたりと隠した。他の騎兵たちも、どこか悄然として散っていった。
「ジーク……カヤは、僕たちのために……」

エノルが釈明しようとするが、ジークはさっと背を向けて先頭の方へ行ってしまった。
「うっわぁー……あんな怖い狼男、初めて見たぁ」
アリスハートがびっくりして言った。ノヴィアも同感だった。敵に対するジークの苛烈さはこれまで何度も見てきたが、味方に対してここまで厳然となるのは初めてだ。
「みんなを、何とかして守ろうとしているのよ……ジーク様は」
ノヴィアにとってはそう思えても、ナデッタの民には今のがジークそのものとなった。全体を守るためなら、たとえ騎兵であろうと容赦なく叱咤する厳格な守護者である。甘えも優しさも言い訳も、あの男には通じない。領主ランドでさえジークには一目置いている。あの男にだけは、逆らわない方が良い——それまでは聖法庁から派遣されたただの「偉い騎士」だったのが、民全体を左右する、恐ろしい存在になったのだ。
せっかく騎士たちが休息の地を与えようとしてくれたのに、ジークが禁じて厳しい行路を命じたのだ。何様のつもりだ。どうせ聖法庁の命令でやってるだけのくせに、自分たちをこんな目にあわせる奴らの一人がジークだ——そんな声が上がっては消えてゆくのを、ノヴィアは黙って聞いていた。ジークがそんな風に言われることがノヴィアにはひどく悲しかったが、先を進むジークの歩みは、それでも全く揺るぎなかった。
土地の騎士団は、自分たちの縄張りから民を追い出すと、あっさり去ってしまった。

どんどん陽は傾き、道は歩きにくくなった。馬車が横転しかけ、整備された街道を通れない自分たちの身を呪う声が上がった。そしていつしか、沈黙が民に満ちた。
誰もが黙って歩き、誰もが黙って胸のうちに怒りと悲しみをためてゆく。ただ歩き続けるだけで、自分たちが追い立てられ、孤立し、見捨てられたことがひしひしと感じられた。
その沈むような重い足取りの中、ノヴィアもジークも、ひたすら無言で歩き通した。
やがて二万人の列が森に入り、先頭の集団が泉を見つけ、ようやく休息の地を得た。
そして夜が訪れるとともに、彼らを狙う者達が、近づいてきた。

「南からも大勢来ました……この辺りに集まろうとしています」
ノヴィアが告げるたびに、地図に、接近する集団を示す印が増えてゆき、幕舎の中の緊張が高まっていった。幕舎の外では、ナデッタの民がやっとの思いで食事と休息にありついている。周囲は闇であり、もはや一歩も動けぬ状態だった。
「なんという数だ。この近辺の盗賊どもが全て集まってきたか？」
領主ランドが、信じがたいというような声を上げる。
「まるで僕たちをここに追い込むために、どこも門を閉ざしたみたいだ……」
エノルの言葉に、民の代表者たちや、カヤを筆頭にした騎兵たちが目をみはった。

事実、そう思いたくなるほどの素早さで兵が集まってきているのだ。あらかじめ近辺の地形を把握していなくては出来ないことだった。しかも夜の森では馬が思うように使えない。騎兵の力を半減させ、ナデッタの民を無力化するには格好の地形だった。

「はん、敵は近隣の騎士どもというわけかの。それとも盗賊どもの働きを黙認して、代わりに分け前をせしめるつもりなんじゃろうな」

チリング司祭が、やけになったように酒をあおる。

「ノヴィアさんがいなかったら、何も分からないまま襲われていましたね……」

エノルが心底から感謝するように言う。ノヴィアは礼儀正しく頭を下げ、

「でもこのままだと、襲われることに変わりはないんでしょぉ？」

アリスハートが不安そうに、ひそひそと口にする。

「包囲が整ったところで、一気に攻め寄せてくるつもりだろう」

ジークが淡々と、地図を見ながら言った。エノルやみなが思わずぞっとなった。とても数十騎の騎士だけで対抗出来る数ではない。抵抗も出来ずに皆殺しにされるだけだった。

「カヤ・アピアノス」

ジークが呼ぶ。カヤは反射的にびくっとなった。いきなりひっぱたかれたのが、だいぶこたえているらしい。だが、すぐにその表情を隠し、無言で一歩前へ出た。

「お前たち騎士団は、この地点から闇にまぎれて攻め、周辺の敵を撃退しろ」

そう言ってジークは宿営地の東側の一点を示した。何とも無造作な指示に、カヤが面食らったようになる。慌てて敵の位置と数を確認し、さらに愕然となった。

「こ……これだけの数の敵を？　馬もろくに走らせられないのにですか？」

「策はある。騎士の数名を伝令に使う。ノヴィアが見た敵の動きを、俺たちにつなげ」

カヤが不安を押し殺して黙り、すぐさま伝令役の騎兵が選ばれた。

「聖王の騎士よ、もし、そなたたちが戦っている間に、民が攻撃されたら……」

領主ランドが訴える。ジークはかぶりを振り、民の代表者たちに向かって告げた。

「心配ない。お前たちは、民を一カ所に集めて、恐怖で逃げ出さないよう抑えていろ。この状況では、逃げ出した者から先に殺される。これから、策を説明する」

そして素早く指示を出してから、ジークは、静かに全員の顔を見渡した。

「敵はまだ自分たちが位置を悟られていることを知らない。奇襲において彼らは既に敗北している。あとはその隙を突いて連携を崩すだけだ。必ず勝てる」

しかも、それはただ勝つだけではなかった。ジークははっきりと言った。

「民に指一本触れさせず、一人の騎兵も死なせず、敵を倒す。お前たちの誇りを見せろ」

3

夜の闇にまぎれて、するすると音もなくナデッタの民の宿営地に近づく者がいた。
影法師トール――そういう異名を持つ青年であった。気配を隠して忍び寄ることには天才的な能力を発揮し、また周辺の気配を探ることにもずば抜けた才覚の持ち主だった。
そのトールが、ふと宿営地を前にして立ち止まった。幾つもの気配が、宿営地に向かってではなく、そこから放たれるようにして移動した感じがしたのだ。
トールは咄嗟に、周囲の兵どもに連絡しようかとも思ったが、すぐに諦めた。
彼らは、あくまで自分の欲のためにナデッタの民を襲おうとしているのだ。彼らにとってトールはよそ者であり、本来いるはずのない人間である。
それにしても、どうしてナデッタの民はこの奇襲に気づいたのか。民の全員がさんざん歩き回され、疲れきっていることを、日中ずっと後を追っていたトールは知っている。
確かに今、盗賊どもが巨大な獲物に喜び、森中の仲間を集めていた。砦の騎士たちは森での略奪は全て盗賊のせいに出来ると信じて、やりたい放題やるつもりでいる。領国の兵はナデッタの聖印を奪うよう命令されており、領主を拷問してでも手に入れる構えだ。
だが彼らが一堂に会したのは、結果的にそうなるようレオニスが仕向けただけなのであ

る。それゆえ事前に動きを読むことなど不可能であり、レオニスの織りなす策の本当に恐ろしい点だった。彼らが同じ獲物を狙う競争相手の存在を悟ったのは、実に森に来てからである。いきおい「早い者勝ち」という意識が芽生え、布陣を急いだ結果の包囲網だった。要するにこの包囲には何のつながりも必然性もないのである。だから多数の兵に包囲されるなどナデッタの民には予想外のはずだった。それなのにどうして分かったのか――

　そんなことを考えるうちに、トールはふと苦笑するような気分になった。

（ノヴィア・エルダーシャ――）

あの少女がいる限り、兵の動きをどれだけ隠そうが無意味に決まっているではないか。しかもあのジーク・ヴァールハイトであれば、すぐさま危機に対応するに決まっている。

つい、ノヴィアが敵であるということを忘れるな、とトールは思った。

そのくせ自分がここにいるのは、そのノヴィアを守るようレオニスに命じられたからだ。その矛盾した状況のせいで、ノヴィアの万里眼の存在を、いっとき忘れていたのである。

間もなく、幕舎の一つにノヴィアの姿があることを突き止めた。

手頃な木を見つけて登り、上から幕舎の灯りを見渡す。これでよし。危険が迫り次第、ノヴィアを助けるために何らかの対処をすればいい。それ以外に何の目的もない。ただ守ればよかった。いざとなれば気絶させて戦場から連れ去ればいいのだ。

やがて森中で、殺伐とした気配が起こった。これほどの数を相手に、ジーク・ヴァールハイトは、どこまで民を守れるのか——トールの興味は、その一点にあった。

ナデッタの民に迫る者たちは、みな獲物を前にした歓喜に震えていた。
何を奪っても、どう殺しても、どこからも文句は出ず、報復の心配さえないのだ。これほど素晴らしい獲物など滅多にあるものではない。
盗賊どもも、砦の騎士団も、領国の兵たちも、この獲物を独り占めしたかった。
そして独り占めの方法も、それぞれの集団によって違った。
盗賊どもはひたすら自分たちが他に先んじて攻め込む構えだ。騎士団は、競争相手ごと獲物を皆殺しにするための包囲を敷いてゆく。領国の兵たちは、競争相手に先に獲物を手に入れさせた上で、横から奪うための突撃陣形を敷いて待ち構えようとしていた。
最初に異変に出くわしたのは、先を焦る、盗賊どもの一団だった。
宿営地の様子を調べに行った者が、獲物が幕舎の中央に集まって寝る準備をしているらしいと報告した。寝静まったところをいきなり襲いかかる興奮に目をぎらつかせながら、盗賊どもが宿営地へとにじり寄った、そのときである。
突然、灯りが消えた。

宿営地の全ての灯りが一斉に消され、あっという間に闇が辺りを覆い尽くした。
盗賊どもは仰天した。夜の森で火を絶やすというのが考えられなかったのである。
寝静まるにしてもほどがあった。森について無知な馬鹿どもめ、火が消えればたちまち獣がよってくるぞ、狼の群に襲われたらどうするのだ、と狼に等しい盗賊どもは憤慨した。
何より宿営地の灯りこそ目印だった。これでは後方の仲間たちが獲物の位置を確かめるのもひと苦労だ。かといってこちらが灯りをともすのは論外である。あくまで灯りに向かって闇から攻め込むからこそ相手を攪乱出来るのだ。
こうなれば宿営地に攻め込んで、片っ端から火をかけるしかない。
そう盗賊どもが決めたとき――彼らの背後でにわかに、その火が、かっと燃え盛った。
今度こそ、盗賊たちは飛び上がるほど驚いた。
やや開けた場所に立つ樹に、誰かが馬の餌である藁の束を縛り付け、火を放ったのだ。
一本の樹木が、丸ごと巨大な松明と化し、真っ赤な炎が森の闇を払いのけるや――
「ゆくぞっ！　ナデッタの騎士団の力、愚者どもに見せつけよ！」
鋭い叫びとともに、馬蹄の音が轟いた。一人の槍騎兵が先頭に立って突撃し、その槍に刻まれた聖印の輝きを旗印とする騎兵の一団が、横殴りに躍りかかって来たのだった。
「う、馬だ！　馬で来やがった！」

盗賊どもが恐慌に陥った。夜の森で、馬に乗った騎兵に追い回されるなど想像もしていなかったのだ。樹木に火を放った何人かのナデッタの騎士が、すぐさま宿営地から離れたところで、もう一本の樹木を燃やした。

明るさが増した森の中で、馬上の騎兵が思う存分、盗賊どもを蹴散らしていった。

突如として起こった灯りと騒ぎに、砦の騎士団も、領国の兵たちも、一斉につられた。

「あちらだ。あちらに包囲を移すぞ！　あそこにいる者どもを殲滅せよ！」

伝令の騎士が闇に駆け込んだ途端、もの凄い絶叫が起こった。どさっ。何か重いものが地に転がる音が聞こえ、それきり沈黙が降りる。

「なんだ……!?」

砦の騎士たちが、伝令役が消えた闇を凝然と見入った。

心なし、そこだけ闇が濃くなったようだった。ざわざわと木の葉が揺れた。何か異様な気配がそこに集まり、一転してそれが、ごうごうと唸りを上げて吹き荒れる風となった。

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」

凄まじい叫びとともに、真っ赤な髪をした男が躍り出た。右手に血に濡れた剣を握り、左手に稲妻を迸らせ、堕気に満ちた風をまとって、その左手を地面に叩きつける。

「非業の魂よ！　土刻星の連なりの下、剛魔ダゴンとなりて我が敵の前に立て！」
刹那、地中から青ざめた稲妻の輝きが幾重にも迸った。そしてその輝きが消えるや、猛烈な地響きを立てて、とんでもないものが四方の闇から続々と押し寄せてきた。
「ナデッタの地で死んだ者たちよ、お前たちの同胞の道行きを守れ！」
ジークが苛烈に言い放った。騎士たちは、愕然となってそれらを見た。
それらは実に薄汚れた鉄塊の群だった。重装歩兵にも見えたが、首から直接、獣の口が生え、がちがちと牙を嚙み鳴らしている。胸には巨大な槍のごとき角を生やし、
「乙女座の陣！」
ジークの言下、一斉に騎士たちに向かって驀進した。
騎士たちが悲鳴とも雄叫びともつかぬ声を上げて迎え撃つが、何しろそこら中の闇から現れるため、あっという間に連携を崩され、なぎ倒された。慌てて逃げ出し、他の仲間と合流しようとする者もいたが、そのときには既に一帯を魔兵の群に包囲され尽くしている。
逃げ場もなく壊滅する騎士たちの叫びが森中にこだまし――それを聞きつけた領国の兵たちは、いよいよ略奪が始まったのだと思い、急いで移動を開始した。
「三方から、突撃せよ。馬鹿どもの背後から攻め寄せ、獲物と一緒に皆殺しにするぞ」
指揮官が叫び、領国の兵たちがすぐさま森の中で燃え盛る灯りに向かって前進した。

そのとき、何かが頭上の闇から飛び掛かってきた。
「なんだ……？」
指揮官が呟く。その首が、いきなり宙を舞った。前進する兵の一人が切断された指揮官の首を反射的に両手で受け止めた。一拍遅れて、金切り声が上がった。
わっと隊列が崩れたそこへ、何かが猛然と閃いた。断頭台の刃のごとき長大な剣だ。しかも一つや二つではない。三十本以上ものそれが闇の中で竜巻のごとく振るわれたのだ。
そしてその刃を振るう異形の姿を目にした兵たちが、あまりの恐怖に絶叫した。
全身を銀の鱗に包まれた、人の形をしたトカゲのごとき姿。目も鼻もなく、突き出した口にかっと牙を剝き、両手の双剣でたちまち兵を斬り屠る。それら十六体の魔兵が、人血を浴びて歓喜に酔うさまに兵たちが半狂乱で応戦し、またたく間に隊列を乱していった。
混乱によって生じた敵の動きを、ノヴィアが素早く見ては伝令役の騎士に伝えた。
そしてその伝令を受け、夜の森を駆けながら次々に魔兵を招き出すジークの姿を見た。敵を分断し、おびき寄せ、死角を突いて一挙に打ち破る——容赦のない殲滅戦闘を繰り広げるジークに、ノヴィアは、そのとき奇妙な哀切を感じていた。
闇を走るジークが、ときおり戦いとは違うことを叫んでいるように見えていたのだ。

といって森中の敵の動きを見るノヴィアに、ジークを凝視する余裕はない。ただ、ジークの動きを確認するうち、ふいに、その全身から放たれる無言の叫びを見た気がしたのだ。叫びを聞くのではなく見るというのも、我ながら妙な感覚だったが、ノヴィアは確かに、それを感じていた。そしてその意味を、やがて痛切に理解した。

(俺は、ここにいる——)

そういう叫びを、ジークは、その口ではなく全身で叫んでいるのだと思った。

(俺は、ここでこうして、戦っている——)

いったい誰に向けての叫びか。ノヴィアはすぐにそれを理解した。ジークが追い続けているたった一人の男に向かってだ。ジークをかつて導いた男——ドラクロワに。

その声なき叫びは、まるで相手に、戻ってこいと言っているようでもあった。

あるいは、すぐにお前のもとへ行くぞと言っているようでもあった。

今だけでなく、これまでもずっと、ジークは戦いの中で叫び続けてきた。

自分が、守り続けているということを。それを守るから、自分が自分でいられるもの——

——同時にそれが、失われた相手との最後のつながりとなるもの。そういうものを守るために戦っているのだということを、どこにいるかも分からない相手に、伝え続けているのだ。

故郷を失い、帰るべき場所を失ったナデッタの民もまた、ジークが守るべきものだった。

他ならぬドラクロワが、ナデッタの民から故郷を奪った張本人だとしても、むしろそうであるがゆえに、ナデッタの民を守ることは、今、闇と血に染まろうとするようにして戦うジークにとって、その長い旅の意味の全てを賭けた行いなのではないか。

「私は……見ています」

無意識に、ノヴィアの深いところから、そんな言葉が零れ出ていった。

「私が、あなたを見ています……」

たとえジークの叫びがどこへも届かなかったとしても――たとえジークが自分を見ることがなかったとしても、自分は、ジークが全身で叫ぶその声を見守り続けるだろう。

それが、従士として以上の、ノヴィアの思いだった。そういう思いが自分の中に満ちることが、哀しいのか、嬉しいのか、戸惑えばいいのか、ノヴィア自身にも分からなかった。

ただ、ノヴィアは見た。ジークの戦いの全てを、一心に見つめ続けた。

4

トールは闇の中で一人、凍りついていた。まさか――と思った。幾重にも襲いかかるはずの兵が、次々に破られ、翻弄され、壊滅の道を走らされるのがはっきり分かった。

信じられなかった。ジーク個人の強さは、嫌と言うほど知っている。〈招く者〉の力が

恐るべきものであるのも分かっている。だがノヴィアの万里眼のことも考慮に入れても、ジークがここまで無駄なく、確実に敵の包囲を打ち破るとは思ってもいなかったのだ。
何より、闇の中で息をこらえて身を潜めているナデッタの民の落ち着きぶりはどうだ。優秀な指揮官に――ジーク・ヴァールハイトに全てを委ねている証拠だった。
あの民が恐慌に陥り、ばらばらになって逃げ出せば、それだけで形勢は逆転する。ジークは守るべきものに逆に翻弄され、戦うすべを失う。だがそんな気配は微塵もない。
「ヴァールハイト……」
トールは戦慄をこめて呟いた。〈戦場の真理〉――実に正しい称号だ。ジークは知っている。戦いの急所を。すべきこと、すべきでないことを。戦場のあり方を熟知している。
無意味だ。この程度の奇襲では全く歯が立たない。トールはそう結論した。
そして、どうすればいいかを考えた。ジークを倒す必要はない。あくまで無力な民を狙えばいい。だがどう攻めればいいのか。トールはいつしかノヴィアを守るというレオニスの命令さえ頭の隅に追いやるようにして、ジークの戦いぶりを切り崩す方法を考えていた。
カヤとナデッタの騎士団は盗賊どもを蹴散らし、つづいて燃え盛る木につられてやってきた砦の騎士の一団へ猛然と迫り、存分に馬上から槍を振るって一方的に撃退した。

燃え盛る樹の下で赤々とした灯りの中で敵の屍が積み重なった。その光景に新たにやってきた騎士の一団が愕然となって立ちつくすさまに、ふと、カヤが注意を引かれた。
騎士たちに見覚えがあった。すぐに分かった。カヤはさっと兜の面頬を開き、叫んだ。
「お飾り騎士ども！　地獄の火に焼かれに来たか！」
騎士たちはぎょっとなり、たちまち味方を殺された怒りとともに剣を構えた。
「誰かと思えば、ほっぺたを叩かれて泣いてたお嬢ちゃんか！」
例の、カヤに剣を砕かれた騎士が、嘲弄のこもった声を上げながら剣をふりかざした。
「待っていろ！　素っ裸にひん剝いて、この剣でたっぷり尻を叩いてやるぞ！」
カヤは敢然と笑って槍を構えた。
「私の尻を叩ける男は少ないぞ！　そら、かかって来い！」
わっと喚声を上げて騎士たちが殺到した。馬のない状態では文字通り歩兵にすぎないとはいえ、少数のカヤたちにとって大勢が合流すればそれだけで脅威だ。
カヤは、すぐさま他のナデッタの騎士とともに何の容赦もなく迎え撃った。聖印を刻まれた槍の刃が、敵の剣を砕き、鎧ごと胸を貫き、手足を斬り飛ばした。
砦の騎士たちゆえ、馬上の敵を倒す訓練も十分に積んでいるはずである。だがカヤはそれ以上に見事に馬を駆り、決して囲ませず、馬と己の身を守りながら的確に槍を振るった。

「くそっ！　物乞いどもと一緒に地獄に堕ちろっ！」
罵声を上げながら、騎士がカヤの背後へ回ろうと走り続ける。そしてようやく馬の後ろ足目掛けて、剣を振り上げたその瞬間――騎士の上に何かが降ってきた。
騎士の動きを察したカヤが、騎士の頭上で、燃え盛る樹の枝を槍でなぎ払ったのだ。
燃え上がる枝が落下し、したたかに騎士の頭を打った。たちまち頭髪が燃え上がり、慌てて火を振り払って顔を上げるや、そこに槍を振りかざしたカヤがいた。
「よく喋る奴だ！　その軽い口で、我々を襲う理由を喋ってみろ！」
騎士は身を強ばらせたが、すぐに自棄になってわめいた。
「はっ、貴様らが良い獲物だってことを知らせて回ってる奴がいるってこった！　どこも敵だらけだぞ！　俺たちに殺された方が幸せだったと思えるような目にあって死ね！」
ひとしきり呪詛を放ち、猛り狂って剣を振りかざす騎士へ、カヤは迷わず槍を振るった。
「ご助言、礼を言う」
丘でカヤに剣を砕かれた騎士は、今度は剣ごと胸を斬り割られて絶息し、地に伏した。
「大丈夫、ジークを信じて。ナデッタの騎士たちを信じて」
エノルはそう繰り返し、その天性の陽気さで民の代表たちを落ち着かせていた。

遠くから人が斬り合う音、絶叫、甲高い悲鳴が届いてきても、みな息をひそめ、じっと闇の中にうずくまっている。一方、ノヴィアは周囲の状況を見て、伝令に告げる合間に、

「こちらに向かってくる敵はいません。ジーク様が西側の敵を倒しました。ナデッタの騎士たちが、東側で沢山の敵を倒しています。心配いりません」

などと民の代表者たちを通してみなに伝え、動揺が起きるのを未然に防いでいる。

「まったく、長い夜じゃな」

チリング司祭は、珍しく声をひそめて、ぼそぼそと言った。

「確かに長い夜だ」

領主ランドは、落ち着いた声でそう返した。

「だが、それでも夜は必ず明けるのだ。どれほど長い夜も、必ず明けるときがくる」

やがて闇の彼方で、徐々に戦いの気配が引いていった。

薄汚れた鉄塊のごとき剛魔たちが、敵兵を駆逐しながら続々と燃え盛る二本の樹木の周囲に集まってきた。血の雨を浴び、がちがち牙を鳴らす剛魔の凄まじさに、カヤもナデッタの騎士たちも思わず後ずさる。そこへジークが姿を現すと、途端にみな歓声を上げた。

「カヤ・アピアノス」

ジークが呼んだ。カヤは思わずびくっとなり、慌てて馬を降りようとした。
「降りなくてもいい」
そう言われ、また慌てて姿勢を正し、ジークのそばへ馬を運んだ。
「ジーク殿……怪我を？」
カヤがはっとなる。ジークの左腕が籠手の下でおびただしく出血しているのだ。
「力を使った影響だ。気にするな」
淡々と返すジークに、カヤはしばし呆然となった。凄まじい堕気がジークの体にかける負荷の重さを悟ったのである。それでいて揺るぎないジークを、カヤはじっと見つめた。
「死傷者はいるか」
鋭く訊かれて、カヤは慌てて我に返った。
「お、おりません。みな浅手です、ジーク殿」
「よくやった」
「い、いえっ、ジーク殿の策のお陰で……」
「お前たちが的確に敵を引きつけてくれた。お陰で俺もやりやすかった」
「はっ……」
「見事だった」

カヤは返事をしようとして、急に喉がつまった。何か言おうとするのだが、胸に熱いものが込み上げてきて、うまく言葉にならない。
「みなが、よく戦いました……」
やっとそう応えた途端、鳶色の目が潤んだ。慌ててうつむいた。
「民のもとへ戻る。みなを安心させてやれ」
ジークの言葉に従い、ナデッタの騎士たちが凱旋の声とともに民のもとへ駆けていった。
民が一斉に立ち上がってそれを迎え、暗い森に、勝利の歓声が果てしなく響き渡った。
ジークは一人遅れて宿営地に戻りながら、勝利に沸く民の様子を淡々と眺めている。
直接、ジークに声をかける者は誰もいない。かと思うと、静かにジークを待って佇んでいる者がいた。宝杖を握りしめたノヴィアが、アリスハートとともに待っているのだ。
「おつかれさまぁ、狼男ぉ。よく頑張ったわねぇ」
アリスハートが明るく言う。ノヴィアは、小さな花が咲くように微笑んでいる。
ジークはうなずき、ノヴィアのそばまで来ると、木に背を預け、ゆっくり腰を下ろした。
左腕から血がしたたり、強い堕気のせいでその指先がかすかに震えている。
ノヴィアは膝を折り、そっとジークの左手を取って、その聖性で、堕気を宥めた。
「戦いの間、お前の眼差しを――聖性を、感じた」

ふいにジークが言った。ノヴィアは、どきっとなって顔を上げ、
「よく見てくれた。お陰で有利に戦えた」
真っ直ぐに目を向けてくるジークに、かっと赤くなり、思わず手を離しそうになった。
「そ、それが、私の使命ですから……」
そう返しつつ目を伏せ、血で染まるジークの左手をおずおずと両手で握っていた。
「戦いの間だけでも……あなたを見守らせて下さい」
ジークは目を閉じ、荒れ狂う堕気が徐々に静まるのを感じながら、小さくうなずいた。
「頼む」
ナデッタの民の歓声は、いつ果てるともなく続いている。

5

何だこれは——次々に届けられる報告書に目を通し、レオニスは自分が馬鹿になった気がした。報告書は、聖法庁からの書状や、ナデッタの民への援助物資に関する書類にまぎれて届けられ、それがレオニスの策謀の手段であるとは分からないようになっている。
そのひそかな報告書を何度も確かめながら、レオニスはゆっくりと地図の上の針を抜いては、新たに刺していった。ある地域に活発に起こっていた争乱の気配がものの見事に静

まり、レオニスが下した鉄槌であるはずの紅い針が抜かれた。代わりに大幅に兵力を失ったことを表す黄色い針を刺してゆく。何だこれは——またそう思った。
そして黒い蟻を貫く紅い針を抜いて、正確にその移動先に刺し直したとき、
「……何だこれ」
思わず口に出していた。ナデッタの民の被害は皆無だった。むろん進行が遅れ、大きく迂回させられたせいで、その後の労苦は甚大なものとなるだろう。
だがそれでも、その蟻の行列はびくともしていない。指先一つでひねり潰せそうなそれが、レオニスの策に噛みつき、逆にぼろぼろに食い散らしてしまったのだ。
急激にレオニスの中で強烈な感情が込み上げてきた。目の前の地図も円卓も全てひっくり返し、滅茶苦茶にしたくなり、かろうじて深く息を吸い、冷静さを保った。
「トール……。お前はそこでこれを見てるんだろう、トール。見てくれ、これを」
苦笑するようにトールの名を口にすると、さらに落ち着いた。そうだ。この戦いを、ナデッタの民を、トールが見ているのだ。次の策を待つトールに自分が情けない姿を見せてどうする。その思いがレオニスを落ち着かせ、今回の敗北を、新たな策を練る力に変えた。
数日してトールから報告書が届いた。ナデッタの民の進行、ノヴィアの様子、トールが実際に見たジークの戦いぶりなどが報された。そしてさらにトールが独自に思いついたあ

る方策が記されており、レオニスは思わず目を見開き、嬉しそうに微笑んでいた。
「面白い。地図か……」
それは、レオニスにも思いつかない盲点だった。策としては単純きわまりなく、その分、実行がたやすい。そしてそれゆえジークにも対応しづらいだろう。
やはりトールは全てを見てくれているのだ。そのことがレオニスは何より嬉しかった。
何万人の兵を策謀で操作したところで、それは決してレオニスの思いを理解してくれる仲間などではない。レオニスにとって本当の味方はトールただ一人なのだ。
レオニスはじっと地図を見つめた。新たな策を放つにも時間がかかる。東へ移動し続けるナデッタの民に対し、大がかりな罠を仕掛けるにはどこが最適か――
「ジーク……お前の弱点を、僕は知っているぞ」
低い囁きが零れた。ノヴィアの笑顔が脳裏に浮かんだ。父やトールの顔が浮かび、ドラクロワの苛烈な眼差しが甦った。そしてジークの顔をありありと思い浮かべ、
「歩けないからといって戦えないと思うな。この地図が僕の戦場だ。これが僕の戦いだ」
匹敵したい――という思いが痛烈にその胸に生じた。ドラクロワに、ジークに、自分もまた戦う者として彼らに挑みたい。それしか生き残るすべがなかったし、それ以上に、それが自分にとってただ一つの「歩み」だという激しい思いがあった。

そしてそれしか、この地を動けぬ自分が、遠くへと旅立っていったノヴィアと、対等になる方法などない——レオニスはそのとき初めて、ノヴィアに対するその思いを強く自覚していた。自分は決して、優しいノヴィアに甘え、すがりたいだけではないのだ。自分を——強い自分を、ノヴィアに見せたかった。どれほどノヴィアが遠く行ってしまっても手を伸ばしてつかまえてしまえる力があることを、自分自身に対して証明したかった。

たとえその力が悪であっても——自分は魂を賭けてそれを望むだろう。

「何を守り、何を与え、何をもたらすのか……」

見果てぬ思いを凄惨な戦いの祈りに変えながら、レオニスはやがて紅い針を何本も取り出し、黒い蟻が向かう先に、立て続けに刺していった。

ジークと騎士団が森の戦死者を葬ってのち、ナデッタの民は出発した。数日かけて森を抜けると、敵の追撃に身構えていた民に、ほっと安堵が訪れた。草原を蜿蜒と東へ渡り、やがて久しぶりに街道に入って進むうちに、遠くに城と街が見えてきた。

「あそこで食料を買おう。援助された物資だけではじきに底をついてしまう」

街に入る前に、領主ランドが言った。臣下たちもエノルも賛同した。

「さてはて、あの城の者どもが素直に門を開いてくれたらの話じゃがな」

チリング司祭が皮肉っぽく言ったが、意外にも門はたやすく開かれた。
土地の領主は親切めかして街の広場や、騎士団の練兵場などを開放してくれた。たちまち組み立てられる幕舎(テント)の群(むれ)に、城の者たちがざわめいたが、誰(だれ)も文句(もんく)を言わなかった。
「ジーク殿(どの)……」
カヤがさりげなくジークに近寄(ちかよ)る。ジークはうなずき、ノヴィアに辺りを見させた。
「城の騎士たちが、こちらの様子を、あちこちから窺(うかが)っています」
「騎士の連中はいい。兵の格好(かっこう)を見てみろ」
ノヴィアが、あっと声を上げた。
「森の中で襲ってきた人たちと、同じ形の鎧(よろい)を着ている人たちがいます」
カヤがぐっと身を強(こわ)ばらせた。衣裳(いしょう)を競い合う富裕(ふゆう)な騎士身分と違い、兵士の鎧は一括(いっかつ)して領主が買い付けるのが普通(ふつう)だった。価格(かかく)の上でも、自分の兵と他の兵を見分ける上でも、鎧の形状は同じにしておいた方が便利なため、土地によって鎧に特徴(とくちょう)が出るのだ。
「ジーク殿……やはり、この国の者達が、我らを……」
「証拠(しょうこ)にはならない。たまたま似(に)た鎧だと言われれば、それまでだ」
「でもぉ、ここで休んでて、いきなりまた襲われたらどうすんのぉ」
ノヴィアの肩先で、アリスハートが心細げな声を上げる。だがジークはかぶりを振り、

「門を開いた以上、それはない。だが用心しておけ」
そう言ってノヴィアたちを警戒に当たらせ、自分はエノルたちのところへ足を運んだ。
「食料の方はどうだ」
「参りました。小麦粉がこんなに高価なものだとは思いませんでしたよ」
エノルが皮肉を零した。領主ランドも臣下たちも苦い顔だ。土地の領主が、あの手この手で食料の価格を上げ、ナデッタの民から出来る限りの金をせしめようとしているのだ。
「街中が同じ値段なんです。僕らが去れば、急に値が下がるのは確かですけどね」
「聖法庁からの援助物資がここに運ばれるよう手配する。それまで交渉しろ」
「何とかします。食料がきれたら、お終いですから」
エノルは明るく言ったが、声の底にひどく重いものを抱えたような響きがあった。
ジークは一つうなずいて幕舎を去り、そのまま今度は一人で聖堂へ向かっている。
すると向こうからチリング司祭が、ふうふう息を切らせながらやってきた。
「聖王の騎士よ、あそこのクズどもの巣に行く気か。いっそ奴らを皆殺しにして金を奪い、次の街でたらふく食った方が良いのではないか」
「その必要はない」
「必要もなにも、奴らが最初に我らを殺して奪おうとしたではないか」

獰猛な顔を真っ赤にして言う。チリング司祭も、この聖堂や領主が、森で襲ってきた兵に関係していることを悟っているのだ。ジークはうなずきつつ、別のことを言った。
「一人で行ったのか？」
「出来ればあの可愛い〈銀の乙女〉をつれてゆきたかったがのう。あまり悪い大人ばかり見せても教育によくないじゃろうと思うてな」
チリング司祭は真顔でそう言ったものだ。
「それに一度、森でお前さんがたに兵をやられとる。ああいうクズどもの計算高さからして、しばらくは襲ってこんじゃろ。その代わり、さんざん聖印の在処を教えろと言ってきおった。あんな安酒で教えられると思っておるとは、馬鹿にしとるわい」
わめきながらも、明らかに浴びるように呑んできたらしく、足元がふらついている。
「どの程度の酒なら教えられる？」
チリング司祭は何か言おうとしたが、急に口を閉ざし、にやりと笑った。
「ふん、お前さんの方が、あのクズどもより一枚も二枚も上手じゃな。ナデッタの民も、良い牧羊犬に飼われとるわい。その調子で新天地まで追い立ててやるが良いわ」
がはは、と品の無い笑いを上げ、ジークの脇を通り過ぎて行ってしまった。
ジークはそのまま聖堂へ向かうと、途中で道をそれ、横手の墓地のベンチに座った。

間もなく、巡礼者の法衣に身を包んだ男が聖堂から顔を出し、こちらにやって来た。
「予定より数日遅れたが、無事に会えたな。俺を覚えてるかい？」
こはく色の髪と目をした男だった。ジークは、うなずきもせず言った。
「サガ・トルホーズ、諜報院を通して、食料の援助を急ぐよう聖法庁に申請しろ」
「了解だ。心配はいらん。じきにまた物資が届くさ。それより、これを見てくれ」
サガはベンチに座ると、法衣のたもとから書類を取り出し、ジークに渡した。
「あんたの言う通り、ナデッタの難民騒ぎで発生した物資の流れを、諜報院の方で調べ上げた。さすがだな。あんたの目の付け所は間違っちゃいないよ、ジーク」
ジークは書類にさっと目を通しただけで、静かにそれを元通りたたんでいる。
「大量の物資が動いてる。しかも武器に使われる鉄材だの、難民には何の関係もないものまで、騒ぎにまぎれて、あちこち運ばれてやがる。まさか、これがやつの狙いだとはな」
「ドラクロワの所在はつかめるか？」
「物資の流れのどこに奴がいてもおかしくない。諜報院が総出で調べてるが追いつかん。とんでもない野郎だ。自分が物資を手に入れるためだけに、街を一つ滅ぼしやがった」
ジークは無言でうなずいた。怒りとも悲しみともつかぬ光をやどした目で、じっと宙を見据えている。その全身に漂う気迫に圧倒されたようになりながら、サガが言った。

「俺たち諜報院（ガルム）が必ず、奴を見つけ出す。その間、あんたはあの民を導（みちび）いてくれ」
「聖地シャイオンは、どこにも関係していなかったか？」
「いや……。俺たちが調べた限（かぎ）りでは……」
「たった一人でこれだけのことを行うのは、ドラクロワでも不可能（ふかのう）だ」
「だからといって聖地シャイオンにこだわるのはなぜだ。実に平和な国だぜ」
「見せかけで真実を逃（のが）すな」
ジークの言葉に、サガの笑みが一瞬、ひどく冷たいものになり——すぐに元に戻った。
「分かってるさ……あんたの従士みたいに、あんたに斬（き）られたくはないからな。あんたの望むように調べ上げてやるさ。それと……これがこの先の詳細（しょうさい）な地図だ」
「これ以外にも、ナデッタの民が通る可能性のある、全ての地形を調べたい」
「聖法庁だけが持つ一番詳（くわ）しい地図を用意するさ。さて、俺はそろそろ旅立つとしよう」
サガは笑って立ち去った。ジークはそのサガの背（せ）を見つめ続けた。
その姿が聖堂に消えても目を向け続けていると、ふと別の人影（ひとかげ）が近づき声をかけてきた。
「ジーク、今の人は？」
エノルである。ジークと同じように、サガが去っていった方へ目を向けていた。
「聖法庁からの連絡（れんらく）役だ」

「確か、諜報院の方ですよね」
「……なぜ、知っている？」
「以前、何度か、顔を見かけたことがありまして……」
ジークは眉をひそめた。まさかエノルが、聖王の密偵の顔を知っているとは思っていなかったのだ。一方、エノルはジークの態度に首を傾げている。
「街が滅ぶちょっと前に、父があの男と会っていたんです。それが何か？」
ジークは思案するようにエノルを見つめた。だがすぐに小さくかぶりを振り、
「いや……。ここで何をしている？」
「食料を安く買う方法を何も思いつけなくて、ぶらぶらしてただけですよ。でも、あの男とあなたが会っているのを遠くから見て、ちょっと思いついたことがあります」
「思いついた……？」
「ええ。少しの間だけ、貸して欲しいものがあるんです、ジーク。良いですか？」
エノルはそう言って、先ほどのサガのはり付けたような笑みとは比べものにならないような、正真正銘の陽気な笑顔を浮かべてみせたものだった。

6

サガは巡礼者になりきった様子で聖堂を去り、馬を引いて、聖堂からやや離れた林の中へと入っていった。そこで馬を木につなぐと、苔むした岩に腰掛け、待った。
間もなく、サガのいる場所へ二人の男が馬に乗って近づいてきた。両方とも巡礼者の法衣をまとっている。サガの姿をみとめると、真っ直ぐ歩み寄り、片方が声を上げた。
「サガか……。ジーク・ヴァールハイトと連絡は取れたのか？」
「無事にな。お前たちは、どんな情報を持ってきた？」
「緊急の用件だ。ジーク・ヴァールハイトはどこにいる？」
「はっ、緊急か。聖地シャイオンから流れる物資に、妙な動きでもあったか？」
二人の男が顔を見合わせた。先ほど声を上げた方が怪訝そうに、
「なぜ知っている？」
「ジーク・ヴァールハイトが、あの聖地と物資の流れを調べろとうるさいんでね」
「なに？　ジーク・ヴァールハイトが？　なぜそれを我らに早く言わない」
サガは無言で笑っている。二人の男に緊張が走った。一方がサガの背後へ馬を移動させ、
「サガ……何を考えている。報告を偽れば、諜報院はお前を反逆者とみなすぞ」
「偽っちゃいない。そんなことをすれば諜報院の他の者にすぐバレるからな。俺はただ、情報の最後の部分を教えずに、胸の内にとどめているだけさ」

正面の男が、サガを睨みすえた。背後の男が、そろりと腰の短剣を握る。
サガは素手である。両手を投げ出したまま、にやにや笑って正面の男を見ながら、
「ジークの仕事は真実を葬ることだ。俺は、その真似をしてみただけさ」
「馬鹿を言え。貴様にそんな権限はない。何が目的だ、サガ。聖法庁を裏切る気か」
正面の男が素早く腰から短剣を抜いた。だがそれはサガの気を引くためだ。
その隙に、背後の男が音もなく馬から降り、短剣を手に、さっとサガにつかみかかった。
「やめておけ、怪我するぜ」
サガが笑った。刹那——ばん、と何かが破裂したような音が響き、背後の男が呻いた。
短剣を振りかざす右手に、凄まじい衝撃が走ったのだ。気づけば、右手首が短剣ごと跡形もなく吹っ飛んでいる。消失した手首の先から鮮血が迸り、背後の男が絶叫した。
「貴様、何をした……」
正面の男が、信じがたい顔でサガを見つめた。サガの両手は全く動いていないのだ。
「教えてやるさ。その代わり、それがお前たちがつかむこの世で最後の情報になるぜ」
サガが右手をかざした。何かが、ふわりとその掌から浮かび上がった。
掌でつかめるほどの、シャボン玉そっくりの透明な気泡である。
「聖汽雷——」

サガが、言った。気泡が、ふわっと動いた。風などない。にもかかわらず、するすると
サガの背後で呻く男へと気泡が流れてゆく。
「に……逃げろ！」
正面の男が叫ぶ。サガがにやりと笑い、両手をかざした。
その両方の掌から幾つも同じ気泡が浮かび、背後の男の周囲を漂った。
そして突然、全ての気泡が真っ赤に染まった。まるで血の泡の群だった。
「た、助けて……」
背後の男が、真っ赤な気泡の群に囲まれ、弱々しい声を漏らす。
「やめろ、サガ……！」
正面の男が叫ぶや、気泡の一つが、背後の男の右肩に当たって弾けた。
ばん。風船が破裂するような音とともに男の右肩が吹っ飛んだ。男がもんどり打って倒れ、他の気泡に次々に触れていった。ばん。ばん。ばん。ばん。ばん。気泡が炸裂するたびに、男の体が凄まじい衝撃で右へ左へ回転し、奇怪な踊りを見せた。
「聖性を一カ所に高密度で閉じこめた、空飛ぶ爆弾さ。綺麗なもんだろう？」
サガが酷薄に笑った。その背後で、男の肉体がばらばらになって地面に降り注いだ。
「き、貴様……！　聖道士の修練を積んだことを諜報院にも隠していたな！」

「言ったろう、俺は偽りはしない。情報の最後の部分を教えないだけさ」
男が馬首を返し、一目散に逃げ出した。その男の行く手に、すうっと気泡の群が集まり、にわかに赤く染まった。男は一瞬ためらったが、すぐに馬を気泡の群へ突っ込ませている。ばん。馬の顔面で炸裂した。馬が甲高くいななき、顔を振りながら倒れ込んだ。炸裂音が立て続けに響き渡った。馬が粉砕され、男が絶叫しながら炸裂の嵐を踊り越えた。
「ははっ、馬を盾にしたか」
サガは面白そうに唇を吊り上げ、自分の馬に乗り、森へ逃げ込む男を追った。すぐに男の眼前に馬を躍り込ませ、幾つもの気泡を放つ。そして男が逃げ惑う様子を大声で笑った。
「そら、逃げろ！　狩りの時間だ！　逃げろ、逃げろ！」
そのサガの全身が、今や激しい憎しみに満ちていた。目はぎらぎらと憎悪の光を放ち、必死に逃げ回る男がまるで長年の仇敵ででもあるかのように追いつめてゆく。
ふと、サガが笑うのを止めた。男が木の陰へ逃げ込んだ途端、どっと倒れたのだ。
サガが不審そうに馬を止めた。男は倒れたまま、ぴくりとも動かない。ゆっくり近づいてみると、男は頸動脈を鮮やかに切り裂かれ、血潮を噴き出している。即死だった。
「隠れてないで出て来い！　そこら中を吹きとばすぞ！」
サガが怒鳴ると、すぐそばの木の影がすうっと伸びるように、青年が姿を現した。

「……別に、隠れたつもりはなかったのですが」
「天然でそこまで気配を絶つか……影法師の坊や。なぜ俺の獲物を横取りした？」
「あなたと早く話をするためです」
影法師の青年――トールが、こだまのように感情の無い声で返す。
サガは、トールが持つ漆黒の短剣を、油断なく見やって、
「そいつであの男の首を掻き切ったか。大した刃だ。どこで習った？」
「レオニス様に勧められて、何人かの聖道士から教えを受けました」
「どれ、見せてみな」
トールは、サガが驚くほど素直に短剣を渡した。サガはしげしげと黒い刃を見た。冬の夜空をそのまま刃の形にしたような鋭利さと硬さであり、驚くほど軽い。
「俺が、こいつでお前さんに襲いかかったらどうするつもりだ？」
トールは、ひょいと手を翻した。するとサガが持つ短剣は黒い靄と化し、一瞬で消えた。
「上手いもんだ。聖性と堕気を混ぜ合わせて鋼を作り出せる奴は聖法庁でも数少ないが……俺は一人、知っている。その男は、丸ごと一つの長剣を作り出せる」
「ヴィクトール・ドラクロワ――」
トールが呟いた。トールが知る限り、誰よりも多くの力を隠し秘めた男の名だった。

剣を作り出す技術は、そのドラクロワが持つ力の一つだ。そしてその技術がトールにも適していることを見抜いたのがレオニスである。それまで聖道士の修練など何の興味もなかったトールだが、いざ始めてみると誰もが驚嘆するほどの速度で習得してしまった。

だがそのトールにも長剣を現せるほどの力はない。それが才能の差であり、どれほど修練を積んでも無理なものは無理だった。とはいえトールにとってそれはどうでも良かった。あくまで自分に適したものさえ作り出せればいいのである。

「ナデッタの民は、まだ一人の死者も出していません」

トールが無表情に本題に入った。サガは肩をすくめ、

「分かってるさ。だからそのための策を、俺とお前で色々と仕掛けるってわけだ」

「私の本来の役目は違いますが……。例の物はジークに渡せましたか……？」

「ばっちりだ。これでしくじれば俺がヤバいことになるがな。しかしお前の目の付け所は悪くないぜ、影法師の坊や。一度しか使えない手だが、効果的だ」

「もう一つ、レオニス様からの策がありますが、使えますか？」

「使わせてもらうさ。ここの聖堂が聖印を使って空に呼びかける予定だ。耕地のための恒例行事だが、ちょうどナデッタの民の進行に重なる。最高のチャンスになるはずだ」

「空に呼びかけるのは、ここの土地だけではないのですか？」

く知っている。それより、お前の方はうまくナデッタの民に入り込めそうなのか？」
「苦労しましたが、なんとか入れました」
サガは本気で感心したように口笛を吹いた。
「今じゃナデッタの民はお互い顔も名前も知ってる状態だ。どうやって入り込んだ」
「偽名を使って、怪我をしてずっと馬車に乗っていたことにしました。途中からまた歩くようになったと言って、適当に集団の中に入れてもらいました」
あっさり告げるが、実際は、ひどく神経を使う行動だった。ナデッタの民のルールを逐一確認しつつ潜入したのだ。怪しまれないよう崩壊する前のナデッタの街の情報を頭に叩き込み、街のどこに住み、何の仕事をしていたかまで考えた上での潜入だった。
「その黒い法衣でか？」
「潜入するときは着替えます。彼らから離れるときは逆にこの格好の方がバレません」
「お前、諜報院で俺と一緒に働く気はないか？　お前なら良い仕事をするだろうよ」
サガはちょっと本気になって誘ったが、トールはあっさりかぶりを振った。
「レオニス・ジェルミナルのためにしか働かんというわけか。無事に潜入したからといって油断するなよ。なにせ相手は、自分の従士の出生まで調べさせる油断も隙もない男だ」

「従士の出生……？」
トールが珍しく驚きをあらわにした。サガが、にやっと笑った。
「ノヴィア・エルダーシャの出生だ。なんだ？　お前も興味があるのか？」
そう訊くサガの目は、相手の内心を読み尽くそうとするような貪欲な光を溜めている。
トールもまたじっとサガの表情を見つめ、やがてかぶりを振りつつ、別のことを言った。
「彼女には危険が及ばないようにしなければなりません。レオニス様からの厳命です」
「分かってる。何度も聞かされてるからな。しかし、なぜあんな小娘に気を遣う？」
「私やあなたが関知することではありません。あなたがドラクロワのもとで働いているように、私も主人の命令に従って働いているだけです」
「大した服従ぶりだが、勘違いするな。俺は俺の意志でドラクロワに協力してるだけだ」
「意志……？」
サガは答えず、にやっと唇を吊り上げた。
「余計なお喋りは終わりだ。さあ、二人であの最強の男を出し抜く作戦にかかろうぜ」

第四章　離脱者

1

「こんなに上手くいくとは思いませんでした」
エノルがにこにこ笑って、ナデッタの民が歩む長い列を振り返る。馬車と人の間に、今までにいなかったものが多数、彼らと共に歩んでいるのだ。何百頭というラバであった。
「これほどの数の家畜を、よくぶんどったもんじゃ。将来は領主よりも詐欺師になるか」
チリング司祭が息をきらしながら皮肉を言う。髪はきちんと剃っているが、ほったらかしの髭が妙にいかめしく、たるんだ顎を黒々と覆っている。
「まあ、領主も詐欺師も、どちらも似たようなものですからね」
エノルが平然と言う。前回とどまった街が食料の値段を上げてきたのに対し、エノルがとった行動は単純にして効果的だった。まずエノルは、ジークにこう頼んだのだ。
「少しの間だけ、貸して欲しいんです。あなたが手にしている、その包みの方だけを」

ジークはエノルを見つめ、諜報院のサガから受け取った密書の中身を空にすると、その封筒だけを渡した。エノルは喜んでそれを受け取り、翌日、土地の領主との交渉に臨んだ。

　土地の領主は、食料を高騰させる以外にもあらゆる面でナデッタの民から奪う気だった。特に援助物資の受け渡しはひどいもので、明らかに大半が横領されているのだ。

　だが領主ランドもエノルも文句一つ言わず、淡々と不利な交渉を続けていた。

　そこへ突然、領主ランドの臣下の一人が、手に恭しく封筒をたずさえて入ってきた。

　土地の領主や有力者たちがぎょっとなるのをよそに、エノルは封筒を受け取ると、それが非常に貴重なものであることを見せつけるように丁寧に開き、中身をじっくり読んだ。

　土地の領主も有力者たちも、気が気ではない。なにせエノルが持つ封筒は、聖王直属の紋章が記され、関係者以外が中を見れば厳罰に処せられるものなのだ。なぜそんな封筒が今ここにあるのか。そこで土地の領主も有力者たちも特別に出席しているジークを見た。

　ジークはエノルに頼まれてそこにいただけで、一言も口をきかずに、始めから終わりまで座っていただけである。だが土地の領主も有力者たちも愕然となってある結論に達した。

　諜報院が動いている。聖王の密偵が何かを調べ、ナデッタの民に知らせに来たのだ。

　普通ならとてもそんな結論には辿りつかない。聖王が一部の民にそこまで肩入れする必然性が無いからだ。だが聖王の紋章と、ジークという聖法庁の騎士の存在のせいで、彼ら

は勝手にその結論を信じ、にわかに不安に襲われたのだった。
「なるほど」
いきなりエノルが言った。土地の領主と街の有力者たちが一斉にびくっとなった。
エノルは彼らの方を見もせず、さっと封筒とその中身を領主ランドに渡した。
領主ランドが、それをじっくりと読んでいる間、エノルが代わりに交渉を続けた。
土地の領主も有力者たちも、急に弱気になった。領主ランドが無言で書類をたたみ、
「ふむ……」
低く呟き、かすかな笑みさえ浮かべていたのである。
エノルも領主ランドも、封筒の中にどんな情報がつまっていたかなど一言も口にしない。
それが土地の領主と有力者たちを恐れさせた。自分たちの悪行を無言で責められている
気になる。しかもジークという聖王の代理人のような人物が同席しているのだ。明日にも
聖法庁から彼らを断罪する報せが来ても不思議ではなくなってくる。
エノルはそこでとどめとばかりに封筒をジークに渡した。ジークが無言で受け取り、
懐に収めるのを見て、土地の領主と有力者たちを絶望が襲った。
「ところで、我々が今、緊急に求めているものについてお話させて頂きたいのですが」
エノルが、にっこり笑った。それで土地の領主も有力者たちも完全に言いなりになった。

食料や必需品に加え、荷を運ぶためのラバまで提供することを約束したのだった……
「──それもこれも、ジークのお陰です。本当にありがとうございました」
「二度は、使わない方が良い」
ジークはそう釘を刺した。土地の領主や有力者たちが、封筒について何も言ってこなかったから良いものの、言及されればエノルの方が不利な立場になっていたのだ。
「はい。諜報院の名を騙ることが重罪になるのは知っています。すいません」
エノルが真面目に頭を下げる。ジークはうなずきつつ、ぼそっと言った。
「だが、よくやった」
エノルが喜色満面となってノヴィアを見た。ノヴィアもくすっと笑う。ノヴィアはその場に同席しなかったが、後で話を聞いて、ちょっぴり痛快な気分になったものだ。何よりジーク自身が、内心ではエノルの機転を楽しんでいるのがノヴィアには分かった。
「ふぅん。それって封筒だけで、中身は何の意味もないものだったんでしょぉ？」
アリスハートが面白がって訊く。チリング司祭が酒をあおりながら、
「おおかた紙クズでも入れておいたのじゃろうよ。間抜けな領主もいたもんじゃ」
そうわめいたところへ、カヤが馬を走らせてやって来た。
「……紙クズ？　何の話だ、エノル？」

「例の封筒の中身だよ」
カヤも、にやりとなった。無力な民に兵を差し向けるような領主など、カヤにしてみれば何百回騙そうが爽快なだけで、良心のうずきなど全く覚えない相手だった。
「お前が交渉でやったペテンか。その中身がどうした？　どうせただの紙切れだろう？」
「昔、カヤからもらった手紙を入れておいたんだ」
エノルの言葉に、ジークを除く全員が呆気に取られた。カヤは顔を真っ赤に染め、
「な……な、な、なにぃっ？　き、貴様っ、わ、私の……？　い、いつのだっ」
「カヤが、騎士見習いとして聖法庁に出向してた頃のだよ」
「な、なんだとぉっ。そそそ、それでは、りょ、領主様も、そ、それを読んで……。お、お前っ、い、いくらなんでも、大事な交渉の場で、そんな、わ、私のっ……」
カヤは怒りと恥ずかしさで、もはや泣きそうだった。すぐそばを歩くナデッタの民も、面白そうにカヤとエノルを見ている。エノルは山吹色の髪をくしゃくしゃかきながら、
「交渉が上手くいくよう、おまじないのつもりで、一番大事なものを入れといたんだ」
「お、おまじない？　お前、一番……大事なものって……。私の、その……」
いつも威勢の良いカヤの声が、弱々しく尻すぼみになる。エノルがまた髪をかいた。
「まったく、若い者はええのう」

チリング司祭がぶすっとなって言う。途端にナデッタの民が笑い声を上げた。
ノヴィアとアリスハートも顔を見合わせてくすくす笑う。エノルも苦笑している。
顔に血をのぼらせてうつむくカヤに、ジークが助け船でも出すように言った。
「カヤ・アピアノス、何か連絡があるのか」
「は……はい。その、ラバを手に入れたため荷が運びやすくなり、みな喜んでおります。民の代表者たちが言うには、歩く速度をもう少し上げても大丈夫ではないかと……」
「いや、このままでいい。急に速度を上げれば、隊列が乱れるもとになる」
「はっ……そ、そのように伝えます」
「ご苦労」
カヤはさっとジークに敬礼すると、唇を尖らせてエノルをにらみ、
「馬鹿」
小さく言って、すぐに馬首を返して隊列の後方へ戻って行ってしまった。
「やっぱり、怒ったかな……」
今さらのように申し訳なさそうな顔をするエノルに、ノヴィアが微笑んだ。
「ねぇねぇ、エノルとカヤさんって、恋人同士なのぉ？」
アリスハートが真顔で訊く。エノルが困ったように笑った。

「臣下たちが言うには、一応、婚約者ってことになってるらしいけど……」
ノヴィアとアリスハートが、びっくりして互いに顔を見合わせた。
「まあ、子供の頃からの腐れ縁だよ。親同士が仲が良かったんだ……」
髪をかきながら、エノルが言い訳のように付け加える。
「素敵なお二人ですね」
ノヴィアがくすくす笑って言う。アリスハートが腕を組んで、しみじみとうなずいた。
「エノルが良いお母さんで、カヤさんが立派なお父さんになりそうねぇ」
「領主の不良息子に、槍を振り回す女の子さ。どっちも他に相手がいないんだ」
しれっとしてエノルが言う。呆れたようになるアリスハートに、
「君は？　恋人はいるの？」
「あたしぃ？　だって同じ妖精もいないんだよぉ」
本心から文句を言うアリスハートに、エノルが苦笑した。
「じゃあ、チリング司祭は？」
エノルが話を振ると、チリング司祭はがははと笑って、酒瓶を振って見せた。
「これじゃよ。若い頃はそれはそれは沢山の恋人たちがおったがのう。独身の誓いを立てて司祭の任についた今は、酒が、わしの唯一にして最高の恋人じゃ」

ノヴィアがちょっと眉をひそめ、エノルが肩をすくめる。アリスハートが呆れ返って、
「ちょっともぉ、おじさんったら、そんなに飲んで大丈夫なのぉ？」
「ええい、このチビすけめ。おじさんと呼ぶなと言っておろうが。司祭様と呼ばんか」
「チビじゃないってのっ。あたしは小さいだけっ」
がみがみ言い合う一方で、エノルが今度はノヴィアを振り返った。
「ノヴィアさんは？」
自分が振られるとは思っていなかったノヴィアは、咄嗟に意味が分からず、きょとんとなった。するとエノルは、ひそひそ内緒話をするみたいに声をひそめて訊いてきた。
「好きな人はいないの？」
ノヴィアの胸の奥で、何かがどきっと音を立てた。かと思うと急に幾つもの光景が甦ってきた。何気ない日常の光景もあれば鮮烈で恐ろしい光景もあった。中には光景ではなく、盲目だったときの暗闇の中で感じた温もりや厳しさといった記憶もあった。
それらが急にいっぺんに迫ってくるのへノヴィア自身がびっくりした。何よりその全ての光景に——暗闇の中で感じたものの向こう側に、一人の男がいることをどう受け止めて良いか分からず、思わず力を込めて宝杖を握りしめた。そしてその杖を手にした経緯にも、同じ男が存在するのに気づいて呆然となった。

「わ、私……」
ノヴィアは早鐘のように鼓動が胸をつくのを感じながら、
「従士ですから……」
細い、虫の羽音のような小声で、そう口にしていた。
「なるほど」
エノルが、にっこり笑う。ノヴィアは猛然と顔に血が昇るのを感じながら、同時に強い不安を覚えた。言ってはいけないことを口にしたような気持ちに襲われ、チリング司祭と言い合うアリスハートに声をかけようとして、そこで何歩も先を歩く男の背を見ていた。
そのままノヴィアはその背から目が離せなくなった。すぐ目の前を歩いているくせに、恐ろしく遠くを歩いているようだった。どれだけ頑張っても追いつかない距離を感じた。
従士――その言葉が胸を貫くようだった。急に悲しい気持ちに襲われ、もう少しで足を止めてしまいそうになった。そしてその悲しさを、エノルはすぐに汲んでくれた。
「いつも一緒にいると、だんだん自分が相手をどう思ってるか分からなくなるんだ」
エノルの陽気で優しい声が、ふいに穏やかな風のようにノヴィアの心を慰めた。
「僕とカヤなんて二十年以上も一緒でね。でもカヤが騎士見習いとして聖法庁に出向していた四年間……あいつ、沢山手紙をくれてね。ナデッタの地を捨てるとき何もかも捨てた。

旅に出てからも色々捨てた。母親の形見の品も、父と相談して売った。食料を買う足しにするために。でもあの手紙だけは捨てられなかった。どうしてなのか今はよく分かる」
ノヴィアは、悲しい気持ちから逃げるようにして、エノルを見つめている。
「あの森で襲われたとき、カヤが騎士たちと一緒に離れたとき、なんとなく分かった。そして戦いが終わって無事にカヤが帰って来たとき、はっきり分かった。それまでは怖かったり気まずかったりで、本気で分かろうとはしていなかったんだ」
思わずノヴィアはそこで、おずおずとうなずいていた。エノルはにっこり笑い、
「自分の本当の気持ちなんて、そうそう分かるもんじゃないよ」
そう言って、そっとノヴィアの肩を叩いた。
「自分の気持ちをゆっくり受け入れるのが先さ。それが、自然なことだと思えるように
……子供たちとの接し方を、子供たち自身に訊けば良いように」
それだけで、嫌な気持ちがふわっと宙に消えてしまうような優しい手の感触に、
「……カヤさんが羨ましいです」
思わず本気で言った。訴えるような声音だった。けれどもエノルはかぶりを振った。
「本当は誰も、そんなことで羨ましいと思う必要はないんだよ」
じわっと込み上げてくるものに、ノヴィアはもう少しでわけもなく泣きそうになった。

「本当に大事なものさえ分かれば、羨ましさなんて、すぐに消えて無くなるよ」
ノヴィアは目を伏せ、小さく何度もうなずいた。その様子にアリスハートが気づき、
「どしたの、ノヴィアぁ。なんだか悲しそう」
心配そうに肩に乗るのへ、ノヴィアは、ただ微笑みを浮かべて、こう言った。
「なんでもないの、アリスハート。ただ……沢山歩かなくちゃって、思っただけ」

2

何日か進むうち、辺りは急激に荒涼とした景色になった。
草木も生えぬ岩山を、ナデッタの民の列が隊列を崩さぬよう、慎重に進んでゆく。
「ひどい土地じゃな。前の街のクズどもが食料を高く売りつけてきた理由が分かるわい」
チリング司祭が毒づいた。エノルはひんぱんに民の代表者たちと連絡を取り合い、みなが崖から転落したりしないよう、注意を呼びかけている。
「ジーク様……大勢の兵士が、ずっと先で待ち伏せしています」
ふいにノヴィアがそっと小声で報告すると、
「本当か？」
珍しくジークが聞き返した。ノヴィアはもう一度見て、はっきりとうなずいた。

「どの辺りだ」
ジークが地図を見せてきた。ノヴィアは何度も辺りを確認したが、
「恐らく……この辺りではないかと思います」
やや自信なさそうに告げた。アリスハートが不思議がって、口を挟んだ。
「どしたのぉ、二人とも変な顔してぇ。おかしなことでも書いてあるのぉ？」
「……確認する。ノヴィア、エノルに報告し、他に敵を見たら騎士に言って俺に伝えろ」
ノヴィアが声を返す間もない。ジークはすぐさま列を離れ、岩山を駆け上がっていった。
「なぁに、ノヴィアぁ。どうなってんのぉ？」
アリスハートが不安そうに訊く。ノヴィアにも分からない。かぶりを振りかけ、ふと、
「まさか……地図が……」
そう呟いたとき、ジークの姿は、連なる岩の向こう側へと消えていた。
トールは、前から六番目の集団に紛れ込み、ナデッタの民とともに黙々と歩んでいた。
ふと強い気配を感じ、ちらりと目を上げた。男が一人、岩山の斜面を風のように駆けてゆく。ジーク・ヴァールハイト――トールは、そっとその名を口の中で呟いた。
もう気づいたのか？　それともただの斥候か？　だがもう遅い。この険しい岩山を大勢

が列をなして無事に通過するための道は一つしかない。ここで後戻りをしても無駄だ。
思わず緊張で体が強ばった。トールはしいて体の力を抜きながら、心の中で囁いた。
墓を掘れ——ジーク・ヴァールハイト。二万人の墓を。ナデッタの民の墓を。

ジークはどんどん先行し、やがて尖った岩の上で立ち止まって辺りを眺め渡した。
その手の地図と地形とを素早く見比べていると、後方から幾つか馬蹄の音が響いてきた。
「ジトク殿、いかがなされた！」
カヤが、数騎を率いて追ってきたのだ。だがジークは振り返りもせず、射貫くような眼差しを地図に向けている。その鬼気迫る様子に、馬を寄せたカヤたちも思わず息をのんだ。
「罠だ……」
ジークが呟いた。カヤたちが唖然とするのをよそに、何枚もの地図を一気に握り潰した。
「罠とは……ジーク殿？」
「この地図を読む限り、この先での待ち伏せはまずない。だがノヴィアは伏兵を見た」
「ということは——」
「よ、よく似た違う地図を渡された。時間が無い。ノヴィアが見た伏兵を先行して叩く」
「た、叩くとは……我らだけでですか？　私を入れて四名しかおりませんが……」

「敵と接触したら、一名は伝令となれ。俺たちの動きを連絡し、そのまま用心して進むよう領主ランドとエノルに伝えろ。残り三名は、俺たちとともに死に物狂いで戦え」
言うや、猛然とシャベルを地面に突き立てた。シャベルを握る左腕に雷花が迸り、
「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」
刹那、幾重もの稲妻がシャベルそのものに走った。
「水刻星の連なりの下、凄魔ギルトとなりて、我が敵に見せしめよ！」
ジークの招く声に応じて、シャベルが無数の水銀の輝きとなって飛び散り、異形の姿に変じる様を、カヤたちが愕然となって見守った。水銀の輝きの中から現れたひと振りの剣の柄をジークが握ったとき——総勢十六体の、双剣を握る魔兵が地に立っていた。
ジークが無言で岩から跳躍した。魔兵どもが牙を剝き、咆吼を上げてジークを追った。
岩山を猛然と駆け下りるジークたちを、カヤたちが慌てて追いかけていった。

峠の狭い道のすぐ脇に、開けた高台のような岩場があった。
道から見上げてもただの崖にしか見えず、逆に高台からは広範囲に辺りを見通せる。
その絶好の場所に、集結する兵団がいた。剣と弓矢を携え、高台から岩を落とす用意までしてあり、さらに後方では、槍を抱えた一団が突撃する時を待ち焦がれている。

ふいに馬蹄の音が響き、兵たちが振り返った。本隊からの連絡だ——誰もがそう思った。
それは獲物の到来を告げる連絡であり、一方的な殺戮という淫虐の宴の開始を意味した。
だがそのとき高台よりもさらに上の崖から、想像を絶するものが躍りかかってきた。
銀の鱗に覆われ、顔には目も鼻もなく、トカゲのような口に牙を剝き、双剣を烈風のごとく振るう。その凄魔たちを最初に見た者は、驚く間もなく鎧ごと体を両断された。
血しぶきの嵐が起こり、そこへ赤髪の男が現れるや、存分に剣を振るった。
ようやく悲鳴らしい悲鳴が上がったとき、さらに三騎の騎士が突進してきた。
兵たちはたやすく恐慌に陥り、いたずらに絶叫と怒号を上げ、間もなく永遠に沈黙した。

やはり気づいたか——トールは最初の罠が失敗したことを悟って失望しつつ、見破ったジークに対する喜びを同時に感じるという、我ながら奇妙な感情を抱いた。
騎士たちが襲撃を警戒しつつ、焦って列を崩さぬようナデッタの民に呼びかけている。
その民の様子を内側から見るトールは、正直、感動さえしていた。
沢山の荷を運び、大勢の子供や老人を抱え、襲われればひとたまりもない状況である。
にもかかわらず、ナデッタの民の落ち着きぶりは全く崩れなかったのだ。
絶望ではなく明らかに希望を込めて前進していた。誰かの指示で仕方なくそうするので

はなく、みなが生き残る最善の手段として、懸命に前へ前へと歩んでいた。
トールは、すぐそばを歩く者たちが——老人たちが、父親や母親たちが、若者たちが、女たちが、子供たちが、無惨に斬り殺され、血と泥の中に倒れるさまを想像し、胸が悪くなるのを覚えた。それは戦闘ですらない。無意味で、無目的で、全く何の勝利ももたらさない、ただの暴力だ。そのことが、トールの心の底にある戦士の誇りをひどく傷つけた。
やめろ——トールは慌てて、そのような思考は不要だと自分に言い聞かせた。
自分は意味など求めない、目的など持たない。自分はそうやって生きてきた。
これからも、そのようにして生きてゆくだろう——そう思ったとき、ふいにトールは気配の変化を悟った。人間の動きの変化ではない。空気全体の変化である。
来たか——トールは自分が喜んでいるのか悲しんでいるのかも分からないまま思った。
じきに最大のチャンスが来る。大地はお前を裏切らないだろう。それがよく分かった。
地図の誤りさえ大地はすぐにお前に知らせた。大地がお前の味方なら、自分たちは違うものを味方にするまでだ——トールは一切の感情を捨て、どこかにいるジークに心の中で呼びかけた。それは、じきにやって来る。一つ一つは小さく無意味だが、大量にそれは降り注いで地面を覆い尽くす。まともな地図も無いお前に、これをかわして民を守れるか？
トールは天を見上げ、そして確信した。お前の負けだ。ジーク・ヴァールハイト。

血の海が広がり、兵の遺体が折り重なる光景に、カヤは胸が痛んだ。
夜の森での必死の戦いとは違い、ひたすら死に物狂いで恐慌に陥った敵を殲滅したのだ。
こうしなければ自分たちが危うかったとはいえ、とても勝利を喜ぶ気にはなれなかった。
他の騎士たちも悄然としている。ジークだけが兵の武装を見て回り、カヤたちには分からない何かを探り出そうとしていた。やがて、そのジークが顔を上げ、言った。
「……明らかに伏兵だが、本隊はどこで何をしている？」
「本隊？　これが彼らの総数ではないのですか？」
「これを遥かに上回る兵数が、どこかにいる」
戦いはこれから始まると言うのに等しいジークの言葉に、カヤたちが一斉に我に返った。
「で、では……敵の本隊は、これらの兵の損害を察知しているのでしょうか」
「そう考えた方が良い。だが静かすぎる。こいつらを見捨てたのかもしれん」
「見捨てた……？　なぜですか？」
「この伏兵よりも、もっと有効な兵力を温存するためだ」
ジークは辺りを見渡し、岩山の様子や隘路のうねり方、無数の斜面の形状から、敵の存在を示すヒントを読み取ろうとしている。と――ふいに、カヤが空を見上げて言った。

「ジーク殿、来ます」
「来る？」
「はい。この地形で来られると、民のみなも難儀するでしょう。いったん戻りませんか」
そのとき初めてジークは空を見上げ——愕然となった。地形を読み取ることでは分からなかった答えが、にわかに明確な意味をもってそこに現れようとしていた。
「敵の中に、俺の力の弱点を知る者がいる……」
己を呪うようなジークの声にカヤたちが文字通り仰天した。ジークは、答えを告げた。
「雨だ——奴らは、雨を待っていた」

それまでの晴天が嘘のように急に雲行きが怪しくなり、ノヴィアは驚いて空を見上げた。
「雨が降る気配なんてなかったのに……」
旅慣れたノヴィアにも意外な、急激な天候の変化だった。チリング司祭も空を見やり、
「やれやれ、雲が一カ所からわき出しとる。例の街の聖堂が、空に呼びかけておるな」
その途端、ノヴィアは、あっとなった。耕地を豊かにするために聖印を用いて何人もの聖道士や聖道女が一丸となって雨を呼ぶのだ。アリスハートが驚いて目を丸くし、
「ねぇ、それって誰かが雨を降らせてるってことぉ？」

「そうじゃ。これはしまったのう。前回あそこにとどまったときに聖堂の者たちに空に呼びかける予定を聞いておくべきじゃった。すっかり安酒に騙されたわい」
そのとき——ぱらぱらと雨粒が降ってきた。
その雫の一つ一つが、ノヴィアには恐ろしい衝撃を伴って降り注ぐように思われた。
ふいに猛烈な勢いで雨音が走った。一挙に視界が狭まり、ナデッタの民が天を呪う言葉を叫んだ。ただでさえ歩きにくい岩山の隘路は、突然の豪雨を迎えて最悪の足場となった。
「なんという土砂降りじゃ。ええい、耕地には必要とはいえ、わしらには大迷惑じゃ」
チリング司祭がわめき、アリスハートが慌てて雨をよけてノヴィアの懐に隠れる。
「このまま峠を越す！　慌てないで進むんだ！　そう長いこと続く雨じゃない！」
エノルが雨音に逆らって声を張り上げる。民がどれだけ天を呪おうとも、雨やどり出来る場所などどこにもない。冷たい風雨から逃れるすべなどどこにもないのだ。
そう。逃げられない——ノヴィアは頭からずぶ濡れになりながら、ふいにぞっとした。
恐るべき予感に打たれ、慌てて後方を見た。雷鳴が轟き、風が騒いだ。雨がそこら中を叩きまくるそこで、ノヴィアは、もの凄い数の兵団が暗雲のごとく猛然と迫るのを見た。
慌てて距離を確かめた。まだしばらくは追いつかれない。だがこのままでは——
殺戮の光景を想像し、ノヴィアは寒さと恐怖で総毛立ちながらジークの姿を探した。

そして突然、ある考えがノヴィアを襲った。雨だ。この雨とともにあの兵団はやって来た。あの兵団はジークの力が殺がれるこのときを待っていた。
その考えが雷撃のように心を打ち、真っ青になるノヴィアに、エノルが声をかけた。
「大丈夫？　なるべく馬車の陰に入って風をよけるんだ」
ノヴィアは咄嗟にエノルの袖をつかんだ。そのとき、かっと稲妻が走り、落雷の轟音が辺りを震わせた。ナデッタの民が呻くような声を上げ、落雷の恐怖に耐えて前進する。
「なんだって？」
エノルが雷鳴と雨音に負けぬようわめく。そこへ、騎影が雨を貫いてやって来た。
「ノヴィア殿！　敵がいずこより来るか分かりますか？」
敵という言葉にエノルがぎょっとなる。ノヴィアは反射的に、隊列の後方を指し示した。
「良かった……ジーク殿の読みと同じだ。エノル、ジーク殿は敵を迎え撃つため後方へ向かった。前方の敵は殲滅したゆえ、止まらず前進するようにとのことだ」
「わ、分かった。父さんには――」
「既に伝えた。私は後方で民を守る。それでは――」
「待って、カヤさん！　お願いです、ジーク様を助けて！」
ノヴィアが弾かれたように叫んだ。エノルもカヤも呆気に取られた。ジークに彼らが助

けられることはあっても、まさか彼らがジークを助けるなど想像もつかなかった。
　そのとき、ノヴィアの懐でアリスハートが、あっと声を上げた。
「そうだよ、雨だよっ！　狼男が危ないよっ！」
「どういうこと？　何が危ないの？」
　エノルが心なし、声を低めて言う。他の者が話を聞いて動揺しないためだ。
「ジーク様は、招けないんです。水があるところでは堕界の魂を招けないんです」
　ノヴィアも声をひそめ、訴えるように言った。カヤがはっとなった。
「た、確かに、ジーク殿は敵が弱点を知っていると仰っていた。まさか……」
「そんな……。それじゃ、ジークは一人で敵と……」
　エノルが慌てて後方を振り返る。稲妻が辺りを照らし、一瞬、ナデッタの民の誰もが、既に死んだような顔色に見えた。エノルは体が内側から凍りつくような恐怖に襲われた。

　凄魔たちが凄絶な咆吼を上げながらジークとともに走っていた。
　雨が強くなるほどに、凄魔の体を覆う銀の鱗が、酸でも浴びたかのように溶けてゆく。
　水自体に弱いのではなく、地面とのつながりが水のせいで保たれなくなっているのだ。
　やがてある地形を見つけて足を止めた。左右を高い崖に挟まれ、今いる道以外に大勢の

人間が通過できる道はない。兵団を食い止める上での絶好の地形であった。
ジークは剣を振りかぶり、頭上で左手を剣の柄にあてた。両手で握りしめるや、剣全体に青白い炎のようなものが燃え盛った。ジークの左腕から発される激しい瘴気が、剣身を通して、炎のように発露したのだ。その青く燃える剣を掲げたまま——ジークは待った。
やがて道の向こうから続々と黒い波がやって来た。叩きつけるような雨の中、剣を、盾を、槍を手にした者たちが、巨大な暴力の津波となって押し寄せてくるのだ。
(なぜ守る——？)
ジークの脳裏に、再びその問いが起こった。答えは、みなぎる力とともにやって来た。
「お前がそれを教えてくれた……。理想を……俺が戦う理由を……」
兵団の先頭が、一人で剣を構えるジーク見つけ、笑い声を上げ、罵倒しながら迫り来た。
「お前がこの剣を授けてくれた……。ただ生き残るために戦っていた俺に……理想のための剣を……民を守るための剣を、お前が与えてくれたんだ……ドラクロワ」
先頭の兵たちが、一斉にジーク目掛けて武器を掲げた。
——おおっ！
刹那、ジークの口から言葉にならぬ烈声が迸った。青白い炎がひときわ強く燃え盛り、その剣が振り下ろされ、剣尖が豪雨を切り裂くように迅った。

そのまま、体をくの字に折るようにして目の前の地面に刃を叩き込んだ。
どん！　まるで鉄槌を打ち込んだかのような重い音とともに、地面を覆う水が信じがたい高さにまで舞い上がった。一瞬、ジークの足下から水が消えた。それほどの剣風だった。
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
すかさず剣の柄から離した左手に、燦然と雷花が閃いた。
「冥刻星の連なりの下、哭魔ブラスフェミーとなりて我が敵に雪崩れ込め！」
地面を呼び起こすかのように激しく左手を叩きつけた。地中から青白い稲妻が吹き荒れ、その一部が雨水に弾かれて体を灼き、ジークは歯を食いしばってその灼熱に耐えた。
殺到する兵の一部が、地面から何かが、もこもこと盛り上がるのに気づいた。赤黒い大きな風船のようなものが、地面に半ば埋まったまま、じろりと兵たちを見上げたのである。
「牡羊座の陣！」
ジークが叫んだ。刹那、目の前の地面が爆発した。先頭を走っていた兵たちが真下から爆撃され、五体が吹っ飛び、土砂とともに高く舞い上がった。
立て続けだった。閃光と爆音が次々に兵たちの足下で起こり、千切れ飛んだ死体が泥とともに辺りにばらまかれ、爆煙が立ちこめる中、ジークが卒然と走り込んだ。
兵ごと大地の表面を抉り飛ばしたそこに、僅かの間、乾いた地面がのぞいた。

その地面に飛び込むようにして、雷花を迸らせる左手を叩きつけた。
「地刻星の連なりの下、巌魔ヘイトレッドとなりて我が敵を払え！」
稲妻とともに巨人のごとき魔兵が現れ、馬の胴ほどもある手足を振るって爆発を逃れた兵をなぎ倒してゆく。そうして、兵団の第一波が押し返された。
間もなく第二波が訪れ、後方へ退く第一波の生き残りを吸収しながら迫り来た。
「蟹座の陣！」
巌魔の群が、二手に分かれて巨大な方陣を築いた。その中央にジークが凄魔と並び、三個の軍勢となって、敵の兵団と相対した。どちらも他に通る道などない峡谷の進軍である。
二つの勢力が真正面からぶつかった。どちらかが全滅するまで戦う、総力戦であった。

雨の中、一人の男が馬上から戦いを見下ろしていた。小高い岩場のすぐ下では、二つの巨大な波がぶつかり合うようにして、ジークの魔兵と兵団が、戦闘を開始している。
男のこはく色の髪が、濡れて顔に張り付いていた。その髪と雫を払いのけ、じっと戦いを見つめた。サガ・トルホーズ——ジークを陥れるために諜報院を裏切った男であった。
圧倒的な力を振るうはずの魔兵の群が、徐々に押される様子に、サガがにたりと笑った。
大地とのつながりが大量の水で遮られ、魔兵を形作る堕気が失われてゆくのだ。

あちこちで厳魔たちが、どろどろの黒い固まりになって倒れる様に、笑い声を上げた。
あの聖堂が空に呼びかけることを、本当なら諜報院の俺が教えるはずだったんだがな。
サガは笑いながら思った。だが偽ったわけじゃない。単に情報の後半部分を教えなかっただけだ。情報が無ければお前は無力だ。それがお前の限界だ——ジーク・ヴァールハイト。

雨に視界と足場を悪化させられながらも、ナデッタの民は着実に、岩山の難所を通り抜けていった。誰もが必死に声を上げて励まし合い、この過酷な状況をともに戦っていた。
だが、隘路を越え、雨の向こうで峠が間近に迫ったとき、突然、異変が起こった。
先頭の列がいきなり止まったのだ。後続の者たちがもう少しでぶつかりそうになった。
「どうしたの、父さん！」
エノルが先頭に走り寄る。そして泥の中に倒れた領主ランドの姿に、呆然となった。
「父さん……？」
エノルが弱々しく呼んだ。領主ランドは苦痛に呻きながら胸を押さえ、エノルを見た。
「と、止めるな……みなを……エノル、お前が……」
ぜえぜえと喘ぎながら、やっとそれだけを言った。臣下たちが急いで領主ランドを担ぎ、隊列からどかすようにして運んでゆくのをエノルは馬鹿みたいに突っ立って見ていた。

いったい父はどこへ行くのか。こんな大変なときにどうなっているのか――

「エノル・ディオン！　早く民を導けっ、貴様の父がぶっ倒れたのじゃ、お前がやれ！」

いきなりチリング司祭に怒鳴られ、エノルは頭を殴りつけられたような衝撃を受けた。

自分が導く？　これまで民と親しく接することばかり考えていた自分が？

「俺は……司祭様……」

「がたがた言っとるヒマがあると思うなっ！」

チリング司祭の分厚い掌が、まともにエノルの頰をひっぱたいた。

「父親の代わりになることも出来ずに、父親にたてついとったかっ！　甘ったれがっ！」

その言葉がエノルの胸に突き刺さった。それで逆に、しっかりと腹が据わった。

「……すいません。父親が領主だということを、忘れてました」

ぺこりと頭を下げた。こういう人を食ったような素直さがエノルの本領発揮だった。

「ここからは俺が父に代わって先頭に立ちます。騎士たちは俺に報告を！　出発する！」

止まっていた隊列が動き始め、たちまちエノルのもとに雑多な報告が押し寄せてきた。

今の突然の停止で何人が怪我をした、どの集団で何人倒れた、子供たちが寒さで動けなくなった。臣下とともに逐一応えながら、エノルは歯を食いしばって進んだ。

先頭に立って初めて父が背負う重荷が分かった。倒れた父のことが泣きたくなるほど心

配だった。民の不安も、疲れも、苛立ちも、全てが自分の背後から迫るようだった。
本当に平等にするなら——と、いつかの笑い話を思い出した。俺が馬車を引っ張って、馬に叩かせよう。さあ、俺を叩け。何も分かってなかったこの馬鹿をみんなで叩け。
そう思いながら必死に前へ進むエノルのもとに、ふいにノヴィアがやって来て言った。
「この先で、雨で土砂崩れが起きました。迂回して下さい。私が道を示します」
この状況において、ノヴィアの力は最高の助けだった。だがエノルはあえて訊いた。
「ジークのところに行かなくても平気？」
ノヴィアがジークの身を案じて、いてもたってもいられないのを察しているのだ。
しかしそのときノヴィア自身の中の何かが、不安に駆られてジークのもとへ行くことを強く押しとどめていた。ノヴィアは、きっぱりと言った。
「ジーク様は、ここにとどまるよう私に命じました。私は、ジーク様の従士です」
かつて盲目であった頃のノヴィアであれば、とっくにジークを追いかけている。だが今は任された仕事を果たさねばならなかった。ジークの信頼に応えるためにも——ジークの戦いに報いるためにも。そういう決意が、恐ろしい不安の中でノヴィアを支えていた。
「狼男のやつなら、きっと大丈夫だよ。だっていつでも、どうにかしてきたんだもん」
アリスハートも、ノヴィアの胸で不安を押し殺したような声で言う。

「それにきっとカヤさんが、ノヴィアが見たものを、狼男に伝えてくれるよ」
エノルは微笑み、ふと、頬がひりひりするのに気づいた。呆然としていた心が立ち直り、チリング司祭にひっぱたかれた頬が、ようやく痛みを感じていたのだった。

3

終わりだ——戦場を見下ろすサガは、興奮と喜びに痺れながら思った。
その顔に、いつもはり付けている笑顔とは似ても似つかぬ、陰惨な笑みが浮かんでいる。
眼下では、魔兵が次々に力を失って倒れ、ジーク自身も明らかに押されている。
とはいえ、ここでジークを倒す必要はない。防御を崩し、ナデッタの民さえ殺せば良いのだ。そしてジークも魔兵たちも、兵を押しとどめる力を確実に失っていった。
逃げたいんじゃないのか、ジーク。サガは心の中で囁いた。お前が従士を斬り殺したように、民を見捨てて兵どもに殺し尽くさせてやったらどうだ。
ふいに、そのサガの笑みが強ばり、悲しむとも怒るともつかぬ表情になった。
俺は、聖法庁を信じていた。戦火で滅んだ故郷の代わりに、新たな土地を与えてくれると信じて聖法庁のために働いてきた。だが何年待っても土地は与えられず、やがて確信したのだ。誰も、自分たちに新たな土地など与えようとは思っていないことを。

そして蜂起を計画し、兄弟でそれを進めた。みなで戦おうとしたのだ。領主どもを人質にし、一部の本当に勇気ある者たちとともに自分たちの力で土地を手に入れようとした。
それを何もかも潰したのがジークだった。弟が殺され、みなが罪人として処断された。
サガは自分の素性を偽り、聖法庁の中に潜伏し続けた。いつかジークに復讐するために。
聖汽雷の力も、そのために血のにじむような努力の末に手に入れたものだ。だがとても〈招く者〉と正面からぶつかる力ではなく、残された道は、機会を待つことだけだった。
情報を握り、常にジークの居場所と行動を知り、復讐の好機を待った。
そしてやっと機会が到来した。ヴィクトール・ドラクロワが聖法庁から離反したのだ。
サガは歓喜してドラクロワと接触し、聖法庁の情報を何もかも流すことを誓った。
そしてさらに待った。ジークを欺き、倒すときを、ひたすら待ち続けた。聖法庁を裏切ることは何でもなかった。最初に欺いたのは聖法庁なのだから——サガはそう信じていた。
サガは今や、雨に濡れた顔で、泣きながら笑っていた。あのとき自分は、故郷を手に入れられると思った——もう一度、帰れると思った。それなのにお前が潰してしまった。
お前が、俺の弟の墓を掘った。俺の同胞の墓を掘った。全てが、お前に葬られた。
俺は、お前が葬ったはずの真実の生き残りだ——ジーク・ヴァールハイト。

「牡牛座の陣！」
ジークの言下、凄魔を先頭に突撃陣形が築かれた。少数の兵が大軍に躍り込み、攪乱する戦術である。今や、そうするしかすべがないほど魔兵の数が減っていた。
凄魔が鋭く敵兵に切り込んだ。目的は指揮官である。敵の殲滅が不可能なら、とにかく中心を叩くしかない。ジーク自身も修羅のごとく剣を振るい、遮二無二突っ込んだ。
自滅すれすれの行為だが、かろうじて功を奏した。もともと民の虐殺しか考えていない指揮官である。異形の魔兵が突進してくるや、慌てて自分の身を兵たちに守らせたのだ。
その動きで指揮官の居場所が分かった。ジークは魔兵とともに血と刃の嵐を走り抜けた。
そして指揮官がもたもた剣を構えた刹那、ジークが両手で握りしめた剣が、その剣と体をともに真っ二つに断っていた。
ジークの左腕の籠手の隙間から、どっと血が噴いた。その凄まじい剣風に、兵たちがわっと退く――が、思ったほど恐慌が広がらない。ジークは、すぐにその理由を悟った。
後方から敵の第三波が到来したのだ。もはや兵たちも指揮官がいようがいまいが関係なかった。ひたすら真っ直ぐ進み、ジークと魔兵を蹴散らし、民を殺し尽くせば良いのだ。
厳魔たちが兵に呑み込まれ、倒れていった。凄魔たちも手足が溶け出し、動きを鈍らせてゆく。ジークはなんとか陣形を保つために退き、そのまま後ろへ後ろへと押された。

迎撃のために選んだ地形から押し出され、ついに開けた道へ出てしまった。兵団が左右に広がり、さらに迎撃が困難になる。ジークの背後に崖が近づくと、兵団は躍起になってジークと魔兵を攻めたてた。崖際に追い込まれれば、兵数に押されて転落するしかない。
ジークは素早くそれを避け、ひたすら地面を探した。水に覆われていない地面を。だが岩壁からは滝のように水が流れ、地面は泥の海だ。乾いた地面など見つかるはずもない。
いや——とジークは懸命に剣を握りしめた。この地形なら、必ずどこかにそれがある。
以前、それで敵を撃退したことがあった。膝まで水につかった状態で魔兵を招いたのだ。
それを教えてくれたのは、当時、まだ目を開けずにいたノヴィアだった。
盲目の状態であるにもかかわらず必死で走り、ジークにその地点を示してみせたのだ。
走れ。追いつめられるな。何としても探し出せ。目が見えているのならそれを求めて絶望に抗え。あの少女のように走れ——左腕の出血と戦いの疲労で朦朧とする自分を叱咤し、ジークは魔兵を率いて再度、敵の中心へと突撃しようとした。そのときであった。
「——ジーク殿っ！」
一騎の槍騎兵が、聖印を刻まれた槍を振るって、側面から躍り込んできたではないか。
「なぜここに来た！」
ジークの鋭い叱咤にも怯まず、カヤは声の限りに叫んだ。

「ノヴィア殿からの伝令です！　ジーク殿が必要としているものについて！」
ジークが、かっと目を見開いた。
「どこだ、どこにある！」
だがそのとき、兵たちが凄魔の半数までもなぎ倒していた。もはや敵を撹乱するどころではない。ジークと残りの魔兵は、カヤとともに、あっという間に崖際へ追いつめられた。
カヤが何かを大声で叫んだ。
次の瞬間――一斉に突き出された槍の向こうで、ジークとカヤの姿が消えていた。

「落ちた――！　ついに落ちた！」
サガが快哉の声を上げた。ジークと槍騎兵が、ともに崖から落ちたのを見届けたのだ。
兵たちは、すぐさま残りの魔兵を蹴散らし、進撃を開始している。もはやナデッタの民と兵たちを遮るものは何もなかった。暴虐の喜びに突き動かされ、駆けに駆けてゆく。
「終わりだ、ジーク！　今日が騎士としてのお前の最期だ！」
サガが叫んだ。その刹那――にわかに、崖の方で何かが青白く輝いた。
なんだ？　サガは豪雨に視界を遮られながら崖の方に目をこらし、ぎょっとなった。
崖の向こうから、幾重もの青白い稲妻が、騒然と噴き上がったのだ。

稲妻の輝きは水に弾かれながらも辺りを真っ白に照らし、後続の兵士を立ちすくませた。
輝きがやみ、何かがぬっと崖の下から現れた。巨人のごとき巌魔が群をなして崖を登ってくるさまに、兵士たちが、サガが、愕然と凍りついた。
その巌魔たちが躍りかかる前に、兵士たちの間で凄まじい悲鳴が上がった。
なんと倒されたはずの凄魔たちが立ち上がり、竜巻のごとく双剣を振るっているのだ。
前進する兵たちは、後方の異変に気づいていない。
ふいに彼らの眼前で、地面が爆発するかのように盛り上がった。薄汚れた鉄塊のごとき剛魔が地中から続々と現れ、慌てる兵たちに向かって泥まみれで突撃したのだった。
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
叫びを上げて、ジークが雷花を咲き乱れさせる左手を猛然と叩きつけた。
「海刻星の連なりの下、迅魔オウディウムとなりて我が敵に走れ！」
刹那、岩の壁の一面に青白い稲妻が吹き荒れ、小柄な魔兵が飛び出した。
カヤの腰ほどの背丈で、両手に真っ赤な鋭い爪を生やし、疾風のごとく崖を駆け上がる。
立て続けに魔兵を招くジークの姿を、カヤが馬上から驚嘆して見つめていた。
崖際に追いつめられたとき――カヤは、こうジークに叫んだのだ。

「このすぐ下です！　この下に、ジーク殿に必要なものがあります！」
ジークは全く躊躇しなかった。すかさず退き、兵たちが突き出す槍に合わせて、崖へ跳んだのだ。宙で岩壁に剣を突き立て、落下の速度を殺してから一挙に飛び降りた。
カヤも馬を崖へと躍らせていた。ジークのように垂直には落下せず、別の進路から僅かな足場を見つけて巧みに馬を駆り、崖の急斜面を降りていったのである。
カヤが崖下に到達したとき、ジークは既にそれと向かい合っていた。
必死に探し求めていたもの——水に濡れていない地面を。
岩の壁の上方では、崖が屋根のように前にせり出しており、そのためそこだけ豪雨が届かずにいたのだ。実に、ジークが苦戦していた、その足の下にあったのだった。
ジークはその地面を通して魔兵を招き、今なお力の限り招き続けている。雨の中では魔兵は長くは存在していられず、一定の兵数を保つには連続して招かねばならない。
ジークの姿は見ているカヤの方が空恐ろしくなるほどの鬼気に満ち、腕全体から流れるおびただしいまでの血がしぶき、岩壁が、赤く染まっていた。
まるで血肉を割いて大地に捧げ、代わりに民を守る魔兵を招くようなジークに、やがてカヤの方がたまらなくなった。慌てて馬を降り、背後からしがみつくようにして止めた。
「もう……もう十分です！　十分に兵は……」

ジークはカヤを振り払うと、猛然と左手に雷花をまとわせ、岩壁に叩きつけた。そしてなお堕気が慟哭の声を上げてジークに流れ込み、眩いばかりの雷花を左腕に咲かせてゆく。
カヤは咄嗟に、槍の聖印を輝かせた。堕気がジークを駆り立てていることを鋭く察し、
「集まるなっ、堕気どもっ！　亡霊どもっ！　これ以上集まっては、ジーク殿が……！」
聖槍の力で集まる堕気を払おうとするや、ふいにその柄をジークの左手がつかんだ。
血が柄をつたわってカヤの手を濡らした。呆然とするカヤに、ジークは言った。
「ナデッタの地で死んだ魂たちが……お前たちを守ろうとしているだけだ……」
それでもうカヤは何も言えなくなった。ジークは静かに槍を放し、岩壁に向かった。
死者の慟哭を一身に引き受けるジークの姿を、いつしかカヤは泣きながら見ていた。

サガは驚愕と怒りに震えながら、壊滅してゆく兵の有様を見つめた。
雨のせいで魔兵の力も半減し、兵たちの奮闘によっては倒すことも不可能ではない。
だが数が異常だった。地獄の蓋でも開いたように崖下から続々と異形の兵が登ってくる。
それらの魔兵を招き出すジークは、もはやサガにとって常軌を逸した存在だった。
地図の誤りを見抜き、伏兵を見抜き、後方の本隊の存在を見抜き、そして最大の援軍である はずの豪雨の中でさえも血みどろになって戦い抜き、ついにジークは、近辺の砦や領

国からかき集められた大量の兵を、全滅させようとしているのだ。
化け物め——サガは歯を食いしばり、もう少しでジークに対する恐怖で震え出しそうになるのをこらえた。まだだ。貴様を仕留めるための策は、まだある。見ていろ化け物。
きりきりと歯を軋らせながら馬首を返した。勝敗が決した今、最後まで見る必要は無い。何よりこれ以上ジークの力を見れば、自分が恐怖に支配されるのが分かっていた。
サガは、兵が殲滅される様を見届けぬまま、その場を去った。

「ここで立ち止まっては駄目だ！　もう少し進めば平地に出る。そこまで頑張るんだ！」
休憩させてくれるよう嘆願する民の代表者たちへ、エノルは容赦なく叫んだ。
エノルであれば意見を聞き入れてくれるはずだと思っていた民の代表者たちにとっては、意外な厳しさである。風雨のせいで手足がかじかみ、岩地で滑って怪我をする者が続出し、老人や子供ばかりか、若者や大人たちまでが疲労を訴えていた。
だがエノルは、彼らを振り返りもせず、民全体を引きずるようにして歩いた。
今このとき、中途半端な優しさは民を殺すことになるのがよく分かった。敵が迫っているだけではなく、こんな場所で休憩を取ろうものなら、いつ頭上の岩が土砂崩れで落下してこないとも限らないのだ。哀訴と怨嗟が充ち満ちようとも、構わず歩くべきだった。

民も懸命にそれについてゆく。長い長い歩みだった。何もかもが自分たちを打ちのめしているようだった。人も山も全てが敵に思えてくる。憎しみが起こり、それを歩く力にした。悲しみが満ち、それを歩く力に変えた。そうせねば生きられなかった。
ノヴィアは胸にアリスハートを抱きながら、その民の様子を、じっと内側から感じていた。ただひたすら前進を続ける彼らのために、ノヴィアは必死に道を見続けた。

崖を登りきる寸前、血で赤くなった泥が流れ落ちてくるさまにカヤは呆然となった。
崖から顔を出し、真っ赤な泥の中に無数の死者が横たわっている光景に、ぞっとなった。
「……生存者はいるか」
カヤの肩で、ジークが訊いた。もはや手足に力が入らず、目がかすむほどの疲労だった。
カヤは一方の肩にジークを抱き、他方の手で馬を引きつつ、なんとか斜面を登った。
「残りは逃げたようです。誰も……生きている者は、誰もおりません……」
そう告げながら、カヤは、がしゃがしゃと音を立ててくずおれる魔兵たちを見つめた。
凄魔たちでさえ全身ずたずたで、顔も手足もどろどろの銀の固まりと化している。
「民に……敵は撃退したと伝えろ……」
ジークは、カヤの肩から離れながら、掠れ声で命じた。

「俺は……敵が来ないことを確認しながら……戻る」
「で、ですがジーク殿、もしここで敵が来たら……」
「必要なものは……そこにある」
無造作に、剣を崖の方へ向けた。カヤは愕然となった。ジークの力は無限なのかとさえ思った。だがそんなわけがない。ジークもまた限界を持つ一人の人間だ。なのに――
「なぜですか……。なぜそこまで、我らのために……」
ジークは答えない。どう答えれば自分の思いを伝えられるのか分からなかったのだ。答えようのない思いを抱え、疲労と苦痛に耐えながら、ジークはただ、別のことを言った。
「行け……。民を……エノルを安心させてやれ……」
カヤは何か言おうとしたが言葉にならず、歯を食いしばってジークに敬礼し、
「すぐに……すぐに迎えの馬車を寄越します。それまで……」
やっとの思いでそう口にしたとき――道の向こうから、一騎の騎士が駆けてきた。
あっとカヤが声を上げた。やって来たのはナデッタの騎士の一員だが、その馬に同乗している者に、思わず笑顔を浮かべていた。小柄な少女が今にも泣きそうな顔で馬を降り、
「ジーク様！　ご無事で……ご無事で……！」
そう叫びながら大急ぎで駆け寄ってくるのだ。その姿にジークは目を細め、

「なぜ……来た。お前は、民の目になれ……」
厳しく言った。ノヴィアはジークの前で立ち止まり、そっと血まみれの左腕に触れ、
「私……ジーク様の従士ですから」
少し寂しげに微笑して告げた。その肩で、アリスハートが明るい声を放った。
「みんな山の向こうで泊まる準備してるよ。行っていいよってエノルが言ったんだよ」
ジークはうなずき、ゆっくり泥の中に膝をついた。その左腕の籠手を、ノヴィアが急いで外した。血でべっとりと濡れた腕を、ノヴィアは胸に抱き、荒れ狂う堕気を宥めた。
「敵が来たら起こせ」
ジークはそう言って目を閉じ、倒れるように眠り込んでしまった。
この男は、深い闇にいるのだ――ノヴィアは小さな体で必死にジークを支えながら思う。
そのまま待つだけでは決して逃れることの出来ない闇の中で、戦っていた。どんな夜も必ず明けることを信じて。森で襲われたときに領主ランドが言ったように。ジークもまた、ナデッタの民と同じように、己自身の夜明けに向かって進んでいるだけなのだ。
ノヴィアは力をこめてジークの腕を抱きしめた。疲労と痛みを少しでも消せるように。従士として少しでも役に立てるように。そして自分の本当の気持ちが少しでも伝わるように――そこにノヴィア自身の夜明けがあると信じて。ジークの血の熱さを胸に感じていた。

4

薄暗い場所に、ジークはいた。どうやら幕舎の中に横たわっているらしい。
うっすら開いた目で、幕舎の天井を見た。起きあがろうとするが指一本動かせない。
そばに誰かがいる気がするが、意識が朦朧としてよく分からなかった。
ふいに、ぼそぼそ話し声がした。ジークは僅かに目だけを動かして、そちらを見た。
無数の人間が、そこにいた。みな青ざめた顔色で、中には血みどろの顔もあった。
ああ——とジークは嘆息した。死者たちが集まってきているのだ。だが、こんな風にはっきり見えることは滅多にない。もしかすると自分が勝手に想像した幻かもしれない。
そう思っていると、ふいに死者の一人が近寄り、膝をついてジークの顔を覗き込んだ。
焦げ茶色の髪と目をした、若い青年だった。今は無表情な青ざめた顔をしているが、かつては愛嬌に満ちた明るい青年だったことをジークは今でも覚えている。
(聖王の騎士様——)
青年の声が、遠い記憶の向こうから甦った。ジークは目を細め、小さくかぶりを振った。
(俺を、そんな風に呼ぶな……)
ふと、それが遠い昔にかわした会話であることを思い出していた。

では何と呼べば良いのかと訊かれ、ただのジークで良いと返したのだ。
(ではジーク様とお呼びさせて下さい。俺は――)
青年は、にこにこして自分の名を告げた。そして、こう言ったのだ。
(今日から、あなたの従士として働かせて頂くことになりました)
その声が甦った途端、ジークの胸に、悲しみが切られるような痛みとなって疼いた。
聖王直属となった自分につけられた最初の従士――ひどく自分を慕ってくれた青年だった。ジークが故郷を失った話をしたら、自分のことのように泣いてくれた。そして青年自身が失ったものについて話してくれた。
明るい態度の底で、必死に失われたものを取り戻そうとする思いを抱いた青年だった。
そしてその思いゆえに、青年は、ジークの従士に志願し、危険な任務に赴いたのだ。
青年が、横たわるジークの袖を握った。その青白い首元が、気づけば真っ赤に染まっている。深い刀傷が、肩から胸にかけて走っていた。明らかな致命傷であった。
かつて自ら剣を振るい、青年の命を奪ったその傷を、ジークは悲しく見つめ、言った。
(すまない――)
袖を引っぱる青年が、自分を連れて行こうとしているように思ったのだ。
死者の眠る闇に、自分を導きに来たのだと。そしてそれに応えることが出来ない自分が、

無性に悲しかった。もう良いではないかと死者たちが言っているような気がした。もう十分に苦しんだのだから、良いではないか。もう楽になっても良いではないか。

すまない――ジークはそう繰り返した。まだなんだ――すまない。

朦朧とする意識に、そのときまた別のものが見えていた。丘の上に建てられた墓標――ジークがその手で葬り、碑銘を刻んだ墓だった。だがその墓石は無惨に砕かれ、掘り返された土の底には何もない。そこに眠っているはずの女も、棺ごと消えていた。

（シーラ――）

悲しみをこめて女の名を呼んだ。それがかつて自分とドラクロワとともにあった絆の名だった。ジークは暴かれた墓の前で、失われたものの最後のかけらを抱き、いつまでもうずくまる自分の姿を見ていた。絆というもののかけらを今でも手放さずにいる自分の姿を。

ここで自分の命を放り出すということは、その最後のかけらを捨てるということだ――

ふと、青年がジークの袖から手を離した。そして、その体の傷に触れてみせる。

痛いのか――ジークが訊く。青年は微動だにしない。すまない――ジークが言う。青年がかぶりを振る。そしてふいに、ジークは、青年が違うことを告げているのを悟った。

（お前のその傷を思い出せと言っているのか――）

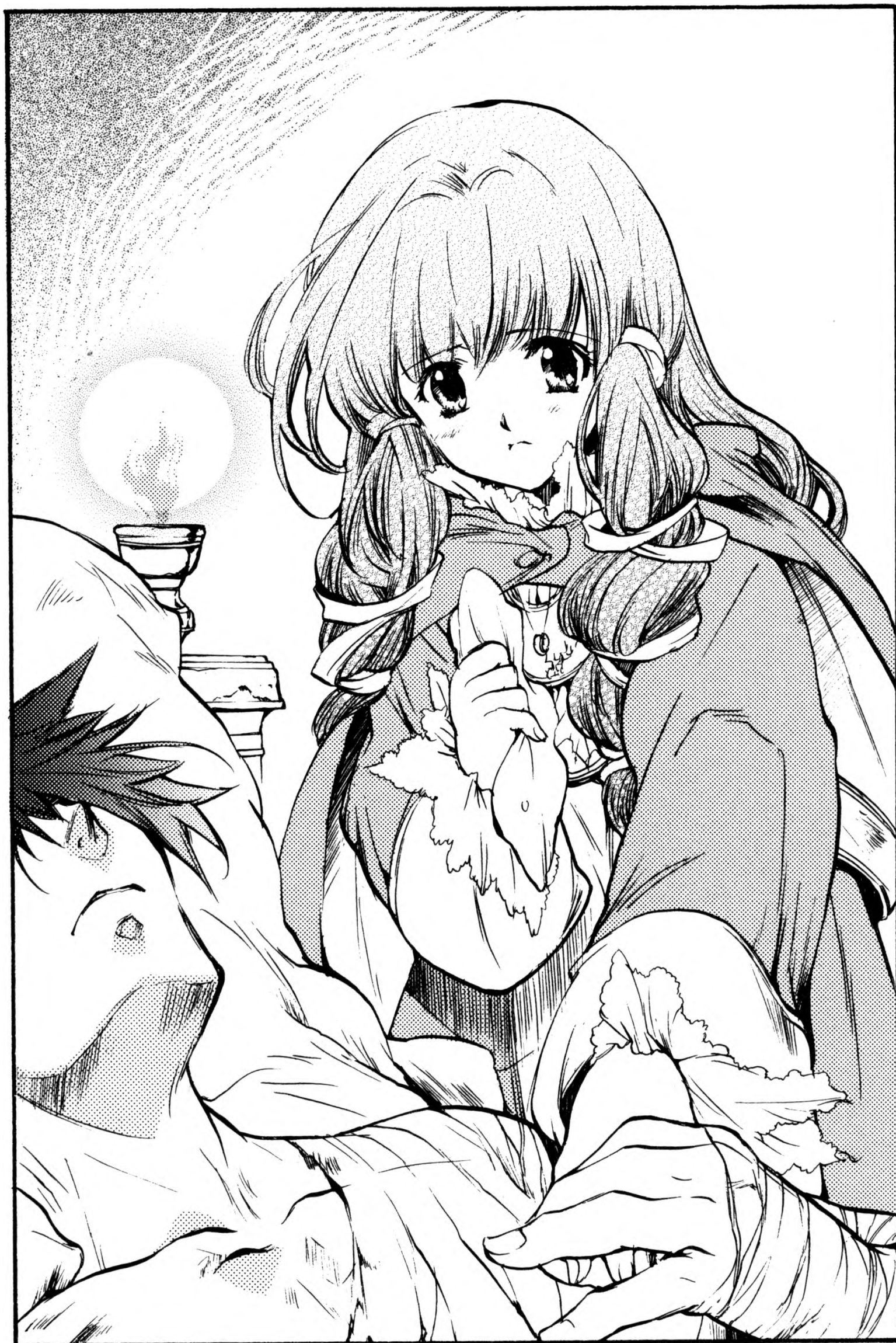
その途端、青年の背後で、死者たちが音もなく動きだし、どこへともなく消え始めた。

やがて青年もまた立ち上がった。待ってくれ——ジークは、青年の名を呼んだ。
(お前が、あのとき俺に教えてくれた民を守る方法を——もう一度やれというのか)
青年は僅かにジークを振り返り——消えた。薄暗いそこに、再びジーク一人となった。
ジークは目を閉じ、死者が自分を闇に引きずり込みに来たと思ったことを詫びた。
死者たちは——青年は、今でもジークのことを信じてくれていた。
(信じろ——)
強く自分に言い聞かせた。彼らの信頼に応えるために。自分にそれが出来ると信じろ。戦いの向こうにあるものを信じろ。失われたものの最後のかけらを信じるように、死者たちが自分のことを信じてくれているように、自分を信じろ。そして——それを信じることが、自分を置いていった男を止める最後の方法であることを信じろ。
ジークは、次なる試練への思いが自分の中に満ちるのを感じながら、深い眠りに落ちた。

横たわるジークのそばにノヴィアとアリスハートがいた。あの岩山を越えたところに設けられた宿営地である。騎士たちがこの幕舎にジークを運んで介抱してくれたのだ。
「良かった……だいぶ落ち着いてきたみたい」
ノヴィアが、ほっとして呟く。アリスハートも安心したようにこう言った。

「狼男が落ち着いたよって、エノルさんたちに伝えてこよっか、ノヴィアぁ？」
ジークが運ばれてから丸一日が経っており、エノルやカヤや臣下たちが次々に様子を見に来ていた。カヤがジークの戦いを伝えたお陰で、今やみなが感謝し、気遣っているのだ。
「ええ……。お願い、アリスハート」
ノヴィアが言うと、アリスハートはすいっと宙を飛んで幕舎を出て行った。
それを見送るノヴィアは、心中複雑だった。ナデッタの民がジークの状態を気にするということは、ジークが戦えるかどうかということなのだ。ジークが果敢に戦えば戦うほど、ナデッタの民は更に自分たちを守るための戦いをジークに求めることになる。
ときおりジークがうなされるたびにノヴィアはたまらない気持ちになった。戦いに勝ってジークが得るものは、結局、次の戦いでしかないのではないかと思ってしまうのだ。
ノヴィアはそんな思いを振り払いつつ、水で濡らした布を絞り、そっとジークの額に浮いた汗を拭った。そのとき――ジークの目蓋の隙間から、すっと一筋、何かが流れ落ちた。
どきっとしてノヴィアは手を止めた。思わず、ジークの顔を凝視してしまった。
たった今、ジークの閉じた双眸から零れたものが、うっすらとその顔を濡らしている。
ふいにノヴィアの胸の奥で鼓動が早鐘のように鳴り、顔に血が昇ってきた。
ほんの一瞬、確かにジークが涙を流したのだ。ジークの中のどのような思いがそれを流

させたのかは分からない。ただ初めて見るそれに、咄嗟にどうして良いか分からなかった。
ジークの左手の指が、何かを求めるように伸ばされた。
ノヴィアは、右手で布を握ったまま、おずおずとジークの指に、左手で触れた。
ジークの指がかすかに力を込めてノヴィアの手を握り返した。
猛然と心臓が鳴り、耳まで赤くなりながら、ノヴィアはしばしジークの手を握り続けた。
やがてジークの手が力を失い、ノヴィアの手から離れて、毛布の上で横たわった。
ジークが本当は誰の手を求めていたのか、ノヴィアには分からない。
ただ、たった今ジークの手を握っていた自分の手を見つめながら、思った。ジークが戦うことで何を得るのかは、その戦いを実際に見守ることでしか分からないだろうと。
ノヴィアは、ジークの顔に触れ、かすかに残る涙の跡を、ひそやかにその手で拭った。

何通もの報告書に目を通しながら、レオニスは呆然となった。
のろのろと地図に手を伸ばし、報告書に従って、針を抜いては新たに刺してゆく。
ナデッタの民が越えた岩山がどれほど険しいか、地形を確認すればするほど慄然とした。
こんなのは人間の歩く道ではないとさえレオニスは思う。このような道を進めと言われれば、誰もがぞっと立ちすくむだろう。なのに、重い荷を運び、老人子供を抱え、豪雨に襲

われ、背後から敵に迫られながら——ナデッタの民は、その道を踏破した。
しかも多くの傷病者を出しながら、死者は一人もいない。
「なぜ……？　なぜ諦めない……？　どうしてそこまで抵抗する……？」
黒い蟻に向かってそう口にした途端、ぞっと恐怖が湧いた。たやすくひねり潰せると思って振り下ろした手を、逆に食いちぎられた気分だった。自分は自分に対して証明しなければいけないのに。そういう思いが恐怖を加速させた。たとえ歩けなくとも、たとえこの地を動けなくとも、そんな必要がないくらいの力が自分にあることを、自分自身に対して証明しなければいけないのに。このままでは自分はこの蟻に殺される。心を殺される。
怪物だ——レオニスは思った。もはやジークもナデッタの民も、想像を絶する何か違う生き物のようだった。獰猛に障害を突破する、得体の知れない怪物がそこにいた。
「ト……トール！　トール、トール——！」
孤独な叫びが上がった。返事などあるわけない。
「早く帰って来て、トール！　僕はどこへも行けないんだ！　ここを動けないんだよ！」
暗い闇に置き去りにされた子供が、必死に上げるような叫びだった。
目に涙がにじみ、はっと叫びをこらえた。やめろ——制止の思いが強く湧いた。
自分がいったい何に取り乱しているのか、必死に考えた。

敗北だ——それが怖いのだ。そしてこの場合の敗北とは、自分の心が挫かれることだ。戦いの恐ろしさは、命を奪い合うことだけではない。心の奪い合いでもあるのだ。戦いは人間の心さえも殺す——そのことを、レオニスは生まれて初めて実感し、理解していた。

「これが……戦い……」

戦慄とともにレオニスは口にした。そもそも恐怖に怯えるなどという感情が、自分の中にあることとさえ意外だった。だからその感情にたやすく呑み込まれそうになったのだ。

レオニスは、いつの間にか額にびっしりと浮かんでいた冷たい汗を拭った。

そして静かな気持ちで考えた。自分は父を殺した。ドラクロワと会った。ナデッタの土地を滅ぼした。大勢の命を奪い、今もまた必死で歩む者たちを叩き潰そうとしている。

それが今の自分だ。望んで後戻りの出来ない領域へと我が身を投じたのだ。

だがどうすれば勝ったことになるのか、それが分かっていなかった。一方的な殺戮をもたらせば勝てると思っていた。人を操作して殺すことの罪悪感さえ無視すれば、自分は勝てるのだと漠然と信じていた。なんと愚かだろう。戦いとは決してそんなものではない。

「僕は、戦いの恐怖を知った——」

呟いた途端、どくんと鼓動が響いた。自分の全身全霊が本当の戦いに赴こうとしているのが分かった。自分の心を賭けた戦いだった。自分が生きるか死ぬかの戦いだった。

そしてそれこそが、本当の意味で後戻りの出来ない道に踏み込むということなのだ。
「何を守り、何を与え、何をもたらすか……」
静かな声で自分自身に囁きかけた。答えは分からない。だがそれまで抱いていた漠然とした虚無感のようなものが綺麗に消えていた。心を賭けたからだ。どのような答えが到来しようとも、必ずそれを受け止めてみせるという決意が、ごく自然に胸に湧いたのだ。
そして次の瞬間、ある強烈な感覚がレオニスの総身に燃え上がった。
自分は生きている――ここでこうして生きている。そういう感覚であり自覚であった。
レオニスはかっと目を見開いて極彩色の地図を見た。突き立てられた針の一つ一つが、単なる「各地の情報」という以上の意味を持ってレオニスの目を打った。
人が生きている。地図の向こう、針の色彩の向こうに、多くの命が生きている。
そう思った途端、まるで全ての針が鮮やかさを増したようだった。そしてその鮮やかさが、他ならぬ自分の命と結びついているのだという感覚に総毛立った。
深い感動があった。それと同じくらいの恐怖があった。喜びや悲しみや怒りが起こり、それまで自分が体験したあらゆる感情が一挙に膨れあがるようだった。
「これが、戦いだ――」
凛烈たる声音がレオニスの口から迸った。かつてないほどの強さを自分の中に自覚した。

同時に、どれほど自分が弱いかを思い知った。自分の残酷さを真正面から自覚し、暗い感情の全てが何かそれまでとは違う、輝ける血となって全身に駆け巡るかのようだった。
その青紫の目に、誇りと残酷さの輝きを同時にあらわし、ひたと黒い蟻を見すえた。
「まだまだ策はあるぞ、蟻ども」
傲慢とさえいえる口調で言った。だがその声はもはや揺るぎない。その黒い蟻が、二万人の命の塊であることを自覚した上での、恐るべき態度であった。
自分はナデッタの地を滅ぼしたあの怪物に似ている。改めてそう思った。呪縛された己の身への憤懣を力に変え、成長し、炸裂する怪物だ。だが同時に、これまでとは違う思いもある。たとえ炸裂する怪物であったとしても、自分の命や心の重さに押し潰されているわけではない。命を賭け、心を賭けるのだ。自分は生きている。生きることを求めている。
そしてナデッタの民も、ジークも同じように生きている。どちらかが生きるか死ぬかの戦いだ。お前たちが突き進む怪物なら、自分はそれとは違う怪物になって襲いかかろう。
自分は呪縛された獰猛な花だ。あらゆる策略こそ、動けぬ自分が伸ばす枝であり葉であり根であるものだ。自由に移動することが出来ない花の獰猛さを、とくと味わわせてやる。
残酷なのが、獣のように走り回るものたちだけだと思うな。花が咲くとき、それはそこに存在するかもしれなかった他の無数の命を犠牲にして咲いているのだ。

お前たちを――ナデッタの民を、ジークを、聖法庁を、ドラクロワでさえも、全て食い滅ぼし、聖地シャイオンという大輪の花を咲かせてやる。

「それが、僕が生きているということだ」

レオニスは敢然と告げ、針を手に取った。そして花がじっと咲くときを待つように微動だにせず地図を見つめ、やがて地図の上に、幾つもの紅い針を突き刺していった。

ナデッタの民が越えていった岩地に、ひそかに話し合うトールとサガの姿があった。

「本気で奴に斬られる心配をしなければならなくなった。間違った地図を与えたのは俺だからな。情報を教えなかっただけじゃなく、証拠になるような偽りを与えちまった」

サガはそう言って、獣油ランプの灯りの向こうにいるトールを、じろりと睨んだ。

「あなたであれば、それくらいのことは、いくらでもごまかせるでしょう」

トールは無表情に応じた。サガが肩をすくめ、にやっと凶暴な笑みを浮かべた。

「ふん……お前の主人は新たな兵を動かす気らしいな。その前に一つ策を仕掛けるぞ」

それは以前から機を見て仕掛ける気でいた策だった。サガが考え、それを実行するための最適な場所をレオニスが定めたものだ。あとはサガとトールで準備を整えれば良かった。

「まさか民が無傷なまま仕掛けるとは思いませんでした……大丈夫でしょうか」

「心配ない。ナデッタの民も、さんざんな目に遭って怒りが増してる頃だ。それに民が統率されている限り、いくら兵を放っても無駄だ。民に亀裂を入れなければ勝機はない」
サガは笑って言った。陽気な仮面を捨てた、残忍で陰惨な笑いだった。
「さあ一緒に楽しもうぜ、影法師の坊や。ジーク自身に、あの民を殺させてやろう」

岩山の難所を乗り越えたナデッタの民は、荒涼とした土地を、東へ進んでいった。
草一つ無い丘で宿営しているとき、ノヴィアは、これまでとは明らかに違う者たちが遠くから観察しているのに気づいた。初めて見る衣裳であり、みな例外なく武装している。
「近辺の蛮族だ。こちらの存在に気づいたのだろう――」
ノヴィアが報告すると、即座にジークは断定した。
蛮族がうろついていることはすぐにナデッタの民に知れ渡り、不安を呼んだ。
領主ランドが倒れ、傷病者のための馬車に乗っていることも不安を煽った。
一方で、エノルは岩山を越えたことで明るさと陽気さを取り戻したらしく、
「聖法庁の民に狙われることを思えば、蛮族の方がむしろ理解し合えるんじゃないかな」
などと言って、臣下や民の代表者たちを苦笑させた。
「エノル様だったら、蛮族どもさえ食事に招きかねませんな」

「奴らは人の肉を食うといいますぞ。エノル様が代表で彼らに振る舞って、やりますか」
「じゃあ俺と一緒に何人か見繕って行ってみよう。調味料を身体にかけてさ」
あまりたちの良くない冗談だったが、みな大声で笑った。
「エノルの奴、また不謹慎なことを」
カヤが苦虫を噛み潰したような顔になる。チリング司祭がぐいっと酒をあおって、
「まったくこのじゃじゃ馬娘は固いのう。ほどよい冗談は、疲れを癒す最良の薬じゃて」
「人身御供の話題が、ほどよい冗談なものか」
「人を捧げれば、食い扶持も減って、蛮族の脅威も取り除けるぞい。一石二鳥じゃ」
「司祭様を蛮族に捧げたところで鼻が曲がると言われて突き返されるのがオチですな」
そう言うと、カヤはぷいっと顔を背けて行ってしまった。
「なんじゃとぉ。このガチガチ娘ときたら、蛮族でさえ歯が立たぬだろうて」
チリング司祭がわめき、ふうふう息を切らせて脂汗を流しながら、ジークを振り返る。
「それにしても、よくみな牧羊犬に追い立てられながらここまで無事に来られたわい」
ジークも無言でうなずいた。荒涼とした土地にも民は決して絶望せずによく歩いた。
「じゃがお前さんばかりでなく、そこら中から追い立てられれば羊も狼になろう。どこも関門を閉ざすならば、いっそ門をぶち破ってやれば良いと若い連中が話しとったわ」

そんなことをすればナデッタの民全体が関門破りの犯罪者と化す。そこら中の勢力にナデッタの民を滅ぼす口実を与えるだろう。だが現実に門前払いを食わされ、何度も襲われ、難所を歩かされれば、犯罪者になろうがなるまいが同じだと思ってしまうのも当然だ。

ジークが、伏せっている領主ランドに会いに行くと、自然と話題はそのことになった。

「以前、お主が話しておった、民の怒りを抑える策……そろそろ使うときが来たか」

領主ランドは、胸の痛みをこらえながら掠れた声で言った。ジークもうなずいた。このまま民の怒りを放置すれば、いずれ必ず何らかの形で爆発するのは目に見えていた。

「そなたは大丈夫か？　恐るべき戦いの後でも馬車にも乗らずに歩いているとか……」

「心配ない。堕気を宥めてくれる者がいるお陰で……体の痛みも消えた」

「……すまない。……そなたと、そなたの従士には、深く感謝している」

領主ランドは目を伏せ、深い溜息をつきながら、言った。

「今度は、我ら自身が、痛みを被る番だ……。エノルもカヤも……辛いことになるな」

「民の内情を鎮め、外からの脅威を排除する。カヤには俺から話す」

「内憂外患を一度に解決するか……。内憂は良いとして、外患の方……蛮族は大丈夫なのか？　聞くところによれば長年、聖法庁に叛逆し続けているというが……」

「セグレブの民という。もとは聖法庁の民だったが、聖印を捨てて蛮族となった」
「なんと……聖印を自ら捨てたのか……？　なぜだ……？」
「分からない。何度か聖法庁の兵を撃退しているが、関門を越えて来ようとはしない」
「荒野を領土にする蛮族か……。そんな者たちを相手に、勝算はあるのか……？」
「十分にある——ただ、一つ確かめてから、策を実行する」
「確かめる……？」
「民の中で、妙な気配がする。俺たちの様子を、探っているような気配だ」
「何者かが紛れ込んだか……？」
「それを確かめるため、エノルに、これまでの負傷者のリストを作らせている」
「負傷者……？」
「負傷者を装って敵の陣営に入り込むのは、戦場では常套手段の一つだ」
領主ランドは目を細めて、まるで油断も隙もないこの男を見つめた。
「頼む……。民を……我が子らを、守ってくれ……」
ジークはうなずき、それから相手をあまり強く刺激せぬよう、静かに訊いた。
「諜報院の者と、連絡を取っていたそうだな——」
領主ランドはジークから目をそらし、やがて、わなわなと体を震わせた。

「民のためだ……そう思っておった。愚かだった……。せめて償いを……民を導き……」
途端に激しく咳き込む領主ランドの肩に手を当てて落ち着かせ、ジークは言った。
「俺が……民を守る。今は休め」
いつしか領主ランドの目に涙が溢れ、かさついた頬を流れ落ちていった。

荒地を歩み、ようやく関門を開いてくれる場所に到達した。土地の領主は門を開くことに反対したが、街の貴族たちがナデッタの民に金を支払わせることを提案した。
門が開かれたとき、ナデッタの民のなけなしの金は、大きく持っていかれた。
街道を進み、久々に緑豊かな土地を見ることが出来た。そして、長旅で疲れ、ぼろぼろの馬車を引くナデッタの民を、街の市民が同情と蔑みの目で迎えた。
ナデッタの民は、街の市民の視線を無視し、黙々と疲労の回復に努めた。
トールは、そのナデッタの民の若者たちと幕舎を組み立てながら、
「ここの街の貴族どもが、我々に、ある話を持ちかけてきているのを知っているか？」
そんなことを何気なく訊いていた。若者たちは怪訝そうに、かぶりを振った。
「貴族どもの中には、ここの領主を良く思っていない連中がいるらしい」
だからどうした。自分たちは、ただの厄介者だ。何の関係もない。みなそう口にしたが、

「貴族どもは、自分たちと一緒に領主を倒してくれる相手を、探しているそうだ」
トールが言うや、みな顔色が変わった。トールはさらに話した。というのもそもそも街の門を開くことに反対していたが、貴族どもがそれをしてくれた。領主はナデッタの民が自分たちの味方になってくれるかもしれないと思ったからだ。そして貴族どもは、一緒に戦ってくれればナデッタの民をここに住まわせても良いと言っている……
みな呆然と辺りを眺めた。聖印の加護による豊饒の地を。自分たちが失ったものを。
トールはあちこちでその噂話をし、黙っているようにと注意した。領主ランドやエノルに聞かれたら、話を潰されてしまうと。それと同じことをみなが話し、噂が広がった。
やがて信じがたいことが起こった。街の貴族たちがナデッタの民の前に現れ、一部の民の代表者たちと話し合ったのだ。貴族たちはナデッタの民に武器を与えることと、そして戦いの後で豊かな土地を与えることを約束した。噂が現実となり、みな興奮して、領主ランドやエノルにはなんの相談もしないまま、ひそかに仲間を集めた。
うますぎる話だと疑う者もいたが、これまで多くの土地で傷つけられてきた怒りのはけ口として、その話を信じるようになった。再び定住出来るという希望が彼らを動かした。
旅でつちかった結束力という土台に、謀略という名の果実が実る様子を、トールは何の感情もなく眺めた。ナデッタの民への同情も蔑みも無く、透明な存在として彼らを眺め、

そして結論した。ここには、悪人もいなければ、愚者もいない。ただ、人がいるだけだ。故郷を失った人が、ここにひしめいているだけだ。乾いた木ぎれが集まり、そこに火種が生じて火災が起こったとき、誰が木ぎれの罪を責めるだろう。
火種は自分だ。トールは何の感情も持たぬまま思った。この火種を消せるか、ジーク・ヴァールハイト。いつしかトールは、ジークの様子をひんぱんに窺うようになっていた。ジークは火種に気づいているようでもあり、気づいていないようでもあった。気づいて欲しいのか、気づいて欲しくないのか、トールには自分でも分からなかった。
やがて、大量の武器が少しずつ、確実にナデッタの民の間に行き渡っていった。

エノルは臣下たちとともに、領主ランドが不在のまま土地の領主と必死に交渉していた。あの手この手で彼らが横領しようとする援助物資を吐き出させ、出来る限り安価に食料を買い、一日でも長く街にとどまって民が疲労を回復出来るよう交渉する毎日だった。
そのエノルが幕舎に戻ってくると、ふとジークとカヤが宿営地から離れたところで話しているのが見えた。カヤはうつむいていた。
またジークに叱られているのだろうか。そう思ってエノルは苦笑した。そのくせカヤのジークに対する信頼は日に日に増してゆき、ときどきエノルは嫉妬を覚えるほどだ。

「カヤ、どうしたの。またお尻を叩かれてるのかい」
エノルが陽気に声をかけると、カヤがはっと振り返った。その顔が蒼白だった。
「……どうしたの？」
エノルは呆気に取られて訊いた。カヤは目をそらし、
「何でもない。……危機に対する警戒が足らぬと、ジーク殿に指摘されただけだ」
素っ気なく言って、さっと背を向けて行ってしまった。
「せめて街の中くらい、休ませても良いんじゃないですか？」
「無警戒な点について、幾つか指摘しただけだ」
「……あんまり責めないでやって下さい。あいつもあいつなりに一生懸命なんです」
ジークは応えず、エノルとともに幕舎に戻りながら別のことを訊いた。
「負傷者のリストは出来たか？」
エノルは、幕舎の中に入って何枚かの紙片をジークに差し出した。
「こちらが馬車の担当者たちに作らせた傷病者のリストです。そしてこちらが民の代表者たちに作らせた……怪我や病気で馬車に乗っていたと言っている者のリストです」
ジークはさっとリストに目を通し、やがて静かにエノルと顔を見合わせた。
「実際の傷病者より、なぜか一人多いでしょう。……どうします？」

「何もするな。見当はついている」
「見当……？」
「ここ数日、俺の周囲をうろうろ探っている奴がいる」
「危険じゃないんですか？」
そこで、ジークは奇妙な顔をした。そしてエノルには分からないことを言った。
「いつでも試せと言ってあるからな」
エノルは首を傾げた。そしてふと今のジークの表情が、エノルには奇妙と見えただけで実際は面白そうに笑っているのではないかということに思いあたった。
それから何点か打ち合わせをしてのち、エノルは民の様子を見て回った。そこへ、
「エノル、ちょっと良いか」
ふいにカヤが声をかけてきた。ひどく真剣な顔だ。エノルは何かたわいのないことを言おうとして思わず口をつぐんだ。カヤはそのエノルの手を取ると無言で引いて歩いた。
「ちょ、ちょっと……どうしたの、カヤ」
カヤは問答無用でエノルを引きずるようにして歩いてゆく。その様子に、食事の用意をしていた民が笑った。エノルも苦笑した。カヤはずっと黙っている。やがてエノルも口をつぐみ、黙々と歩いた。気づけばカヤに手を引っ張られながら、街の外れまで来ていた。

ふいにカヤが立ち止まり、手を握ったまま、くるりと振り向いた。
その鳶色の目に間近で見つめられ、エノルは自分でも意外なくらい、どきっとなった。
珍しく真っ直ぐおろした子鹿色の髪が、思っていたよりもずっと細い肩や首筋にかかっている。いつもの軽武装ではなく、馬具も外した平服だった。男装に等しい格好だが、それでもなぜか、いつもより遥かに女性らしく見えた。握ったままの手が、ひどく温かい。
「カヤ――」
エノルが呼んだ。なぜか声が掠れた。ごくっと唾を飲み込み、もう一度呼び直そうとしたとき、カヤが無言で顔を寄せてきた。

あ――と、ノヴィアが素っ頓狂な声を上げて、アリスハートをびっくりさせた。
「どしたのぉ、ノヴィアぁ」
「な……なんでもないの」
慌てて取り繕い、ノヴィアは目をそらした。心臓がどきどき騒ぎ、顔が猛然と赤くなるのが自分でも分かった。そこへジークが近寄ってきて、
「力を使いすぎたか」
ノヴィアの目を覗き込むように顔を近づけるのへ、

「い、いえっ……！　大丈夫ですっ！」
飛び上がらんばかりに退き、束ねた髪がほどけるほどの勢いでかぶりを振った。
「な、なんでもありません。見てません。知りません。ま、ま、真面目に見ますっ」
首を傾げるアリスハートとジークから顔を背け、再び透視の力を発揮させて辺りを丹念に見るふりをした。実際は自分が何を見ているのかも分からないほど、どきどきしていた。
たった今見たエノルとカヤの姿が頭から離れてくれなかった。自然と、そちらへ眼差しがいってしまう。そろそろと息を詰めるようにして、また見てしまった。
エノルとカヤは最初に見たときと同じ姿勢で抱きしめ合っている。そして互いに顔を寄せ合っている――というよりもくっつけ合っている。ノヴィアは息を止めて二人を見つめ、二人の顔がゆっくりと離れると、ようやく自分も大きく息をついていた。
カヤとエノルは互いに無言で見つめ合っている。互いに互いの唇から、言葉を奪いきってしまったように。かと思うと、カヤがそっとエノルから離れ、何かを短く言った。
返答を待たずに身を翻し、そのまま走り出すカヤを、エノルは呆然と見送っている。
ノヴィアも呆然となりながら、その一部始終を見守ってしまった。
「ノヴィア、まだか」
ジークの声が飛んだ。ノヴィアはびくっとなって、咄嗟に大声で言い返した。

「ま、まだです。私にはまだ早いですっ」
「……そうか。ゆっくりやれ」
「武器を探せ。既に民の間に、かなりの数の武器が入り込んでいる可能性がある」
「は、はいっ」
「か、可能性ですか」
おずおずと振り向くと、ジークは、はっきりとうなずいてみせた。その形の良い唇を見て、ノヴィアは真っ赤になって顔を背けた。また辺りを見るふりをしながら、そっと自分の唇に手を当て、この口があんな風に塞がれるところを想像した。
鼓動の音がひときわ騒然となり、耳鳴りのごとく響いてノヴィアをふらつかせた。

夜半――街の貴族たちとナデッタの民の代表者たちが、ひそかに話し合いの場を持ち、着々と準備が整っていくのを確認しながら、トールはじりじりとした焦りを感じていた。
ジーク・ヴァールハイトは本当に何も気づいていないのか？　このままナデッタの民がその場の勢いに任せて貴族どもと一緒に、この土地の領主を攻撃したらどうなる？
その焦りを、トールは自分がその瞬間を待ち望んでいるからだと無理にも納得させた。
だが民の代表者たちがある人物をつれて来るや、トールは愕然となった。

まさかこうも早く実現するとは！　ジークは何をやっている？　なぜ気づかない？
民の代表者たちは、その人物が参加してくれて俄然やる気になった。領主ランドたちの言う通りにしていたら聖法庁に騙されるばかりだ。聖法庁は自分たちが新地に辿り着けるとは思っていない。その証拠にどれだけ危険な目に遭ったか考えてもみろ。
みな口々に言い合った。そしてその人物に、賛同を求めた。
「みなの思いはよく分かった。こうなれば私たちも、みなのために働こう。ナデッタの騎士団の総力を挙げて、この地の心厚き貴族の方々と協力し、領主を倒してみせる」
民の代表者と貴族たちの前で、カヤ・アピアノスは、はっきりとそう告げたのだった。

ジークは幕舎の間を歩きながら、民に満ちる不穏な空気を鋭く感じ取っていた。
ふと、その足が止まった。すぐ先の幕舎の前で、おぼろな人影が立っているのだ。
近づくと、人影はすうっと消えた。ジークは人影が立っていた幕舎を見つめ、そっと、かつての従士の名を口にしていた。そしてそのまま領主ランドのいる幕舎に行き、
「――今夜、やる」
鋭く、告げた。領主ランドは無言でうなずいた。

その夜――ナデッタの民の宿営地に、わっと明るい歓声が上がった。
エノルが援助物資を手に入れて戻ってきたのである。さらには街の貴族が食料や必需品を無償で与えてくれていた。その山のような荷物に紛れて、赤い印のついた箱が幾つも運ばれ、あちこちの幕舎に集められた。
その幕舎の一つで、若者たちが緊張しながら箱を開き、輝くものを取り出していった。
ジークが見た、あの、おぼろな人影が立っていた幕舎であった。そこで今、新品の剣、歩兵の鎧、槍の穂先などがずらりと並び、若者たちが緊張と歓喜を押し殺していた。
一斉に蜂起出来るほどの武装が手に入るまで、もう少しだった。蜂起が成功すれば、どれだけの耕地を任されるかも貴族と話し合った。中にはナデッタにいたときよりも良い暮らしが出来ると言って喜ぶ者もいた。俺たちはここまで頑張った。何だってやれる。そうさ。やってやる。自分たちの力で失ったものを取り戻すんだ。興奮しながら囁き合った。
――ずどん！　そこへ突然、地面を揺るがすような音が響き渡り、若者たちが慌てて武器に毛布をかぶせて隠した。そして幕舎の外に出るなり、揃ってぽかんとなった。
ジークがシャベルを地面に突き立てていた。その柄を回し、引き抜いた。新たな柄が現れ、抜き放った。妖しくも鋭い銀剣が現れ、何ごとかと集まってきた民がぞっとなった。
「ジーク!?」

エノルが驚いて駆け寄ろうとすると、ノヴィアがアリスハートをつれて立ち塞がった。
「ジーク様に任せて下さい。ランド様もご承知です」
「父さんも……？」
ノヴィアがうなずいたとき、あっと驚愕の声が起こった。
ジークがいきなり剣を振るって、幕舎のロープを次々に切ったのだ。
幕舎が一枚の布となって倒れ、その端をつかむと、ジークは無言でそれを引っぺがした。
内側から、何かに毛布をかぶせたものが現れた。その毛布をジークがどけた。剣の束があった。鎧があった。槍があった。興奮していた若者たちが青ざめ、大人しくなった。
「なんてことを……。俺が知らない間に……なんで……みんな……」
エノルが呆然となった。民の他の面々も、突然の事態に言葉を失っている。
ジークは新品の剣の束の前に立った。右手に銀剣を振りかざし、凄まじい切れ味を誇るその刃が、一挙に剣の束を残らず斬り砕いた。民が驚きと恐怖の声を上げ、
「運び込まれたおもちゃを全てここに集めろ。逆らえば、首を斬る」
ジークの言葉に、若者たちが、おどおどと顔を見合わせる。すると――
「言う通りにする必要はない！」
カヤが馬に乗って現れ、叫んだ。完全に武装し、聖印を刻まれた槍を掲げている。

「カヤ……⁉」
エノルが仰天して呼んだ。だがカヤはエノルを振り向きもせず、戦いの眼差しでひたとジークを睨みすえている。更にそこへ馬蹄の音が集まってきた。なんとナデッタの騎士団が一人残らず武装し、ジークを取り囲んだのだ。
「や、やめろ……。やめろっ！　お前たち、いったい何をやっているんだ！」
エノルが叫んだ。だがカヤも騎士団も——ジークも、エノルを見ようともしない。
「隠し続けるつもりはなかった。いずれ機を見てみなに話すつもりであった」
カヤが高く澄んだ声を放った。ナデッタの民の全員が、固唾を呑んでそれを聞いた。
「我らはこの地の貴族と契約した。彼らとともに領主を打倒すれば、ここの土地に住まわせてもらえるというのだ。その代わりに、我らがその戦いの先頭に立つ」
「……利用されているだけだ。自分たちの土地を、よそ者に分け与えるはずがない」
ジークが一言一句、みなに言い聞かせるようにして言う。カヤも同じように叫んだ。
「我らは、彼らを信じた！　彼らも我らを信じ、無償で武器を与えてくれた！」
「権力争いのために用意された武器だ。お前たちのためではない」
「権力争いだろうが何だろうが、我らが武器を持てる絶好の機会だ。貴族たちが裏切るなら、彼らも皆殺しにすればいい。この街の者たちが反対するなら、彼らも殺す」

何のためらいもなく言い切るカヤに、エノルは絶句した。民が――先ほどまで武器を手に入れて興奮していた若者たちでさえ、その常軌を逸した言葉に凍りついた。
「この土地を奪い尽くす気か」
「今度は我らが略奪する番だ。女子供も容赦せぬ。殺し、奪い、自分たちのものにする」
おお、おお、と騎士団が賛同の声を上げた。若者たちが震え上がり、この件を進めていた民の代表者たちでさえ、ぞっとなった。ジークとカヤの言葉の応酬を聞いて、自分たちがどれほど無謀なことに手を出そうとしたか、はっきりと分かったのだ。
誰か止めてくれ。これを――この騎士団を止めてくれ。みながそう思った。
「ジーク殿。我らとともに戦って下され。ジーク殿さえおれば、どんな敵も――」
「断る」
ジークが鋭く返す。カヤの顔から表情が消えた。その唇が、殺気のこもった声を放った。
「……聖王の黒き騎士に対し、さすがに馬上からでは失礼ですな」
さっと馬を降り、地に立った。そのまま無言で、聖印を刻まれた聖槍を構える。
ナデッタの民が呻いた。彼らを守ってくれるはずの者たちが、刃を向け合ったのだ。
「やめろっ！　やめるんだ、カヤ！」
エノルの必死の叫びにさえ全く耳を貸さず、カヤは総身に殺気を溢れさせ、

「――いやぁーっ！」

にわかに凄まじい気合い声を迸らせるや、槍の穂先が真っ直ぐ迅った。

まさしく電光の速度である。ジークはなすすべもなく貫かれたかに見えた――そのとき、かっと火花が散った。剣で槍を払いざま、ジークがすかさず矢のように前方へ跳んだのだ。

カヤが退きながら槍をたぐり、なぎ払った。懐に入られれば槍になすすべはない。

立て続けに火花が閃き、聖印を刻まれた武器同士が苛烈な音を立ててぶつかり合った。

ジークの容赦ない斬撃を、かろうじて槍の柄で受け止めつつ、カヤはどんどん後方へ追い込まれていった。防戦一方になるカヤへ、ジークがひときわ大きく剣を振るった。咄嗟にそれを槍で受け止めたカヤの体が、耳をつんざくような音とともに真後ろにすっとんだ。

どっと背から倒れるカヤを、ジークが素早く追い詰めた。剣の切っ先を下に向け、倒れたカヤの胸を貫こうとするジークに、エノルが絶叫した。

「やめろ！　やめろ！　やめてくれっ！」

ジークの手がぴたりと止まった。カヤは、かっと目を見開いてジークを見上げている。

「全ての武器を集めて破壊しろ。逆らえば斬る」

ジークが剣を掲げたまま言うや、

「我らは、決して武器を捨てん！」

カヤが猛然と吠えた。その無謀さに、エノルも民も愕然となった。そんなに殺し合いがしたいのか。そういう怒りが起こった。武器を集めろ。大勢が叫んだ。そんなものは捨ててしまえ。みながそれに従った。――騎士団を除いて。
「ジークやめて！　お願いだからやめて下さい！　カヤを許して、カヤを……！」
エノルが、わめきにわめいた。ジークは剣を下ろし、代わりに鋭く言い放った。
「殺しはしない。その代わり、民のもとから出て行け」
カヤは歯を食いしばって立ち上がると、槍を手に、自分の馬にまたがった。
「臆病者ども！　これ以上、貴様らとともにいるなど、こちらこそ耐え難いわ！」
大声で罵るカヤを、エノルは、なすすべもなく見つめている。出て行け、と民が叫んだ。二度と戻ってくるな。その叫び通り、カヤは馬を進め、騎士団がそれに従った。
「カヤ……待てっ！　行くなっ！　カヤっ！」
エノルが慌てて、カヤの前で両手を広げた。ふいに、カヤの顔に静かな微笑が浮かんだ。
「尻を叩かれたよ」
エノルが呆然となるや、にわかに馬を走らせた。エノルに止めるすべなどない。たちまちカヤを先頭に騎士団が疾駆し去り、夕闇の向こうに消えていった。
「な……なぜだ、ジーク！　何も追放する必要なんかないはずだ！」

エノルが怒鳴りながらジークに歩み寄り——いきなり後ろから肩をつかまれた。
振り返るとそこに闘犬のように顔をしかめたチリング司祭がいた。
「馬鹿者、あのくそ優秀な牧羊犬に感謝せんか。ああでもせねば騎士団の方が民に殺されとったかもしれんぞ。しっかりせい、みなが見とるぞ。貴様は次期領主じゃろうが」
チリング司祭の緋色の法衣を、エノルは思わずつかんで揺すった。
「父さんが倒れて……カヤもいなくなったら……俺は、どうすれば……」
「雨の中で、さんざんわしらに頑張れと鞭打ったじゃろう。今度はお前が頑張らんか」
チリング司祭はそう言って、分厚い手でくしゃくしゃエノルの山吹色の髪をかき回した。
エノルは、じっと歯を食いしばってこの突然の出来事に耐えた。かつて故郷を失ったときのように。それと同じくらいの痛みに耐えた。
そのエノルを、ジークは静かに見つめている。ジークのそばに、ノヴィアがそっと近寄った。そしてノヴィアもまた無言で、ジークと民を見守り続けた。
その夜——全ての武器が集められ、破棄された。それから二日後、街の貴族どもが苦虫を噛み潰したような顔で見送る中、ナデッタの民は出発した。

第五章　新地への橋

1

「なんて男だ。騎士団を犠牲にしやがった。トカゲの尻尾のように切り捨てやがった」
サガが吐き捨てるように言った。ナデッタの民の宿営地から離れた林の中である。
「事前に民の異変を察していたのでしょう。迅速で確実な対応でした」
トールは無感情に返している。心の底ではジークに賛嘆の念さえ抱いていた。ジークは、あのような事態が起こりうることを知り尽くしていたのだ。だがサガは憎悪をこめて、
「何でも平気で犠牲にする男だ。奴が自分の従士をどんな風に殺したか、よく分かった。お陰でもう小細工はきかん。確実な武力であの民を襲うしかない。民を足止めし、追いつめる。ただし、やるのは昼間だ。夜戦ではジークの方が遥かに慣れている」
トールはうなずいた。夜の森でとったジークの策は、恐ろしいほどに効果的だった。
「ですが、昼間であれば民は移動し続けます。どうやって追いつめるのですか」

「お前の主人が教えてくれた最適の地形がある。しかもそこはまだ蛮族の土地だ」
サガがぎらぎらとした光を目に溜めて言った。
「そこが最後の決戦の場所だ。全ての策と力を結集させ、ナデッタの民を皆殺しにする」

民から離脱した騎士団の行方は、杳として知れなかった。
旅を続けるナデッタの民には──エノルには、その行方を知るすべさえない。
「あなたを恨まずにいるだけで、精一杯なんです」
エノルは硬い声でジークに言い放ち、必要以上の会話を避けるようになった。
ジークは何も言わない。ノヴィアは悲しい顔でエノルとジークを見守るばかりだった。
エノルが父に騎士団の離脱を報告したのは、貴族の謀略を退けて出発した翌日である。
領主ランドは、伏せったまま我が子を見つめ、
「あの手紙は、カヤからのものだな？」
と訊いた。エノルは一瞬、意味が分からず眉を寄せたが、すぐに思い出した。ある街で領主たちとの交渉で使った、聖王の紋章つきの封筒の、中身のことだ。
「……交渉が成功するように、おまじないのつもりで入れておいたんだ」
エノルがうつむいて言うと、領主ランドは目に笑みを溜めた。喜ぶような苦笑するよう

な、息子の日頃の生活を唐突に知った父親が浮かべる慈愛のこもった微笑だった。

「今日着いた。聖都は大きい。沢山人がいる。お前にも見せてやりたい。女騎士の宿舎に入った。沢山女がいるので驚いた。そのうち色々なことを書いて送ってやる。読めよ」

領主ランドが手紙の一文を諳んじると、エノルも思わず苦笑を浮かべた。

「実に、簡潔な文面だな」

領主ランドが言う。エノルがくしゃっと自分の髪をかいた。二人とも、笑いを零した。

「真っ直ぐな娘だ。お前も、あまりひねくれていないで、きちんと受け止めてやれ」

「でも……行ってしまった。俺には止められなかった……」

またうつむくエノルの腕に、ふと領主ランドが手を当て、

「あの娘が真っ直ぐ出て行ったのなら、真っ直ぐ帰って来られる場所を作ってやれ」

そう言って、もう一方の手を差し伸べると、何かをエノルの手に渡した。

「受け取れ……。民のために。わしのために。カヤのために……」

エノルは、渡されたものを、じっと見つめた。やがてゆっくりとうなずき、

「父さんのようには、まだなれないけど……」

そう言って、領主の紋章を刻まれた首飾りを、力強く握りしめた。

「ありがたく受け取らせてもらうよ。自分のためにも」

体調が悪化する元領主ランドに代わって、エノルがナデッタの民の領主となった。簡略にそのことが告げられ、民の前でチリング司祭が、エノルの身に領主のしるしを授けた。
「見ての通り、領主になりました」
いつものようにエノルが陽気な声を上げると、取り巻く民に笑い声が起こった。
「ここからは俺が先頭に立つ。必ずみなを新天地につれて行くことを約束する。後に残してきた負傷者を、一日も早く迎えられるように。みなで必ず辿り着こう」
エノルの全く勿体ぶった様子のない言葉を、みなが静かに聞き入れている。
「もうこれ以上、一人も離れて行かせたくない。騎士団が離れていってしまったことはものすごく悲しい。だけど彼らが出て行ってしまったのは、俺たちが剣を求めたからだ。俺たちが戦いを求めたから、彼らは戦おうとした。彼らは俺たちのために出て行った」
途端に、蜂起に加担した若者たちや、民の代表者たちが、気まずげに顔を伏せる。
エノルは彼らを見渡した。ふとノヴィアの方を向くと、にこりと笑ってみせた。
ノヴィアが驚いていると、エノルはそのまま、ゆっくりとジークに視線をあてた。
そして、同じように笑いかけた。憎しみや恨みを乗り越えた、朗らかな笑顔だった。
「ああ、エノルが笑ってるねぇ……」

アリスハートが嬉しそうに呟く。ノヴィアも胸が熱くなった。エノルは必死にジークを許そうとしていた。むろんそう簡単に全てを吹っ切れるわけがない。だがそれでもエノルは自分の意志で、ジークのしたことを受け入れようとしているのだ。
ふとジークが何かを口にした。どうやら人の名らしい。そして、ぽつりと言った。
「……同じだ」
「エノルさんが……？　どなたとですか……？」
ノヴィアが驚く。ジークは目を細めて演説を続けるエノルを見つめ、
「聖王直属となって、初めて得た従士と……同じことを言っている……」
それはすなわちジークが斬った従士ではないか。ノヴィアは大きく目を見開いた。
だがジークに殺伐とした気配はない。むしろエノルに対する暖かな思いさえ感じられた。
ふいにノヴィアは悟った。ジークは決して、その従士を憎んで斬ったのではない。それどころか今も、手にかけた従士のことを信じ続けているのではないか。そう察した途端、ジークが従士を斬ったという怖さがノヴィアの心から不思議なくらい綺麗に消えていた。
ノヴィアは目を細めてジークを見上げた。いったいどれだけの悲しみをこの人はたった一人で受け入れてきたのだろう。大事なものを失いながら、どうしてこうも毅然として立っていられるのだろう。そう思うノヴィアの耳に、エノルの陽気な声が朗々と届いてきた。

「俺たちはただ歩いてゆく！　剣は必要ない。俺たちを守ってくれる人たちを信じ、俺たちのために戦ってくれる人たちに応えるためにも、俺たちは剣を捨て、ただ歩こう！」

　エノルの声に応じて、民の誰かが無言で立ち上がった。続いて、みなが次々に立ち上がり、黙ってエノルへの賛同を示してゆく。

「後に残してきた人たちを、新天地で迎えよう。離れていってしまった人たちが帰ってこられるように。必ず彼らと再会できると信じて、俺たちはただ歩こう！」

　歓声が上がった。みなが地に立って声を上げていた。迫害への怒りも、蜂起への欲求も、長い旅の不安も疲れも、その歓声によって全てが激しく昇華されてゆくようだった。

　ただ歩くということが、これほど偉大な行為になる瞬間を、ノヴィアは初めて見た。

　思わず自分も立ち上がって宝杖を力強く握りしめていた。自分は今、人を見たと思った。

　これまでの旅よりも遥かに多くの人と接し、その生活を見てきた。ともに歩き、ともに戦い、ともに苦しんだ。そしてそのとき、強く理解したことがあった。

　母は、これを守ろうとしていた。みなが剣を持たず、ただ歩いてゆけるというそのことに母は命を費やした。そのために母も――そしてジークも戦っていた。自分もそうありたい。このために戦いたい。ノヴィアの心身をその思いが貫くようだった。

　ジークもまた立ち上がってエノルの宣言を聞いている。誰かが歩むとき、その道行きを

どこまでも守り通そうとするように。確かな意志をもってそこに立っていた。
民の歓声に応え、エノルがさらに大きく叫んだ。
「新天地はもうすぐそこだ！　俺たちはそこへ向かって、ただ歩いてゆく！」

レオニスは報告書に目を通し、衝撃に襲われたようになって声も出なかった。
ナデッタの民を内側から切り崩す策が、見事に失敗しただけではない。騎士団を追放し、蛮族がいる土地に赴くナデッタの民の態度が信じられなかった。土地を奪う絶好の機会を捨てたばかりか、戦うすべを放棄して危険な地域に踏み込む気なのだ。
完全に無防備となって、新天地へ向かってどこまでも歩みゆく――この地を一歩として動かぬまま、あらゆる策略で獰猛に襲いかかろうとするレオニスとは全く逆の態度だった。
武器を捨てたことに不安はないのか？　なぜそうまでして困難な道を選ぶ？
「いったい……何を求めてるんだ？」
やっとレオニスの口をついて出たのは、そんな言葉だった。地図の上で紅い針に貫かれた黒い蟻をじっと見つめた。するとふいに、その大きな黒い蟻が、
（お前には分からないものさ――）
レオニスを見返して、そう言った気がした。

（より良いものを、美しいものを、真実を求めているだけだ――）

「……ろくな土地じゃないのに？　お前たちが向かってる新天地など、耕地も建物もない、荒れ地だらけの土地なんだぞ。地図を見れば……辺りの風景を見れば分かるだろう」

（お前には分からないさ――）

それを最後に、黒い蟻は沈黙した。レオニスは我に返り、慌ててかぶりを振った。

たった一人でこんなことを考えていると、どんどんおかしなことになりそうだった。

溜息をついて黒い蟻を地図から抜いた。進行に合わせて移動させ、丁寧に刺し直し、

「蟻どもめ……巣に戻ろうとするみたいに頑張って……」

その途端である。レオニスは自分が口にした言葉に、はっとなった。そう。今の今までナデッタの民の凄まじいまでの歩みに圧倒されて忘れていた。ナデッタの民には何もない――家も耕地も聖堂も城もない。代わりにあるのが「歩く」ことであり、それこそレオニスにはないものだ。だから忘れていた。ナデッタは当たり前のものを求めているだけだ。

巣に戻る――レオニスは、ようやく自分がこの民から最初に奪ったものを思い出した。

「故郷に帰ろうとして……」

紅い針を右手に持ったまま、動けなくなった。針を地図に刺し込もうとするが、目に見えない沢山の手が体を押し返すようで、円卓に近づくことさえ出来ない。

自分がナデッタの民から奪ったものに対する罪悪感に、心が押し潰されそうになった。
それでも歯を食いしばって手を地図へと伸ばすや――かっと灼熱感が生じた。
針がまるで真っ赤に灼けたようになり、思わず放り出した。紅い針が円卓に転がり、
「止めないでよ、父さん……あなただって、こうしようとしてたじゃないか」
凄惨な微笑が浮かぶや、花瓶に活けられた白水仙の花を、わしづかみにしていた。
花が握り潰され、代わりに痛みが引いてゆく。それから、ゆっくりと円卓に指を近づけ、
はらはらと花弁を手の間から零しながら、針を手に取った。
たちまち激痛が走った。針を持つ指が、実際にじりじりと焼かれる臭いさえ感じた。
それでもなお気力を振り絞って、黒い蟻の進路に正確に突き刺した。手を離した後も、
しばらく声が出ないほどの激痛に襲われた。顔にも背にも冷や汗をしたたらせながら、ジ
ークもドラクロワも、こんな痛みを感じながら戦っているのだろうかと思った。命を奪う
痛みに――己の手を血で染めることの辛苦に慣れきってしまえたらどんなに楽だろう。
だが痛みから逃れることは逆戻りでしかなかった。戦いを知らず、心を殺される恐怖さ
え知らぬまま無邪気な虚栄心を振りかざす愚かな自分に戻るだけだ。
そんな自分では決してジークやドラクロワに勝てない。この苦痛とともに、どこまでも
突き進むしかない――レオニスは大きく息をつき、ふと膝の上に散った花びらに気づいた。

「……ごめん」
申し訳なさそうに花びらを撫でた。そしてゆっくりと静かな目で、黒い蛾を見た。
「お前たちが求めているものを……見せてよ」
怒りも恐れもない、切々とした顔だった。自分とは全く逆の戦いをするナデッタの民こそ、自分を否定するものであると同時に、何かの答えをもたらすものである気がしていた。
「何を守り、何を与え、何をもたらすのか……。見せてよ……僕に」
レオニスはその青紫の目を閉じ、祈るように、その言葉を口にしていた。

「祭りを行いたいとみなが言っているのですが……」
民の代表者たちが、ちょっと遠慮するように言い出したとき、エノルは素直に驚いた。
ナデッタの地で夏と秋の初めに行われていた、耕地の恵みを祈る、穀雨の祭礼である。
エノルは思わずにっこり笑った。その笑顔に、民の代表者たちが窺うような表情になる。
それがエノルを一風変わった領主にしていた。良いときも悪いときも必ず、にっこり笑う。そして決まって短く断定する。良いよ、駄目、分かった、考え直しな、などである。
これが妙な迫力を生み、誰も逆らえない。といって意見を出しにくいのではなく、自由に発言出来る雰囲気があった。駄目と言われれば、また別の考えを出す。自然と議論が活

発になり、エノルはその議論の火を絶やさぬよう竈の番をしているだけだという。
「次の宿営地は、湖のそばになる予定です。火も使いやすいですし、これから行く新天地でも恵みが得られるよう、今のうちから祈っておくのも悪くないと思うんです」
エノルが言うと、ジークも黙ってうなずいた。そうして祭りが行われることが決まった。
食料にも余裕のない状態では簡素な催しにしかならない。だがそれでもみな喜び、歩みゆく足取りも軽くなった。エノルも内心で驚喜していた。みなが指折り数えて、祭りの日を確かめていたのだ。たとえ故郷を捨てても、生活の全てを失ってはいない証拠だった。
本来の祭礼から二日ずれたその日、街道そばの湖畔で祭りが準備された。久々に活気に溢れた笑い声が響く一方、儀式を司るチリング司祭は、いつにも増してぜえぜえ息を荒げ、
「大丈夫ですか、司祭様。どこか悪いんですか？」
エノルもあらためてチリング司祭の顔色の悪さに驚いた。だがチリング司祭は、
「最近、美味い酒をちっとも飲んどらんしの。安酒の二日酔いは体にこたえるわい」
などとわめいて心配するエノルや民の代表者たちを呆れさせたものだ。
「大丈夫でしょうか……。チリング司祭も、領主様のように倒れてしまうのでは……」
ノヴィアが言う。だがジークは淡々と、
「好きにさせてやれ」

そう言って、チリング司祭が大地に感謝し、天に感謝する聖句を唱えるのを見ている。
みなが唱和し、天が穀物に降り注ぐ雨をもたらしてくれることを感謝した。
「ただし、岩山を登っているときの雨を除いて」
チリング司祭は岩山で受けた豪雨と襲撃に対する言葉を付け加え、みなを爆笑させた。
朗らかで、誰もが浮き立つ気分になるような、明るい笑い声だった。するとそこへ、
「こらっ！　いったいここで何の馬鹿騒ぎをしているっ！」
いきなり怒声が飛んだ。見れば近隣の砦の騎士たちが駆けつけて来るではないか。
「蝿のようにどこにでも現れおって。くそ騒ぎの臭いに惹かれる、くそ蝿どもめ」
チリング司祭が毒づいた。エノルは騎士たちに祭礼を行っていることを告げたが、
「街の者が、貴様らの馬鹿騒ぎを不快がっておる！　即刻やめんか！」
頭ごなしに怒鳴られるばかりだった。民の間に失望が満ちた。剣で襲いかかられるのに等しい苦痛に襲われ、せっかくの笑い声が、怒りと悲しみの表情に呑み込まれていった。
ふと、ジークが騎士たちへ歩み寄った。騎士の一人がジークを睨み付け、
「なぜこの場を厳しく監督せんのだ。こんな場所で騒がれては全員にとって迷惑だ」
ジークは立ち止まり、淡々とうなずいて言った。
「確かに迷惑だ」

民のみなが沈痛に顔を伏せた。みながジークの厳しさを思い知っていた。味方の騎士団さえ追放した男である。とても民の馬鹿騒ぎを肯定してくれるとは思えなかった。

「そうだ。すみやかに騒ぎを鎮め、出来る限り早くここを出て行くことだ」

「そうしてもらおう」

——どん！　猛然とシャベルを突き立てた。騎士たちが驚き、民がびくっとなった。

「即刻、立ち去れ。貴様らが来ては迷惑だと、砦の全員に伝えろ」

ジークが、言った。騎士たちに向かってである。民のみながぽかんとなって顔を上げた。

「そのような態度でくるか。なら、我らも力ずくで追い出さねばならんな」

にわかに騎士たちが殺気立った。かと思うと、

「それが嫌ならば、我らの不快さに見合うだけの誠意を見せてもらわんとな」

ようやくそこで金での解決を持ち出してきた。エノルがすぐさま交渉しようとすると、

「足らん」

ジークが言った。エノルがぎょっとなった。これまでのジークにはありえないほどの強圧的な言葉である。だが騎士たちには意味が分からなかったらしい。

「……足らん？　何を言っている？　何が足らんのだ？」

「貴様らの兵数は？」

騎士は、嘲りと怒りを半々に混ぜつつ砦の兵力を並べ立てた。実際の兵力をそう簡単に部外者に教えるわけがない。騎士の様子からしてだいぶ誇張しているのだろう。
思わずエノルが苦笑した。騎士たちがぎろりと睨む。何がおかしいんだという顔である。
「俺たち、その十倍の兵に襲われたことがあります」
騎士たちが呆然となってナデッタの民を見た。みなが無言でエノルを肯定していた。
「き、貴様ら、た、たわごともいい加減に……」
途端にしどろもどろになる騎士に、エノルがにっこり笑って言った。
「このジーク・ヴァールハイトが全て撃退してくれました。砦に戻って確かめて下さい」
ヴァールハイトという高位の称号に、騎士たちが仰天した。かろうじて嘲笑しつつ、
「よ、よかろう。もし貴様らの言葉が偽りだったら、そのときは容赦せんぞ」
騎士たちは馬首を返し、あっという間に消え去った。民がわっと笑い声を上げた。
「ありがとうございます、ジーク」
見る間に明るさを取り戻す民を代表して、エノルが心の底から感謝した。
ジークは無言でうなずいてシャベルを引き抜き、そのまま独り、湖畔へと歩き去った。
まるで自分の姿さえも民の迷惑になるとでもいうように、黙っていなくなろうとするジークを、ノヴィアが微笑して追いかけた。

「ほんと、怖いんだか、お節介なんだか分かんない男よねぇ」
アリスハートが呆れたように呟き、ノヴィアとともにふわっと宙を舞った。
「どこまでもくそ優秀な牧羊犬じゃや。羊の群に何が必要か、よう知っとる」
「どうしたら、ああいう風になれるんでしょうね、司祭様」
「お前さんは羊飼いじゃや。牧羊犬の牙なぞ欲しがらず、羊の尻を叩く鞭を磨け。そら、さっさと退屈な儀式をやり直すぞ。歌って踊るのはまだかと羊どもがうずうずしとるわい」
エノルは笑って髪をかき、鼻息を鳴らすチリング司祭と一緒に民を集め直した。
騎士たちは二度と現れなかった。

夜になり、民は火を焚いてその周囲で踊り、歌った。楽器もなく、酒も食料も少ない。にもかかわらず、その賑わいは夜のしじまに朗らかに響いた。そのざわめきを遠く聞きながら、エノルは伏せったままの領主ランドの傍らで、何枚もの地図を整理していた。
「見てよ、父さん。俺たち、もうこんなに進んだんだ。後もう少しだよ」
これまで歩いてきた地図を束ねながら、エノルがにっこり笑って父に呼びかけた。
ランドは目を細めてうなずき、掠れ声を零した。
「カヤの身が……騎士たちの行方が、心配か？」

「……まあ、ね。無事であって欲しいと思ってるよ。なんで急にそんなことを訊くの」
「どれだけ明るく笑っておっても、お前が内心では心配していることくらい分かる」
エノルは肩をすくめた。もう一つ心配してるんだけどな、父さん、と心の中で呟いた。
そんなにやせ細って、そんなに辛そうな顔をして、俺に何が出来るか言ってよ。
「あの歌をもう一度聴けるとは思わなかった……」
ランドが、民の歌声に耳をすませながら、しわがれた呟きをもらした。
「母さんとの思い出かい」
エノルが、いたずらっぽく笑う。領主ランドは苦笑した。平民出の母は、領主ランドと、穀雨の祭礼で初めて出会ったのだ。エノルはそのことを母から聞いていた。
「お前に、言っておきたいことがある……」
ランドが言った。顔は、民の歌声が響いて来る方を向いている。そのせいでエノルは母との思い出か何かかと思ったが、違った。
「ナデッタの街が滅ぶ前……わしは諜報院の者と会った」
エノルは目を丸くした。そのことは知っていた。ジークが同じ男と会っているのを見て、聖王の紋章が記された封筒を使った策を思いついたのだ。
「その者が、わしに教えたのだ……ドラクロワが聖堂の者と通じていることを」

エノルは息をのんだ。思わず聞くのが怖くなったが、じっと黙って父の横顔を見つめた。
「わしはそのとき既に、聖堂が何やら企んでいることを察していた。わしは聖堂の者どもを一掃する絶好の機会だと思い、すぐにも奴らを糾弾しようとした」
「……なぜ、そうしなかったの？」
「諜報院の者は言った。聖堂の者たちを追い出しても代わりの者がやって来て同じように不正を行うだけだと。それよりドラクロワの企みを黙認し、言い逃れがきかぬほど事態が進展するのを待つ方が良い。そして、わし自ら聖堂の者どもを倒し、実権を握ってしまえと。わしはその通りにした。聖堂の者がわしに不正を持ちかけたときも受け入れるふりをした。奴らに協力しながら、奴らを抹殺する機会を待った」
「そんな……彼らを殺す必要なんてないじゃないか。そんなに聖堂が持ってるものが欲しかったの？　彼らの不正を糾せば良いだけなのに。殺して奪うなんて……」
「憎かった」
ぽつっとランドは言った。乾ききった声だった。エノルは激しくかぶりを振った。
「なぜさ。カヤの父さんだって聖堂の不正を抑えるだけで、決して力ずくでは……」
エノルの声が尻すぼみになって消えた。そう。カヤの父は聖騎士としてナデッタの聖堂の不正をうまく抑えていた。だが彼が死ぬと、聖堂はもはや手が付けられなくなった――

エノルは、今初めてその可能性を察し、あまりのことに呆然となった。
「まさか……カヤの父さんは……」
「聖堂の者たちが殺した」
ランドが断定した。エノルは言葉を失った。
「我が友を、病にみせかけて毒殺した。わしは友の遺体を調べ、毒を調べ、聖堂の者たちが指示した証拠もつかんだ。そしてわしは……自らの手で奴らを裁くことを誓った」
領主ランドが掠れた声でそう告げるのを、エノルは悲しい顔で見つめた。
「今思えば諜報院の者はドラクロワに通じていたに違いない。わしと聖堂の関係を見抜き、復讐の機会を与えるふりをしてドラクロワの企みを実らせ、あの怪物が……街を……」
ランドの手が弱々しく宙に差しのばされた。その手の向こうで今まさにナデッタの地が滅ぶ光景を見るような悲痛な顔だった。エノルは、その父の手にそっと触れた。
「あの怪物が現れたとき、わしは喜んだ……聖堂に攻め入る絶好の機会に歓喜した。聖堂の者どもを抹殺し、奴らの不正の原因である聖印を奪い、亡き我が友に捧げようと……」
ふつふつと元領主ランドの目に涙が浮かび、深くしわの刻まれた頰を流れ落ちていった。
「我が友も、それを喜んでくれると思った……なんという愚かな……」
わなわなと震え、やがて最後の涙が流れると、ランドは確然とした表情になった。

「お前がこのことを聖王の騎士に告げよ。わしを裁き、お前は民の模範となるのだ」
エノルは父のやせ細った手を握ったまま無言でいたが、やがて、にっこり笑った。
「馬鹿だな、父さん」
ひどく明るい声だった。ランドは、目を細めて、我が子を見やった。
ランドはうなずかなかった。ただ驚いたように我が子を見ていた。
「一人でずっと黙ってて、辛かったでしょう」
やがてその老眼に、それまでとは違うものが込み上げてきた。
「もっと早く話してくれれば良かったのに。どうせ俺が領主としてやっていけるかどうか分かるまで、話せなかったって言いたいんだろう」
笑って言うエノルに、ランドは、震えながらうなずいた。
「大切な友達を殺されて、辛かったでしょう。母さんが死んだとき一人で耐えてたみたいに。今は……こうして話してくれて、嬉しいよ」
ランドの引き結んだ唇から嗚咽が漏れた。エノルは一方の手で父の肩に触れ、
「ジークには、俺から話すよ。でもジークも父さんと同じで、きっと誰にも言わずに黙ってるんじゃないかな。父さんは……もう十分苦しんだよ」
そう囁いてランドを落ち着かせた。そして水を汲んできて胸の痛みのための薬を飲ませ

た。それから、その体から強ばりが抜けるまで肩を撫でてやり、眠るよううながした。
「最後の最後で……お前に笑われてしまったな……」
エノルはそれこそ明るく笑って言った。
「俺が父さんの首をとるにはまだまだだけどね」
ランドは、ゆっくりと目を閉じ、最後に思いついたように、
「新天地の名を……今のうちに考えておけ」
そう言って、エノルをちょっと呆れさせた。
「父さんも気が早いな。じゃあ、みなに候補を考えさせるから父さんも何か考えてよ」
エノルが言い終わるよりも早く、父は眠りに落ちたようだった。
エノルは静かに立ち上がり、幕舎を出て行こうとして、
「マイア……」
父の声に、ふと振り向いた。父は静かに寝息を立てている。エノルは微笑した。
「おやすみ、父さん」
そう声をかけて、幕舎を出て行った。それからしばらく、エノルは民とともに祭りの賑わいを楽しんだ。そして夜が更ける頃、エノルは薬を手に、父のいる幕舎に戻った。
「父さん、起きてる？　そろそろまた薬を飲まないと……」

父は、ひっそりと横たわっている。
「……父さん？」
返事はなかった。

2

ノヴィアが目を休ませている間、ジークが辺りの哨戒に出ていた。
ノヴィアは楽な格好に着替え、横になって目を閉じながら宝杖を額に当て、杖の聖性で眼差しの力が回復するのを待っている。アリスハートが付き添っていたが、
「お祭りを楽しんできて良いのよ、アリスハート。私も後から行くわ」
「いいよぉ、一緒にいるよぉ」
「少し眠るから……私の代わりに、みなさんの様子を見守っていて欲しいの」
そう言われて、アリスハートは心配しながらも、ふわりと舞って幕舎を出て行った。
ノヴィアがうとうとしていると、ふいに幕舎の入り口に気配が起こった。
はっと眠りから覚めた。目は閉じたままだ。額に当てた宝杖の聖性を感じながら、
「ジーク様……？」
かと思うと幕舎の入り口から、ぜえぜえ荒く濁った息が聞こえた。かすかな酒気が漂い、

それで誰だか分かった。チリング司祭だ。だがなぜここに――？
「もう我慢出来ぬ……」
チリング司祭の低く唸るような声が聞こえた。声に、ただならぬ響きがあった。
ノヴィアは思わず目を開き、半身を起こした。透視の力を使いすぎて疲労した目が、ぼんやりとチリング司祭の巨体を映し出す。ずいっとその体がこちらに向かって動いた。
異様な雰囲気を感じ、ノヴィアは咄嗟に宝杖を握りしめて身を引いた。
「な、何かご用ですか」
相手を凝視するが、まだ疲労のせいでぼうっと目が霞み、輪郭しか見えない。これではいざというときに幻視の力も使えない。そう思い、わけもなくノヴィアはぞっとなった。
「何かご用があって来たのではないのですか」
怒ったように言った。だがチリング司祭は応えない。ひたすら荒い息をふき零し、
「頼む……わしを助けると思って……」
などと押し殺したような声を放ってくる。ノヴィアには何がなんだか分からない。
チリング司祭が言葉にならぬくぐもった声を漏らした。かと思うと突然、布が擦れる音が聞こえた。ノヴィアは呆気に取られ、そして次の瞬間、全身が鳥肌を立てるのを覚えた。
チリング司祭がノヴィアのすぐ目の前で立ち上がり、緋色の法衣の帯を解いたのだ。

ノヴィアを強い混乱が襲った。身がすくんだまま動かず、声も出ない。目を必死にしばたたかせ、一秒でも早く眼差しの力が回復するのを祈ることしか出来なくなっていた。
「頼む……〈銀の乙女〉の少女よ……」
チリング司祭が、喘ぐように言った。そのときようやくノヴィアの視界の焦点が定まり、相手の姿をとらえた。そしてあまりのことに、高い悲鳴を上げていた。

辺りの警戒を終えて戻って来たジークを、エノルが呼び止めた。幾つか言葉を交わし、ジークはそのまま真っ直ぐ幕舎のひしめく辺りへ向かい――ふと、何かが聞こえたように足を止めた。祭りの騒ぎが湖畔から聞こえてくる一方、幕舎がある方はやけに静かである。
ジークは、ノヴィアが休んでいるはずの幕舎の前に立ち、入り口の幕を無造作に開いた。
「どうした」
ぼそりとしたジークの声に、中にいる二人がはっと振り向いた。
「ジーク様……」
ノヴィアが呆然と呼ぶ。毛布にくるまって宝杖を握りしめ、身を守るような格好だった。
ジークは、じろりと、チリング司祭に目を向けた。チリング司祭も闘犬のような獰猛な顔でジークを見た。ぜえぜえ息をきらせ、目がぎらぎらとし、顔中が脂汗で濡れていた。

「……辛いか」

ぼつっとジークが言った。上半身を剝き出しにした、チリング司祭に向かってである。

チリング司祭は、くぐもった唸り声を発した。相当の苦痛に耐えている声だった。

そのチリング司祭の全身に刻み込まれた凄まじいまでの青白い輝きに、

「ジ、ジーク様……な、なんなんですか……司祭様の、これは……」

思わず目を背けたくなりながらも、ノヴィアがおずおずと訊いた。

「ナデッタの街にあった、聖印だ」

ジークが断定した。ノヴィアが目を丸くする。チリング司祭は息を荒げ、うなずいた。

「て、天地に働きかけて実りをもたらす、天界に属する聖印じゃ。ナデッタに受け継がれた十五種の聖印のうち……じゅ、十一種まで、なんとかこうして、持ち出せた」

その言葉に、ノヴィアは気が遠くなりそうになった。十一種類もの聖印を、たった一人の身に刻み入れるなど、もはやノヴィアの想像を絶する行為だった。

「聖印の原盤を持ち出せなかったのか」

だがジークは、あくまで淡々と訊いている。チリング司祭は、ぶるっと頰を震わせ、

「と、土地に結びついた聖印の原盤を移すには、何人もの司祭が力を合わせ、その聖性を保護するのじゃ。下手に移動させれば聖印にやどる聖性の効果が歪んでしまうゆえ……わ、

わしの肉体と聖性で、聖印を、密閉したんじゃ。あの怪物に、聖堂の者たちが食われとる間にな。げ、原盤を持ち出す余裕などなかった……こうするしかなかったのじゃ」

わなわなとチリング司祭の身が震えた。緋色の法衣で隠れていたあらゆる部分――顔や首や手以外の場所全てに、びっしりと青白い光を放つ精緻な紋印が刻まれ、皮膚など全く見えない。それらの聖印が持つ聖性の凄まじさを、ノヴィアは改めて理解していた。あれでは常時、目に見えぬ炎で身体を灼かれ続けているのに等しい。

「わ、わし自身の聖性では、もう限界じゃ……。く、苦しい……頼む、そこの〈銀の乙女〉に、ひ、ひ、一つか二つでいい……し、新天地まで、こ、これを持ってもらえぬか」

チリング司祭の言葉に、ノヴィアは今度こそ本当に気が遠くなりかけた。

このようなものを身体に受け入れるなど想像も出来ない。もしそれが出来たとしても、聖印の聖性と拮抗するために自分の聖性を使うことになる。そうなれば――

「ノヴィアの万里眼や、幻視の力が使えなくなる。駄目だ」

ジークは何の同情も示さず却下した。チリング司祭は黙ったまま息を荒げて立っている。

ふいに、ぐすっと洟をすする音がした。と思うとチリング司祭が顔を歪めて泣いていた。

ひいっひいっと子供のように泣くチリング司祭を、ジークはただじっと見つめている。

ノヴィアは、いっそ聖印を受け入れようとも思ったが、それもジークは無言で封じた。

ノヴィアにも役目があるように、これがジークが言うチリング司祭の責任だった。
チリング司祭はひとしきり泣くと、おもむろに緋色の法衣をきちんと整え始めた。喉元まで広がる聖印を隠すようにボタンを留め、袖でぐっと涙と汗を拭い、大きく息をついた。
「くそったれな痛みが……少し落ち着いてきたわい。波があるでな。またぶり返すまで、しばらくもつじゃろう。……驚かせてすまなかったの、可愛い〈銀の乙女〉の少女や」
ノヴィアは返答できず、ただ小さくかぶりを振った。
チリング司祭は青ざめながらも元の顔つきに戻っていた。だが完全に苦痛が消えたわけではないことは、荒い息や、手足の震えから明らかだった。
「ランドが息を引き取った」
ジークが唐突に言った。チリング司祭もノヴィアも、大きく目を見開いた。
「……ならば、司祭のわしが行かねばならんな」
「わ、私もすぐに着替えて参ります」
「無理をするな」
「大丈夫です、ジーク様。あの……申し訳ありません、チリング司祭様」
ノヴィアは今ようやく、なぜチリング司祭が自分に近寄ってきていたかを理解していた。
ノヴィアの聖性を分けてもらいたかったのだ。聖印がもたらす苦痛から逃れるために。

「……良いんじゃ。わしのくそ根性の無さを見せてしまって、恥ずかしいわい」
ノヴィアはまたかぶりを振った。チリング司祭はその状態で、これまでの旅をずっと歩き抜いてきたのだ。しかも聖印を狙う者から隠すため、ずっと一人で耐えていたのだ。
「どうしてですか……。誰も頼んでもいないのに、どうして、お一人でそこまで……」
思わずノヴィアの口からそんな言葉が零れた。チリング司祭は、ふうっと溜息をついた。
「頼まれてから動いたのでは遅すぎる。それに……わし以外に、誰がやるんじゃ」
チリング司祭はぶつくさ文句を言うように返すと、ジークとともに幕舎を出て行った。
ぶるっとノヴィアの身体が震えた。チリング司祭の壮烈な覚悟を理解したのだ。ノヴィアは自分の頬を両手で叩いてしゃっきりさせ、二人の後を追うために着替え始めた。

「眠ったまま、母のもとへ逝ったのだと思います。苦しみはありませんでした」
エノルが静かに言った。臣下たち、ジーク、チリング司祭、ノヴィアとアリスハートが、みなじっと、前領主ランドの遺体を見つめている。
「実に良い顔で死んでおるわい。のう、聖王の騎士よ。きちんと役目を果たした顔じゃ」
チリング司祭がしみじみと言った。ジークも、はっきりとうなずいてみせる。
それで臣下たちが肩を震わせて泣き出した。主人が二人に誉められたことが嬉しいのだ。

エノルも同じだった。つとジークに歩み寄り、言った。
「父は全てを話してくれました。俺からジークに伝えるようにと」
「分かった。いずれ聞こう」
あまり気にした様子もないジークに、エノルが感謝して頭を下げた。エノルが思った通り、ジークはいたずらに罪を咎めはせず、別のことを訊いた。
「いつ、領主の死を、民に話す？」
「今日は祝日ですから……明日、伝えます。あなたに父を葬って頂きたいのですが」
ジークは静かにまたうなずいた。それからエノルと元領主ランドを二人きりにしてやり、みな幕舎を出た。祭りの火を眺める臣下たちを尻目に、ジークとチリング司祭はともに宿営地の外れまで歩いていった。ノヴィアとアリスハートも、やや離れて後に続いた。
「旅の途上で死におった割には、本当に良い顔をしとったわい」
「人は、みな旅の途上で死ぬ」
「ふん。牧羊犬らしい言いざまじゃ。お主、戦死者専門なのではなかったのか」
「戦いはまだ続いている」
「立派に戦って死んだか。それとも……まだ誰かが襲ってくるとでも言うのか、お主」
ジークは無言で両方とも肯定している。チリング司祭は唸りながら手近な岩に座った。

「お主、聞くところによれば幼い頃に戦火で故郷を失ったそうじゃが……なぜ、そこまで故郷を求める者の気持ちが分かる？」
「……昔、故郷と呼ぶべき土地が、一つだけあった」
「ほほう。聖王の騎士様の故郷ときたら、それはまたくそ豊かな場所であろうな」
「僅かな鉄が採れる以外、人しか売るものがなかった」
「人を……。そうか、戦場に売ったんじゃな。剣奴売買は最近では聞かなくなったが、お主の年齢ではまだ一般的だったじゃろう。だがなぜ、そこが故郷ではない？」
「剣奴売買を再開しようとした者たちを、俺が斬った」
ノヴィアが驚くほど、ジークはチリング司祭に、淡々とありのままを告げている。
「……なんだか変な組み合わせの二人ぃ。変人同士、気が合うのかしら」
アリスハートが、ジークとチリング司祭を茶化す。ノヴィアも同感で、ちょっと複雑な気分だった。男同士の会話に入り込めず、聞いているしかないのが妙にもどかしいのだ。
「おおかた……親しい者でも斬ったんじゃろうな。お主は、ずいぶんと多くの絶望を見とるようじゃわい。だがそのせいで、民の希望をよく理解できるんじゃろうな……」
チリング司祭は腰から水筒を取り出した。ふと立ったままのジークと目が合い、
「……わしの親父どのも、飲んだくれでな。そんな親父が嫌でしょうがなかったわい」

ゆっくりと水筒の栓を開きながら、チリング司祭は言った。
「親父は農夫でな。その頃はまだナデッタの街には五つしか聖印が無く、わしは貧しい暮らしに反発して、司祭になると言うては親父と喧嘩しとった。わしが司祭になれるとは誰も思わんかったが、とにかく学問と修行を積んでな。ついに聖都に上る許しをもらった」
そこでチリング司祭は、ざまあみろというように、にたりと笑った。
「母が聖都で生活する金を出してくれた。だがその半分は実は親父の金じゃった。あの親父が酒を減らし、その分の金をくれとった。それを知ったのは教父見習いとして故郷へ帰ったときじゃ。わざわざ聖都で買った酒を、親父どのめ、飽きたと言うて飲もうとせん。その父も母も、わしが司祭になる前に死んだ。以来、街に聖印が増えるたび、こうした」
そう言うと、水筒の中身を地面に零し始め、ノヴィアとアリスハートを驚かせた。
「親父どのの墓にこうして酒を注ぎ、母の墓にはその年採れた穀物を捧げた。わしやみなが、あの街をくそ豊かにしようと頑張ったのは、寄生虫のような聖職者どもに食わせてやるためではない。わしらの父や母に、喜んでもらいたかったからじゃ」
チリング司祭は、水筒の中身を注ぎ終えると、ゆっくり顔を上げてジークを見やった。
「……ランドは、ナデッタの聖堂を倒そうとしておったな？　わしには分かる。ランドの親友だった聖騎士が病に倒れたとき嫌な噂が立ったわい。聖堂の連中が殺したのだとな」

「おそらく噂の通りだろう」
「やはりのう……。それでランドは聖堂を潰すために、ドラクロワに協力したのか」
「利用されただけだ。ドラクロワと関係していたらランドも城も無事ではなかった」
チリング司祭はまた溜息をつき、空っぽの水筒を振って最後の一滴を地に落とした。
「父と母の墓は、あの爆発で吹っ飛んでしまったからのう。こうして適当に飲ませるしかなくなってしもうたわ。……で、ランドのことだが、恐らくエノルも臣下も民も、あの男を責めぬじゃろう。わしも、責める気が失せた。お主は……どうじゃ？」
「俺は、死者を葬るだけだ」
ジークにランドを裁く気など無いことが、チリング司祭にもノヴィアにも分かった。
「酒はもう良いのか？」
「新天地という麗しきご婦人に会いにゆくのに酔っぱらっとっては失礼じゃからな」
ジークは淡々とうなずいた。するとチリング司祭は、憤然としたように鼻を鳴らした。
「意地の悪い男じゃな。酒をやめれば我が身に刻んだ聖印を保護しやすくなるのは分かっとる。誰もお主のように我慢強くないわい。苦痛をまぎらすものがいるんじゃや。まったく……わしも親父どののように酒はやめじゃや。明日からは水筒に薬湯でも入れるわい」
「ノヴィアに頼め。たまに、俺一人では飲みきれないほど作る」

ジークはいきなりそんなことを言って、ノヴィアをきょとんとさせた。
チリング司祭は声を上げて笑った。全身の苦痛に耐えながら、必死に笑っていた。
「鼻のきく牧羊犬(シェーファー)め、感謝(かんしゃ)しとるわい。馬車に乗って楽をしとったら、とてもこの旅には耐えられんかった。お主ならわしを甘(あま)やかさんと思ったが、本当に容赦(ようしゃ)なかったのう」
ノヴィアはちょっと驚(おどろ)いた。チリング司祭は、ノヴィアに聖性を求めたように、自分を厳(きび)しく追い立ててくれる者を求めて、ジークに近寄ったのだ。
「わしは弱い人間でな。弱いなりの歩き方もあるというわけじゃ」
そう言って水筒の栓をしめると、ジークやエノルや他のみながそうしているように、チリング司祭もまた自分の役割(やくわり)を果たすために、ゆっくりと立ち上がった。

「父が死にました。綺麗(きれい)な死に顔です」
エノルは、あっさりと言った。朝になり、出発を待っていたナデッタの民(たみ)は、この突然(とつぜん)の訃報(ふほう)を嘆(なげ)き悲しんだ。自分たちが楽しんでいる間に死者が出たという気まずさに対し、
「父は、みんなの歌を聴(き)いて喜んでました。祭りを提案(ていあん)してくれた人に感謝します」
エノルはきっぱりと言って、民の気持ちをいっぺんに和(やわ)らがせた。
ノヴィアはそのエノルの態度(たいど)に、なんとも見事なものを感じた。自分の母が死んだとき

の対応とは、ずいぶんな違いである。そのことをアリスハートにこそっと洩らすと、

「歳が違うわよぉ。エノルよりもずっと若いんだから当然よぉ、ノヴィア」

アリスハートに呆れたように返された。ノヴィアもくすっと笑った。これほど大勢の人間と一緒にいるせいか、自分の背丈がはっきりする感じがした。一生懸命に背伸びをしようとしていた自分が、ほっと楽になって、無理のない状態になるのだ。

「父の遺言は、新天地の名前を決めておけということでした。何でも事前に準備しておけと、しょっちゅう叱られたのを思い出します」

エノルが肩をすくめると、民のみながちょっとだけ笑った。

「新天地の名前については、俺から一つ提案があるんだけど、良いかな」

エノルは民と臣下たちを見渡した。みながその提案を待っていた。エノルは言った。

「マイア」

民も臣下たちも驚いたようだった。みなが、その名が誰のものかを承知しているのだ。

「父が最期に呼んだんだ。マイア、と。みんなも知っての通り、母の名です。といっても母を偲んでその名をつける気はないんだ。ただ、俺たちはずっと東へ向かって歩いてきたからね……そしてマイアは、もともと朝陽を意味する古い言葉なんだ」

民も臣下たちもうなずいた。エノルはさらに続けた。

「あの森で襲われたとき、父が言った。どんなに長い夜でも必ず明けるときが来ると。俺たちは夜明けに向かって歩いてきた。それが俺たちみんなが、この旅で得たものだ。夜明けに向かって歩くということがどんなことか、俺たちはこの旅で知った」

エノルはそこで口を閉ざした。民がざわめいた。みなこれまでの歩みを思い返していた。東へ、陽が昇る方角へ向かってここまで歩んできた。マイアの地に——夜明けの大地に向かって。良いじゃないか。誰かが言った。新たな母なる大地にふさわしい名だ。

「マイアの地へ！」

誰かが叫んだ。次々に唱和が起こった。その声を聞きながら、ノヴィアも、領主ランドとエノルがともに告げたその言葉に強く共感していた。それこそが、全ての旅する者が目指す場所なのではないか。そう思いながら、傍らのジークを見上げた。

「夜明け——」

ジークもまた、エノルの言葉を呟いている。どこから来たのかと訊かれて、遠くからだと答えるしかないジークやノヴィアにとって、それは深い共感を呼ぶ言葉だった。

民の賛同の声に、エノルが微笑んだ。父がいたら苦笑したに違いない。そう思って悲しみに襲われた。まんまと民を納得させおって、領主と詐欺師は似たようなものだとは、よくも言ったわ。父の笑い声がどこからか聞こえる気がして、もう少しで泣きそうになった。

だがエノルは笑顔を保ったまま、民の唱和がひときわ高くなるのを見計らって叫んだ。
「マイアの地へ！　後もう少しだ！　マイアの地へ向かって進もう！」
民が一斉に上げる歓呼の声を浴びながら、エノルは、心の中で父と母に別れを告げた。

3

「あの民が喜び勇んで進む先に、奈落の淵を用意する」
サガが血走った目で言った。死に物狂いで策を練り、何度も地形を確かめたのだという。
「マイアの地に到達する、ちょうど寸前ですね」
トールが地図を眺めて言うと、サガの眉間に怪訝そうな皺が寄った。
「マイア？　なんだそれは？」
トールもちょっと不思議そうにサガを見つめた。当たり前だった。ナデッタの民の中にサガは一度も入ったことがない。その生活も、人々の喜びも悲しみも、何も知らないのだ。
「この土地の名前ですよ。ナデッタの民が名づけたので、私もそう呼んでるだけです」
トールは素っ気なく告げた。案の定、サガは皮肉そうに笑った。
「潜入が達者なのは良いが、あまり民に染まるなよ。殺しにくくなるぞ」
トールは、余計なお世話だと言わんばかりに、無表情に別のことを言った。

「一つだけ注意して下さい。ジーク・ヴァールハイトの従士のことです」
「またそれか。ノヴィア・エルダーシャは傷つけない。分かっちゃいるが、戦場なんだ。どうなるか分かるものか。それとも俺に、あの少女を殺す気があるとでも？」
「そう思ったことが無いとでも？」
「大したことはない。あの少女が死ねばだいぶ楽になると何百回か思いついた程度だ」
「いけません」
「……くそっ。分かってる。こうして俺があのジーク・ヴァールハイトに本気で仕掛けられるのは、お前の主人レオニス・ジェルミナルと、ドラクロワのお陰だ。その一方の厳命とくれば逆らえんよ。実際、俺の策の中で、今まであの少女を狙ったものがあったか？」
トールはゆっくりとかぶりを振りつつ、真っ直ぐサガを見つめている。
「俺の狙いはあくまであの民だ。あの少女に何かあれば、お前が守る。以上だ」
トールが、こくっとうなずく。サガはちっと舌打ちし、
「その話はもう二度とするな。これから兵数のため押しをする。一カ所に兵を集中させたいが、何割かは決戦を待たずに抜け駆けするだろう。その分の兵数を補充する」
「レオニス様が動かした兵は、これで全てですが……」
「もう一つ、蛮族がいる。セグレブの民といって、聖法庁から与えられた聖印を自分たち

で捨てた、筋金入りの蛮族だ。奴らをうまいこと誘い出し、ナデッタの民を襲わせる」
「蛮族が言うことを聞きますか？」
「ドラクロワは、その蛮族と通じている。ドラクロワの名を出せば話を聞くはずだ」
　サガの言葉に、トールは内心で驚いていた。ドラクロワがこの地の蛮族と？　いったいどういうつながりがある？　だが表面上は無関心を装ってトールはうなずいてみせた。
「念のため餌を与える。ナデッタの民への援助物資の一部を、ドラクロワに渡すために輸送していてな。そいつを蛮族にくれてやる代わりに、ナデッタの民を襲わせる」
　トールはやや反感を覚えた。トール自身、ヴラドの民という蛮族の出なのである。そして荒地に住む蛮族が、物資を餌にされれば動くことも予想がついた。その反感を隠しつつ、
「ご成功を祈っております」
　かすかな皮肉をこめてトールは言った。

　トールがナデッタの民の宿営地に帰ると、サガはすぐさま馬を走らせ、荒地を駆けた。
　険しい岩山がつらなるこの一帯が民の血に染まり、力無くひざまずくジークを想像して胸が躍った。お前は、俺の弟をゴミのように斬り、俺たちが故郷を取り戻す機会を奪った。お前は聖法庁そのものだ。俺の全てを賭けて、お前を倒す——サガは何度もそう誓った。

一昼夜かけて予定地点へ向かいながら、ふとトールの言葉が思い返された。ノヴィア・エルダーシャ――なぜあの少女を守ろうとするのか。サガにとって答えは一つしかない。
サガは、自分がその情報を握っていることにたまらない喜びを感じた。
誰が何を求めて、どう動いているか。どこに何があり、何がないか。そうした情報こそ俺の王国だ――そうサガは思う。それは故郷を失った者の最後の王国だ。
情報のどの部分を教え、どの部分を隠すかで、これまで大勢の人間を操作してきた。
情報を握るためならどんな努力も惜しまなかった。俺は、情報の王国で全てを支配する。
そこが俺の帰るべき場所だ。そういう歓喜とともに、サガは荒野を駆け抜けた。
そして予定地点へ到達する寸前――奇妙な音を聞いた。大勢の人間の叫び声に、幾つもの金属音がまじっている。明らかに戦闘の音だった。
サガは急いで音の方へ近づいた。嫌な予感がした。横領した物資を運搬していた奴らが仲間割れを起こしたか？　それとも蛮族にいきなり見つかって襲われたか？
慎重に岩陰から覗くと、聖印を刻まれた槍が、いきなりサガの目に飛び込んできた。
――ナデッタの騎士団!?
サガは仰天した。ナデッタの民から離脱した騎士団が、なぜか物資を狙っているのだ。
物資を運んでいたのは、ドラクロワに呼応した辺境の離反騎士団である。武力では決し

て劣っていないはずの彼らを、ナデッタの騎士団はたちまち撃滅してしまった。苦難の旅で団結力を強め、ジークの戦術を学び、実にとんでもない強さになっていた。

そうか！　サガはいきなり回答を見出し、激しく歯を軋らせた。

ジークだ。奴に物資の流れの情報を与えたのは俺だ。下手に偽れば、すぐに情報が矛盾してサガに疑いがかかる。あくまで情報の後半部分だけを伏せて相手を操るのだ。

そして物資の流れについての情報は、前半部分として確かにジークに渡してあった。

「くそっ、ジークめ、物資の流れをわざわざ調査させやがって。悪魔のような野郎だ」

もともと蛮族の地を通り、聖法庁の目につかぬよう物資を運ぶ予定でいたのだ。それを蛮族に与えることにしたのは最近である。ナデッタの騎士団は、物資の情報をジークから与えられていたに違いない。そして自分たちが食いつなぐためにここを狙ってきたのだ。

「こんなときに、この盗人どもっ……」

もともとナデッタの民の援助物資なのも忘れて唸りつつ、ただの物資で良かったと心底ほっとしてもいた。これがもし増殖器だったら、サガがドラクロワに殺されるところだ。

ドラクロワは以前から公正さで有名だが、今では尋常ではない公正さで知られていた。なにせ反対する者、失敗する者、利用し終えた者、みな平等に消されているのだ。

ともかくは別の物資を運ばせ、策に間に合わせよう。善後策を考えるうち、サガはふと、

おかしなことに気づいた。ナデッタの騎士団が物資を奪って喜んで戦利品を広げるかと思いきや、きびきびと馬車を点検し、整理整頓して、どこかへ運び始めたのだ。
サガは慌てて後を追った。彼らの様子は異常だった。帰るべき場所を失った騎士団の末路を、サガは知っている。規律を失い、だらけきり、奪うことだけが生き甲斐になるのだ。
だがナデッタの騎士団は違った。今や筆頭格となった女槍騎兵の号令に従い、一糸乱れず行動している。なぜか——答えは一つ。目的があるのだ。
やがて彼らが荒地を渡って行くのを見て、サガは飛び上がりそうなほど驚愕した。
それで全て分かった。ナデッタの騎士団が毅然としている理由は、ただ一つ。
——蛮族の地に向かう気か！
「死ぬ気か……」
その証拠に、蛮族の地へ向かう彼らはみな凄まじいまでの緊張を帯びているではないか。
「ナデッタの民のために……蛮族と戦う気か」
凄惨な覚悟で進む騎士団を見届け、サガは思わず笑い出していた。なんという馬鹿だ。
セグレブの民は、ただの蛮族ではない。自ら聖印を捨てた、もとはれっきとした聖法庁の民であり、その掟の厳しさ、戦いの強さは尋常ではない。かつて数多の騎士団が彼らに撃滅されているのだ。とても僅か数十騎で勝てる相手ではない。

それでもナデッタの騎士団は全滅するまで戦うだろう。武器を持たぬ民のために。
だがこの蛮族は絶対に侵略者を許さない。ナデッタの騎士団に攻め込まれたら、必ずその民も滅ぼし尽くす。逆にそうせねば聖法庁に叛逆し続けることなど出来はしないのだ。
もう善後策は必要ない。ナデッタの騎士団が自ら代わりをしてくれた。セグレブの民は確実に動く。わざわざセグレブの民を招くとは。蛮族についての知識がなさすぎだ。
サガは大声で笑った。情報が足りない愚者どもを嘲笑うことほど甘美なときはなかった。
それが、故郷を——帰るべき場所を失ったサガの、最後の喜びだった。

「兵が集まっています。後ろから来るつもりのようです」
ノヴィアが敵の接近を素早く見てとり、ジークに告げた。
「俺が食い止める。決して止まらずに進み続けろと、エノルに伝えろ」
ジークはそう言うや、烈気をみなぎらせてナデッタの民の後方へと向かった。
それを見た民たちが、次々にジークの名を呼び、感謝と賛嘆をあらわした。みなジークが何も言わずとも、自分たちを守るために戦いに行くことが分かっているのだ。
ノヴィアは民の代表者を通して、エノルにジークの言葉を伝えた。
エノルの役目はただ歩み続けることである。荒れ果てた峡谷を、ナデッタの民は力強く

前進していった。決して焦らず、恐慌に襲われず、冷静に進んでゆく。
谷を抜け、草原の街道に入ろうとしたとき、ふいに騎士たちが駆け込んできた。
「待て！　それ以上進んではならん！　この地の領主がお前たちを拒んでいる！」
エノルはさっと手を振り、代表者たちに合図していったん民を止めさせた。
そこへ紋章つきの馬車が現れ、さも苛々したような顔で土地の領主が出て来るや、
「この難民の代表者は誰だ」
「ナデッタの民の領主、エノル・ディオンです」
エノルはにこりと笑った。その笑顔が持つ妙な迫力に、土地の領主はやや戸惑いつつ、
「若い領主だの。まあよい、聞け。即刻ここから引き返し、別の道を行くのだ」
相手が若者と見て、ずけずけと頭ごなしに言ってくる。だがエノルは慣れた顔で、
「なぜですか。ここは関門がありません。聖法庁の法に従って我々は歩いてきました」
「この土地の法は別だ。とにかく帰れ。ここを通られては民の迷惑だ」
「迷惑はかけません。我々はただ歩くだけです。武器も持っておりません。それに背後には我々を狙って攻めようとしている者達がおります。引き返すことは出来ません」
「難民を攻めるなどという物好きがいるものか。さっさと、帰れ。ほれ、帰らぬか」
しっしっと手を振って追い払おうとする領主に、エノルはにっこりと笑いかけた。

「分かりました、帰ります。俺たちがまだ見ぬ新しい故郷に、これから帰ります」
言うや、エノルは、さっと手を振った。たちまちエノルとともに民が一斉に歩き出した。
騎士たちが、エノルの見事な統率力に驚いた。無数の足音が響き、土地の領主が仰天した。まるで巨大な生き物が真っ直ぐ動き出したようだった。
「我々は歩いているだけだ！」
エノルが叫んだ。民が、一斉にそれを唱和した。
――我々は歩いているだけだ！
天地に響き渡るかのような凄まじい斉唱に、領主が、騎士たちが、度肝を抜かれた。
「我々はただ歩いているだけだ！　我々には何の武器もない！」
エノルが叫んだ。民が歓呼の声を上げるがごとく、それに倣った。
――我々はただ歩いているだけだ！　我々には何の武器もない！
騎士たちは慌てて左右に分かれてエノルと民を通した。その騎士たちにエノルが敬礼し、にっこりと笑った。思わず騎士たちもつられて敬礼し、苦笑していた。
「我々は、まだ見ぬ故郷へ帰るところだ！」
エノルが敬礼しながら、堂々と叫ぶ。民のみなが騎士たちに手を振りながら叫んだ。
――我々は、まだ見ぬ故郷へ帰るところだ！

「我々は故郷へ向かって、ただ歩いているだけだ！」
――我々は故郷へ向かって、ただ歩いているだけだ！
アリスハートも面白がって一緒にその言葉を叫び、ノヴィアを微笑ませた。民が前進すればするほど、それだけジークも自由に戦えるようになる。ノヴィアはジークの戦いと民の進路を交互に見ながら、いつしか自分も同じように民と叫びながら歩いていた。
「ななな何をしとるか、騎士団長。こやつらを止めろ。こんな危険な集団を放置するな」
土地の領主は半狂乱になってわめくが、騎士は、あっさりと返した。
「私には、危険には見えません」
「こ、この馬鹿ものがっ。わしが危険だと言っておる。さっさと追い散らさぬか」
騎士が不快感を隠さぬ目で、じろりと領主を見た。
「武器も持たずに、ただ歩いている者を攻めろとおっしゃるか。そのような盗賊じみた行い、我らの方が、聖法庁から罪に問われますぞ」
領主はあんぐりと口を開いたまま呆然としている。騎士が肩をすくめて馬首を返した。
「ま、待て、どこに行く気だ。わ、わしの身を守らぬか」
領主が焦った。エノルに暴言を吐いたことで、ナデッタの民に襲われるのが怖いのだ。
エノルに比べ、実に身勝手で小心な領主だった。そのことに騎士自身が今さらのように

気づいた。逆に言えばエノルの態度はそれほど見事だったのだ。騎士はきっぱりと言った。
「彼らの背後を守ってやるためです」
そして唖然とする領主を置き去りに、ナデッタの民に声をかけながら行ってしまった。

民とともに歩きながら、トールは、その騎士たちの動きを見ていた。本気でナデッタの民を守る気らしい。頑張れよ、とか、心配するな、とか民に声をかけながら騎士たちが疾駆してゆく。エノルと民の歩みが、彼らをつき動かしたのだ。
そしてその歩みを支えているのが、今、抜け駆けした馬鹿な兵どもを撃退している、ジーク・ヴァールハイトという守護者の存在だった。
帰りたい――ふと、トールの胸にそんな思いが湧いた。ナデッタの民とエノル、そしてジークのあり方を見ているうちに、レオニスのことを思い出したのだ。自分の主人のもとへ戻り、その傍らで守護者として立つ――それがトールにとって最も自然なあり方だった。またそれ以上に、こうしてナデッタの民とともに歩いていると、なんだか自分までもが故郷を失い、二度と聖地シャイオンに帰れなくなったような気がしてくるのだ。
それはたまらない感情だった。今すぐにもレオニスの命令に反し、故郷に戻って自分が帰属している場所を確かめたくなる。せめて一言二言で良いからレオニスの声を聞きたい。

そんな風に思う自分を意外に感じつつ、トールは気を引き締めた。
そして民の様子を内から観察し、レオニスやサガの狙いが確かであることを悟った。
民が優れた統率のもとで歩みゆく限り、たとえ大軍で攻め寄せても効果はない。
ノヴィアが敵を見つけ、ジークが戦術を駆使し、民は冷静に攻撃から逃れてしまう。
とにかく民が隠れたり逃げたり出来ないようにし、恐慌に陥らせ、ジークの足を引っ張らせるしかない。だが包囲戦術は夜の森で失敗している。あくまで兵以外のもので民の足を止めるのだ。そのためにサガは全てを調べ上げた。民が確実に歩む道を、周辺の地形を、効果的な兵の進撃方向を、尋常でない労力を費やして調べ、罠を仕掛けたのだ。
それもレオニスが自在に争乱を操り、各地の兵を動かすからこそだ。レオニスの手腕と、サガの執念が見事に結びついたようなこの策を、いったいどうジークは乗り越えるのか。
トールは歩みながら考えた。ジークがどう罠に勝つかを。決して、どう負けるのか、ではなく。これまでのジークの戦いぶりを思い出し、どう対処するかを想像した。
そして、どう考えてもジークに勝ち目がないことを悟り、なぜかトールは呆然となった。

4

騎士たちに守られながらナデッタの民は街道を進んだ。土地の領主の不安をよそに街の

そばを通り過ぎ、やがて騎士たちと別れを告げ、民は東へ向かった。
日が暮れ、川べりで宿営の準備をしていると、戦いを終えたジークが悠然と戻ってきた。
掩護もなしに攻めてきた一部の騎士団をあっさり撃退したというジークに、
「ジーク様……先ほどから、こちらの様子を窺っている人たちがいます」
ノヴィアが、声をひそめて報告した。ジークはちらりと夕暮れの丘へ目を向けた。
遠くに、芥子粒のような小ささで何騎かの影が見える。ノヴィアが見たところ、土地の騎士とは全く違う衣裳で、みな武装し、夕焼けのせいで全身血を浴びたように赤い。
もしかすると本当に全身に返り血を浴びているのかもしれない。殺戮が日常茶飯事になった者たちを見た気がした。ノヴィアは、やけに嫌な予感がして、ぞっとなった。
「セグレブの民……この先の土地に住む蛮族だ」
ジークの淡々とした声音も、どこか緊張を帯びている。
「なんだか今にも襲ってきそうねぇ。大丈夫なのぉ？」
アリスハートが心配そうに口を挟む。ジークはうなずき、
「まだ今は動きはしない」
そこへエノルが来て、ジークに深く感謝した。そしてノヴィアが見た者の話を聞くと、
「こっちには来ないんですね」

ぽつっと言って、不思議な眼差しで、丘の向こうにいる騎馬の影を見た。
「我々が、彼らの土地に入って行くしかないことが、彼らも分かっているんでしょう。ここまで来たらもう迂回は出来ない。もう他に道は無いんです」
エノルがどこか寂しげな微笑で言う。いつもの明るい笑顔ではなかった。
「今日、かなり強引に進んだんです……もう、あまりやらない方が良いですね」
ジークもうなずいた。強引な突破を繰り返せば、いつか必ず争いになるからだ。
「だが、あのときは行進し続けることが最善だった。よくやった」
ジークが珍しく誉めた。エノルは、ちょっと照れたようにくしゃくしゃ髪をかいた。
「あの騎士たちが襲ってこない確信があったんです。不思議な感覚でした。争いにはならないと信じて歩みました。あの蛮族たちにも、何となく同じものを感じます……」
エノルは、夕陽が沈む方角を振り向いた。これまで歩いてきた道のりを遠く見つめ、
「大地と一つになった父が、そんな風に俺に教えてくれている気がするんです」
そう、父を葬ったことを表現した。領主ランドの遺体は、祭りを行った湖畔から次の道へ向かう場所に葬られた。墓石には、旅の途上で死んだこと、ナデッタの民であることを示すしるしが刻まれた。ごく簡略な葬礼が行われ、エノルも民も、旅に出て初めての死者をともにつれてゆけぬ嘆きを抱いて出発した。

「国境なんてあいまいなものです……。ここまで歩いてきて、それが分かったんです」
　エノルが大地を眺めながら呟く。ジークもノヴィアたちも、黙ってそれを聞いた。
「父はこの地面と一つになりました。もともと大地と俺たちは一つのものなんだということを、あなたが父を葬って下さったことで理解した気がします。その地面の上に勝手に領主たちが国境を引いて、騎士たちが守り、民が生活しているだけなんだと。ナデッタの国が失われる前までは、国境があることが当然だと思っていました。もちろん国境が無ければ困ることだらけです。それでも絶対に必要だってわけじゃない」
「だが……それがお前の仕事になる。新天地で国境を定めることが」
　ジークは淡々と言った。反論しているようでいて、エノルがそんな風に考えていることを、ひどく喜んでいるような気配があるのをノヴィアは敏感に察している。
「領主としての義務は理解してます。国境を無視すれば争いになるのも分かってます。でも、この大地に住む我々は、自分たちが豊かになるために土地を奪い合い、国境線を引き直し続けてきました。多くの場合、国境があるということは、そこに戦いがあった証拠なんだ。だから俺たちが国境を越えるのを、みな嫌がるんですよ。戦いが起こる気がして」
　そしてエノルは、遠くに見える蛮族の影に囁きかけるようにして、こう言った。
「俺が新天地で国境線を引くときは……なるべく沢山の隙間を空けておきますよ。余計な

戦いが起きないように……大勢の人が、自由に行き来できるように」
そこで初めてエノルは、にっこりといつもの笑顔を浮かべ、ジークを見上げたのだった。
ジークはその笑顔に目を細め、静かに深く、うなずいてみせた。

ノヴィアたちが食事の用意を手伝いにゆき、エノルが幕舎へ戻ると、ジークは一人、宿営地のそばの川岸に座り、民の宿営の様子を眺めた。
「どこかで見ているか、ドラクロワ……。この民を……エノルの姿を……」
いつしかその口から、本人も意識せぬほど強い悲しみと喜びのこもった声が零れていた。
「ここに、俺たちが求めたものがある……。お前と俺が求めたものが……お前が置いていってしまったものが……今、ここにある……。見ているか……ドラクロワ」
今自分が目にするものを、同じように相手に見せたいと切に願うような呟きであった。
そんなジークの様子を、ひそかに窺う者がいた。トールである。幕舎を組み立てるのを手伝いながら何気なくジークの方へ近づいたのだ。あまり接近すればすぐに気づかれるのは分かっていたが、それでもジークの様子が気になって仕方がなかった。
ジークはこの先の罠の存在を察しているだろうか、それとも全く気づいていないのか。
トールが、じりじりと焦れたような気分でいると、ふいにジークに近づく者がいた。

馬に乗った巡礼者風の男だ。トールはすぐにその正体を見抜いた。諜報院の者がジークに接触しに来たのだ。トールは危険を承知で近寄った。気配を殺し、幕舎の陰から陰へ音もなく移動し、かろうじてジークたちの声が聞こえるところまで接近することに成功した。
諜報院の者は、ジークに書状と地図を渡しながら、
「……サガ・トルホーズ自身は着実に任務をこなしているし、大しておかしな動きはないな。だがあの男の派遣先で、諜報院の仲間が数名、行方知れずになっている」
「サガの仕業か？」
「断定は出来んな。間違った地図についても調査したが、サガの意図かどうか不明だ。いずれにせよサガが任務から戻り次第、尋問する予定だ。聖王はあんたの働きを高く評価している。あんたが安心してあの民を守れるよう、諜報院も万全の態勢をとるつもりだ」
ジークがうなずくと、諜報院の男は馬に乗り、風のように走り去っていってしまった。
トールは、がっかりした。ジークはサガに疑惑を持ちつつも確信していないようなのだ。
それではいくら諜報院が支援しようと、到底この先の罠を打ち破ることは出来ない。
いったいジークに策はあるのか。それとも単にどこまでも戦う気でいるだけなのか。
トールは焦れったい気持ちを何とか抑えながら、ジークの様子をなおも探り続けた。
「おーい、ご飯だよぉー」

集中しすぎて、アリスハートがすぐそばを飛んでゆくのに気づかなかったのだ。トールには珍しい失態である。トールはすぐさま撤退し、宿営地にまぎれこんだ。僅かでも動揺した状態でそのままいれば、確実にジークに見つかることが本能的に分かっていた。
突然、明るいわめき声が頭上を飛んでいき、トールはぎくっとなった。ジークに意識を
「どしたの、狼男？　なんかいるの？」
宿営地の一角を向いたまま動かないジークに、アリスハートが不思議そうに声をかける。
ジークは、やおらアリスハートに目を向けると、こう言った。
「チビ、お前にも働いてもらうかもしれん」
「もおっ、この狼男っ。あたしに頼み事があるときくらい、チビって呼ぶなってのっ」
アリスハートがわめきつつ、ふと、嫌そうに小さな眉をしかめた。
「……また隠れたり飛び回ったりするのぉ？　やだなぁ……」
以前、ジークの策を手伝い、けっこうひどい目にあったアリスハートなのである。
「今回は、ただわめいていればいい。お前に最適な役割だ」
「って……ちょっとぉ、あたしがいっつも、わめいてるみたいな言い方じゃない」
ジークは妙な目でアリスハートを見たが、それについては何も言わなかった。
「ノヴィアが孤立した場合の対処だ。お前がノヴィアを守れ」

「へっ？　あ、あたしぃ？　そ、そりゃ、そうしたいけどぉ、あたしに出来るのぉ？」
「ただ、こう叫び続ければいいだけだ」
そしてジークは、その短い言葉を、アリスハートに告げた。
「……なにそれ？　なんかのおまじない？」
アリスハートの目がまん丸になる。ジークの意図が全く理解出来なかったのだ。
「ノヴィアの命を守るための、一度きりしか使えないまじないだ。忘れるな」
ノヴィアの命という言葉に、アリスハートは緊張した顔で、こくっと大きくうなずいた。

「みんな、これを見て欲しい」
出発の前に、エノルは民の前で、何枚もの地図を掲げてみせた。
全て、ナデッタの民がこれまで乗り越えてきた土地の地図だ。そしてエノルが、もう一方の手にたった一枚の地図を掲げるや、民のみなが歓喜の顔になった。
「あとこれだけだ！　この先に、新天地がある！」
エノルが最後の一枚の地図を掲げて叫んだ。たちまち民が爆発的な歓声を上げた。
「ゆこう！　マイアの地へ！」
エノルの言下、民が一斉に力強く地に立った。もはや故郷を去った当初とは比べものに

ならぬほどの速やかさで隊列を組んでゆく。老人も大人も子供も、誰もが自分の役割の大切さを知っていた。土地を失ったにもかかわらず、みなが自分の居場所を持っていた。
それこそが彼らの本当の勝利であるように、ノヴィアには思われた。
自分は人を見た——ノヴィアはいつか思ったことを、さらに強く実感した。
この旅で大勢の人を見てきた。そして自分が何のために戦うかを知った。自分がジークの従士であるという確信を持った。ノヴィアもまた多くの思いを抱き、民とともに歩んだ。
辺りは草木もまばらな荒涼とした岩地である。目指すべき新天地も、決して豊かな土地ではないことに、みなうすうす感づいていた。それでも彼らの歩みには歓喜がある。自分たちがその土地を豊かにしてみせるのだ。かつてナデッタの地を、祖先がそうしたように。
そしてそこに向かうには蛮族の土地を通らねばならない。それは聖法庁の加護の届かぬ土地であり、襲撃されたあの夜の森よりも悪い場所だ。どこの兵がナデッタの民を殺しても誰も分からない無法の荒野を、ナデッタの民は冷静に、毅然として前進していった。
日暮れとともに宿営し、夜明けとともに出発する。それを繰り返すナデッタの民を観察する不吉な影を、ノヴィアは幾つも見た。不吉な影は蛮族であったり、近隣の兵であったりした。どちらもナデッタの民に合わせて動いていた。そして機会を窺っていた。
だがエノルは、むしろ彼らに自分の歩む姿を見せつけるようにして進んだ。

民のみながエノルと同じように荒地を渡り、谷間を抜け、岩山を越えてゆく。いつ襲われても決して恐慌に陥らず、整然と進み続ける覚悟でいた。それが今や彼らの誇りだった。

そしてその誇りを、無惨にも打ち砕くような事態が、あるとき唐突に起こった。

あ——と、ノヴィアが、低く驚きの声を上げた。

慌てて辺りを見るが、一瞬、ノヴィア自身にも何が起こったのか分からなかった。

つい先ほどまで見えていたものが、ちょっと目を離した隙に消えていたのだ。

「どうした」

ジークが訊く。ノヴィアはいったい自分が何を探しているのかすぐに思い出した。

「橋です。橋が消えました」

「なに？」

「さっきまであったんです——」

ノヴィアは丹念に万里眼を駆使して、ナデッタの民が進みゆく先の地形を見た。

荒れ果てた岩地である。高い崖がそこら中にあり、あちこちで断崖が道を閉ざしている。

一つ道を間違えれば、どこにも進めなくなる難所であった。

その道の先に、木と鉄で出来た大きな架け橋がノヴィアには見えていたのだ。それが忽

底を見た。尖った岩地に粉々になったものが散乱していた。ノヴィアは呆然と言った。

「橋が落ちました。一瞬で……」

ジークはすぐさま地図で位置を確認した。もう間もなく到達する地点である。

「エノルさんに報告して、別の道を進んでは……」

ノヴィアが提案するが、ジークは即座にかぶりを振って否定した。

「来る」

その一言が、ずしりとノヴィアの胸に重いものを感じさせた。

「恐らく、橋に仕掛けをしていたのだろう」

機を見て一瞬で橋を落下させるための仕掛けである。事前にそれを行わず、わざわざ民がこれほど接近するのを待ってから落下させたのは――

「敵は、お前の万里眼を知っている。だから今まで橋を落とさなかった」

ノヴィアは驚愕に目を見開き、そのまま四方を見た。そんな仕掛けを施したのであれば、敵がここを戦場に選んだのは間違いない。ふいにそのノヴィアの肩をジークがつかんだ。

「力を使うな」

だがノヴィアは意味が分からず、ジークを見上げた。

「力を温存しろ。敵がどこから来るかは、地形で分かる」
「温存……？」
「お前がやれ。先頭へ行ってエノルに伝えろ。俺は敵を倒す」
ジークが即断した。だがそれはノヴィアの理解を完全に超えた。訳が分からなかった。
「私が——？　あ、あの、いったい何をすればよろしいのでしょう……」
「い、い、い、い、い、い、もう一つの力を使え。民の前進を止めるな」
その瞬間、いきなり理解が訪れた。たちまちノヴィアの背を戦慄が突き抜けた。先ほど橋の落下を悟ったときとは比べものにならぬ壮絶な恐怖に襲われ、ぞおっと総毛立った。
「わ、わ、私……」
思わず涙が零れそうになった。無理だと叫びたかった。幾らなんでもそれは出来ないと。
そのときである。ジークがノヴィアの肩をつかんだ手に力をこめてきた。そしてこれまでのノヴィアの全てに報いるような言葉を告げていた。
「——お前は、俺の従士だ」
その一言がノヴィアの涙を封じた。恐れを封じ、逃げ出そうとする自分を完全につかまえてしまった。ノヴィアは無意識に、肩に置かれたジークの手に触れた。
「民を歩ませてくれ」

ジークが心の底から願っているのが分かった。ノヴィアは、きっと歯を食いしばった。いつかジークに向かって挑んだときのような目で、しっかりとうなずいた。
すっと、ジークの手が離れた。その手がほんの一瞬だけ、自分の手を握り返した気がしたが、ノヴィアにそれを確かめる間はなかった。
「行け」
ジークは言った。
「はい」
ノヴィアは凜と返し、さっと身を翻してアリスハートをつれて先頭へ走った。
そのノヴィアの背を見つめ、すぐさまジークも民の後方へと駆け出した。
互いに互いの背を守るように――ジークとノヴィアのそれぞれの戦いが、始まった。

5

高い崖の上から、サガが、進みゆくナデッタの民を見下ろしている。
橋を落とした者たちは、既に岩壁をよじのぼり、後方の兵へ合図の狼煙を上げていた。
最高のタイミングだった。あの少女の万里眼から逃れるため、遥か後方へ配置していた兵が、今、三方から真っ直ぐに岩山を突き進んでくるのが見えた。

ナデッタの民が引き返そうとしても、必ずその兵のどれか一つとぶつかることになる。ジークの力、ノヴィアの万里眼が見通す範囲、ナデッタの民の進行、サガの手持ちの兵の進撃——それら全てがぴたりと一点に集約させられる場所は、ここしかなかった。

サガはふいに、情報の王国という形の無かったものが、突然この世に出現したような錯覚にのみこまれた。俺はずっと、ここに帰ってこようとしていたのだ——その強い思いがその胸を切々と満たした。そしてサガは、強い光をやどした目で眼下の光景を見つめた。

進みゆく民が断崖の前で完全に止まったとき、サガのおもてに壮絶な笑いが浮かんだ。

俺の最後の故郷をこの世に現すために貴様らは死ね。サガは心の中で猛然と叫んだ。そして無数の血で染まった俺の王国の旗こそ、貴様の墓標だ——ジーク・ヴァールハイト。

「これじゃ、歩くことも出来ないか……」

エノルは、なんとか落ち着きを失わずに、左右を見渡していた。

背後では、民のみなが、足を止めた状態で低くざわめいている。

ぽっかりと開いた断崖と、もとはそこに架け渡されていた橋の跡とを、先頭の集団が信じがたいという顔で見つめていた。右も左も断崖である。びょうびょうと風が吹き上げ、遠くの向こう岸を呆然と眺めるしかない自分たちを嘲笑うようだった。

「どこかに迂回路があるはずだけど……。それだと、来た道を戻ることになる……か」
エノルが呟く。それでは背後から迫る敵に進んでぶつかることになる。ジークの戦いの妨げとなり、目の前の断崖に飛び降りる以上に最悪の行動となってしまうのだ。
「ジーク様は、前進するよう仰いました」
ノヴィアは、きっぱりと言った。チリング司祭が奈落の淵を見て唸った。
「あの牧羊犬もとうとう、とち狂いおったか。ここをどう前進しろと言うんじゃ」
「私が、やります」
敢然と告げるノヴィアに、エノルとチリング司祭が息をのんだ。臣下たちも民も無言でノヴィアを見つめる。息がつまるような緊張があった。背後からは敵が押し寄せ、前方には奈落しかない。このような状況で、恐慌に陥らずにいることの方が不思議だった。
だがエノルは穏やかな姿を民に見せ続け、やがて、にっこりと笑って言った。
「お願いします、ノヴィアさん」
ノヴィアは、はっきりとうなずいてみせる。ごくっとアリスハートが唾を飲み込んだ。
ざわっと戸惑いの声が民の間から上がった。いったい何をすればこの窮地を脱せるのか。
そしてノヴィアはその答えを示してみせるため、手近な岩場へ行き、そこを登った。
すぐに民と断崖を見下ろせる位置に来ると、そこで祈るように両膝をついた。

ひざまずいて両手で宝杖を握りしめるノヴィアを、みなが固唾を呑んで見つめている。
やがて、吹き上げる風の中、ノヴィアの凛とした声が上がった。
「橋が——見えます」

ジークは剣を手に、岩山を猛然と駆け下りていった。
「俺と、俺の従士が、守ってみせる。お前が置いていったものを——ドラクロワ」
烈気を放つジークの周囲では、十六体の凄魔が、かっと牙を剝いてつき従っている。
やがて開けた場所に出た。この辺りの地形を読む限り、兵が三方から押し寄せてくることは分かっている。この場所は、そのうちの二つの道が交わる場所であった。
布陣に最適な地点に到達するや、ジークの左手に、猛然と雷花の閃きが迸った。
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
高々とその手を掲げ、地面に叩きつけた。青白い稲妻が地中から迸り、風が吹き荒れた。
「地刻星の連なりの下、総力をあげよ！」
巌魔の巨体が次々に地中から現れ、薄汚れた鉄塊のごとき剛魔の群がジークの左右で身を起こし、稲妻とともに深紅の爪を持つ迅魔の影が走った。
砲魔が右腕の代わりに巨大な砲身を抱えてずらりと並んだ。麗魔が刃で出来た手足をき

らめかせながら宙に舞い上がり、黄金色の弩弓を抱えた尖魔が後方に並ぶ。

十六体の凄魔をふくめて、あっという間に七種の魔兵がそこに出現し、咆吼を上げた。

ジークの左腕が激しく出血を起こし、籠手の隙間から血がしたたった。だが、そこから更に、赤黒い風船のごとき哭魔が飛び出し、四つの巨大な爪を持つ甲魔が列をなした。

かつてジークがその総力を現したときより、兵種が多くなっている。力が増したというよりも、それだけジークの体が堕気に耐えられるようになったというべきだった。理由は明白である。常に聖性を発揮させ、堕気を宥めてくれる相手が、そばにいるからだ。

ジークは、左腕からおびただしい血を流して立ち上がり、剣で空を切った。

「双子座の陣！」

言下、各魔兵が二手に分かれ、二つの道の前で同じ斜線陣形を築き上げた。

その中央で、ジークが十六体の凄魔とともに円陣を組んでいる。

やがて一方の道から、馬群の上げる土埃が迫り、その左右後背に兵団が殺到してきた。

ジークの剣が空を切るや、一方の陣が驀進した。巌魔と剛魔の群が真っ向から敵とぶつかって血しぶきの嵐を起こし、その衝突を回避した後続の兵団を残りの魔兵が迎え撃つ。

間もなく他方の道からも兵団が登ってくるのに合わせて、ジークはそちらへもう一つの陣を放ち、自らも凄魔とともに攻め寄せた。同じように巌魔を中心とした剛魔の方陣がぶ

つかり、それを避けようとする兵団を、後方で立ち塞がる他の魔兵たちが迎撃した。
だが周囲に障害物が少なく、岩地のあちこちに開けた場所があるため、どこかで必ず隙間が出来る。やがて兵団の一部がその隙間をくぐって魔兵の迎撃線を突破するや——彼らの足下で、赤黒い風船のごとき哭魔の群が一挙に炸裂した。耳をつんざくような爆音が轟き、ジークの背後で、粉々になった兵士の肉体が大量の土砂とともに降り注いだ。
「一兵として通すな！　ナデッタの地で死した者たちよ、歩みゆく者たちを守れ！」
ジークが苛烈に叫び、ごうごうと渦巻く瘴気をその身に受け入れてゆく。左腕を己の血で真っ赤に染めながら、右手に握りしめた剣を猛然と振るって兵を斬り倒していった。
だがこれまでの敵と違い、この兵団はジークと魔兵を、力任せに撃破しようとしない。的確に突破することを考え、魔兵が攻め寄せれば、さっと左右に分かれて両脇を通り過ぎようとしてしまう。お陰でたやすく潰走せず、粘りに粘ってくる。このままでは、いずれ別の道から新たな敵が訪れ、ジークと直接ぶつからずにナデッタの民へ迫ることになる。
やがてジークは二つの斜線陣形をじりじりと後退させていった。二つの兵団と戦いつつ、いずれ来るであろう第三の兵団を迎え撃たねばならないからであった。
やむなく退いてゆくジークを、サガが崖の上から憎しみと喜びの両方に光る目で眺めた。

ナデッタの民は断崖の前で立ち往生している。戦場の音が近づけば、彼らはたやすく混乱に陥るだろう。サガはその光景がもうすぐ訪れるのを、胸を焦がすようにして待った。ナデッタの民が逃げ場を求めて散り散りになり、誰もそれを統率出来ず、いたずらにジークの足を引っ張るのだ。大勢の人間が泣き叫び、絶望の中で滅ぼされる光景を見ることを、これほど恋い焦がれている自分が、サガ自身にも意外なほどだった。

俺の王国の存在意義は──俺を喜ばせるもので満ち溢れていることだ。そう思って喜色満面となったとき、ふいに、サガの視界の隅に、奇妙なものが映った。

何かが断崖の間に現れようとしているのだ。サガは眉間に皺を寄せてそれを見つめた。

そしてその正体を理解したとき、それがサガの王国を崩壊させる最初の亀裂となった。

「橋が……見える……」

エノルが呆然と言った。チリング司祭も民のみなも、啞然とそれを見ていた。

にわかに──ノヴィアが見つめるそこに、橋が出現したのだ。

三十歩ほどの断崖を、白亜に輝く橋が、虹のように渡っている。

まるで巨大な大理石からそのまま削りだしたかのように、どこにも継ぎ目がない。

三人ほどが並んで歩ける幅があり、どれほどの強風で煽られてもびくともしない。

だが——誰も動けなかった。エノルでさえ、こうして目の前に橋があるのが分かっていても咄嗟にそれを踏み越えて行く勇気がなかった。本当にこの橋は存在するのか？　喜んで渡っていった途端、幻のようにすり抜けて奈落の底へ落ちるのではないか？
「見えました！　渡れます！」
ノヴィアが、橋を見続けながら叫んだ。宝杖を握りしめた手が、ぶるぶる震えている。もし大勢の人間が渡っている途中で、橋が消えてしまったら——自分が彼らを断崖から落とすことになるのだ。その怖さに必死に耐えながらの叫びだった。
「——この橋の向こうに、マイアの地がある！」
ふいにエノルが拳を握りしめて叫んだ。敢然と橋へ歩み寄り、
「新天地への橋だ！　ノヴィア・エルダーシャの橋だ！」
ひときわ大きく声を上げながら、意を決してその橋に足を乗せた。
おおっ——と民が押し殺したような声をもらした。エノルがさらに勇気を振り絞って足を進めた。立っていた。断崖にかかる橋の上に立ちながら、エノルが民を振り向いた。
「俺たちはただ歩く！　進める可能性がある限り、歩み続ける！」
そう叫び、どんどん橋を渡ってゆく。五歩、十歩と進み、やがて橋の真ん中まで来た。
チリング司祭が、民のみなが、アリスハートが——そしてノヴィア自身が、とてつもな

い緊張とともに見守り続けた。エノルは振り返らずに進み続け、やがて最後の一歩を大きく踏み出した。対岸にたどり着いた途端、エノルの全身にどっと冷たい汗が湧いた。
同時にノヴィアもまた、のみこんでいた息をそろそろと吐いていた。エノルが橋を渡っている間、まるで相手の体重がそのまま自分の全身にかけられたように思えていたのだ。
たった一人を渡らせるだけで、これほどの重みを感じるのかと思った。こんな自分が本当に全ての民を渡らせられるのか――ノヴィアが不安に襲われたそのときである。
なんとエノルがくるりと振り向き、橋を戻ってきた。ノヴィアが必死に橋を見てエノルの体を支えるのをよそに、民が驚喜の声を上げてエノルを迎えた。
エノルは拳を掲げてそれに応えるや、いきなり橋の真ん中で立ち止まっていた。
そして、ゆっくりとノヴィアを振り向いたのだ。不安を押し殺している自分の顔を真っ直ぐ見られてしまった。それで、てっきりエノルが愕然とするだろうと思っていたら――
にっこりエノルが笑った。まるで大丈夫だと逆にノヴィアに言い聞かせるような優しい笑顔だった。ノヴィアの胸に、かっと熱いものが生じた。エノル自身が恐怖を感じているだろうに、なぜ、そんな笑顔を浮かべられるのか。そう思った途端、ノヴィアの手の震えがぴたりと止まった。橋の上にエノルが乗っている様子が、さらにノヴィアの中で確かな橋を見るきっかけとなっていた。

おお——と民が驚きの声を上げた。橋がさらに分厚く、堅牢なものへと変わったのだ。
エノルが橋を見渡し、再びノヴィアを見た。そこでノヴィアは、凛とうなずいてみせた。
「素晴らしい橋だ！　ノヴィア・エルダーシャの橋だ！　みな、来い！」
エノルが叫んだ。橋の真ん中で立ったままだ。橋が消えたときは自分が最初に落ちると言わんばかりの姿が民をつき動かし、またノヴィアに猛烈な緊張と勇気とを同時に与えた。
「ノヴィア・エルダーシャの橋だ！」
民の先頭の集団が一斉に叫びを上げて橋に歩み寄り、勢いよく足を踏み出し——橋の上に乗った。ずしりとした重みをノヴィアは実際に感じた気がした。先ほどエノル一人を乗せたときよりも層倍の重さだった。その重さがさらに増した。次々に人が橋に乗り、渡ってゆくのだ。みなが続々と橋を渡るさまに、ノヴィアは自分が押し潰されそうになる恐怖に襲われた。そしてそれゆえに——どんどん橋のイメージが確かなものになるのを感じた。
そのまま民が二人ずつ並んで歩き、やがてエノルの両脇を通り過ぎたとき、ノヴィアの中で強い喜びが恐怖に勝った。そして先頭の二人が対岸にたどり着き、歓声を上げた。
「ノヴィア・エルダーシャの橋だ！」
その瞬間——ノヴィアの中から恐怖が消えた。断崖を吹き荒ぶ恐ろしい風の音も聞こえなくなった。ただ民の声と、その無数の足音がノヴィアの心を満たした。今や何十人もの

重みがノヴィアにのしかかってきていた。だがそれさえも今やノヴィアの一部だった。
「ノヴィア・エルダーシャの橋だ！」
橋へ足を踏み出すたびに、みなが叫んだ。まるでそう叫ぶことによって橋がより確かなものになるというように。事実、その民の声がノヴィアにかつてないほどの力を与えた。
「ノヴィア・エルダーシャの橋だ！」
そう——これは自分の橋だ。ノヴィアの中でそんな思いが湧き起こった。自分の存在そのものだ。たとえ今、誰かが自分の命を奪おうとも民を渡らせ終えるまで、この橋だけは必ず存在させ続けてみせる。強くそう信じることが出来た。
そしてそのとき、ノヴィアの心に突然、新たな橋の姿が思い浮かんでいた。
「みんなが渡っていくよぉ」
アリスハートが泣いていた。これほど大勢の人間を、ノヴィアは歩ませることが出来るのだ。そう思うと、嬉しくて嬉しくて涙が溢れた。
一方で、チリング司祭はその場を動かずにいる。みなが先に渡らせようとするが、
「民より早くわしが渡れるか。先陣をきって橋を渡るのが領主の義務ならば、最後に渡るのが司祭の義務じゃ！　ほれ、さっさとわしを渡らせるために、みなで渡らぬか。この素晴らしき橋を渡れ！　ノヴィア・エルダーシャの橋を！」

そうわめいて、みなが次々に渡るよう、うながしてゆく。
そこへ突然、民が爆発的な歓声を上げた。橋に、変化が起こったのだ。
分厚く、堅固になるばかりではない。左右の幅が、少しずつ広くなってゆくのである。
三人ほど並んで歩くことが出来ていた橋が、徐々に五人の幅になり、やがてなんと十人以上が並んでもまだ余裕のある広さになった。
先ほど心に思い浮かんだ新たな橋の姿を、ノヴィアが少しずつ具現していったのだ。
しかもそれはまだ完成していなかった。自分が心に見た橋には至らない。まだ大きく――より広く。もっと大勢の人間の重みを――命の重みを支えることが出来るはずだった。
ノヴィアは、心に浮かんだものを現実に見るべく、さらに力を振り絞った。それこそが、この旅における自分の夜明けとなるように。深い闇から輝く場所へと踏み出すように――心の底にある、ありったけの思いで、より多くの命の重みを受け入れていった。
その変化を橋の真ん中で目の当たりにしたエノルが、今や一切の恐怖を吹き飛ばすような笑顔で、大声を張り上げた。
「ノヴィア・エルダーシャの橋だ！　さあみんなで新天地への橋を渡れ！」
――ふざけるなっ！

サガの心の中で凶暴な叫びが上がった。怒りが強すぎて声も出なかった。いきなり出現した橋をナデッタの民が続々と渡ってゆくのを、震えながら見ているしかなかった。
あの少女さえ殺せれば！　しかしそれは支援者であるレオニスから固く禁じられている。もし反すればサガ自身がレオニスに殺されるだろう。何せ自分は、あの少女の情報の後半、、、、部分を握っているのだ。それがなければとっくにあの少女を殺していた。
だが一方で、大丈夫だという気持ちもあった。あの程度の橋で、そう簡単に総員を渡らせられるわけがない。そしてその気持ちは、ものの見事に打ち砕かれることとなった。
――橋が大きくなった!?
橋がどんどん幅を広げ、渡れる人数が一挙に増えたのだ。サガは猛烈な不快感に襲われ、胃がむかむかした。あの少女への殺意が膨れあがり、慌てて抑えつけた。
そこへ第三の兵団が道の向こうから暗雲のごとく迫り来るや、サガは、たちまち平常心を取り戻した。ジークが無理やり陣形を広げるのが見えた。第三の兵団を何とか封じ込めつつ、残り二つの兵団とともに一カ所に集めて叩こうとしているのだ。
第三の兵団はすぐにその動きを察し、魔兵の群を突破すべく激しい戦いを繰り広げた。
今やジークは、たった一人で、のたくる三匹の大蛇を相手にしているようなものだった。
どれか一匹を叩こうとするたびに別の二匹が手からすりぬけようとし、全てを抑えるため

には、どんどん後退せざるをえないのだ。
その戦場の激しい音を聞いて、ナデッタの民の後方の集団が、僅かに隊列を乱した。
良い徴候だ。サガが、にやりと笑みを浮かべ、殺戮の光景への渇望を覚えた。
民の前進が滞ったせいで、ジークの陣形が異常に伸びている。隙間が生じ、それを埋めるたびに魔兵もジーク自身も消耗してゆく。民が逃げ惑うようになるのも、もうすぐだ。
そうなればジークは民を守るため、取り返しがつかぬほど陣形を歪めねばならなくなる。
やがてジークの陣の後方で、さらに第四の兵団が巻き起こす砂塵が猛然と湧き起こった。
「――来たっ！」
サガが叫んだ。焼けつくような怒りも憎しみも、その一言に昇華される思いだった。
第四の兵団、すなわち蛮族である。セグレブの民が、ジークの苦戦を嘲笑うように真っ直ぐナデッタの民に向かってゆく。彼らは兵団とは全く違う方角から――蛮族の土地から断崖に沿って現れた。ジークの背後をつく素晴らしい進撃に、サガは、うっとりとなった。
もし謀略と殺戮を芸術と呼ぶことが出来るならば、これは歴史に残る作品だ――サガはそう信じた。俺だけの王国が完成した。光り輝く王国に、今、血みどろの旗が揚がった。
ここが俺の帰るべき場所だ。喜びで目がくらみそうになりながら、サガは叫んだ。
「終わりだ、ジーク・ヴァールハイト――！」

そしてその瞬間、蛮族の群が、ナデッタの民に接触した。

6

孤軍は弱い——ジークの胸中に、いつしか、そんな痛烈な思いが生じていた。

どれほど強い力を持とうとも、他に連携する相手を持たなければ、あるのはいつか訪れる限界と、その果ての無惨な壊滅だけだ。今、ジークは、目の前でのたくるように岩山を登ってくる三つの兵団以上に、戦略から孤立することの恐怖と戦っていた。

——自分の施した策は、戦略にのっとっていたか？　どこかに読み間違いはなかったか？　こうあって欲しいという勝手な期待のもとで考え、行動していなかったか？

そんなぞっとする思いが、次から次へと起こった。そしてその思いを押し殺すようにして魔兵を操り、自らも迫り来る兵たちを片っ端から斬り屠ってゆく。

頼む——届いてくれ。いつしかジークはそう祈りながら戦っていた。もはやここに至っては、それ以外にすべはなかった。届いてくれ——これまでの戦いで学んだ全てをもとに判断したのだ。それが届かなければ自分には何もない。これまでの自分の戦いの全てが無意味だったということだ。自分の全てをこれに捧げても良い。だから届いてくれ。そして守ってくれ。民を、自分とドラクロワとシーラが守ろうとしたものを。その思いは、今や

大地への祈りそのものとなってジークをさらに激しい戦いへと駆り立てていった。
真の恐怖は、その策に対して、自分が背を向けているということだ。
成功であれ失敗であれ、全ては、自分の背後からやって来る。
ジークは目の前の敵と、背後から迫る恐怖の両方に対し、必死に戦い、祈っていた。

橋の真ん中で民を励ましていたエノルは、突如として迫り来る馬蹄の轟きを聞いた。
半数以上の民がまだ橋を渡れていない。残された者たちが軍勢の音に悲鳴を上げ、隊列を乱した。エノルは慌てて橋を民の流れとは逆に渡り、
「落ち着くんだ！　俺たちはただ歩く！　何があっても歩き続ける！　それが誇りだ！」
必死に叫びながら隊列を整えさせた。だが軍勢の轟きはどんどん近づき、もはやそこに自分たちを守ってくれるあの偉大な存在、ジーク・ヴァールハイトがいないことをエノルは悟った。そして民も、それを悟った。もう少しで恐慌が起こりかけた。
「歩け！　誇りをもって進め！　恐れずに渡れ！」
なおもエノルが叫んだ。チリング司祭も民の代表者たちも必死にみなの動揺を鎮め、少しでも早く渡らせようとする。歩け。それがナデッタの民の誇りだ。他のどんな民も真似できないくらいに毅然として歩め。一人でも多く、ノヴィア・エルダーシャの橋を渡れ。

そして——来た。
断崖が続く岩地の向こうから、にわかに湧き出た雷雲のごとく、騎馬の群が躍り出た。
絶望するほど巧みな乗馬術だった。どの馬も平地を走るがごとく岩場を疾駆してくる。
見たこともない衣裳に、おどろおどろしい色彩に塗られた甲冑、気が遠くなりそうな鋭い剣や槍を手に、甲高い吶喊の声を上げている。
「俺たちは武器を持っていない！　ただ歩いているだけだ！」
エノルがたまらず騎馬の群に向かって両手を広げて叫んだ。
「俺たちは剣を捨てて歩く者だ！　俺たちは歩く！　俺たちは恐れずに歩く！」
その叫びは、騎馬の群に向けられると同時に、最後まで民を励ますためのものだった。
エノルは、ノヴィアの橋を最初に渡るのも自分ならば、敵に最初に殺されるのも自分でなければならないと信じているようだった。チリング司祭が慌てて走り寄り、エノルの肩をつかんで引き戻そうとしたときは、もはや何もかもが遅かった。
騎馬の群が目と鼻の先に迫った。このまま逃げても追いかけられて背後から斬られる距離である。ならばこのまま正面を向き続け、最後まで叫び続けることをエノルは選んだ。
「——俺たちは、ただ歩み続ける！」
エノルが叫んだとき、一騎の騎兵が、素晴らしく逞しい悍馬を駆って群から躍り出た。

その騎兵のしなやかな姿が、エノルとチリング司祭の目に、はっきりと鮮やかに映った。
そしてその聖槍騎兵は、エノルの声に応えるように、光り輝く槍を掲げて叫んだのだ。
「——行け、ナデッタの民よ！　そのまま真っ直ぐ歩み続けろ！」
聖印を刻まれた槍を振るって進路を示すや、怒濤の勢いで迫る騎馬の群がエノルの目前で一斉に右へと転進した。そのままナデッタの民のすぐそばを奔流のごとく疾駆しつつ、
「そのまま歩みゆけ！　我らがそなたらを守る！」
先頭で槍を掲げる者が、民に向かって呼びかけるではないか。
エノルとチリング司祭は、その騎馬の群の疾駆の前で、呆然と顔を見合わせた。
やがて、エノルが泣くような笑うようななんともつかぬ表情になり——爆発した。
「カヤだ！　カヤだ！　カヤだ！　カヤだ！」
エノルの口から歓声が迸った。チリング司祭の緋色の法衣をつかんで子供のようにはしゃいだ。チリング司祭もエノルの肩に手を回し、笑いながら踊っていた。
「ナデッタの騎士団が、蛮族をつれて助けに来てくれたぞーっ！」
喜び驚く民の前で、エノルとチリング司祭は二人して奇妙な踊りを踊って叫び続けた。
——狂ってる！　狂ってる！　狂ってる！

サガは自分が失神しないのが不思議なほど、眼前の光景に驚きおののいていた。
あのナデッタの騎士団が生きていた。そればかりか蛮族の群の先頭で馬を駆っている。
さらには蛮族どもがナデッタの騎士団とともに兵団に真っ直ぐ躍りかかったのだ。
ジークは、すぐさま蛮族とナデッタの騎士団の突撃に合わせて陣形を整えている。
ジーク、ナデッタの騎士団、蛮族――この三つの勢力が、あっという間に連携し、三つの兵団を完全に食い止めていた。その有様に、サガは驚愕と怒りで、がくがく震えた。
もはや呪われているとしか思えなかった。たった今まで光り輝くようだった自分の王国が、無惨にも打ち砕かれ、なすすべもなく崩壊してゆくのだ。
サガは真っ赤に血走った目を、せわしなく辺りに向けた。どこかに何か一つでも正しいものはないのか。だがナデッタの民は大きな橋を渡ってゆくし、兵団は押し潰されそうになっている。練りに練った策は崩壊し、選び抜いた地形は最悪の場所となっていた。
もはや何も正しいことなどない。サガはそう結論した。ならば、とことんまで狂った奴の勝ちだ。サガは命を捨てる覚悟を抱いた。最後の賭けを行うのだ。
さっと馬に乗り、猛然と駆けた。ナデッタの民を歩ませている最悪の元凶に向かって。
レオニスを敵に回そうとも構わない。あの少女を――ノヴィア・エルダーシャを殺すのだ。

やはり、策はあったのだ――民の代表者とともに整列を手伝うトールは、やけに満足する自分を自覚していた。ジークは全てを見通している。あらゆる可能性に対して、一つ一つ手を抜かずに対処している。ジーク自身でさえ、本当にそんな可能性があるのか疑いたくなるものもあっただろう。だがそれでもジークは怠らない。おそらくサガが練る策の何倍もの可能性を、ジークは常に考え抜いているのだ。

つくづく感嘆するトールだが、一つだけ、気にかかることがあった。

他ならぬノヴィアのことである。ここでノヴィアが狙われれば、橋が消え、ナデッタの民は甚大な被害をこうむる。渡れなかった民は、たちまち恐慌に襲われるだろう。

だが、こんな重要なことをジークが見逃すはずがない。必ず何か手を打っているに違いなかった。では、どんな手を打っているのか――トールの興味は、そこにあった。

そして、ふと、妙なことに気づいた。

ノヴィアのそばで、アリスハートが何やらわめいているのだ。だがノヴィア・エルダーシャの橋だ、という民の叫びのせいで、その甲高いわめき声が断片的にしか聞こえない。

トールは、するすると民の間を移動し、ノヴィアがひざまずく岩地のすぐ下にまで来た。

そしてアリスハートの声をはっきり聞きとった瞬間、トールは、ジークが全てに対処しているはずだという自分の予想が、半ば的中し、半ば完全に裏切られたのを思い知った。

「出番だぞーっ、影法師ぃーっ!!」

アリスハートは、ノヴィアを守るためのおまじないを必死に叫んでいるところだった。

――なんだって!?

一瞬、頭が真っ白になって何も考えられなくなった。

そしてすぐさまトールは我に返っている。突如として近づいてくる凄まじいまでの殺気がそうさせたのだ。数は一人――トールの才能がいかんなく発揮され、相手が近づくよりも早くその存在を察し、素早く行動に移っていた。

誰にも見とがめられることなく影のように移動し、さっと岩地を登った。

あっという間にノヴィアやアリスハートよりも高い位置まで来て、ふと振り返った。

すぐ下でアリスハートが叫び続けている。きっと声が嗄れても、ノヴィアを守るために必死に叫び続けるだろう。トールはちょっと可哀想になった。人に対する同情というものをほとんど持たないトールにとっては、きわめて珍しい感情である。

「アリスハート」

トールが穏やかに声をかけた。アリスハートがきょとんとなり、慌てて頭上を見上げた。

その金色の目がまん丸になるのを見て、トールの口元に、かすかな微笑が浮かんだ。

小さくアリスハートに向かって手を振ってみせ、次の瞬間、影のように忽然と消えた。
「本当に、影法師……じゃなくてトールが来た」
アリスハートが呆然と呟いたとき、トールは既に、殺気を放つ相手へと向かっている。
（いつでも試せ——）
走りゆくトールの脳裏に、かつてジークにそう言われた言葉がまざまざと甦っていた。
いつどのように襲っても良いと。そのときは、自分から刃を捨てて、ジークに降参した。
おそらく今も、同じことをするだろう。試されるのはあくまで自分であり、ジークに太刀打ちすることも出来ないに違いない。素直にそう思える自分が、トールは不思議だった。
いつか必ず、ジークに匹敵してみせる——そんな強い思いが湧き起こるのを感じた。
それは、憎悪や怒りとは全く違う場所から生まれた思いだった。いったいそれがどこから来るのかトール自身が疑問に思ったとき、相手の気配がすぐそばまで来た。
トールは立ち止まり、岩陰に身を隠そうとして、やめた。相手の意志を確認する必要があったし、何よりジークに匹敵したいという気持ちを、どうにも止められなかった。
正面から来い——これもジークに言われたことだ。そしてトールは、その通りにした。
左右を岩に挟まれた隘路に、やがて馬に乗ったサガが現れ、手綱を絞りながら、
「邪魔だ」

道を塞ぐトールに、言った。トールは、ゆっくりとかぶりを振った。
「殺す気ですね」
誰を、とは言わない。この状況でサガが単独でここに来る理由は一つしかない。ノヴィアを狙いに来たのだ。トールは、こだまのように感情の無い声を放った。
「他の策を、改めて考えましょう」
サガの顔に凶悪な笑みが浮かんだ。今回の策が失敗したという言葉が、千の罵倒よりもサガの胸をかきむしったのだ。すぐさま両手の手袋を外して投げ捨て、
「貴様も殺せば、俺があの少女を殺した証拠は何も残らん」
言うや、両方の手から、ふわりと気泡が浮かんだ。
聖汽雷――掌ほどの大きさの、透明な気泡である。それが、サガの目の前の空間に、あっという間に何十と浮かんだ。その一つがすうっと宙を流れ、トールに向かった。
その気泡が真っ赤に染まった瞬間、トールは素早く右手を宙で翻した。
黒い靄が現れ、漆黒の短剣となってトールの手に握られた。その短剣を、投げた。
短剣が赤い気泡を貫き、炸裂した。短剣が木っ端微塵になって宙に霧散したとき、トールの両手には、それぞれ同じ形の短剣が、三振りずつ現れている。
「その程度の手数では足らんぞ、影法師の坊や」

サガが手を翻すや、にわかに気泡の群が動いた。トールの視界を覆わんばかりに気泡が広がり、その全てが真っ赤に染まった。トールの両手が閃き、六つの短剣が次々に飛んだ。近づいてくる気泡から炸裂させ、隙を見て、短剣の一つをサガに向かって投げ放つ。
が——すうっと気泡の一つが動き、炸裂する盾となってその短剣を消し飛ばした。
その間に、トールは素早く走って気泡をよけ、サガの背後に回っている。
サガが笑った。トールがどう動こうともサガの意志一つで無数の気泡が追いかけるのだ。
短剣を使い果たしたトールは、更に、両手に三振りずつ、短剣を現した。
そのときにはもう、トールの背後にも頭上にも、真っ赤な泡が回り込んでいる。
トールの足が完全に止まった。どこへ逃げても真っ赤な気泡の群があった。じわじわと近づく気泡のどれか一つでも触れれば、あとは肉体が砕け散るまで炸裂し続けるだろう。
「お前、その程度の力で、正面から戦いを挑んだのか」
サガが嘲笑った。自分の意志で動く、この炸裂する気泡こそサガの心だった。
世界はこの泡のように自由に動かせるべきなのだ。そして自由に破壊されるべきなのだ。
トールは、その気泡に完全に包囲された状態で、静かに、両手の剣を重ね合わせた。
いったん全てが黒い靄となり、右手がつかむ動作をするや、それまでとは違う、やや長い柄と化して握られていた。それでも、通常の剣の柄に比べて、格段に短かく細い。

トールはその柄を握ったまま、すうっと左手を動かしていった。
すると、その指の隙間から、驚くほど細い刃が、するすると伸びてゆくではないか。
剣と言うにはあまりに貧弱すぎた。ほとんどひものような幅しかないのである。
それが、トールが現せるこの聖性と堕気を混ぜ合わせた鋼の限界だった。
サガがげらげら笑った。今すぐ殺すには惜しいほど、トールが作り出す剣が面白すぎた。
「お前にドラクロワが作る剣を見せてやりたいもんだ！　いやいや、その前に、お前の剣をドラクロワに見せてやりたいくらいだ！」
トールは無表情に、そのまま左手を動かし続けてゆく。両腕いっぱいの長さになったかと思うと、そのまま弧を描いた。途端に——サガの笑いが、ぴたっと消えた。
なんと刃が、U字型になっていた。トールの左手が、柄を持つ右手のそばで止まった。
すっ、とトールが左手を離した。ひゅん。目に見えない何かが宙を迅った。
ひものような刃が、一瞬、消えて無くなったように見え、何かが、鋭く地面を抉った。
トールの右手が、舞うような動きを見せた。かと思うと、にわかに竜巻のような刃風がトールの周囲で走り、群れ集まっていた赤い気泡が、片っ端から切断されたではないか。
閃光が走った。気泡の群が一挙に炸裂したのだ。爆音が岩場に反響し、馬が驚いて棹立ちになる。サガは慌てて手綱を握り、かろうじて落馬をまぬがれた。

ひゅん。鮮やかに空を切る音とともに、爆煙の向こうでトールがそれを振るった。
次の瞬間、サガの右腕を、いきなりそれが通り抜けた。もの凄い灼熱感が起こり、あっという間にサガの右手首は完全に切断され、手綱を握った状態でぶら下がっていた。
右手があった場所から勢いよく血潮が迸り、サガが甲高い絶叫を上げた。
「ドラクロワに見せる前に、どうぞ、あなたがご覧になって下さい」
トールが、相変わらずこだまのような感情の抜け落ちた声で言う。
サガは歯を軋らせて傷を縛り、血止めをしながら、苦痛に耐えてトールを見た。その手に短い柄が握られている。問題は、その柄から伸びるひものような刃だ。
「鞭か――」
サガが呻くように、トールが作り出した刃の姿を、そう表現した。
剃刀の鋭さと、鋼の剛さを持つ、恐るべき鉄鞭である。とてつもない弾力で刃が跳ね、縦横無尽に切り裂くのだ。気泡に触れても炸裂する前に両断してしまう速度であった。
トールには決してドラクロワのような長剣を作り出すことは出来ない。だがそれはトールにとってどうでも良かった。あくまで自分に適したものが作り出せれば良いのだ。
そしてこの鉄鞭こそ、試行錯誤の末にトールが最適とみとめた武器というわけだった。
「なぜ、貴様……。なぜ一度、見せたとき、隠した……」

苦痛に震えながら、サガが言った。かつて最初に互いに力を見せ合ったとき、まさかこのような形に刃を造り変えることなど、片鱗も見せてはいなかったではないか。
するとトールは、ちょっと意外そうに眉をひそめた。
「情報の後半部分は教えないのでしょう？」
お前の流儀に合わせただけだ、と言わんばかりである。サガが憤怒と苦痛に唸った。
トールはまるで気にした風もなく、さっと右腕を舞うように動かした。
たちまち背筋が凍りつくような刃の音が乱れ交った。サガはその瞬間、トールの本当の恐ろしさを知った。こいつは何の殺意もなく相手を殺す！　トールには全く殺気がない。それこそ物でもどかすみたいに殺されるのだ。サガはぞっとなり、咄嗟に叫んでいた。
「待て、情報の後半部分だ！　ノヴィア・エルダーシャの出生について教えてやる！」
サガを八つ裂きにしようとしていたトールが、ぴたりと攻撃をやめた。
「これだ。これに書いてある。読めば分かる」
サガは、残った左手で慌てて腰の鞄を探り、封筒に入った書類の一つを放り投げた。
書類が、先ほどサガの右手から噴き出した血だまりの上に落ちた。
それが血に染まる前に、トールが拾い上げようとしたとき――
ふわりと、サガの血から透明な気泡が幾つも浮かび上がり、紅蓮の色に染まった。

「なめるな小僧」
サガが嗤った。気泡が炸裂した。サガは馬の腹を蹴り、爆音が轟く岩地を疾駆した。
そのとき失血と痛みで朦朧とするサガの頭にあったのは、あの少女が吹き飛ばされて、粉々の肉の塊になったら、ジークやレオニスはどう思うだろうということだけだった。
次の瞬間、馬の後ろ足が両脚とも真横に切断された。馬が悲鳴を上げて転倒し、サガは岩地に叩きつけられ、慌てて顔を上げた。そして目に見えないほどの速度で襲いかかる黒い刃の嵐が、馬を粉々の肉の塊に変えるのを見た。最悪だ——とサガは思った。

7

最初に撃滅されたのは、ジークが魔兵の大半を投入した兵団であった。
実に、九種の魔兵が襲いかかったのだ。のたくる蛇が、何匹もの肉食獣に食いつかれ、ずたずたにされたようなものだった。ついでジークは魔兵の陣形を最初のかたちに——すなわち二つの斜線陣形に戻し、それぞれ残り二つの兵団を側面から襲わせた。
蛮族たちが兵団の一つを潰走させ、ナデッタの騎士団が最後の兵団を撃ち破った後は、ただの掃討となった。そして夕暮れを迎える前に、それも終わった。
累々たる死者の間に立つジークへ、カヤが馬を寄せ、兜の面頰を上げた。

「ジーク殿の策に従い、民から離脱してのち、セグレブの民に助力を乞いました」
ジークはうなずき、ナデッタの騎士団と、鮮やかな衣裳の蛮族を、目を細めて眺めた。
「孤軍の……自分の弱さを思い知った。感謝する」
ぽつっとジークが言う。カヤがびっくりした顔になり、そして、くすっと笑った。
「民を守るための策を授けて下さり、感謝すべきはこちらですのに……不思議な方だ」
だが、まだ憮然としたままでいるジークに、カヤは微笑し、
「さあ、帰りましょう。敵が再び襲ってくるかどうかは我々が確かめます。今度ばかりは置いて行けませぬ。お互い、帰るべきところへ帰ろうではありませんか」
ぴたりと言ってのけた。ジークは剣の腹で、自分の肩を叩いた。ますます憮然としたような仕草だった。帰る、という言葉に、それだけ馴染みが薄くなっているのかもしれない。
だがカヤは、そこでさらに微笑んで言い加えた。
「ノヴィア殿を、安心させてあげて下さい、ジーク殿」
ジークは、ちらりとカヤを見やり、やっと小さくうなずいた。
ナデッタの民の最後の一人が——すなわちチリング司祭が、巨体を踊らせるようにして断崖の向こう側へと渡った途端、とてつもない歓声が響き渡った。その声を聞きながら、

ノヴィアは弱々しく微笑した。緊張がきれ、たちまち目が霞み、暗闇が降りかかってくる。
自分がいったいどれほどのものを支え、成し遂げたのか、咄嗟に想像もつかなかった。
ただ、もう目を閉じて良いということだけは分かっていた。
ノヴィアは、久々に目を塞ぎ、世の中よりも自分の思いの方を優先した。
目蓋を閉じ、ゆっくり横に倒れ、ごろんと転がったのである。会心の笑みを浮かべ、
「疲れたぁ」
岩の上で大きく手足を伸ばした。最高の気分だった。そのままの気分で眠ってしまいたいくらいの疲労と達成感があった。そこへ、アリスハートの元気な声が聞こえてきた。
「すごーい、まだ橋が見えるよぉ」
ノヴィアが見るのをやめたにもかかわらず、まだ橋の残像が浮かんでいるのだ。
「先に行くように、エノルさんに伝えて、アリスハート」
ノヴィアが目を閉じたまま言う。アリスハートが元気良く返事して飛んでいった。
エノルは、アリスハートの言葉を了解した後も、しばらくそこにいた。民が、橋を見続けたがったのだ。やがて橋が透明になり始めると、改めてエノルが民を振り返った。
「行こう。マイアの地へ」
ナデッタの民は、再び出発した。東へ向かって——最後の歩みを果たすために。

アリスハートが戻ってくると、ノヴィアは岩の上ですうすう寝息を立てて眠っていた。
「お疲れ様ぁ、ノヴィアぁ」
アリスハートは小声でそう囁き、そして待った。遠くから聞こえてくる戦いの音も、急速に静まりつつあった。大勢の人が死んだのかなぁ。そう思って悲しくなった。
でもナデッタの民がみんな向こう側に行けて良かったなぁ。心の底からそう思った。
やがて続々と馬蹄の音が響いてきた。アリスハートはひょいと宙を舞い、断崖の前で羽を震わせながら、みながやって来るのを待った。最初に現れたのは、聖印を刻まれた槍を持つ、しなやかな女騎士と、彼女に率いられた騎士の一団である。
「カヤさーん！」
アリスハートが手を振って迎えた。兜の面頬が上げられ、カヤの微笑が現れた。
「久しぶりだな、アリスハート。みなは無事に渡り終えたのか？」
「みんな先に行ってるよぉ。カヤさんたちはぁ？」
「ジーク殿とともに戦えたお陰で、一人として死者を出さずに済んだ」
そこへカヤたちのすぐ後ろから、見たこともない衣裳の一団が続々とやって来た。
「あの人たちは？」

アリスハートが、おっかなびっくり訊く。ふと、頭上から低く鋭い声が飛んだ。
「セグレブの民——自ら聖印を捨てた者達だ」
アリスハートがぎょっとして見上げると、いつの間にかジークがノヴィアの傍らにいた。
「よく頑張ったな……」
ジークが、そっとノヴィアの肩に触れた。ノヴィアはすやすやと眠っている。
そのノヴィアを、ジークはシャベルを担いだまま、ゆっくりと抱き上げた。
そのまま断崖の方を振り向くと、そこにはまだ、うっすらと橋の残像が浮かんでいる。
「見事だ……ノヴィア」
橋の残影を見つめながら、もしノヴィアが目覚めていたら驚喜したような言葉を告げた。
そしてしなやかに岩から跳び降り、カヤに近寄ると、
「ノヴィアを頼む」
静かに、ノヴィアの体をカヤに預けた。無造作なようでいて、優しく力強い仕草だった。
「先に行け。民を——エノルを、安心させてやれ」
今度はジークがそう言った。カヤはノヴィアを抱きつつ、ちょっと首をすくめた。
「ジーク殿に教えられた通り、なるべく威勢良く出て行った手前……照れ臭いですな」
「どうせ、ぜーんぶ狼男の陰険な陰謀だったんでしょぉ？　カヤさんは悪くないよぉ」

アリスハートが、得意満面に請け合う。カヤも騎士団も苦笑した。
「ジーク殿はどうされます？」
「この罠を仕掛けた者を探す。お前たちは、セグレブの民に迂回路を教えてもらえ」
カヤはうなずき、しっかりとノヴィアを抱きつつ、セグレブの民の者たちと話し合った。
アリスハートがノヴィアの方へ飛んで行こうとすると、ジークに呼び止められた。
「チビ、影法師は、どっちへ行った？」
「チビじゃないっーのぉ。もぉ、トールならあっちに行ったよぉ。ほんと驚いたぁ」
「案内しろ」
「ノヴィアのことほっとくのぉ？」
「休ませてやれ。危険はない。近隣の兵など、問題にならない兵力だ」
アリスハートは、ナデッタの騎士団とセグレブの民を振り返り、納得した。
「それにしても、なんでこの蛮族さんが、あたしたちを助けてくれたわけぇ？」
「エノルの言葉を、カヤに伝えさせた」
「……エノルさんの言葉？」
「理解し合える。それだけだ。ついでに多少の物資を土産にさせた」
ふぅん、と分かったような分からないようなアリスハートに、ジークは言った。

「行くぞ。影法師が殺されてるかもしれん」
アリスハートは慌てて、トールが消えた方へ飛んでいった。

左右を岩に囲まれた隘路を進むと、いきなり視界が真っ赤になった。
あまりの光景にアリスハートが悲鳴を上げ、ふらふらとジークの頭上に落ちてゆく。
一面、血の海だった。ずたずたになった馬の肉片がばらまかれているそこへ、ジークがしゃがみこむ。アリスハートは危うく血の海に落ちかけ、慌てて舞い上がった。
「一名、負傷したな」
そこに、ころんと人間の手首が転がっているのだ。アリスハートが、あわあわと震えるのをよそに、ジークは隘路から岩山へ向かって点々と続く血の跡を見つけた。
移動するジークを、惨状の中に取り残されそうになったアリスハートが慌てて追っかけた。
血の跡を辿ると、洞穴に出くわした。ジークが楽に入れるほど、大きくて深い洞穴である。血の跡は、その奥へと点々と続いている。
「ここで待っていろ」
ジークはそう言うと、返事も待たずに、無造作に洞窟に入っていった。

「ちょっとぉ……、少しは気をつけなきゃ駄目よぉ、もぉ」
ジークの姿はあっという間に見えなくなり、アリスハートは戦々恐々としながら待った。
今にもの凄い悲鳴が洞窟から響いてくるのではないかと思い、おどおどしていると、
「こんにちは、アリスハート」
いきなり背後から声をかけられ、思いっきり自分が悲鳴を上げてしまっていた。

ジークは洞窟の奥へと進み、やがて、むっと血の臭いが漂い、荒々しい呼吸音が響いてくると、静かに闇の中で立ち止まった。
「お前が……誤った地図を渡し、この罠を仕掛けたな？」
途端に、洞窟の奥から、ふきだすような笑いが響いた。
「貴様が来るとはな……。あの小僧にとどめを刺されるのと、どちらが最悪かな」
ぜえぜえと息を荒げながら、闇の向こうで、サガ・トルホーズは言った。
「あの地図は最悪だった……貴様の手に証拠を残しちまったんだからな。俺のやり方は、情、い、い、い、報の後半部分を伏せておくことだ。いつでもそうやって、情報を握ってきた」
「なぜ、諜報院を裏切り、ドラクロワに加担した？」
「貴様を殺すためだ……。俺の弟を殺し、俺の民を殺したお前を……」

嘲るような声だった。ジークは僅かに沈黙し、それから、ぽつりと言った。
「……あいつの兄か」
「ああ、貴様の従士だった男の兄さ……。貴様が殺した民の、最後の生き残りだ……」
「お前の民は全滅していない。死罪の者以外、今も聖法庁で罪を償うために働いている」
「死んだも同然だ……自分たちの故郷を取り戻す気を、完全に失ったんだからな」
「あの争乱……お前が、裏で仕組んだな」
「そうだ。腰抜けの領主どもを人質に取り、再び俺たちだけの土地を手に入れる……もう少しで、成功するところだった。それを、貴様が、潰した……」
「聖法庁は……お前たちのために、土地を用意しようとしていた」
「その言葉は聞き飽きた……！　いったい何年待ったと思ってる……！」
「当時は戦乱が広がり、適当な土地がどこにもなかった。だからお前の弟は、戦乱を鎮め、民のために土地が早く用意できるよう……俺の従士となることを志願した」
「それを……その弟を殺したのは、誰だ……」
「あいつは……お前の仕掛けた争乱を止められないのを悟った。だからわざと蜂起の中核となって武器を配り、みなの前で俺に斬られた。みなに降伏を呼びかけるために」
「なにを……貴様」

「同胞を救うために自分が死んだ……俺も、あいつを斬るまで、それに気づかなかった」
「貴様っ、たわごとをぬかすなっ……！　そんなに自分のしたことを責められるのが嫌か！　貴様に葬られた死者の全てが、貴様に感謝しているわけではないぞ！」
「ナデッタの民が武器を求めたとき……お前の弟がどうすれば良いか教えてくれた」
サガが沈黙した。荒い息を零しながら、かつて自分の民が鎮圧されたときと、ナデッタの騎士団が離脱したときの状況を照らし合わせているようだった。確かにそっくりだった。しかも今回は一人の死者も出さず、その上、サガの罠を破る策さえ施していた。
「情報の後半部分を教えてやる。あいつは最期に、兄に伝えて欲しいと俺に言った」
ジークが言った。荒い呼吸音だけが、しばらく響いた。やがて、サガが訊いた。
「なんだ。あいつは、最期に、何を言った……」
「戦火で滅んだものを、戦火で取り戻そうとするのは、もうやめてくれと……」
「嘘だっ！　嘘をつけっ！　あいつは俺に協力したんだぞ……！」
「戦火で取り戻そうとすれば、こうなる……そう告げ、あいつは死んだ。そして民は、あいつの意志を理解し、武器を捨てた。罪を償い、いつか新たな土地を得るために」
サガが、息を詰まらせた。喘ぐような息が、強い震えを帯びていた。
「あの争乱の後、あいつとの血縁関係を隠したな……全ての罪を、弟に着せて。あの後、

俺はお前を探したが、見つからなかった。サガ・トルホーズ……これは偽名だな」
「……そうだ」
サガが呻いた。ジークは、かつて自ら斬った従士の名を口にし、サガの本名を口にした。
「そうだ……その通りだ……それが俺の情報の後半部分だ……」
ふいに、しゅっと音がした。携帯用の小さな獣油ランプに火がともり、闇を払った。
壁一面に、サガの血が塗られていた。その血から真っ赤な気泡が生じ、びっしりと壁を埋め尽くしている。サガの血の色をした泡は、壁にも天井にも広がり、洞窟の奥でうずくまるサガの全身を覆っていた。その有様にジークは鋭く目を向け、言った。
「聖汽雷か――」
「貴様がこれを見て、おたおたするのを期待したんだがな……。本当に嫌な男だ……。さあ……最後の勝負だぜ、ジーク・ヴァールハイト。お前の力で……これを防いでみろ」
「お前の弟は……お前に、こんなことを望んではいない」
「弟に謝りに、あの世へ行くのさ……。付き合ってくれよ……なぁ」
ジークが目を細めた。その左腕に雷花が閃くのを見て、サガが微笑した。
「すまんな……。他に、帰り道が見つからないんだ……」
ジークが初めて見る、サガの本心からの明るい笑顔だった。その顔のまま目を閉じ、

「帰りたかったよ……もう一度、故郷に」
そして、全ての気泡が炸裂した。

8

「なーんで、あんたがここにいるのよぉ。狼男も、なんでそれを知ってるのぉ」
アリスハートが言うと、岩縁に腰掛けたトールの顔に、やや苦いものが浮かんだ。
「本当に……なぜ知っているのでしょうね。私が、まだまだ未熟だということですね」
「ふぅん。レオニスは元気ぃ？　ちゃんと領主やってる？」
「ええ。立派に責務をこなしておられます」
「良かったわね。あんたもこんなとこに居ないでレオニスのそばにいてやりなさいよ」
トールは、こっくりうなずいた。正直いって今すぐにも故郷に帰りたい気分なのだ。
「それにしてもひどい格好ねぇ。どうやったら転んだだけでそうなるのよぉ」
ええ、まあ、とトールは微妙な表情で言葉を濁した。あの気泡の直撃を何とかかわしたものの、手足に火傷を負い、民にまぎれるための衣服の袖がぼろぼろになっている。
「なんだか爆発したみたいよぉ。ここら辺って、爆弾でも埋まってるのかしらねぇ」
アリスハートが冗談めかして言った瞬間——すぐそばで洞窟が木っ端微塵に爆発した。

鋭い岩の破片が洞窟の入り口から奔流となって吐き出され、岩壁に亀裂が走り、あっという間に洞窟全体が崩壊するさまに、アリスハートとトールが呆気に取られた。
「ちょ……ちょ、ちょっとぉっ！　狼男ぉーっ、生きてるーっ？　おおーいっ！」
アリスハートが慌ててふためいてなすすべもなく飛び回る。トールも呆然として瓦礫に埋め尽くされた洞窟を見つめた。ふいに、また凄い爆音とともに瓦礫が吹き飛んだ。中から四つの爪を持つ魔兵が一体、現れた。そのすぐ後からシャベルを担いだジークが出てくる。
「お前が、守ってくれたのか……」
ジークは、その甲魔に向かって誰かの名を呼んだ。アリスハートもトールも知らない名である。ぼろぼろと甲魔の身が崩れ落ち、その身から、ふわりと光が昇った。かつて従士だった男の最後の魂のかけらが天へ解き放たれるのを、ジークは目を細めて見送った。
「ちょっと、大丈夫ぅ？　もぉ、こういうのを墓穴を掘るっていうのよぉ、狼男ぉ」
アリスハートが賢しげに説教する。ジークは真面目にうなずきながら、トールを見た。
「レオニス・ジェルミナルが、お前をここに派遣したな」
アリスハートがきょとんとなった。トールは無言で佇んでいる。
「なぜ、今回の件に加担した」
「全ては、ロムルス様が亡き後の、聖地シャイオンを守るため……」

トールは、ジークの鋭い眼差しを穏やかに受け止め、懐からそっと書類を取り出した。
「ある者の出生に関する、情報の後半部分です」
そう言って、自分の足下に書類を置いた。それから、何歩か下がって、ジークを見た。
ジークは、ゆっくりと血で濡れたその書類に歩み寄り、そっと拾い上げた。
「これに書いてあったことを……読んだのか」
「ある者たちの血のつながりと……血がつながらざる者たちについて」
訳が分からず黙り込んでいるアリスハートにあえて目を向けずに、トールは言った。
「ある女が、騎士と結ばれ、もうけた子のことか」
「はい。騎士は死に、母子が残され……そしてその子もまた、流行病で死にました」
トールがこだまのように感情のない声で告げると、ジークは、かすかに目を見開き、
「我が子が死んで……女は、騎士が死んだ戦場へ赴いたのか……」
「はい……おそらく夫と子に先立たれた女性は、自らも戦場で命を落とすことを願ったのでしょう。そして女性は……戦火に襲われた街の〈銀の乙女〉の施設におもむき、そこで、ある一人の幼子を救っております」
「その子が……姉か」
「はい……弟を残して預けられた子です。女性はその幼子を後方の〈銀の乙女〉に預けよ

うとしました。ですが戦火が広がり、女性自身がその幼子を守るしかありませんでした。女性は幼子を抱いて戦うことを選び……戦場を制覇しました。そして戦いののち、その幼子を、我が子として育てることを〈銀の乙女〉に誓っております」
「その子を育てるために……生きることを選んだか」
「はい。女性がその子を救ったように……その子が、死ぬつもりだったであろう女性を救ったのでしょう。そしてそれ以後、女性は、その子を我が子のように育てました」
トールはそこで、口をきった。アリスハートが感心して、ふぅんと声を上げた。
「なんだか良い話ねぇ。あんたの知り合いなの？」
トールはかぶりを振って、ジークを見つめた。
「誰にも関係のない話です。たまたま面白い書類を拾ったのでお見せしただけ……」
「確かに……お前も俺も、すぐに忘れてしまう話だ」
ジークが言うと、トールは感謝するように頭を垂れた。そして再び顔を上げ、
「古い話とは関係のないところで、私は、あなたの前に、正面から立つつもりです」
そう告げていた。憎しみや恨みはなく、純粋な憧れに等しい言葉だった。
「いつでも試せ」
淡々とジークが返すと、トールの顔に、安堵にも似た微笑が浮かんだ。

「なぜ、お前の主人はドラクロワと同盟した？」
「……そうした質問に答える権限は、私にはありません。ただ……たとえあなたとの敵対を選んだとしても、レオニス様は決して、ノヴィア様まで敵視することはありません。どうかレオニス様をお恨みなさらぬよう……ノヴィア様に、お伝え頂けないでしょうか」
「……敵対？」
ぽかんとなるアリスハートをよそに、ジークは静かに言った。
「このチビが、うまく伝えるだろう。お前たちは、あくまで俺を狙えばいい」
「ちょ、ちょっと待ってよぉっ。あんたが敵って、どういうことよぉ」
アリスハートが慌てて呼びかける。だがトールは頭を垂れ、すうっと後方へ退くと、
「さようなら、アリスハート。またお会いしましょう」
そのまま影のように、音もなく背後の岩地を乗り越え、行ってしまった。
「こらぁっ、ちょっと待ちなさいよぉっ。ノヴィアにどう説明しろって言うのよぉっ」
アリスハートが急いで飛んでいってその姿を探すが、完全に気配を絶って消えていた。
「ねぇっ、トールたちが敵になるって本当？　ドラクロワって奴の味方になるの？」
「さもなければ、あいつらがドラクロワと戦うことになるんだろう」
「そ、そんなぁ……。どうすれば良いのよぉ……」

「俺が、ドラクロワを止めれば良い」
ジークは即答すると、トールが去ったのとは逆の方へきびすを返した。
アリスハートは宙を舞いながら、ほとんど初めてすがるようにしてジークを追っていた。
「頼むわよぉ、狼男ぉっ」
ジークは無造作にうなずき、書類を懐に収め、その場を立ち去った。

気づけばノヴィアは見知らぬ森の中を、どこかへ向かって歩いているところだった。
木々の間に大きな湖が見えている。やがて白い可憐な花に囲まれた小さな家が現れ、自分はここに帰って来ようとしていたのだと急にノヴィアは思い当たった。
自然と足が速くなった。家のドアに駆け寄り、急いでそれを開いた。家の中に誰かがいた。そして自分と同じ淡い紫の目を向けてきた。その誰かが、微笑みを浮かべて言った。
「お帰りなさい、ノヴィア……よく頑張ったわね」
ノヴィアは立ち止まり、じっと相手を見つめた。涙が浮かび、言葉がつまった。すると相手が歩み寄り、そっと抱いてくれた。それで、やっと言うべきことが口をついて出た。
「……ただいま、お母さん」
その瞬間――ノヴィアは、はたと目覚めた。

ぱちぱちまばたきした。風景が揺れながら動いている。目がおかしくなったのだろうか。
なんだか自分も揺れているみたいだ。何か夢を見ていたような気がしたが思い出せない。
ふと誰かに抱かれているのに気づき、ようやく自分がどこにいるかを理解した。
「カヤさん！」
「寝ていても良いのだよ。民のために力を貸してくれて、本当にありがとう」
カヤが優しく言った。ノヴィアはかぶりを振って、姿勢を正した。とはいえ横乗りになってカヤに抱かれているのだから、あまり体勢は変わっていなかったが。
「もうすぐ着くはずだ。セグレブの民に、新天地への道を案内してもらっている」
見ると、鮮やかな衣裳の一団が、ナデッタの騎士団を先導している。
「ジーク様は……」
「後から来ると仰っていた。アリスハートも、ジーク殿と一緒だ」
「アリスハートが、ジーク様と一緒に……？」
なんだかおかしな構図だと思ったが、ノヴィアはそれで安心した。わざわざアリスハートをつれて危険な場所へ行ったりしないだろう。そう思いながら、峡谷の風景を見た。
万里眼は使わず、ただその目で見た。それが新天地に対する礼儀のような気がしていた。
「早く、マイアの地が見てみたいです」

「マイア……?」

「あ……新天地の名前です。エノルさんが、みなさんに提案したんです」

カヤは優しく微笑した。その名がエノルの母のものであることを知っているのだろう。

「エノルのやつめ、東方の地と、もとは朝陽を意味する古い言葉とをかけたな」

「はい。あの……実は、カヤさんがいらっしゃらなかったときに……」

ノヴィアはそこで、カヤに、領主ランドの死を告げた。

「安らかな死に顔だと……エノルさんはおっしゃってました」

「そうか……。エノルも辛かっただろう。そんなときに、不在であったとは……」

「カヤさんたちは、ジーク様の策の通り行動したんです。カヤさんは悪くありません」

「……ありがとう。アリスハートにも、そう言われたよ」

少し寂しげに笑うと、凛として背を伸ばし、カヤは開けてきた峡谷と向き合った。

「じきに着くな」

ノヴィアもちょっと緊張した。やがて急な坂を上り、ノヴィアとカヤは、それを見た。

広々とした草地が鮮やかにノヴィアの目を打った。それほど豊かなわけではないが、先ほどまでの岩地に比べて格段に緑が多い。遠くに湖が見え、なだらかな丘が続いている。

その湖の方へ近づいてゆくと、やがて、大勢の人間が宿営しているのが見えた。

カヤがどきっとするのが、ノヴィアにも分かった。そっと手綱を握る手に触れてやると、カヤがこちらを見た。ノヴィアはにっこりと笑った。カヤも少し照れたように笑った。
そして心もち馬を速めながら、こちらへ歓声を上げるナデッタの民へと近づいた。
「ありがとうございます、カヤさん。ここで降ろして下さい」
ノヴィアは言った。これから再会を果たすカヤのそばにいるのが悪い気がしたのである。
カヤが馬を止め、ノヴィアが降りた。そして、ふと思い出して、こう訊いていた。
「カヤさん、最後にエノルさんに会って、別れたとき、何て言ったんですか？」
「最後に……？」
「あの……カヤさんが、エノルさんを引っ張っていって……」
カヤの顔がみるみる真っ赤に染まってゆくのを見て、ノヴィアは、はたとその後の二人の様子を思い出し、しまったと思った。
「み……見ていたのか。お主……私が、エノルに、その……」
「あ、あの、す……すいません。少しだけです、ちょっとだけ……」
「ま、まあ良い……。おおかた哨戒の際に、偶然、見てしまったのであろう……」
ノヴィアが慌ててうなずく。カヤは、ごほんと咳払いして、自分よりずっと年下のノヴィアの手前、しいて何でもないことのような顔を装い、言った。

「私の尻を本当に叩ける男は、お前しかいないと……私を信じてくれと、そう言った」
ノヴィアは目を丸くし、そして妙に嬉しくなって、くすっと笑った。
何ともカヤらしかった。そう言えばカヤがナデッタの民から去るときも、似たようなことを言っていた。あれは、自分を信じてくれというカヤなりのメッセージだったのだろう。
「……余計なことを思い出してしまったではないか」
ますます顔を赤らめながら憮然とするカヤに、ノヴィアは満面の笑みで言った。
「呼び止めてしまって、すいません。エノルさんが、待ってます」
カヤは唇を引き結んでうなずいた。すっかり先へ行ってしまった騎士たちを追おうとし、
「――カヤっ！」
いきなり大声で呼ばれ、ぎょっと身をすくませた。
エノルが駆けてきてカヤの前で立ち止まり、荒い息を整えた。そして静かに顔を上げ、
「お帰り、カヤ。ここが俺たちの、新しい故郷だ」
そう言って、にっこりと笑った。カヤは咄嗟に言葉を失い、馬の手綱を握りしめ、
「ただいま……エノル」
やっと、そう言った。エノルが差し伸べる手を握り返し、ゆっくりと馬から降りる。
ノヴィアは、今度はちゃんと二人から目を離し、ナデッタの民の方へ歩いていった。

「お父上が亡くなられたと……ノヴィアから聞いた。そばにいてやれず……すまない」
「良いんだ、カヤは悪くない。ジークが、俺の想像以上の悪党だったってだけさ」
「みな、同じことを言うんだな」
カヤは少し呆れたように笑った。その目に、みるみる涙を溜め、顔をしかめた。
「ずっと……お前達を、民を守りたいと思っていた。だがどう守れば良いのか分からなかった。それを、あの男が教えてくれたのだ。ジーク・ヴァールハイトが……」
「偉いな、カヤ。負けず嫌いのくせに、あのとき、わざとジークに負けたんだ」
カヤが、くしゃっと泣き顔になる。泣きながら笑い、そして、小さくかぶりを振った。
「私からの条件だったのだ。本気で手合わせして欲しいと。信じられぬほど強かったよ。ジーク殿が手加減してくれなければ、私は、真っ二つに斬られていたな」
「俺だったら、あっという間にカヤに八つ裂きにされてるさ。でもね、カヤ」
「なんだ、エノル」
「なぜ、俺に黙ってたの？」
「そ、それは、ジーク殿の指示で……ラ、ランド様もご承知の上だったのだ。みなの怒りを、まとめて私たちが引き受けるために、その……」
「民と仲の良い俺が、みんなに賛成して、剣を持つ可能性があると思ったんだろう」

「そ、そうだが……私はむろん、その……お前を信じていた。だが……あのときお前が土地の領主との交渉の中心にいて、武器を運ばせている可能性もあると、ジーク殿が……」
「馬鹿馬鹿しい。ジークめ、本当に悪党だよ。俺がどんな思いをしたと思ってるんだ」
エノルがそっぽを向く。カヤが慌ててエノルの両手を握り、
「す、すまん……」
言い募るのへ、エノルは急ににこっと笑うと、顔を寄せて、相手の口を塞いだ。
そのまま動きを止める二人を、一人で歩いてゆくノヴィアがちらっと振り返った。
ちょっとどきっとなったが、すぐに自然と微笑が浮かんでいた。
「良いなぁ……」
小さく呟いて前を向いた。羨むことなんてないというエノルの言葉を思い出しつつ、
「早く大人になりたいなあ」
夕暮れの空を見上げながら、大きな声を上げているノヴィアだった。
新天地に辿り着いた喜びの声が果てしなく続く中、騎士団がナデッタの民と合流した。
さっそくチリング司祭がノヴィアとともに、セグレブの民の代表と自己紹介していると
ころへ、エノルとカヤがつれだって戻ってきた。

「おお、エノルよ。こちらが我らの新しい隣人の方々じゃ。粗相のないようにな」
チリング司祭が勿体ぶったように言う。
エノルは笑って、セグレブの民の代表であるという年配の男が差し出す手を握り返した。
「ナデッタの民の領主、エノル・ディオンです。我々を隣人と認めて下さるのですか」
男は軽く握ったつもりなのだろうが、エノルがびっくりするほど力強く手を握りしめ、
「得難き隣人として迎えよう、エノル・ディオン。聖法庁の民は、我々を凶暴な人間のように言うが、我々は決して自分たちを守る以外には戦わない」
「ですが我々がここに住むことが、あなた方の土地を奪うことになるかもしれません」
エノルはあっさり言って、チリング司祭やカヤをぎょっとさせた。だが男は微笑み、
「故郷を失った者よ、ここに根付くがいい。大地が平等であることを、お前は苦難の旅で知ったはずだ。私とお前、我が民とお前の民は、良き隣人、良き兄弟になれるだろう」
「俺が知ったのは、地面と人間が、実は一つのものだってことだけですよ」
そう返すと男は笑ってさらに強く手を握りしめ、エノルは危うく悲鳴を上げかけた。
「そうだ。大地は誰の者でもない。我々が大地のものなのだ。大地に降りかかる災いは、大地のものである我々に降りかかる。苦難の果てに辿り着いた者よ、この地の名はあるか」

「マイアと呼ぶつもりですが、あなたたちが別の呼び方をするのを拒む気はありません」
「その言葉は知っている。良い名だ。確かに我々は別の呼び方をするが、お前たちがこの地につける名を拒むつもりはない。この地で最初の死者を葬り、最初の赤子を生むように、大地に最初の名をつけるがいい。お前たちはここで生きてゆくのだから」
エノルがうなずくと、ようやく手を離された。痺れる手を握ったり開いたりしながら、
「では、この地で最初のお祭り騒ぎに、ぜひご参加下さい」
にっこり笑って、エノルは言ったものだった。

「やれやれ、エノル様ときたら本当に蛮族まで食事に招いてしまいなさった」
御者長のドナ爺は民の代表者たちと、そう言って呆れたように笑い合っている。
澄み切った透明な夜が降り、ナデッタの民とセグレブの民がともに火を焚き、騒ぎ合う中、ノヴィアは一人、ジークとアリスハートがやって来るのを待っていた。
「故郷か……」
草原に腰を下ろし、なんだか遠いものでも見るように、お祭り騒ぎを眺めた。
まだまだ何もかもがこれからの土地だった。建物など巡礼者用の小屋くらいしかない。
街も耕地もこれから築いてゆくしかないのだ。まだ援助物資がなければやっていけない

だろうし、本当に暮らしていけるのかも分からない。なのに――みなが喜んでいた。
帰属すべき場所を勝ち取り、苦難の旅を果たし、どんな祈りの言葉よりも強い気持ちをこめて祭りの歌を歌っていた。ともに旅したナデッタの民が、新天地を得たことは心から嬉しかった。だが嬉しさが強ければ強いほど、自分には帰属すべき場所が無いことがひしひしと感じられた。これほど自分に故郷がないことが寂しいとは、思ってもいなかった。
「どうした、ジークの従士よ。みなとともに楽しまぬのか」
セグレブの民の代表である男が、ふいにノヴィアに近づいてきて声をかけた。
「みなさんがここに着いたので……私は去らなければならないんです」
ノヴィアは男が親しく声をかけてくるのに驚きつつ、ついつい寂しさを吐露していた。
「私の居場所は、ここにはありませんから……」
「お前の主のように、大地をお前の居場所とするがいい、命の架け橋を見た者よ」
男が沁みるような声でそう言った。ノヴィアの力のことをはっきりと理解しているのにまた驚いた。そしてふと、男が、ジークのことを親しげに呼んでいることに気づいた。
「ジーク様をご存じなのですか？」
「以前、この近辺の騎士団と我らが相まみえたとき、ヴィクトール・ドラクロワ卿と、ジーク・ヴァールハイトが、調停に立ってくれたことがあった」

ノヴィアは呆れ返った。ジークはそんなこと一言も告げていないのだ。
つくづく、ジークのことを策士とか悪党とか呼びたくなる他の者の気持ちが分かった。
「ジークは、大地を通して怒りの霊をあらわす火と風の使徒だ。あの男は故郷を失った。そして全ての大地が、あの男の故郷となった。だから怒りの霊は、あの男のもとに集う。人が大地から来て、大地に帰ることを、よく知っているがゆえに」
「私も、ジーク様のようになれるでしょうか……」
いつかジークが地図を眺めているときに感じた、途方もない孤絶感を思い出しながら訊いていた。とてもあのように大地と一体となることは自分には無理のような気がした。
「ジークのようになれないということは、そなたには帰るべき土地があるということだ」
「私に、帰るべき土地が……？」
「一つの場所を故郷とするか、大地全てに身を捧げるか……それは人の意志で決まるものではない。大地から与えられる役割に従うがいい、遥かなる眼差しを持つ少女よ」
ノヴィアは何となく男の言葉に圧倒されたようになってうなずいた。大地から与えられる役割――母から教えられた、自分が生まれたという場所以外にも、帰るべきところがあるというのだろうか。途方もない課題を与えられたような気がして呆然としたとき――
わあっと民の間から歓声が沸き起こった。ある名前が連呼され、ノヴィアは思わず立ち

上がって、その姿を探していた。その必死な様子に、男がしみじみと微笑していた。
間もなく、ジークがアリスハートをつれてやって来るのを、ノヴィアはじっと見つめた。
ジークもアリスハートも、真っ直ぐに自分のもとへ向かって来る。それがノヴィアの中で、先ほどまで感じていた寂しさや、途方もない課題への気持ちを、綺麗に消していた。
従士として以上に、自分は、ジークからどう思われたいのだろう――
いつか疑問に思ったことが、そのときノヴィアの中で、ある答えとともに甦ってきた。
具体的には、まだ分からない。ただ、帰って来て欲しいと思う。お互いがいる場所へ。
どこにも帰る場所を持たない自分が持つことの出来る、最高の望みがそれなのではないか。
そう――従士として以上に、自分は、この言葉が言える存在でありたいのだ。
「お帰りなさい、ジーク様、アリスハート」
ノヴィアは、微笑んで言った。ジークはちょっと意外そうに立ち止まり、
「……ああ」
憮然としたように、白外套についた砂埃をはたきながら、返したものだ。
「ただいまぁ、ノヴィアぁ」
アリスハートが元気いっぱいに応え、そのままノヴィアの肩にふわっと舞い降りた。
ジークは、そのまま男に向き直り、丁重な口調で言った。

「セグレブの民の助力が得られたことを、重ねて感謝する」
「良いのだ、火と風の使徒よ。良き隣人を紹介してもらい、こちらこそ感謝している」
　そして、民が運んできた食べ物や飲み物を受け取るジークに、男が静かに告げた。
「ここ数年、我々を、古い知人が訪れるのは、お前で二人目だ」
「……来たのだな？」
　ジークもまた、草原に腰を下ろし、低く淡々とした声で訊いた。さっそくがっつくアリスハートの傍らで、ノヴィアが何のことかと思って二人の話を聞いていると、
「ヴィクトール・ドラクロワ卿が、来た」
　男は、そう言ったのだった。ノヴィアが驚いて目を見開いたが、ジークは既に予期していたらしい。しばらく無言で飲み物に口をつけていたが、やがて呟くように、こう訊いた。
「あなた方が、聖印を自ら捨てたことと、関係があるのか？」
「そうだ。我々は久方ぶりに、彼に宿と食事を分け与えた。そして我々に伝わる様々なことを話し合った。彼が心に抱くことと、我々に伝わることは、とても良く似ていた」
「似ている――？」
「我らの言い伝えでは、聖印と聖法庁とは、大地から人を刈り取るための鎌だという」
「……人を刈り取る？　どういうことだ？」

「はっきりとは分からない。我らは大地と直接結びつくことを選び、聖印を欲さなくなった。ドラクロワがいかなる真実を心に抱いているかは、お前自身で明らかにするがいい。火と風の使徒よ……彼と真の再会を果たすとき、おのずと全ては明らかになるだろう」
ジークはうなずいた。男の言う通りだった。それが、ジークの旅の全てなのだから。
ノヴィアが見守る中、ジークは遠い眼差しを、遥か彼方の大地に向け続けていた。

9

レオニスは、机の上に広げた大量の書類をじっと見つめていた。大半がトールからの報告である。中にはサガや、レオニスが独自に持つ情報網からの報告もあった。
どれもこれも、信じられないことばかり書いてあった。
ジークが一人で撃退した兵数を計上し、レオニスは頭のてっぺんから指先まで痺れたような衝撃を覚えた。全ての放った策と、費やした労力を思い返し、ただ呆然とした。
しばらく何も考えられず、ぼんやりとテラスの窓から聖地シャイオンの湖を眺めていた。
やがて、ゆっくりと車椅子の車輪を回し、円卓の方へ近づいた。
ナデッタの街のあった場所から新天地へ至るまでの地図に、無数の針が突き立っている。
その新天地に至る少し前の場所に、紅い針に貫かれた、黒い蟻がいた。

「……お前が求めていたものは、手に入ったのかい」
レオニスは、そっと黒い蟻に声をかけ——地図から引き抜いた。そして相手が痛みを感じるものであるかのように妙に注意深く、黒い蟻から、紅い針を抜き取った。
そのままクズ籠へ放るか、テラスから投げ捨てるかしようと考えるうち、ふと黒い蟻と目が合った気がした。つくづく器用に作ってしまったものだと我ながら呆れた。ここまで精巧に作る必要なんかないのに。ただの紐かなんか巻いておけばよかった。
そう思いながら、黒い蟻を、さも仕方なさそうに、ぽんと地図の上に置いてやった。
トールからの報告によれば、どうやらマイアと呼ばれることになりそうな土地の上に。
「よく歩いたな。這いずり回って手に入れたのが、そんな荒れ地でがっかりしたろう」
レオニスが皮肉っぽく声をかけると、黒い蟻はこう返してきた気がした。
(良いところだぜ、お前も早くここまで来いよ——)
くすっとレオニスの口から笑い声が零れた。苦笑しようとして、ふいに目蓋の裏に熱いものが込み上げてきた。咄嗟に手で口を押さえ、嗚咽を嚙み殺した。
「僕は……そこには行けないんだよ……」
微笑して言った。涙が溢れ、頬と手を濡らして雫となって落ちていった。
黒い蟻は、じっと静かに、そのレオニスを見つめているようだった。

トールが旅の埃をすっかり洗い落とし、久しぶりに聖地シャイオンの城にのぼったとき、レオニスは、顎に手を当てたまま、机の上の書類に目を通していた。
トールが近づくと、レオニスは、はっと顔を上げた。本当にそこに相手がいるのか何度も確かめるようにまばたきし、やがて、少年らしい笑顔がぱあっと花咲くように広がった。
「――トール！　お帰り、トール！」
その声と笑顔に触れて、トールはようやく、帰ってきたという気になったものだ。
「ただいま戻りました、レオニス様」
「無事で良かった……本当に……。報告で、お前の安否は知っていたけど……」
そう言いつつ、トールの手に巻かれた包帯を見やって、気遣うような目になった。
「浅手です。サガ・トルホーズが、こちらの条件を逸脱しようとするのを止めました」
「ノヴィアだね――万里眼を封じる、一番乱暴な方法を使おうとしたんだな」
レオニスが眉間に皺を寄せて言う。トールはうなずき、ちらりと書類の束を見やった。
「申し訳ありません。ナデッタの民は、無事に新地に辿り着いてしまいました」
「分かってるさ。ジークが一人で撃退した兵数がどれくらいか、想像がつくかい？」
「はい。戦場をこの目で見ました」

「羨ましいな。僕にはとても信じられないよ。あれだけの数を一人で撃退するなんて。ジーク・ヴァールハイトは、間違いなく怪物だよ」

レオニスがどこかはしゃぐように言う。トールはややほっとした。ナデッタの死者は、実にたったの一名なのである。しかも病気による衰弱死であり、兵は文字通り指一本ナデッタの民に触れることは出来なかった。そのことでレオニスが怒り狂っているのではないかと不安だったが、むしろジークへの賛嘆の方が強いようだ。

「これほどのものを見せられると、たとえ敵でも感心するしかないよ」

だがはっきり敵と口にしつつ、レオニスは笑って言った。トールもかすかに微笑した。

そのトールが、ふと机の上の黒い虫に気づいた。つまんでテラスから捨てようと手を伸ばし、それが良くできた作り物であるのを悟った。よくよく見ると、地図の一部を切り取ったものの上に糊づけされて乗っている。ちょっとした飾り物といったところだ。

「よく出来ているだろう。僕が作ったんだ」

レオニスが微笑んで言う。トールはうなずきながら、しげしげとその黒い蟻を見た。切り取られた地図には文字がなく、地名は分からない。黒い蟻はまるでここが自分の巣だとでもいうように、やけに偉そうに脚を踏ん張らせて、こちらを見ている。

「さ、旅の様子を話してよ。報告書だけじゃ分からないことを、全部聞かせて欲しい」

旅人の話を聞きたがる子供のようにレオニスが訴えるので、トールは虫から目を離した。
そして、ジークがいかにして罠を次々に見破り、対処していったかを一つ一つ話した。
ノヴィアやアリスハートがどのように働いたか、エノルや領主ランドのことや、カヤとナデッタの騎士団の様子、チリング司祭という変わった司祭がいたことを話した。
そして、ナデッタの民が故郷を失った苦しみや、旅の苦難など、民に混じって聞いたことや、旅の過程でこうむった様々な嫌がらせや妨害なども、包み隠さず話していった。
と全てを話した。大量の死者を出し、多くの負傷者を置いて行かなければならなかったこと
レオニスは真剣に聴きながら、ときおり両手をぎゅっと握りしめた。幻の熱の痛みに顔を青ざめさせながらも、トールが話す事柄を心に刻み込もうとしているようだった。
やがて新天地を前にしてノヴィアが橋をあらわし、エノルが先頭に立って渡ってゆく辺りになると、両手の痛みも鎮まったのか、レオニスは静かに聴くようになっていた。
そればかりか、徐々にその目に、明らかな喜びの輝きさえやどってゆく。
トールは、ナデッタの騎士団が蛮族とともに帰還し、ジークが兵団を撃退するのと平行して、自分がサガを負傷させ、ジークがそれをしとめたことを話した。
トールが唯一話さなかったのは、サガの自爆の後、ジークとかわした会話だけである。
それだけは、何があっても誰にも話す気はなかった。おそらくジークもそうだろう。

レオニスとノヴィアが姉弟であることを知るのは、トールとジークだけで十分だった。
トールは、ナデッタの民が新天地に辿り着くのを見届けぬまま帰還したと告げ、
「残念でした。彼らが新しい故郷を手に入れるところに立ち合えなかったのは」
「故郷……。民のみんな……そんなに喜んでいたの……？」
レオニスは神妙な顔でそう訊いた。トールはこくっとうなずき、
「私も、彼らとともにいるうちに自分が故郷に戻れなくなるのではと不安になりました。不思議なことに、すぐに帰りたいという気持ちが、どうしても消せないのです」
「帰りたい……そういう気持ちは、僕にはあまり無い。だって、そもそも、どこにも行けないんだから。でも……帰りたいという気持ちは、きっと……とても大事なものなんだ」
レオニスは、そっと机の上の花瓶から白水仙を手に取り、
「僕はこの花の伝説のように、この場所に縛られている。でも、みなにとって……ノヴィアにとっても、帰りたいと思うことは、きっと大事なことなんだ」
まるで長いこと探していた謎の答えを、ようやく見つけたかのように言ったものだ。
トールは正直、驚いていた。ナデッタの民の話をすればするほどレオニスは不思議な喜びを見せた。何がそれほど嬉しいのか、咄嗟に分からなかった。
「さっきまで両手を切り離したくなるくらいの痛さだった。でも、答えが分かった途端

……熱も痛みも、薄れていった」
レオニスはそう言って花を膝に置き、自分の手で車椅子の車輪を回してテラスへ出た。
「一つだけあった……。こんな当たり前の場所にあったんだ。僕が守り、与え、もたらすものの中で、たった一つだけの良いものが……」
静かな眼差しで、そこに広がるものを見つめた。
トールも、ひっそりとそのレオニスの傍らに立ち、同じものを見た。
広大な耕地を、豊饒の地に栄える街並みを、鏡のように澄み切った湖を——初夏の薫りとともに艶やかに咲く花のようなその聖地シャイオンの風景を、ひた向きに見つめながら、
「君に……故郷を与えたいんだ、ノヴィア」
レオニスは、ありったけの愛しさをこめて、そう囁いていた。

Epilogue　信じるゆえに

出発のとき、ノヴィアはこれまで感じたことがないほどの辛さを感じた。ともに歩んできた人々と別れることが本当に悲しかった。聖法庁から新たな任務の書状が届けられ、マイアの地を立ち去るジークたち一行を、ナデッタの民が総出で見送ってくれた。

「次に来たときは、あのぼろ小屋が、くそ豪勢な聖堂になっとることじゃろう」

チリング司祭はそう言って、聖印の保管場所にしている巡礼者の小屋へ顎をしゃくった。その体に刻まれた聖印の半分近くが既に、聖法庁から届けられる金属盤に移されており、

「苦痛が日に日に消えてゆくのはせいせいするが、ちと寂しい気もしないでもないわい」

チリング司祭は剛毅に笑いながら、聖印の力を用いて街や耕地を作る先頭に立っていた。

「ジーク、本当にありがとう。あなたたちをナデッタの民は決して忘れないでしょう」

エノルは、いつものように親しげで、真意のこもった口調でジークに礼を述べている。

「あなたに、ここにいて欲しいと何度も思いました。あなたと我々の旅が違うものなのは分かっています。でもどうか忘れないで下さい。ここに俺たちがいるということを。朝陽

の昇る方角には、いつでもあなたを迎える土地があるんだということを。あなたは単に故郷を持たないいんじゃない。沢山の故郷を作る人だ。あなたには帰るべき場所が沢山ある。俺たちはここで、どんな長い夜も必ず明けるときが来ると伝え続けて――」

急に言葉につまった。にっこり笑いながらも、込み上げてくるもののせいで声が出ず、歯を食いしばるエノルを、ジークは静かに見つめた。

「俺も、マイアの地に根づくナデッタの民のことを、決して忘れないだろう」

エノルは微笑み、手を差し伸べた。

「必ずあなたの旅にも夜明けが来ることを俺は信じています」

ジークは、その思いを受け取るようにエノルの手を力強く握り返した。

民の代表者たちが歓声を上げた。二人の手が離れ、民の代表者たちが次々にジークに礼を述べてゆく中、エノルはつとノヴィアに向き合い、

「俺たちの手で、例の橋を作り直す予定なんだけど、みんながノヴィア・エルダーシャの橋と呼ぶんだ。新天地への感謝と喜びを込めてね」

そんなことを言った。ノヴィアは驚きとこそばゆさとで、慌ててかぶりを振った。

「みなさんが勇気を持って渡って下さったから、あの橋が見えたんだと思います」

「ノヴィアさんも、勇気を持って……焦らずにね」

エノルは、こっそり内緒話でもするみたいに言って、ちらっとジークの方に目を向けた。
ノヴィアはきょとんとなり、ついでその意味を悟って、たちまち真っ赤になった。
「わ、私——ジーク様の従士ですから」
「頑張ってね」
にこにことエノルが言う。何かをするというよりも、自分の気持ちと向き合うという意味での励ましだった。ノヴィアもちょっと首をすくめつつ微笑み、小さくうなずいた。
やがて民の代表者たちの挨拶を終えたジークが、再びエノルと向き合った。
「さようなら……ジーク」
寂しさを精一杯こらえながらエノルが言うと、
ジークは短く答え、背を向けた。エノルは一瞬、驚いたようにその背を見つめた。
「また会おう」
「必ず——必ずまた！」
笑顔で叫ぶエノルと民にノヴィアとアリスハートがぺこりと頭を下げ、ジークを追った。
そうして旅立つジークたちに、ナデッタの騎士団が、峡谷を抜けるまで随行してくれた。
「ジーク殿には、戦いのあり方を、民を守るということを教えて頂きました。もし我らの力が必要なときは、いつなんどきでも駆けつけることを誓います」

カヤは言った。騎士団とともに敬礼し、凜とした声で、最後の別れを告げた。
「ご武運を」
ジークはうなずき、悠然と去った。ジークたちの姿が見えなくなるまで、カヤも騎士団もずっとその姿勢のままでいた。ノヴィアは心の中で、エノルとカヤの幸せを祈った。

「――トールったら、きっと何かの冗談で言ったのよねぇ。きっとそうよねぇ」
峡谷から岩道を下りてゆく間、アリスハートがつとめて明るく言った。
「おそらく本当だ。レオニスとドラクロワは、ひそかに同盟している」
だがジークは、ノヴィアにも聞かせるようにそう返した。
ただしレオニスとドラクロワのつながりは、まだ諜報院にもつかめていない。
おそらく聖地シャイオン全体ではなく、レオニス個人がドラクロワと同盟したのだ。秘密を知る者が極端に少ない分、その同盟の証拠をつかめる可能性は、きわめて低かった。
「ドラクロワの協力者は他にも無数にいる。レオニスだけではない」
ジークの目的は、あくまでドラクロワ本人である。それ以外に誰が敵対しようとも泰然と迎え撃つだけだった。だがまさかノヴィアに、そのような達観が得られるわけがない。
「レオニスが……ジーク様の敵に」

アリスハートからトールとのことを聞かされた今も、とても信じられなかった。
ジークは、ノヴィアとレオニスの本当の関係を、ノヴィアにもアリスハートにも話さず、胸の内に封じ込めている。それが、聖地シャイオンの前領主の願いでもあったし、ノヴィアが本当の母と信じる女性の願いでもあったろう。
だがノヴィアは、それを知らずとも既にレオニスのことを弟のように大事に思っている。
そのレオニスとジークが敵対するということは、自分もレオニスの敵になるのだ。
出来るなら今すぐ聖地シャイオンに赴き、レオニスに会って訳を聞きたかった。だが、もしレオニスに敵意を示されたらどうするのか。万が一、その場で戦いになったら――
「私、どうすれば良いんだろう……」
いきなりふって湧いた事態に戸惑うばかりのノヴィアに、
「信じろ」
ぽつりとジークが言った。ノヴィアは何を信じるのかと訊き返そうとして、咄嗟に口をつぐんだ。今さらながら、ジークがかつての親友を追っているということが心に迫ったからだった。ジークの心の痛み、怒りや悲しみが、ノヴィアの胸に突き刺さるようだった。
「信じろ……」
ノヴィアはその言葉を繰り返した。何を信じるのか――全てを信じるのだ。相手を。自

分を。互いの関係を。たとえ裏切られ、戦うことになってもジークはどこかで信じ続けている。自分と相手の真実を見届けるために。そのことがふいにノヴィアの中に満ちた。それで戸惑いや悲しみが消えたわけではない。むしろ戸惑い、悲しむ自分さえも信じるのだ。自分はジークの従士だ――ノヴィアは繰り返しそう思った。ジークの背負うものをもっと理解出来るように。自分もまた同じくらいのものを、きちんと背負えるように。

「信じるかぁ……そうねぇ、敵って言ってもトールったらちっとも怖くないのよねぇ」

アリスハートもまた、そんなことを、明るく呟いている。

ノヴィアは静かに微笑した。そしてもう一度だけ、ナデッタの民のいる方角を――マイアの地を振り向いた。それから前を向き、ジークの傍らをともに歩んだ。

やがて一行が進みゆく先で、遠く新たな道が見えてこようとしていた。

その日――トールが執務室に入ると、レオニスの前に、三人の客が座っていた。

二人が女性、一人が男性である。みな、レオニスが経歴を調べ上げ、多くの人手を使って見つけ出した人材であった。その彼らを、トールが、レオニスの命令で一人一人訪ね、賓客として聖地シャイオンに招いたのだった。

「ようやく、揃った——」

レオニスは静かに呟いた。そして、三人の客に向き合い、凛とした声を放った。

「我々は今、一人の男を追っている。その男を調査する過程で、あなた方の存在を知った。そしてあなた方こそ、その男を追いつめるのにふさわしい人材であると確信した」

三人とも、レオニスの若い威厳を認めるような顔でいる。彼らもまた、それぞれ事情を持ってここに集ったことをトールは知っていた。その事情を、レオニスはこう表現した。

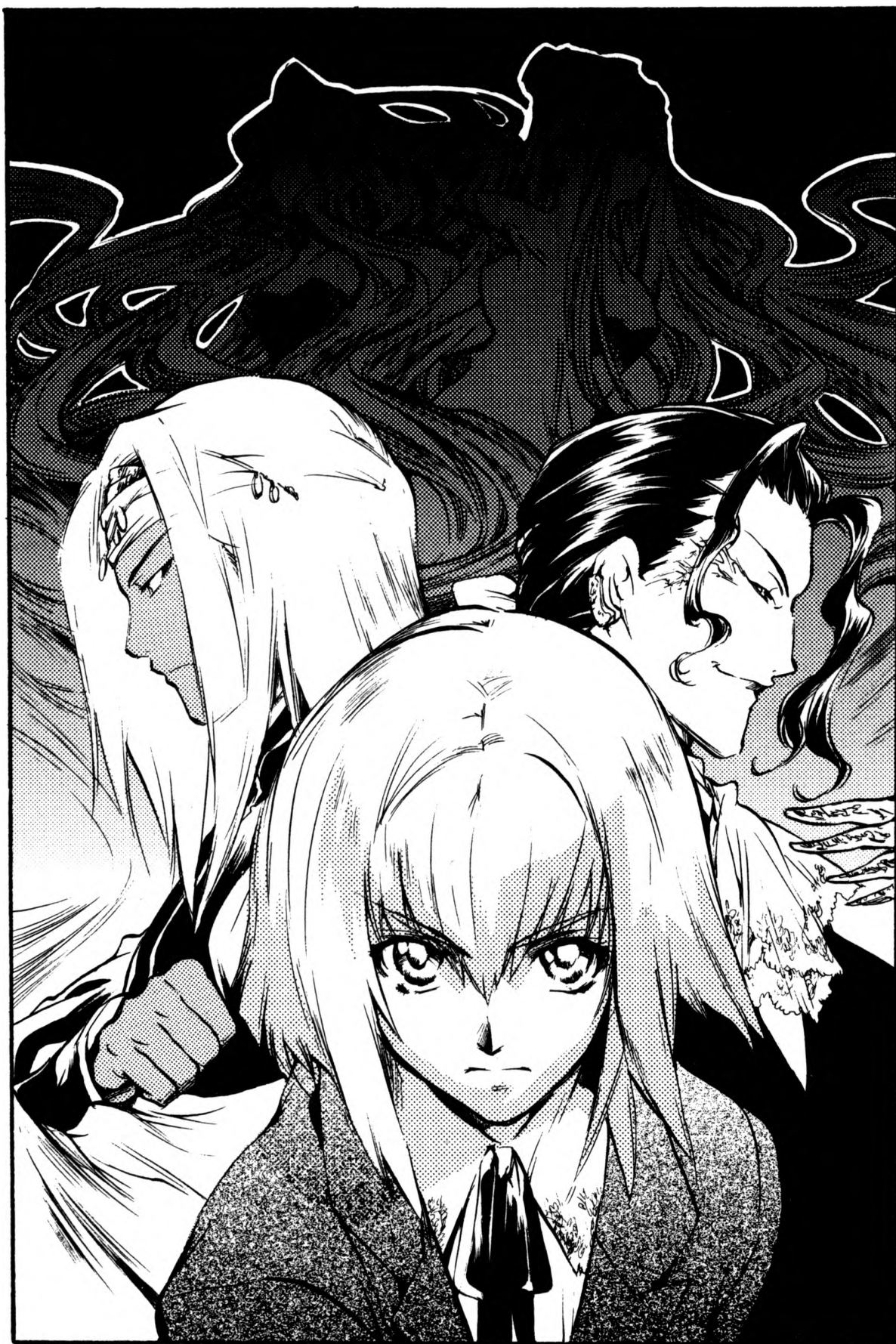
「あなた方は、かつてジーク・ヴァールハイトのもとで命を失った四人の従士と、それぞれ深く関わりがある。その四人の従士のうち一人は、既にその兄であった男が恨みを晴らすべくジークと戦い……力及ばず倒れている」

三人は静かに聞いている。レオニスの支援がなければ彼らはジークの行方さえ分からなかった。また分かったところで、単独で聖王の直属の騎士と戦うすべなどありはしない。

それゆえ、彼らはそれぞれの忘れられぬ思いを抱きながら、日々を送っていたのだ。

「あなた方は、いわば眠れる狩人であった。みな戦う理由をそれぞれに持ち、また全員があの男と渡り合える力を持っている。だが今まで、正当な機会が与えられなかった」

「あなたが、私たちを目覚めさせてくれました……レオニス・ジェルミナル様」

男が、微笑した。レオニスはうなずき、全員を見渡して言った。

「あなた方と、ここにいるトール・ヴュラードをふくめた四人が、ジーク・ヴァールハイトを追う狩人である。聖地シャイオンのレオニス・ジェルミナルが、あなた方がそれぞれの力を発揮し、その切なる願いを叶えられるよう、あなた方の戦いを支援する」

そう告げた途端――レオニスの両手に灼熱の痛みが走った。だがその激痛でさえ、レオニスを止めるには至らない。レオニスは両手を握りしめ、敢然と挑むように言い放った。

「狩人たちよ。あなた方が必ずやジーク・ヴァールハイトを仕留め、その首をもって聖地シャイオンの栄光に、いっそうの輝きをもたらしてくれることを信じている」

すっと男が腰を上げ、柔らかく一礼し、無言のうちにレオニスの言葉を了解した。

二人の女性が立ち上がり、両方とも丁寧にお辞儀をして感謝の意を示してみせる。

トールはひっそりと佇み、いずれ来る戦いのときを何の感情も持たぬ顔で待っている。

その四人を眺め、レオニスは最初の準備が整ったことを確信した。

ジークとドラクロワという、二人の怪物に自分が匹敵するための、最初の準備が。

いつしか、そのレオニスのおもてに、見る者の背筋に冷たいものを感じさせる、あの悽愴の微笑が、ひときわ鮮やかに浮かんでいた。

後書き

初めましての方も、お久しぶりですねの方も、こんにちは、冲方です。

今作で『カオス レギオン』も、ついに四冊目に突入いたしました。

ドラゴンマガジン誌上でも連載が開始され、堂々の新シリーズ開幕といった風情です。

それもこれも読者の皆様の応援の賜物であり、作者としては喜びと気合いが放電するほどの勢いでまたもや大幅に規定枚数オーバーの大花火を打ち上げてしまいました。

なにせ今回は一挙に二万人も登場！

——もとい、そのうちのメインである五人の人物が登場であります。

ジーク、ノヴィア、アリスハート、ドラクロワとともに、前作『01』で登場したレオニスやトールを加え、十一人もの愉快で怖くて笑えて哀しい奴らがひしめく有様です。

本来なら二、三冊に亘って展開するもんなんじゃないかと思いつつ、そこはそれ、ぎゅーと詰まったウブカタ御膳をゆるゆるお召し上がり頂ければと思う次第であります。

とにかく今回のテーマは「行進」なのです。
これはジーク達の旅の当初から、書きたい書かねば書くべしと思い続けていたものでありました。この世界の民の生活や喜びや悲しみはいかなるものか。それらはジーク達が歩む上で避けて通れぬものであり、ぜひ書かせてくれと担当のシバッチユイユイ氏を拝み倒して書かれたのが本書であります。そのときの様子をダイジェストでご覧下さい。

※大まかな物語のあらすじを提出してしばらくしたある日の夜。行きつけの店（まだ三回目だってば）で、結賀さとるさんとシバッチ氏と杯を酌み交わすウブカタ。

シバッチ「テーマは『行進』って……誰かがジーク達と一緒に歩くわけ？」
ウブカタ「歩きますよぉ！　軍隊の行進とは全然違って、もう果てしない距離を、沢山の人が、新たな故郷を目指して延々と歩くんです！」
結賀さん「新たな故郷……？　旧い故郷は？」
ウブカタ「粉々です！」
結賀さん「わー、ということは扉絵は廃墟のシーンかな？（妙に嬉しそう）」
シバッチ「いやー、それはちょっと……。というか故郷が粉々って……きっとドラクロワかレオニス辺りがとんでもないことしたんだろうけど……」

ウブカタ「ええ、全くとんでもないことです！」
シバッチ「……それで、どれくらいの人数を出すつもりなの？」
ウブカタ「ざっと二万人！」
シバッチ「あんたの方がとんでもないよ！」
結賀さん「新キャラ二万人かぁ……デザインに時間かかりそう（真面目な顔）」
シバッチ「ゼッタイ無理だって！」
ウブカタ「いやいや、もちろん、五人くらいがメインです」
シバッチ「ジーク達より人数多いよ！　レオニスやトールはどうすんの！」
ウブカタ「もちろん、あの二人やドラクロワも大躍進です！」
シバッチ「十人以上も登場かい！」
結賀さん「二万人に比べるとズイブン少ないですね（少し残念そう）」
ウブカタ「ええ、かなり人数を絞ってみました」
シバッチ「絞ってないから！」
※しばらくして原稿を書き終え、それを受け取ったシバッチ氏の第一声。
シバッチ「うわー、ジークと一緒に歩いた気分だよ。それにしてもこれ最初の長編より分厚いんだけど」

ウブカタ「おかしいな。我が家のパソコンでは200ページに綺麗に収まって……」
シバッチ「今度は1ページ60行で換算かい！」
ウブカタ「話をそらしますが、結賀さんには、新キャラ気に入ってもらえました？」
シバッチ「そらすな！……結賀さん、チリング司祭が気に入ったって。ほら」
ウブカタ「おお、チリング司祭のラフ画がこんなに！　しかもほとんど出てこないドナ爺まで！　わーい。僕はみんな大好きなのですよ」
シバッチ「あああ、こんなオヤジが出てくるなんて……」
ウブカタ「ちゃんとノヴィアとレオニスを大幅に増シーンしたじゃないですか」
シバッチ「もっと出せー」
ウブカタ「まあまあ、今回は、例のあの方が華麗にオルガン弾いたり、ジークが女の子ひっぱたいたり、ノヴィアがジークとともに同じ屋根の下で一夜を過ごしたかと思うと上半身裸の汗まみれのオヤジに迫られたり、アリスハートがわめいたり（いつもか）、レオニスが針を××に刺して喜んだり、トールが××を振り回したり、『レギオン』初のキスシーンがあったりと、これまでにないシーンがてんこもりです」
シバッチ「あああああ……」
ウブカタ「テーマが『行進』なせいか、今回は思い切って踏み込んだシーンが多い気も

します。今後の参考のためにも、ぜひご感想を頂ければ幸いです」
シバッチ「ダイジェストになってないし！」
※読者の方を向いて一礼するウブカタとシバッチ氏。
ウブカタ・シバッチ「どうもありがとうございましたー」

かくして担当といつも通り激しい戦い（？）を経て、無事、執筆から出版への道のりを歩むことが出来ました。こういうことは読者の応援がないと絶対に実現出来ないことで、本当にもう読者の皆様には感謝、感謝、感謝です。

さて、短編集『カオス レギオン0』という「昨日」から、長編『カオス レギオン』という「明日」へと歩みゆくこのシリーズ。
今作ではジークが、かつてドラクロワとともに抱いていた理想を守るため、ある「民」の大いなる行進を、単独で守ることを決意します。孤軍奮闘するジークと、従士としての働きを見せようといつも通り頑張るノヴィア。長編『カオス レギオン』ではノヴィアがあっさり幻視していたある物も、今作ではクライマックスの一つとして描かれております。
そうした戦いを経て、どのような「今日」が、「明日」へとつながってゆくのか——

どこまでも怪物になることを夢見るレオニス。いまだ己の過去も未来も知らぬノヴィア。やっぱりいつも明るいアリスハート。相変わらず忠実な影法師っぷりなのに、なぜかアリスハートには妙に優しいトール。ジークの過去から襲い来る刺客達。そしてドラクロワという名の「明日」に向かって歩み続けるジーク――

多くの者達が入り乱れる「今日の物語」が、今作によって、いよいよ始まります。

雑誌連載での活躍と合わせて、どうかジーク達のひたむきな歩みを、お見守り下さい。

最後になりましたが――短編連載と合わせて多数の素晴らしいイラストを激忙の最中に描き上げて下さった結賀さとるさんには大感謝です。陣中見舞いで送って頂いた絵は、速攻でパソコンの壁紙化。ジークとドラクロワとレオニスに見られていると手が抜けません。

ＰＣ版『カオス　レギオン』がついに発売のカプコンの皆様、本当にお疲れ様でした。フィギュアありがとうございます。さっそく改造して楽しいひとときを過ごしました。

壊れっぷりのはなはだしいウブカタを見守ってくれる奥さん妖精さん、ありがとう。

そしていつも何度でも感謝を申し上げたい、読者の皆様へ――

本当にありがとうございます。がんばります。

二千三年十一月　冲方丁　拝

《ナデッタの民》
ラフスケッチ集

カヤ・アピアノス
ナデッタ聖堂騎士団の一等聖槍騎兵。
長槍を武器に戦う。エノルとは幼なじみ

《ナデッタの民》
ラフスケッチ集
エノル・ディオン
ナデッタ国領主の長子。だが、酒色に溺れるお調子者。カヤとは幼少からの腐れ縁

チリング・ラタン

ナデッタ聖堂の上級司祭。結賀氏曰く「いらない設定まで……」描くほど、お気に入り

《ナデッタの民》
ラフスケッチ集
サガ・トルホーズ
聖王直属の密偵機関「諜報院<ガルム>」所属。結賀氏曰く「ラテン系笑顔男？」
ドナ爺
パイプをくゆらせる、ナデッタの城の御者長。エノルとカヤを幼少の頃より見守ってきた
ランド・ディオン
ナデッタ国を治める領主にして、エノルの父親。厳格だが、民からの信頼は篤い

カオス レギオン 02

魔天行進篇

平成15年12月25日　初版発行

著者――冲方　丁（うぶかた　とう）

発行者――小川　洋

発行所――富士見書房
〒102-8144
東京都千代田区富士見1-12-14
電話　営業　03(3238)8531
　　　編集　03(3238)8585
振替　00170-5-86044

印刷所――旭印刷
製本所――本間製本

落丁乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに明記してあります
2003 Fujimishobo, Printed in Japan
ISBN4-8291-1578-5 C0193